

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第45集

里 改 田 遺 跡

—室ノ内・岩路地区—

県道 土居—五台山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000.1

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター

里 改 田 遺 跡

—室ノ内・岩路地区—

県道 土居—五台山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000.1

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター









序

南国市は、県都高知市の東隣に所在する人口約5万の近郊型田園都市です。農業に加えて商工業や運輸・通信業が発展する中であって、なおも豊かな自然や歴史環境との共存が身近に感じられるという点で、21世紀の理想都市に成長する条件を満たしています。

この地域での人々の暮らしの歴史は非常に長く、古くは旧石器時代の後期まで遡ることが知られています。縄文時代を経て弥生時代を迎えると、南国市南部の田村地区に臨海型の低地集落が営まれるようになり、県下最大の弥生母村へと発展します。その後、江戸時代に西隣の高知城下が急発展するまでの約2000年間に渡り、南国市域が黒潮洗う土佐の心臓部であり続けたことは、古代の土佐国府跡遺跡群をはじめとする県下最多の複合遺跡の数々が証明します。土佐国府跡は、平安時代に国司として当地に赴任した紀貫之が「あがた「よとせいつとせ」の勤めを果たした場所として、文学研究の世界でも広く関心を集めています。その公邸であった「すむ館」を起点として書き下した『土左日記』は、当時の郷土の地理や文化・世相・人情の様子を垣間見る上でも第一級の史料と言えます。

里改田遺跡は、土佐国府跡遺跡群から6kmほど南の農村にあり、弥生時代から近世に渡る遺物の分布地として早くから知られていました。また、ここには「たいりよう大領」「むろや室屋」等の古代の息吹を伝える小字が数多く残るところから、特に歴史や考古の研究者が大きな関心を注いでいます。

このたび、県道・土居一五台山線の改良工事に伴い、遺跡内の「むろのうち室ノ内」・「いわじ岩路」地区の一角が発掘調査を経て記録保存される運びとなり、その成果をまとめた発掘報告書が、歴史研究や埋蔵文化財の保護に役立つことを願う次第です。

最後になりましたが、一連の発掘調査にあたり御協力を賜りました地元の皆様や関係機関各位に厚く御礼申し上げます。

2000年1月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 河崎 正幸

例 言

1. 書名

本書は、県道・土居一五台山線の改良工事に伴い平成10年度と11年度に実施した里改田遺跡・字「室ノ内」「岩路」地区の発掘調査報告書であり、書名を『里改田遺跡－室ノ内・岩路地区－』、副書名を『県道 土居一五台山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』とする。

2. 事前の試掘調査

調査範囲を確定するための試掘調査は、「室ノ内」「岩路」地区を対称に平成9年12月9日から12月17日にかけて実施しており、その成果は平成10年1月30日発行の『里改田遺跡試掘調査報告書』にまとめられている。

3. 遺跡の所在地

里改田遺跡は、高知県南国市里改田土居に所在する。

4. 調査面積と調査期間

平成10年度の発掘調査は、「室ノ内」地区（Ⅰ区）の1000m²（実掘面積778m²）を対象とし、平成11年1月27日から3月27日にかけて実施した。平成11年度の調査は、「岩路」地区（Ⅱ区）の912m²（実掘面積684m²）を対象とし、5月6日から8月12日にかけて実施した。

5. 調査主体

発掘調査は、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知県南国土木事務所の依頼を受けて実施した。

6. 現地説明会等

調査成果の公表と郷土史体感の機会提供を目的とする現地説明会や発掘体験学習会を平成11年度に次のテーマと日付で実施した。調査区至近の南国市立三和小学校6年生を対象とする「里改田遺跡発掘現場・現地見学会」－4月26日。同6年生を対象とする「里改田遺跡体験発掘学習会」－6月10日。地元・里改田地区の住民と報道機関を対象とする「里改田遺跡発掘調査現地説明会」－7月11日。

7. 調査体制

試掘調査と同報告書の担当： 出原恵三（高知県埋蔵文化財センター調査第三班長）。

同 総務の担当： 吉岡利一（高知県埋蔵文化財センター主幹）。

Ⅰ区本発掘調査の担当： 山本哲也（同 調査第一班長）・小嶋博満（同 専門調査主任）・武吉眞裕（同 調査補助員）。

Ⅱ区本発掘調査の担当： 松田直則（同 調査第五係長）・小嶋博満（同 専門調査員）・江戸秀輝（同 主任調査員）。

Ⅰ区・Ⅱ区本発掘調査の総務の担当：大原裕幸（高知県埋蔵文化財センター主幹）。

8. 本報告書の執筆と編集

執筆は、Ⅰ区（室ノ内地区）を武吉眞裕が担当し、Ⅱ区（岩路地区）を江戸秀輝が担当した。編集は両者の共同で行なった。

9. 調査および本報告書作製の協力者

調査作業： 田代 勝・楠瀬正人・大和田延子・新宅広子・島井博志・島井澄子・島井周子・末政則幸・末政淑子・河村美佐子・浜田南海男・浜田 洋・浜口秀雄・弘田寿子・森 栄美。

重機の操作： 大塚 剛（平成10年度）・上岡順三（平成11年度）。

整理作業： 飯田 縁・黒岩佳子・澤本友子・橋田美紀・益井和子・宮地佐枝・盛田和子・土居江里子・澤本加代子・山本由里。

指導・助言および記録調査： 森田尚宏・前田光雄・小島恵子・泉 幸代・浜田恵子・山田和吉・坂本憲昭・吉成承三・坂本裕一・畠中宏一・田坂京子・松村信博・川端清司・岩崎一步・宮地啓介・坂本憲彦・大賀幸子・澤江和美・西村譲二（以上・同埋蔵文化財センター調査担当職員）。

以上の他、酷暑をいとわず現地説明会や学習会に参加を頂いた地元の方々や三和小学校教職員、給水その他仔細に渡る協力を頂いた住民各位、並びに諸般の調整手配を頂いた県南国土木事務所の関係各位に対し、この紙面を借り、あらためて厚く感謝申し上げます。

10. 資料の保管

試掘調査と両年度の本調査で出土した遺物および記録図面・写真等の資料は、高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

1. 掲載図版の縮尺

個々の遺構平面図版：1/40を原則とするが、より詳細な図示が適切な部分では、最大1/10の縮尺に止め、いずれにもスケールを付した。

個々の遺構断面と高度変化図版：1/40を原則とするが、より詳細な図示が適切な部分では、最大1/20の縮尺に止め、いずれにもスケールを付した。

土器および陶磁類の図版：実物の大小に応じて1/4・1/2の縮尺を使い分け、それぞれにスケールを付した。

石器類の図版：実物の大小に応じて2/5・1/1（実物大）を使い分け、それぞれにスケールを付した。

2. 整理に用いた記号と番号

遺構の整理記号：穴居建築の一種である竪穴式建築物跡を「S T」、地上に柱穴を巡らし、床板の架構が可能と見られる地上式建築物跡を「S B」、柱穴跡を「P i t」あるいは「P」、柱穴や穴居・井戸以外の人為的な掘り込みの跡を「S K」、井戸跡を「S E」、人口開削の流水路を「S D」、自然の流水路を「S R」、人為的な石溜りを「集石」とする。性格や成因を特定し難い形跡は、全て「S X」とした。

遺構の整理番号：両調査区ごとに、上記した整理記号の末尾に1から順の番号を付けた。

遺物の整理記号：平成10年度の出土遺物には「98-23NS」、平成11年度の出土遺物には「99-23NS」の記号を冒頭に付け、次いで上述の遺構番号や層位記号を注記した。

本文目次

第Ⅰ章	調査に至る経過	1
第Ⅱ章	遺跡周辺の地理的・歴史的環境	3
	第1節 遺跡の位置と現況	3
	第2節 地質構造	3
	第3節 地形の形成	5
	第4節 地表堆積の特徴	5
	第5節 仁淀砂の影響	6
	第6節 地形と周辺遺跡の分布	10
	第7節 里改田の名称と属郡	14
	第8節 小字に残る重要な古名	16
第Ⅲ章	調査の概要	17
	第1節 調査区の設定	17
	第2節 調査の方法	17
	第3節 I区の概要と基本層序	21
	第4節 II区の概要と基本層序	23
第Ⅳ章	I区の調査成果	25
	第1節 遺構・遺物の遺存状況と水理作用	25
	第2節 弥生時代の遺構	26
	第3節 古代の遺構	37
	第4節 中世遺構	45
	第5節 近世の遺構	46
	第6節 出土遺物	48
第Ⅴ章	II区の調査成果	89
	第1節 弥生時代の遺構	89
	第2節 古代の遺構	102
	第3節 中世遺構	105
	第4節 近世の遺構	107
	第5節 出土遺物	107
第Ⅵ章	考察——調査結果と水害史料の検討	139
	第1節 概説	139
	第2節 昭和南海地震の観測体制不備と、安政南海地震時の里改田周辺	140
	第3節 史料に見る里改田村の宝永地震被害	141
	第4節 宝永・安政両地震の津波浸入路と引潮路	142
	第5節 まとめ	146

表目次

表1	I区出土遺物観察表	72
表2	II区出土遺物観察表	128

挿図目次

Fig. 1	里改田遺跡の位置図(A)と周辺の地質区分図(B)……………	4
Fig. 2	周辺の地形区分・水系図……………	7
Fig. 3	地形区分上の遺跡分布……………	8
Fig. 4	周辺の遺跡分布図……………	9
Fig. 5	里改田遺跡周辺の地割図……………	15
Fig. 6	大グリッド設定図……………	18
Fig. 7	調査区設定・完掘全区……………	19
Fig. 8	Ⅱ区北壁包含層堆積状況図……………	22
Fig. 9	Ⅰ区完掘全区……………	27
Fig.10	Ⅰ区西壁断面図……………	30
Fig.11	Ⅰ区北壁西壁および北西部東壁の断面図……………	31
Fig.12	Ⅰ区SK10・SE1の断面図(SP22-23ライン)……………	32
Fig.13	Ⅰ区東壁断面図(SX10,SB1-P14,ST1,SK11を含む)……………	33
Fig.14	Ⅰ区竪穴住居跡ST2平面図と断面図……………	34
Fig.15	Ⅰ区ST2内SK8検出面の土器出土状況平面図・土器片復原位置図……………	35
Fig.16	Ⅰ区竪穴住居跡ST1完掘平面図・断面図……………	36
Fig.17	Ⅰ区SX1・SX2周辺の平面図……………	38
Fig.18	Ⅰ区SX平面図・断面図……………	39
	SX1外周のピット群エレベーション図(EV1～7ライン)	
	SX2内外の断面図(SP50-51-52ライン)	
	SX4のクロス断面図(SP53-54-55ライン)	
	SX10の完掘平面図と断面図	
Fig.19	Ⅰ区掘立柱建物跡SB1完掘平面図・エレベーション図……………	40
Fig.20	Ⅰ区掘立柱建物跡SB1.ピット半截過程の柱痕検出平面図・半截断面図……………	41
Fig.21	Ⅰ区掘立柱建物跡SB1.ピット半截過程の柱痕検出平面図・半截断面図……………	42
Fig.22	Ⅰ区SB2完掘平面図・エレベーション図;SB2ピット断面図……………	44
Fig.23	Ⅰ区近世建物の根石検出状況平面図……………	47
Fig.24	Ⅰ区SK2平面図(上)と断面図(下)……………	47
Fig.25	Ⅰ区出土遺物実測図1(ST2)……………	51
Fig.26	Ⅰ区出土遺物実測図2(ST2)……………	52
Fig.27	Ⅰ区出土遺物実測図3(ST1)……………	53
Fig.28	Ⅰ区出土遺物実測図4(ST1)……………	54
Fig.29	Ⅰ区出土遺物実測図5(SX1,SX2,SX3,SX9,SK5,SK6)……………	55
Fig.30	Ⅰ区出土遺物実測図6(SB1ピット)……………	56
Fig.31	Ⅰ区出土遺物実測図7(SB1ピット)……………	57
Fig.32	Ⅰ区出土遺物実測図8(SB1ピット)……………	58
Fig.33	Ⅰ区出土遺物実測図9(SB1ピット)……………	59
Fig.34	Ⅰ区出土遺物実測図10(SB1ピット,SB2ピット)……………	60
Fig.35	Ⅰ区出土遺物実測図11(SB2ピット)……………	61
Fig.36	Ⅰ区出土遺物実測図12(SB2ピット,SX4)……………	62

Fig.37	I区出土遺物実測図13(SX4,集石1).....	63
Fig.38	I区出土遺物実測図14(SK10).....	64
Fig.39	I区出土遺物実測図15(SK10).....	65
Fig.40	I区出土遺物実測図16(SK2,SK4,SK11).....	66
Fig.41	I区出土遺物実測図17(SK11,SK12,北トレンチ).....	67
Fig.42	I区出土遺物実測図18(ピット群,耕作土).....	68
Fig.43	I区出土遺物実測図19(検出面).....	69
Fig.44	I区出土遺物実測図20(検出面,包含層).....	70
Fig.45	I区出土遺物実測図21(包含層).....	71
Fig.46	II-A区遺構平面図.....	91
Fig.47	II-B区遺構平面図.....	92
Fig.48	II-C区遺構平面図.....	93
Fig.49	土層断面図.....	94
	II-A区北壁,東壁	
Fig.50	土層断面図.....	95
	II-A区SX1南北バンク	
	II-A区SX1,SD1東西バンク	
	II-A区SD1南北バンク(西側)	
	II-A区SD1南北バンク(東側)	
	II-A区SK1南壁	
	II-A区P86東壁	
	II-A区P85南壁	
	II-A区P87南壁	
Fig.51	土層断面図.....	96
	II-B区北壁	
	II-B区東壁	
	II-B区SD2南側バンク	
	II-B区SD2北側バンク	
Fig.52	土層断面図.....	97
	II-C区西壁～北壁・東壁～南壁	
Fig.53	土層断面図.....	99
	II-C区ST1南北バンク	
	II-C区ST2南北バンク	
	II-C区ST2東西バンク	
	II-C区ST3,4南北バンク	
	II-C区ST3,4東西バンク	
	II-C区ST3,4バンク交点南向き壁面	
Fig.54	II-C区ST1,ST2,ST3,4平面図・断面図.....	103
Fig.55	II-C区,II-A区,SB平面図・断面図.....	104
Fig.56	II-A区SX,SD,SK;II-B区SD平面図・断面図.....	106
Fig.57	II区出土遺物実測図1(II-A区Pit,SK).....	109
Fig.58	II区出土遺物実測図2(II-A区).....	110

Fig.59	Ⅱ区出土遺物実測図3(Ⅱ-A区) ……………	111
Fig.60	Ⅱ区出土遺物実測図4 ……………	112
Fig.61	Ⅱ区出土遺物実測図5(Ⅱ-A区東側包含層) ……………	113
Fig.62	Ⅱ区出土遺物実測図6……………	114
Fig.63	Ⅱ区出土遺物実測図7(Ⅱ-A区石器) ……………	115
Fig.64	Ⅱ区出土遺物実測図8(Ⅱ-B区) ……………	116
Fig.65	Ⅱ区出土遺物実測図9(Ⅱ-C区ST1・ST2) ……………	117
Fig.66	Ⅱ区出土遺物実測図10(Ⅱ-C区ST3)……………	118
Fig.67	Ⅱ区出土遺物実測図11 ……………	119
Fig.68	Ⅱ区出土遺物実測図12 ……………	120
Fig.69	Ⅱ区出土遺物実測図13 ……………	121
Fig.70	Ⅱ区出土遺物実測図14 ……………	122
Fig.71	Ⅱ区出土遺物実測図15 ……………	123
Fig.72	Ⅱ区出土遺物実測図16(Ⅱ-C区SB.Pit,SK3,SK5) ……………	124
Fig.73	Ⅱ区出土遺物実測図17(Ⅱ-C区包含層) ……………	125
Fig.74	Ⅱ区出土遺物実測図18 ……………	126
Fig.75	Ⅱ区出土遺物実測図19 ……………	127
Fig.76	宝永地震津波の浸入状況図(間城龍男著『南海地震津波—土佐—』附図に基く)……………	144
Fig.77	Ⅱ区中央部,基層確認シレンチの断面図……………	144
Fig.78	物部川下流域における明治40年の寺社分布状況図……………	145

写真図版目次

巻頭写真.1	里改田遺跡周辺の遠景(南を望む;空陸の境は土佐湾) 里改田遺跡北背の丘陵と下田川(東を望む;川沿いの水田地帯は、稲生方面へと広がるデルタ)	
巻頭写真.2	I区の全景(西を望む;遺構群検出時) 弥生時代竪穴住居跡ST2の土器出土状況	
巻頭写真.3	II-A区より西方を望む II-A区全景(西を望む)	
巻頭写真.4	II-B区全景(北上より) II-C区全景(北上より、未完掘部分有り)	
PL. 1	I区.調査前の風景(北西を望む)…………… I区.西トレンチ西壁(北を望む)	151
PL. 2	I区.中世の土坑SK10底面確認トレンチ開削状況(北西を望む)…………… I区.古代の掘立柱建物跡SB2東部(南西を望む;白線内は特に土器類が多い)	152
PL. 3	I区.古代の掘立柱建物跡SB1検出状況(西を望む)…………… I区.SB1-Pit.5柱痕検出状況(中央暗色部分) I区.SB1-Pit.5柱痕半截状況 I区.SB1-Pit.1埋土半截状況 I区.SB1-Pit.10完掘状況	153
PL. 4	I区.弥生末～古墳初頭の竪穴住居跡ST1検出状況(東を望む;近世末頃の土坑に切られる)…………… I区.ST1 ベルト設定と土器の分布状況 I区.ST1土器集中(No.32・42・60) I区.ST1土器集中(No.30・33・39・59) I区.ST1土器細片	154
PL. 5	I区.弥生時代の竪穴住居跡ST2の掘削状況と、それを覆う古代以降の集石1(写真右)…………… I区.ST2 土器集中1(弥生後期の甕が主) I区.ST2 土器集中1(弥生中期末の壺片) I区.ST2 土器集中2(弥生中期末の壺が主) I区.ST2-SK8完掘状況(トレンチ開削)	155
PL. 6	I区.竪穴住居跡ST2北側のピット群半截状況…………… I区.SX1の弥生式土器(No.66)出土状況 I区.遺構検出面の土器(No.293)出土状況 I区.遺構検出面の土器出土状況 I区.SX4の磨製石包丁(No.193)出土状況	156
PL. 7	I区.ST2出土遺物——弥生式土器;砥石(No.21・22)……………	157
PL. 8	I区.ST1出土遺物——弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器……………	158
PL. 9	I区.ST1出土遺物——弥生時代～古墳時代初頭の土器…………… I区.SB1出土遺物——古墳時代～古代の須恵器(上段=外面;下段=内面)	159

PL.10	I区.SB1出土遺物 —— 弥生式土器	160
PL.11	I区.SB1出土遺物 —— 弥生時代～古墳時代初頭の土器;石鎌身・石鎌・磨製石製品	161
	I区.SB2出土遺物 —— 古代の須恵器;弥生時代の土器・打製石刃器	
PL.12	SX4出土遺物 —— 古代～古墳時代の須恵器;弥生時代の石包丁・打製石鎌	162
	集石1出土遺物 —— 弥生時代の土器・敲石	
	SK10 中世の瓦器;古代～古墳時代の須恵器・須恵器瓦	
PL.13	SK4出土遺物 —— 弥生式土器;近世の磁器	163
	SK11出土遺物 —— 弥生式土器;近世の陶磁器・燻し瓦	
PL.14	遺構群検出面出土遺物 —— 弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器;弥生時代の打製石包丁と刃器	164
	遺物包含層(Ⅲ層・Ⅳ層)出土遺物 —— 弥生時代～古墳時代初頭の土器	
PL.15	Ⅱ区.調査前全景(南西より)	165
	Ⅱ-A区～Ⅱ-C区(東より)	
PL.16	Ⅱ-A区検出状況(西より)	166
	発掘調査中	
PL.17	Ⅱ-A区.SX1を中心にSB柱穴等(西より)	167
	Ⅱ-A区.全景(東より)	
PL.18	Ⅱ-B区.検出状況(東より)	168
	Ⅱ-C区.ST1(南より)	
PL.19	Ⅱ-C区.ST1遺物出土状況	169
	Ⅱ-C区.ST2(西より)	
PL.20	Ⅱ-C区.ST3遺物出土状況	170
	Ⅱ-C区.ST3・4(SB柱穴検出含む 北より)	
PL.21	Ⅱ-C区.ST3・4(SB柱穴含む 西より)	171
	Ⅱ-C区.ST3遺物出土状況	
PL.22	Ⅱ区.出土遺物1	172
PL.23	Ⅱ区.出土遺物2	173
PL.24	Ⅱ区.出土遺物3	174
PL.25	Ⅱ区.出土遺物4	175
PL.26	Ⅱ区.出土遺物5	176
PL.27	Ⅱ区.出土遺物6	177

第Ⅰ章 調査に至る経過

西暦2000年を迎えた今、本州－四国3架橋時代となり、まもなく高速道路により四国四県の県庁所在地もX字状に結ばれようとしている。このような中、里改田遺跡の周辺でも、多くの、広域的な交通輸送体系及び流通拠点の整備が急激に進行している。高知空港拡張、高知新港、高規格幹線道路の東進等の交通輸送体系。そして、遺跡の南側の浜改田地区では18.3ヘクタールの流通拠点も機能を開始している。また、遺跡の所在する南国市には四国横断自動車道南国インターもある。

これらの事業が完成し機能し始めた場合、確実に交通量が増大することが予想される。その状況の変化に対処し各種機能を充実させるために、現有道路の幅員拡張工事、改良工事等の道路網の整備が計画された。里改田遺跡に関しては、県道土居－五台山線改良工事、県道南国インター線改良工事が計画、実施されることとなった。そこで文化財保護部局である高知県教育委員会は、南国土木事務所と協議を行った結果、まず県道土居－五台山線について工事計画地の延長170mについて試掘調査を実施することとなった。その結果、本調査の実施が必要な部分があり、今回の発掘調査に至った。

経過の詳細な内容は次の通りである。試掘調査の実施については、高知県教育委員会文化財保護室長から財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長に試掘調査の依頼があった(平成9年10月16日付け、9教文第274号)。埋蔵文化財センターは、試掘調査を承諾し、高知県と委託契約を結び(平成9年11月28日)、平成9年12月1日から試掘調査に着手した。試掘調査では対象地に11個のテストグリッドを設けて実施し、結果G1～G4の東部とG5～G11の西部で状況が大きく異なることが明らかとなった。微地形の違いに対応するものであり、東部は遺構検出の基盤層が全く形成されておらず、弥生後期・古代・中世の遺物を含んだ砂礫層が堆積していた。里改田遺跡の東に広がっている低地に続く傾斜地で、砂礫の流れ込みが繰り返され、中世に至って今日のような地形となったものと考えられた。

西部はG8を除いてすべてのグリッドから弥生時代後期後半の竪穴住居2棟を含む遺構が確認された。この微高地上には弥生時代後期後半を中心とする集落が存在しており、地形から見て調査区の西方にも続くものと考えられた。

G4からG11の間は、建物やコンクリート基礎などのために試掘調査をすることができなかったが、G11から東にも微高地の広がりが見られる。したがって調査範囲のうち2,000㎡については本調査を実施する必要があることとなった。

本発掘調査については、諸事情により平成10年度と平成11年度の二時期に分けて実施した。I区(「室ノ内」地区)については、この調査区は試掘調査の際のG5～G11調査区を中心とした範囲を調査対象地としている。平成10年度、埋蔵文化財センターは高知県と委託契約を結び(平成11年1月13日)、平成11年1月27日から調査に着手し、平成11年3月27日まで実施した。

このI区の本発掘調査では遺構の検出及び遺物の出土について充実した成果が得られた。この結果も受け、当初、試掘調査の結果予想されていたG4からG11の間の試掘空白部分については、建物やコンクリート基礎などの撤去後、平成11年度に本発掘調査を実施することとなった。この調査

対象地をⅡ区(「岩路」地区)として対応した。

Ⅱ区の本発掘調査は、埋蔵文化財センターが高知県と委託契約を結び(平成11年5月1日)、平成11年5月6日から調査に着手し、平成11年8月12日まで実施した。Ⅱ区では現場の状況(排水管、仮設の生活道等)により、調査区をⅡ-A、Ⅱ-B、Ⅱ-Cと3分割して発掘調査を実施した。このⅡ区の調査でも、発掘調査実施前の予想を上回る多くの成果を得ることができた。

Ⅰ区(「室ノ内」地区)、Ⅱ区(「岩路」地区)の本発掘調査における調査成果は本書の通りである。

また、里改田遺跡では、平成11年度に、本報告書の調査対象地の南側に隣接する「杉ノ本」地区において県道南国インター線改良に伴う発掘調査が実施された。

「杉ノ本」地区の発掘調査は、平成11年9月20日委託契約を締結し、平成11年10月5日から平成11年10月7日に試掘調査を実施し、平成11年10月12日から平成11年10月15日まで拡張区トレンチ調査を実施した。調査の方法は調査対象地にテストピットを設定して試掘調査を実施し、うち一つから落込みを確認したため、その方向・規模を明らかにするため二箇所テストピットを新たに設定し、いずれからも落込みが検出されたため、その範囲についてはトレンチを拡張して発掘調査を実施することとなった。そこで落込みの方向・規模、その性格を確認する目的でトレンチを設定し調査を実施した。

テストピットの調査結果から方向が明確になった落込みの東に隣接して土塁の痕跡が認められる点、周辺には『長宗我部地検帳』では「二ノ堀」、「三ノ堀」という地名がみられる点等から、この溝跡は屋敷の周囲に巡らされた溝跡である可能性が考えられる。そして溝跡埋土1層から13世紀から16世紀のものが主として出土しており、この溝跡は中世の段階に機能していたと考えられ、諸文献の内容の結果からも里改田遺跡杉ノ本地区で検出された溝跡は屋敷の周囲を巡る溝跡の一部と考えられるという結果がでてくる。

里改田遺跡ではこれまで、以上の調査が実施されているが、今後さらに道路の改良工事等に伴う新たな発掘調査の実施の可能性も考えられ、検出される各時代における里改田遺跡の性格等、全容が明らかになりつつある。(江戸秀輝)

(引用・参考文献)

出原恵三『里改田遺跡』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1998. 1

久家隆芳『里改田遺跡－杉ノ本地区』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999. 11

第Ⅱ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

第1節 遺跡の位置と現況

高知県南国市里改田に所在する。里改田は、香長平野を流れ下る物部川西岸の沖積扇端に位置する近郊農村型の集落である (Fig.1)。弥生時代以降の遺物散布によって画定された遺跡範囲は、東から上畑・室屋・土居・立石の四地区を含み、現在の集落範囲とほぼ一致する。その平面形は、西北西から東南東方向に細長く、短軸の平均幅約0.35km、長軸1.25km、面積約0.44km²を測る (Fig.6)。地表高度の変化は少なく、海拔4.5mを前後する。宅地以外は田畑が大部分を占め、付近の道路や地表水系は、明治40年の測図 (建設省国土地理院発行、1/5万) と概ね一致する。

平成10年度と11年度の調査が対象とする小字「室ノ内」・「岩路」の両地区は、一車線の市道を挟んで西・東に隣接する。里改田遺跡の中央部を占め、ともに今日の通称「土居」地区に含まれる。

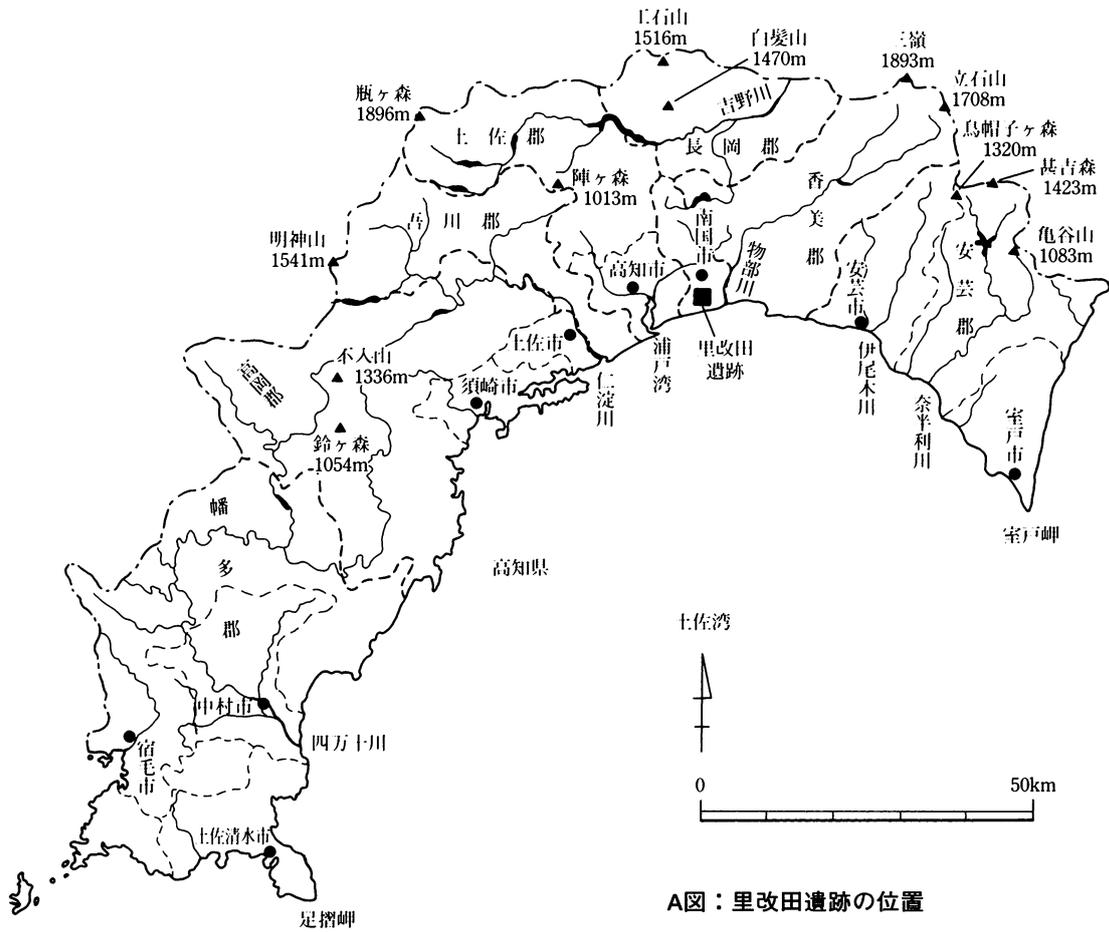
なお、両年度調査の前提として実施した平成9年度の試掘調査が里改田遺跡発掘調査の皮切であり、それ以前に遺跡範囲内における発掘調査の履歴はない。

第2節 地質構造

太平洋を臨む高知の県土は、北西に移動するフィリピン海プレートがユーラシア大陸プレート下に潜り込む南海トラフに沿って南向きの鶴翼形を呈し、形成の古い北から順に三波川変成帯・秩父累帯・四万十帯が東西走向の断層を伴って南北に並列する。これらの断層は、秩父累帯の中帯以南で次第に北傾斜を強め、太平洋側に向かって年代の若い地層が下方に累重する特長を持つ。県内で分布が知られる後期旧石器時代以降の遺跡は、この北傾斜の地質構造帯に立地するものが大部分を占る。

今回の調査で弥生時代以後の遺構や遺物が確認された里改田遺跡の場合では、秩父累帯と四万十帯を区分する高角度の衝上断層 (逆断層) である仏像構造線が遺跡範囲の北半付近を東西に走向するものと推定されており、この推定走向線の直南至近エリアに調査対象地が位置する。更に、遺跡範囲の南端付近は、四万十帯北端の堂ヶ奈路層と次位の半山層 (葉山層) を隔てる断層の推定走向位置に近い^{注1}。この見解に立てば、調査対象の「室ノ内」・「岩路」両地区を含む里改田遺跡範囲の中央部は堂ヶ奈路層に属し、その南北両辺を東西に並走する二断層間に挟在する立地状況が導かれる (Fig.1-B)。

堂ヶ奈路層は1952年に甲藤次郎氏が命名した地層区分であり、須崎市北方の堂ヶ奈路付近を模式地とする。泥岩がち、あるいは泥岩・砂岩の互層からなり、須崎市北方の桑田山や仏像付近、香北町の千萱・久保川・黒見のほか、この南国市の里改田や稲生・唐谷では石灰岩を挟む。仏像構造線推定走向ラインの北に位置する里改田遺跡北部の立石地区や隣接する片山地区は、秩父累帯の南帯に属し、甲藤次郎氏は虚空蔵山層群に区分した。砂岩・泥岩の互層で、チャート・凝灰岩・石灰岩を挟む場合がある。里改田遺跡の南辺付近から南では、「一般に北傾斜が強い」 (田代正之) とされる半山層 (甲藤次郎、1952命名) に変わる。この地層は、葉山村葉山の^{新莊川南岸}新莊川南岸支流流域を模式地とす



る砂岩がちの砂岩・泥岩互層(田代正之)^{注2}である。これら沖積層下の基盤岩基質は、今日では中生代白亜紀前期(約1億年前)の付加体と理解されている。

第3節 地形の形成

付加体形成を主とする上記の造構運動がもたらした西日本外帯の急峻な山谷は、房総から東海・紀伊・四国・九州の南部にかけて巒(ひだ)のように東西に連なる。この西日本外帯の南端に高知県の全土が所在しており、その大部分は、中生代三疊紀～ジュラ紀に形成した秩父累帯と、これに続いて順次付加した白亜紀の四万十帯北帯および第三紀の四万十帯南帯から成る山地に属す。沿長約241kmの海岸線の所々に点在する平野面積の割合は、合わせても微々たる17%を占めるに過ぎない。

この狭小な平野面積も、多くは県中央部の浦戸湾^{うらどわん}を挟んで東西に連なる香長平野と高知平野に集中する。高知平野は、内海性の浅海堆積物と鏡川^{かがみがわ}や久万川^{くまがわ}・国分川^{こくぶがわ}の運搬土砂によって埋積した深い陥没地溝であり、浦戸湾に接する0m地帯は中近世以後の干拓^{注3}に属す。香長平野は、物部川と国分川の沖積により、高知平野に先駆けて陸化した扇状地であり、香美・長岡両郡の南部低地を指す。この沖積扇の末端地帯は、土佐湾側の砂堆や浦戸湾頭に向かってデルタにシフトしてゆく。

里改田遺跡は、基本的に物部川水系によって形成された新期沖積扇の末端に位置しており、革靴形に画定された遺跡範囲は、かかと部分を残してデルタに突き刺る形状を呈す。更に、デルタの外側には、北西から弧を描いて南伸する千屋崎の丘陵端(標高75.9m)と、馬橋で南折する低丘陵の角(標高50m)が間近に迫る。この千屋崎の丘陵端に沿って物部川水系の下田川が流れ、河道を縁取るデルダが稲生を経て浦戸湾頭へと伸びる。また、遺跡周辺には、伏流水が湧出する小流路も見られ、用排水路として利用されている。これらの小流路も、明治40年測図の1/5万地形図^{注4}に既に記載されている。

第4節 地表堆積の特徴

南国市北部の山裾平野を経て浦戸湾に注ぐ国分川と、南国市の東境を画して土佐湾に注ぐ物部川の水源は、奥行き10km前後の平野の後方に広がる土佐山地の峰々にあり、標高500～1000m級の山並みが深々と連なる。沖積碎屑物の搬路である各水系を遡上すると、縦谷や横谷を経て、毛細血管のように細かく急勾配の山谷に分け入り、山嶺に向かって這い上がる(Fig.2)

これらの水系は、ほとんどが泥砂岩を基質とする秩父累帯に源する。その北帯と中帯に介在する黒瀬川構造帯では、浮力によって上昇した蛇紋岩にチャート・石灰岩・玄武岩質緑色岩あるいは枕状熔岩等の岩体が捕獲岩として含まれる。石灰岩は水中の炭酸によって比較的速やかに分解する。また、塩基性岩に属す緑色岩や枕状熔岩等は、化学的・物理的に風化・溶蝕しやすく、渓谷を降る過程で岩片サイズを急減するため、沖積平野に達して長く粒形を留める量には限界があろう。粘土やシルトの来源となり得る泥岩や砂岩では、渓谷の険しさや、豪雨の度に各所で頻発する山間斜面の崩落から見て、露頭は長持ちせず、転石が渓谷河川の床面を躍動(saltation)・転動(rolling)・滑動(sliding)する過程の分級時間や回数は、必然的に短少となる。また、奥行き10km程度の平野では、比較的強い水勢を維持した状態で細粒碎屑物を河口に運ぶ。このため、国分川や物部川等の水

系では、下流部でも粘土やシルトの泥質物が少なく、粒度の大きい砂礫成分が主勢となる。この結果、南国市域の平野は基本的に扇状地型となり、北東から南西に伸びる舌状の古期礫砂台地を挟んで、新期扇状地と自然堤防の交錯が南北両側に形成されている。これらの末端エリアの周辺が、浦戸湾頭や土佐湾側砂堆へと微傾斜する前述のデルタである (Fig.2)。

沖積扇端に位置する里改田遺跡の表部土層は、東部の室屋以東が久世田統 (灰色土壌)、大領・岩路・室ノ内・立石等の中～西部が全て東和統 (灰色土壌) に属す。里改田遺跡の南に広がるデルタは、和泉崎統 (黒泥土壌) に区分される。これらを代表的する土色と土性を昭和40年の土地分類基本調査資料^{注5}に基いて要約すると、下記ようになる。

久世田統の代表は、南国市小田の扇状堆積型水田土壌であり、第1層＝黄黒色土・HC；第2層＝黄黒色土・HC；第3層＝黄褐灰色土 (SL)。

東和統の代表は、長岡郡大津村川原島の三角洲堆積型水田土壌であり、第1層＝黒褐色土・LiC；第2層＝黄灰色土・LiC；第3層＝SC。

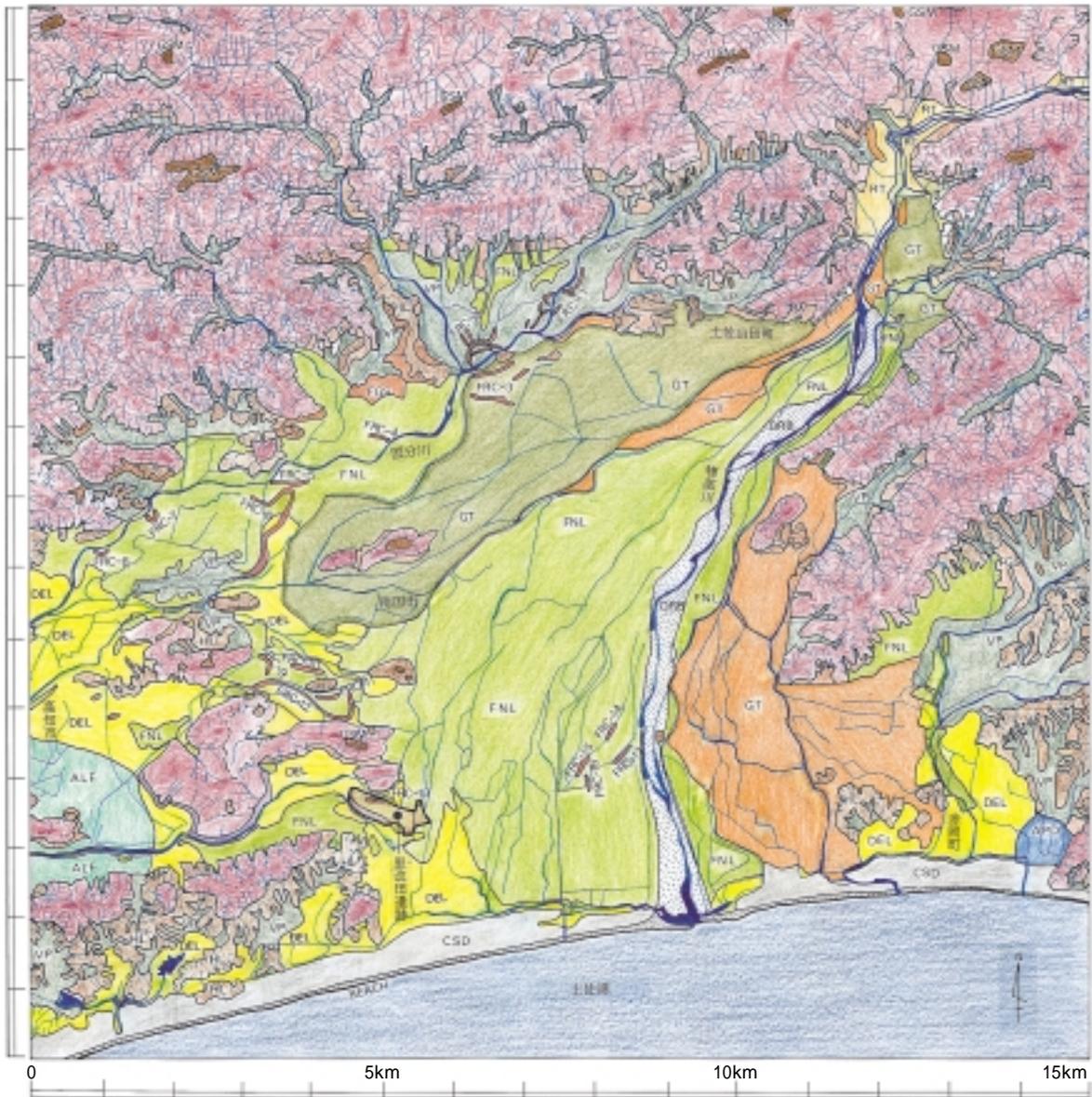
和泉崎統の代表は、南国市三和 (里改田は三和地区に所在) の扇状地平坦型水田土であり、第1層＝黄黒色土・HC；第2層＝黄灰色土・HC；第3層＝黒泥層・HC

なお、今回の発掘調査で観察した表層堆積の断面は、岩路地区のⅡ-A区東部では東和統と一致するが、岩路地区のⅡ-B・C区と室ノ内地区のⅠ区では、「第2層＝黄灰色土・LiC」を欠く。

第5節 仁淀砂の影響

また、県中央部での沖積平野の拡大や海岸環境の形成に関わるいま一つの営力として、高知市西方の春野町と土佐市を境して土佐湾に注ぐ一級河川・仁淀川の膨大な排砂 (仁淀砂) が注目される。そこでは、偏流型河口と斜向波の相乗によって鳥嘴形の堆砂を伸張し、仁淀川自体の河口閉塞を来して洪水を頻発する一方、多量の漂砂と化して東西の沿岸を漂泊する。これによる海浜の拡大や堆砂の増高は、現代に至って鉄筋コンクリート施工による防波・消波処置が普及する以前では、天然の防波堤・消波堤としての役割を果たしてきた。仁淀砂排出地点の約10km東に位置する浦戸湾口は、その前面を遮る西岸の「桂浜」で回折した波が東岸に「種崎」なる地名の鳥嘴形堆砂を伸ばす遮蔽型河口に属す。湾口には、他にも大小の砂州を生じて水深低下を来し、出入する船舶の航路を脅かしてきた。仁淀砂の影響は更に東に及び、十市付近で物部砂と拮抗した後その割合を低減しつつも、浦戸湾口から約11km東に位置する物部川河口に漂泊する。ここは、波浪が汀線と直交する直流型河口に属し、本来ならば排水と波の強弱に従って舌状の堆砂が伸縮する。しかし、江戸時代初期、物部川の沖積扇頂付近に灌漑目的の山田堰 (1639年着工、1664年竣工) を設置して以来、河口排水量と排出土砂の激減を来し、天然の河口環境に大きな欠落を生じた。かつては、その海面に三日月状の砂州を現したという物部川河口であるが、明治40年の測図に見る河口堆砂の平面形は、既に偏流型河口に生じる閉塞状況と変わる所がない。そこでは、西岸の久枝^{ひさえだ}から汀線沿いに伸びる鳥嘴状の堆砂が東岸の吉川村遠崎^{とぶさき}の浜に迫り、現在の状況もこれに近い。

物部川河口の排砂に仁淀砂が加わる堆砂は、汀線と直交する岸向きの卓越風を媒介として、おそらくは海水位が現在に近づく最終氷期の末以来、標高6m (久枝)～11m (浜改田本村) の高さで沿岸



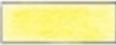
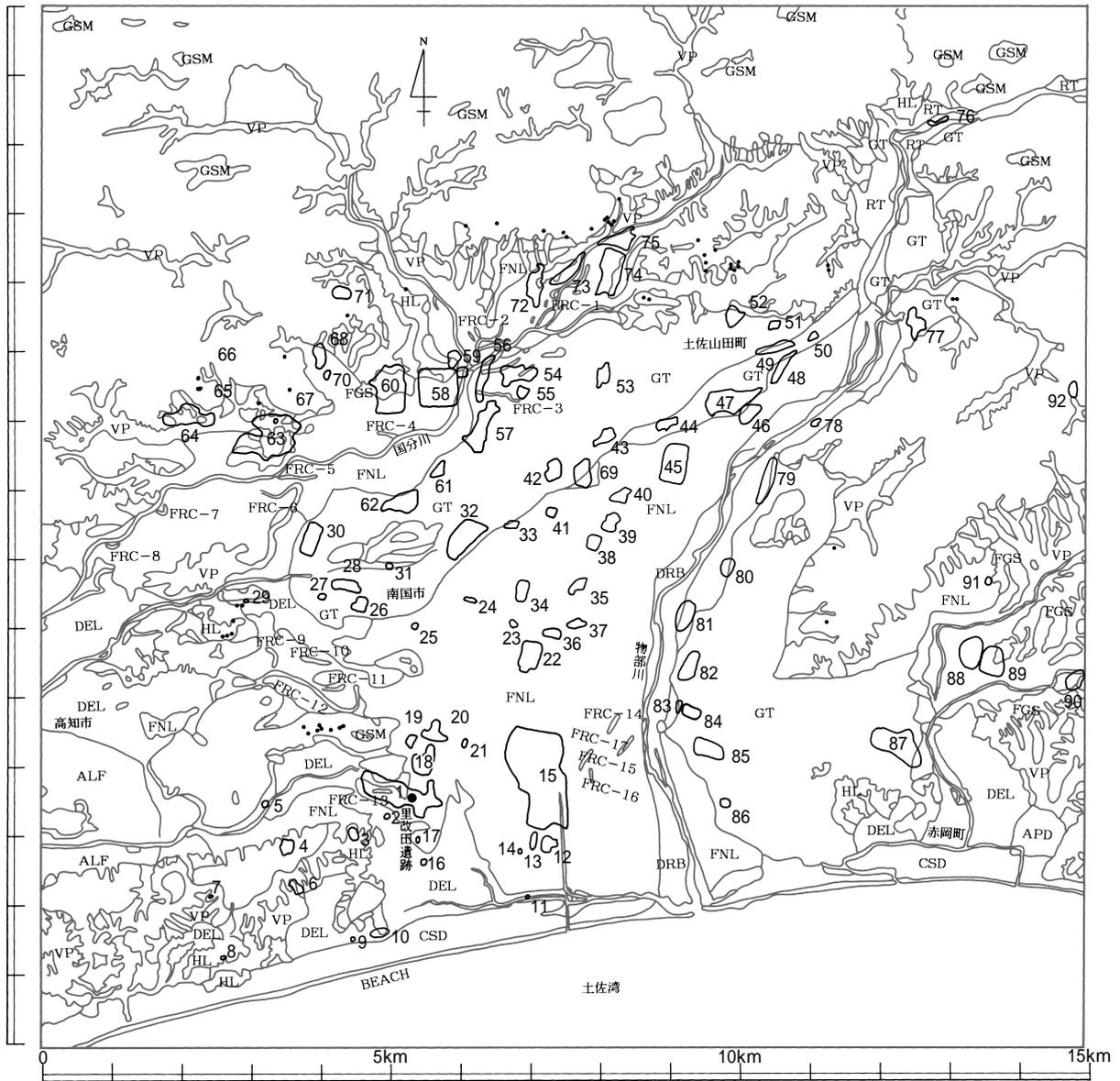
	GSM	山頂及び山腹緩斜面		FNL	扇状地及び自然堤防
		山地		DEL	三角州
	HL	丘陵地		APD	湿地
	FGS	山麓緩斜面		ALF	冠水しやすい地域
	VP	谷底平野		FRC	旧河道
	GT	砂礫台地		DRB	河原
	GT	"		BEACH	浜
	RT	岩石台地		CSD	被覆砂丘

Fig.2 周辺の地形区分・水系図
縮尺1/100000

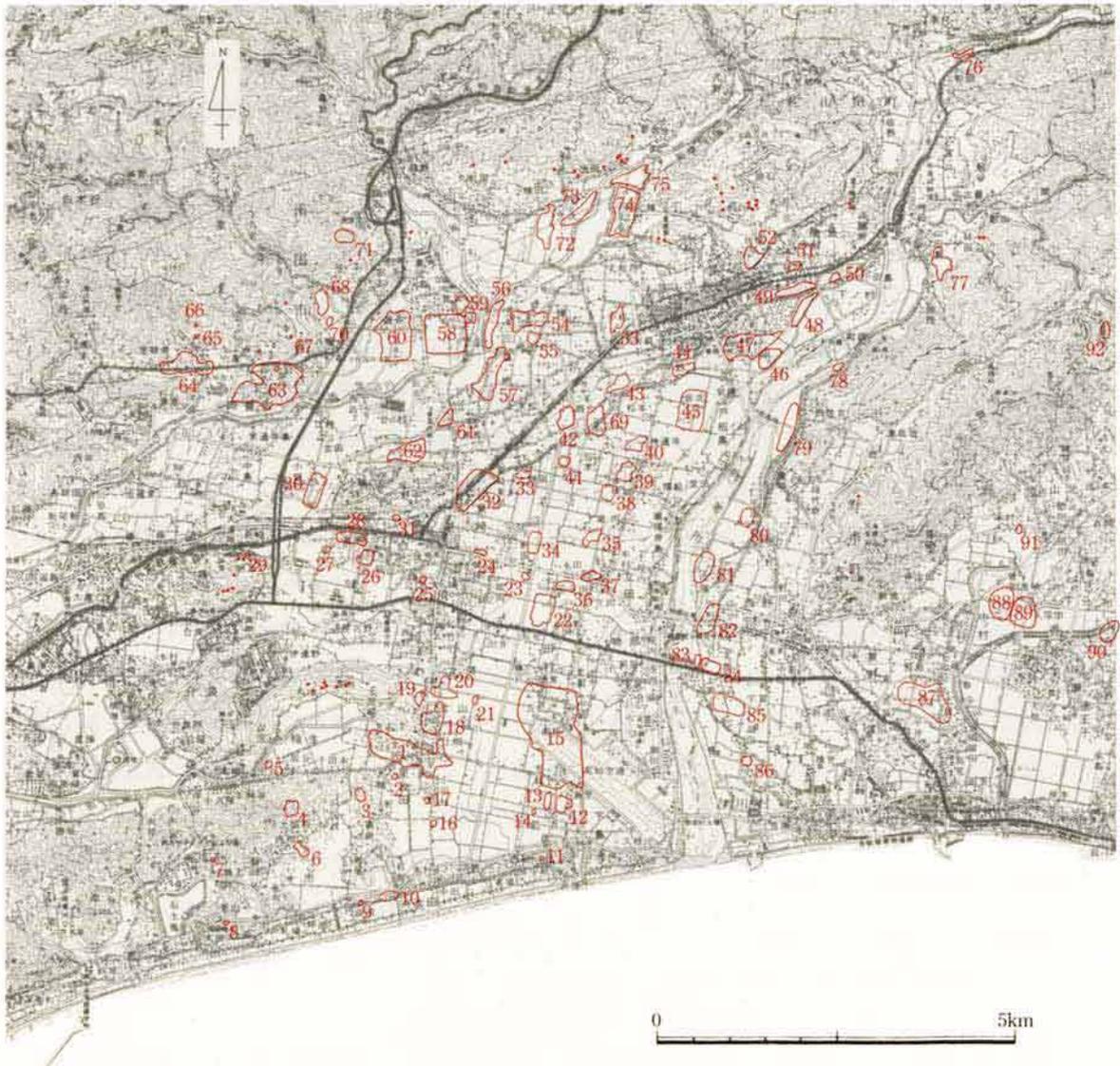
昭和40年現地調査・土地分類基本調査図(国土調査)第61(調査者:建設省国土地理院建設技官 細井将右;1/50000, 昭和41年,経済企画庁発行)と同水系図に基いて作製。



- | | | | |
|-----|-----------|-------|----------|
| GSM | 山頂及び山腹緩斜面 | DEL | 三角州 |
| HL | 丘陵地 | APD | 湿地 |
| FGS | 山麓緩斜面 | ALF | 冠水しやすい地域 |
| VP | 谷底平野 | FRC | 旧河道 |
| GT | 砂礫台地 | DRB | 河原 |
| RT | 岩石台地 | BEACH | 浜 |
| FNL | 扇状地及び自然堤防 | CSD | 被覆砂丘 |

Fig.3 地形区分図上の遺跡分布
縮尺1/100000

昭和40年現地調査・土地分類基本調査図(国土調査)第61(調査者:建設省国土地理院建設技官 細井将右;1/50000,昭和41年,経済企画庁発行)に基づいて作製。



1	名 称	種 別	時 代	24	名 称	種 別	時 代	47	名 称	種 別	時 代	70	名 称	種 別	時 代
1	聖成田遺跡	散布地	弥生-中世	24	門田遺跡	散布地	古墳-中世	47	原遺跡	散布地	弥生-近世	70	西久保遺跡	散布地	弥生-平安
2	聖成田上房城跡	城館跡	中世	25	大森遺跡	散布地	弥生	48	稲荷前遺跡	集落跡	弥生-近世	71	新城城跡	城館跡	中世
3	三ツ城城跡	城館跡	中世	26	北室遺跡	散布地	弥生-平安	49	桶日遺跡	集落跡	弥生-近世	72	ハザツタ遺跡	散布地	古墳-平安
4	橋の森城跡	城館跡	中世	27	北野寺遺跡	散布地	弥生-平安	50	前ノ芝遺跡	散布地	弥生-平安	73	成田神母遺跡	散布地	古墳-平安
5	下田土居城跡	城館跡	中世	28	若宮ノ東遺跡	散布地	弥生-中世	51	ひびのき遺跡	集落跡	弥生-古墳	74	浪江上段遺跡	散布地	古墳-近世
6	大北遺跡	散布地	弥生-平安	29	竹ノ後遺跡	散布地	弥生-古墳	52	伏原遺跡	散布地	弥生-平安	75	須江北遺跡	散布地	古墳-平安
7	程倉遺跡	散布地	弥生	30	小築遺跡	散布地	弥生-近世	53	山田二ツ又遺跡	散布地	古墳-平安	76	八坂神社遺跡	散布地	縄文-古墳
8	上栗山遺跡	散布地	弥生	31	野中庵寺跡	寺院跡	平安	54	三高遺跡	散布地	弥生-平安	77	林田遺跡	集落跡	弥生-中世
9	赤川遺跡	散布地	弥生	32	東崎遺跡	集落跡	弥生-中世	55	水越遺跡	散布地	弥生-平安	78	町田原東遺跡	散布地	縄文-中世
10	岩坂遺跡	散布地	弥生	33	シロイ富遺跡	散布地	古墳-中世	56	酒ノ上遺跡	散布地	弥生-平安	79	西伏古遺跡	散布地	平安-中世
11	中屋敷遺跡	散布地	弥生	34	橋落遺跡	散布地	弥生-平安	57	三津遺跡	散布地	弥生-近世	80	深河北遺跡	散布地	弥生-中世
12	河内田遺跡	散布地	古墳-近世	35	古流谷遺跡	散布地	古墳-平安	58	土佐田宮跡	官衙跡	弥生-中世	81	深河遺跡	集落跡	縄文-近世
13	妻重遺跡	散布地	古墳-近世	36	高浜遺跡	散布地	弥生-平安	59	比川原寺跡	寺院跡	白鳳-奈良	82	西野遺跡群	散布地	弥生-古墳-平安
14	岩家ノ前遺跡	散布地	古墳-近世	37	寺ノ前遺跡	散布地	弥生-中世	60	田分寺遺跡群	散布地	古墳-近世	83	下ノ坪遺跡	建物跡他	平安
15	田村遺跡群	集落跡	縄文-近世	38	芝田遺跡	散布地	古墳-中世	61	後藤丸遺跡	散布地	弥生-近世	84	北地遺跡	散布地	弥生
16	穀田土居城跡	城館跡	中世	39	金地和志遺跡	散布地	古墳-中世	62	土島田遺跡	散布地	古墳-近世	85	高田遺跡	散布地	平安
17	城ノ後遺跡	散布地	古墳	40	姥ヶコツ遺跡	散布地	古墳-平安	63	岡野城跡	城館跡	中世	86	野口遺跡	散布地	弥生-中世
18	中組遺跡	散布地	弥生-中世	41	宮木井ノ内遺跡	散布地	縄文-古墳-平安	64	栄エ田遺跡	散布地	縄文-近世	87	東野土居遺跡	散布地	古墳-平安
19	西ノ芝遺跡	散布地	弥生-中世	42	野村丸遺跡	散布地	弥生-平安	65	熊谷南遺跡	岩屋遺跡他	旧石器-近世	88	曾我遺跡	集落跡	弥生-中世
20	岡の上組遺跡	散布地	弥生-中世	43	松原丸遺跡	散布地	奈良-平安	66	奥谷北遺跡	散布地	縄文	89	千分塚輪遺跡	集落跡	弥生
21	熊枝遺跡	散布地	弥生-平安	44	下ノ野遺跡	散布地	古墳-中世	67	舟谷1号墳	古墳	古墳	90	土方遺跡	集落跡	弥生-中世
22	藤理田遺跡	散布地	弥生-平安	45	大前遺跡	散布地	古墳-中世	68	西村遺跡	散布地	弥生-平安	91	本村遺跡	集落跡	弥生-平安
23	カントリー遺跡	散布地	縄文-古墳-平安	46	高柳遺跡	散布地	弥生-中世	69	全地遺跡	散布地	弥生-平安-中世	92	龍河洞洞六遺跡	洞六遺跡	弥生

建設省国土地理院発行の1/50000地形図に基いて作製。

Fig.4 周辺の遺跡分布図 縮尺1/100000

に連なる横断砂丘を形成している。この砂丘は、物部川の洪水や河道転移を主な契機とする沖積作用に対して堰堤の機能を果たし、高度変化の少ない扇状地の形成を促進すると共に、農業の前提である有効水と有効耕作土の喪失を防いできた。また、南海トラフのプレート間大規模破碎の直後に襲来する最大波高10m前後の歴史津波^{注6}に対しては、明らかに防波堤の役割を果たし、過去の被害を最小限に押さえている。この種の津波による当地域での歴史的被害の第一は、物部川河口部と左右の砂丘低所から数波に渡って押し入る高波であり、膨大な越水が急激な洪水を引き起こし、高低差の乏しい沖積扇やデルタを覆う(Fig.76)。過去に河道転移をもたらした自然堤防の崩壊原因として、物部川では一般的な集中豪雨や長雨の他に、数世代に一度という大津波も視野に収める必要がある。

物部川河道転移の形跡として、昭和40年の国土調査第61号・地形分類図(調査者・建設技官 細井将右)を例に挙げると、現河口から3~2km遡る西岸の開田地区を南西方向に流れ下った旧河川の記載がある(Fig.2・3-FRC-14~17)。また、里改田遺跡の東に鋭く湾入するデルタの形状と規模は、現物部川の河口と酷似する(Fig.2・3)。これらの状況は、物部川がかつて西寄りを行っていたとする藩政時代以来の研究者らによる地理考証の結果とも、基本的に符合する。地理環境の時代設定を現砂丘の基層形成以後に限定すれば、物部川が西寄りを行っていた当時の砂丘後背には、ほぼ今日の地形分類図上のデルタに沿って広がる汽水性の入江が想定される。側面砂丘と河口の堆砂によって波浪から守られる汽水性の入江は、磯に比べて安全かつ身近な漁場となり、更に築港を持たない時代には沿岸航行船の碇泊港として高い利用価値を持つ。この点は、『土左日記』の「おほみなと」に関する歴代の地理考証とも無縁ではないが、それ以前の問題として、香長平野における弥生文化が物部川の河口付近から展開する環境要因を探る場合に、不可避の重要な局面となる。なお、沖積扇に残る複数の侵食崖や砂礫堆にも増して、地下のボーリング調査が明らかとした厚い玉砂利層の広範な分布データ^{注7}は、旧物部川の川床が沖積扇を広角度で覆い、河道と河口の転移は過去に幾度も生じた状況を示唆している。

第6節 地形と周辺遺跡の分布

浦戸湾北面の山裾に古代寺院の秦泉寺廃寺跡や式内社の土佐一宮神社が分布する点や、より低位に立地する孤立丘陵の名称末尾に「島」を付け、「比島」「洞ヶ島」「竹島」「葛島」「田辺島」「大島」等と称する点、更にこれらの周辺に「津」「江」「崎」等の河口や海浜に縁のある語尾をつけた地名が残る点等から、浦戸湾を囲む現高知市の中・東部平野は、少なくとも古代まで浅海に覆われていたと推定されている。

降って南北朝期には、現高知市の中心部で最大の独立丘陵である大高坂山^{おおたかさか}が劣勢に追い込まれた南朝方の最後の拠点となり、その攻防戦は熾烈を極め、応暦3年(1340年)、城主・大高坂松王丸^{おおたかさかまつおうまる}の討死をもって南朝方勢力の命脈が断たれたという。この伝承記録は、大高坂山が湾奥に在って、命運を左右する要衝的位置を占めた状況を窺わせる。更に戦国末期に下って、長宗我部元親は北山を背に、国分川の天然濠と浦戸湾頭に連なるデルタに守られた要害の山城・岡豊城(Fig.3・4-63、南国市岡豊町)から大高坂山への移城を試みるが、城下を襲う洪水の頻発で断念し、移城先を浦戸湾の航行監視に適する浦戸城^{こうち}に変更した。大高坂山は「河中山」とも呼ばれ、「河中」は川の中州を意味

する。この「河中」地区が、「高知」(高智)城下として栄えるのは、山内一豊の土佐移封以後であり、江戸期の寒冷化による小海退に城下北方の山林過伐による沖積作用の加速が重なった結果とも考えられる。

高知城以東の地形区分は、1.4km先の菜円場付近までが鏡川や久万川の形成した自然堤防および後背湿地であり、浦戸湾を取り囲む0m級のデルタ地帯へと続く。このデルタは、浦戸湾を隔てる高知市東部では沖積源を国分川や下田川へとシフトし、北から南の順に大津・介良・芦ヶ谷・砂地におよぶ。さらに大津からは1km足らず(0.75km)の谷底平野を隔て、南国市西端の岡豊町中島～小籠～西野々のデルタへと続く。介良からは南国市の伊達野に、芦ヶ谷からは下田川に沿って南国市の稲生、さらに里改田を経て浜改田砂丘以北の水田地帯に及ぶ。また、沿海の砂地からは、海に迫る山丘と海岸砂丘との狭間にデルタが断続する(Fig.3・4)。

香長平野や、物部川現流の東岸地区では、弥生時代に遺跡数が急増する。平野を囲む丘陵に点在する弥生時代中期末の高地性集落や古墳時代の山上墳墓、あるいは古墳時代～古代の窯址群や中世山城等の山地丘陵遺跡を除くと、古墳時代から中近世にかけて継続あるいは盛衰する諸遺跡の立地は、基本的に弥生時代を通じて拡散した遺跡に沿って、その合間を埋める形で展開している。弥生時代の遺跡分布密度が高いエリアの内部では、その後も遺跡数が増加するのに対し、逆の場合には、無遺跡あるいは希薄なままに終わる。これを面的規模の比較的大きな幾つかの遺跡を例に検証すると、次の状況となる。

1) 沖積扇末端に立地する弥生時代の母村集落： 高知平野中央部における弥生時代の母村集落と目される田村遺跡群(Fig.3・4-15)は、古くは縄文時代前期からの遺物分布が見られ、初現期以降の弥生式土器や住居跡・倉庫跡・環濠跡等が検出されている。若干の衰退期を挟みながらも中近世まで継続した複合遺跡群である。遺跡群は物部川現流の西岸約1.2～2.0kmの距離に展開する。物部川の主流が西寄りを行っていた当時は、遺跡群の東限が侵食崖と接し、より古い段階では、その河口部東岸が遺跡群位置の西端まで200m前後の至近に迫っていたと考えられる(Fig.2・3)。

2) 里改田遺跡における今回調査区の概要： 物部川の旧河口を挟んで田村遺跡群の対岸に里改田遺跡(Fig.3・4-1)が立地する。1998～99年度の調査は、遺跡範囲の面的中央部に当たる室内・岩路地区(Fig.5)を対象とした。ここでは、弥生前期の遺物としては、木葉紋などをヘラ描した土器片が少量出土したが、圧倒的多数は、弥生中期から後期末・古墳初頭期にかけての土器片および石器であり、弥生時代中期末～古墳時代初頭の竪穴住居跡・計6棟を検出している。古代の遺物では須恵器片が主であり、遺構としては掘立柱建物跡・計4棟を検出している。また、中・近世の土坑や溝跡からは、13世紀～19世紀の陶磁器類が出土した。遺跡の立地は、旧物部川河口の一つと推定し得る湾入デルタ(Fig.2・3)の西岸至近に当たる。

3) 旧物部川河口部の西岸帯： 上記した旧河口跡埋積デルタの両岸帯では、里改田遺跡の北に中組遺跡(Fig.3・4-18)・西ノ芝(Fig.3・4-19)・鹿枝遺跡(Fig.3・4-21)等5遺跡が狭い間隔で分布しており、散布遺物も里改田遺跡と併行な時期が示される。弥生時代の遺物散布地としては、更にこの旧河道の周縁に沿って修理田(Fig.3・4-22)・高添(Fig.3・4-36)・寺ノ前(Fig.3・4-37)等の大小の遺跡が北北東の方向に連なる。

4) 物部川沖積扇の扇頂付近： 丘陵裾の古期砂礫台地に弥生時代後期後半の指標土器となるヒビノキ式土器を出土したヒビノキ遺跡群 (Fig.3・4-51) や楠目遺跡 (Fig.3・4-49), 散布地の前ノ芝遺跡 (Fig.3・4-50)・伏原遺跡 (Fig.3・4-52) 等が密集し, それぞれ弥生時代から古墳時代, あるいは中・近世まで複合している。また, 国分川沖積扇の扇頂付近には, 三島 (Fig.3・4-54)・水通 (Fig.3・4-55)・淵ノ上 (Fig.3・4-56) 等の弥生時代の遺物散布地があり, 平安・あるいは近世にかけて複合する。これら二つの扇頂が一体化した部分から舌状形を描いて南西方向に伸びる古期砂礫台地でも, 弥生時代に始まる遺跡の分布は, 伏流水の湧出環境にある縁辺帯に見られ, 古代あるいは中・近世まで複合する。これらの遺跡には, 台地北縁の三添遺跡 (Fig.3・4-57)・後藤丸遺跡 (Fig.3・4-61), 台地西端の小籠 [小籠] 遺跡 (Fig.3・4-30)・北野寄遺跡 (Fig.3・4-27)・若宮ノ東遺跡 (Fig.3・4-28)・北泉遺跡 (Fig.3・4-26)・台地南縁の東崎 (Fig.3・4-32)・野村丸 (Fig.3・4-42)・金地遺跡 (Fig.3・4-69) 等がある。小籠遺跡や北野寄遺跡・北泉遺跡は, 古期扇状砂礫台地の末端にありながら, かつて南流した国分川の旧河道跡 (Fig.2-FRC-6等) を留めるデルタと接する。

5) 北山裾と古期砂礫台地に挟まれた新时期状地： 弥生時代の遺跡としては, 国分川北岸に中世まで複合する土佐国府跡 (Fig.3・4-58) が立地するほか, 笠ノ川西岸には平安時代にかけての複合散布地である西村遺跡 (Fig.3・4-68) や西久保遺跡 (Fig.3・4-70) が分布する。

6) 古期砂礫台地沿いの物部川新时期状地北縁： 末端付近に弥生前期末の指標となる大篠式土器を出土した大篠遺跡 (Fig.3・4-25) が立地するほか, 扇中央に金地遺跡 (Fig.3・4-69) の南端がかかり, 扇頂付近では, 弥生時代から中・近世にかけての集落跡である稲荷前遺跡 (Fig.3・4-48) や複合散布地である高柳遺跡 (Fig.3・4-46)・原遺跡 (Fig.3・4-47) 等がある。

7) 物部川東岸： 弥生時代の遺跡は, 物部川現流の河川敷と直に接する自然堤防や砂礫台地縁辺に沿って列点状に分布する点が, まず特徴的である。この点は, 旧河道跡や孤立小河川を留める凹低地に属し, 1~2kmに渡って遺跡分布が空白な西岸の状況と対照的である (Fig.2・3)。両岸の状況は, 少なくとも弥生時代以後のある時期に, 河道が西から東に転移したことを示している。特に, 物部川最下の自然吐流口にあたる蔵福寺地区の対岸に, 縄文時代から近世に及ぶ複合遺跡の深淵遺跡 (Fig.3・4-81) と深淵北遺跡 (Fig.3・4-80) があり, いずれも古期砂礫台地下の自然堤防に立地する点が目を引く。自然堤防上に立地する縄文時代以来の遺跡には, この他にも下流側から二番目の自然吐流口に当たる岩積地区の対岸に野田堰東遺跡 (Fig.3・4-78, 中世にかけての散布地) が存在する。物部川河川敷に面した砂礫台地の縁辺には, 弥生時代から中・近世に渡る数遺跡が点在しており, 下流側から順に野口遺跡 (Fig.3・4-86)・北地遺跡 (Fig.3・4-84)・西野遺跡群 (Fig.3・4-82)・林田遺跡 (Fig.3・4-77) 等が知られる。また, 物部川東岸地区の地質的特色として, 北東方位の走向を持つ断層帯が狭い間隔で併走しており, 野市町下地から香宗川と山北川の水系に沿って, 山裾丘陵と谷底平野が深く入り組む複雑な地形を形成する点が挙げられる。この谷底平野西端域に立地する遺跡としては, 弥生時代の木製農具や獣骨等のほか, 温帯ジャポニカに少量の熱帯ジャポニカが交じる炭化米を出土した下分遠崎遺跡 (Fig.3・4-89) と, 弥生時代~中世の複合遺跡である曾我遺跡 (Fig.3・4-88) が東西に並ぶ。

因みに, 下分遠崎遺跡から山北川を挟んで約1km北の野市町本村遺跡 (Fig.3・4-91) は, 三宝山

の南裾から山北川に向けて一際長く突出した低丘陵端に立地する弥生時代中期末の集落跡であり、地形上の要衝を押さえる位置にある。この背後に連なる三宝山の頂部斜面(標高249m)には、弥生時代中期末から後期にかけての洞穴遺跡として全国的に著名な龍河洞洞穴遺跡(Fig.3・4-92)が存在するほか、尾根線の一角に高地性集落の所在した可能性が指摘されている。この尾根線からの眺望は極めて良好であり、南面に広がる太平洋や北面に連なる山々、その狭間の平野と河川網が一望の下に在る。

以上、香長平野を中心として地形との関連で遺跡分布を概観したが、歴史地理的に重要な意味を持つ一現象は、古墳時代の墳墓の分布状況に見られる。古代以降の郡制で長岡郡と香美郡に属した南国市は、高知県下では古墳分布が最多密の地域であり、山裾に分布する少例を除くと、大半が古墳時代後期に普及する群集墓に属し、山丘の斜面に沿って分布する。それらは、国分川と物部川が形成した沖積扇の末端とデルタの交錯地帯に沿って南北に点在する孤立丘陵と、その延長線上に北山から張り出す山丘に立地する。更に、この一帯の山丘でも、地形上のデルタや易冠水性の低湿地帯に囲まれるエリアでは、古墳群の分布が途絶する。例えば、古期砂礫台地の先端に閉鎖された「く」字形デルタに西から突出する長崎の小丘陵(Fig.4)には、古墳の分布が知られていない。また、鉢伏山(Fig.4)も麓の大部分がデルタに囲まれるが、東側の沖積扇端から接近が容易な南緩斜面に限って、馬背古墳群や井川古墳(Fig.4)等の分布が見られる。また、鉢伏山との間に約1km²程の孤立した扇状地を形成する沿海の山丘でも、南斜面に奥行き深い緩斜丘陵を多く擁するが、海岸砂丘との間にデルタが介在し、今のところ古墳の分布は知られていない。この状況は、古墳の造営や葬祭に関わる人々が、このあたりから高知市中・東部の丘陵際まで覆っていた浅海を渡って訪れたのではなく、陸化の早い当地域の沖積扇側から参加した状況を物語る。

以上の遺跡分布から、居住圏の歴史地理的な条件を概括すると、少なくとも遺跡数の増加する弥生時代以降の状況からは、一つの明快な原則が見て取れる。すなわち、水系に密着した居住圏の展開が、既に弥生時代を通じて画定を完了しており、沖積扇の自然堤防帯、および勾配を強める折線帯の高位側を優先的に占めている。その地形上の限界枠は、下はデルタ及び低湿地の直前に止まり、上は扇央部、あるいは山丘裾に止まる。このエリアの地形的特質は、地下の伏流水が自然湧出しやすい点であり、この特質は古期沖積扇の末端についても当てはまる。別の表現では、井戸の掘削を必要としないか、あるいは素掘り程度で容易に湧水を得られる帯状のエリアと言える。その前面に広がるデルタは、16世紀末の長宗我部氏地検帳に「塩田」と記載されたような塩湿地であり、大潮あるいは満潮時に海水が進入するため、新田の干拓には前面に築堤を要している。中世から現代に至る築堤干拓や沖積作用の進行によって汀線は後退し、無遺跡の旧浅海底が陸化した結果、遺跡の分布に明瞭な限界線を生じたものと考えられる。ここでも、かつて淡水と海水が接する入江状地形の沖積扇端部において、遺跡分布の高密な点が重要である。

弥生集落の母村として位置付けられる田村遺跡群は、里改田遺跡との間に東西1km余りを隔てるに過ぎない。里改田遺跡が浦戸湾頭へと連なる丘陵間の回廊口を占める点や、2.5m前後低い標高差、および物部川旧河口の一つが田村遺跡群との間に介在した可能性を除くと、ほぼ同様の環境にある。初回に当たる今回の調査でも、「室ノ内」「岩路」両地区ともに弥生前期初頭の木葉紋描き土器

細片を得ており、早い段階から田村遺跡群と並存した可能性がある。

第7節 里改田の名称と属郡

里改田遺跡の立地する「香長平野」の名称は、過去の郡制で東半が香美郡、西半が長岡郡に属したことによる。承平年間(931～938)に撰された『和名抄』に見える郡郷構成では、長岡郡下に登利郷・殖田郷・宗部郷・江村郷・片山郷・篠原郷・大曾郷が、香美郡下には深淵郷・石村郷・物部郷・田村郷が見える。このうち、長岡郡には「奈加乎加」のルビを当てる。

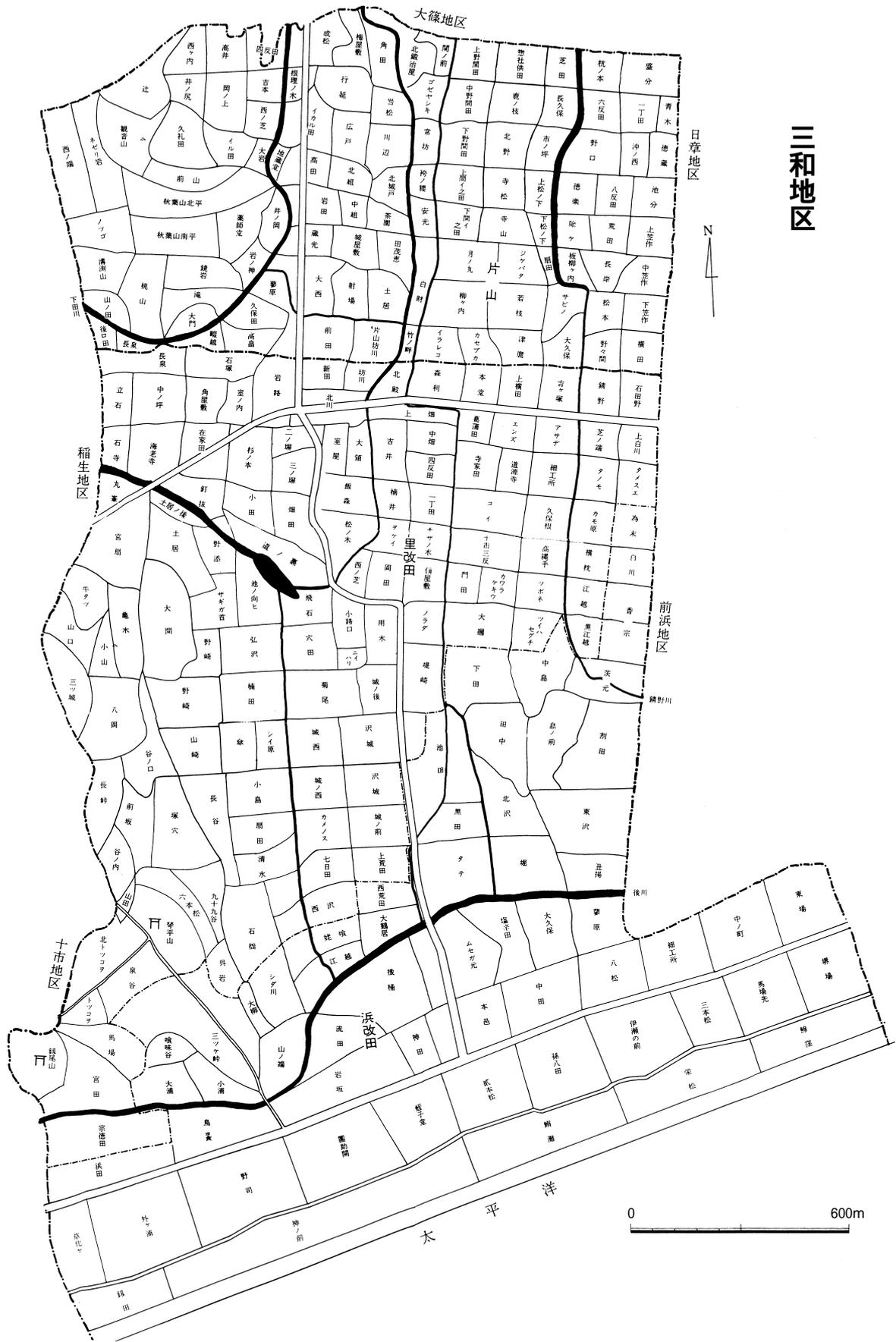
「片山」の称は、里改田の北隣に現存する。長宗我部氏の地検帳では、天正十六年(1588)八月吉日から同年九月十三日付けの長岡郡地検分に「土佐国長岡郡蚊居田村地検帳」と表紙書きし、次いで同年九月晦日から十月十五日付けの地検分に「土佐国長岡郡片山郷地検帳」と表紙書きしている。両地検帳所載の地割名は、里改田と片山に現存する小字と一致するものが多く、位置関係を示す附記とも合致する。個々の日付とその多くが同定可能な地割名を追うと、この一連の地検を南の「蚊居田村」(現. 里改田)から北の「片山郷」(現. 片山)に向けて実施した状況が明らかとなる。それゆえ、少なくとも天正十六年(1588)時点では、里改田は「長岡郡」の「蚊居田村」である。

次に、香長平野に残る古い地割りが、およそN-12°-Eを前後する所から、長岡・香美両郡の郡境も条里制施行当初から同じ方位と想定される。地検帳の「片山郷」と「蚊居田村」が現在と同じ南北の位置関係にあるため、名称は不明ながら、「蚊居田村」地区は和名抄の時点でも「長岡郡片山郷」に属した点に疑いの余地はない。

『続日本紀』は、光仁天皇宝亀九年(778)三月巳酉「土佐国言、去年七月、風雨大切、四郡百姓、産業損傷、加以、人畜流亡、廬舎破壊、詔加賑給焉」と記し、奈良時代末の778年には、土佐国に少なくとも四郡が存在したことを伝える。この四郡は確証を欠くものの、安養寺禾麻呂(1696～1767)の『土佐幽考』(1734年成書)や武藤致和の『南路志』(1813年成書)では、幡多・土佐・安芸・吾川と考えている。また、『土佐幽考』では、「宝亀以来延喜以前(770～923)割土佐建長岡割長岡建香美郡」と見て、「東自鏡河水涯西至坂折山麓遠望難極眼、南北断岸巍立直香美郡名也」とする。更に香美郡設置に関わる記事として、『日本後紀』は「延暦廿四年(805)五月戊寅、授土左国香美郡少領外従六位上物部鏡連家主爵二級、以撫育有方、公勤匪怠也」と記し、「香美郡少領」の名「物部鏡連家主」を挙げる。次いで、『類聚国史』は「大同五年(810)正月壬戌、土左国香美郡人物部文連全敷女授少初位上、免戸田租、以終身、標其門閭、以旌節行也、全敷女、同郡物部鏡連家主之妻也、夫亡之後、哭不絶声、哀感行路」の記事で香美郡既設を裏打ちする。そこで、「割土佐建長岡割長岡建香美郡」(土佐を割て長岡を建て、長岡を割て香美郡を建つ)と見る『土佐幽考』の見解に立てば、長岡郡から香美郡が分かれた時期は、光仁天皇宝亀九年(778)から、延暦廿四年(805)の間となり、長岡郡の設置は、この期間内もしくは以前となる。長岡郡に関する消息は、これを最後に途絶える。[史料引文中の西暦年は筆者が注記]

これを時代を追ってまとめると、i) 『土佐幽考』を前提とした場合のみ、774年以前の長岡郡設立の余地がある。ii) 『和名抄』の撰された承平年間(931～938)には、「長岡郡片山郷」が既に存在する。名称不明ながら里改田地区はこれに属していたと見られる。iii) 「土佐国長岡郡蚊居田村地

三和地区



0 600m

検帳]によって、少なくとも天正十六年(1588)八月吉日から同年九月十三日の期間、里改田地区は「長岡郡蚊居田村」である。

なお、江戸時代に至って、「宇賀家文書」として知られる蚊居田村の庄屋文書では、承応二年(1653)十一月二十八日付の文書に『蚊居田村地詰之目録』、寛文四年(1664)三月二十八日付の『土佐国知行高村数之帳』(内閣文庫蔵)に「一千八百七拾九石五斗貳升 蚊居田村」とし、天正十六年(1588)と同じ字を用いている。現在の「里改田」の初出は、「宇賀家文書」の貞享元年(1684)四月二十三日付の『指出』に記す「里改田^{注8}村」である。しかし、その16年後の元禄十三年(1700)に徳川幕府が作製した『土佐国絵図』(高知市民図書館蔵)では、再び「蚊居田村」と記入しており、「里改田村」の定着には、かなりの時間を要したものと見られる。

第8節 小字に残る重要な古名

遺跡内には、律令制の郡の長官を指す「大領」や、建物を指す古称「室屋」、「室ノ内」等の小字が残る。更に遺跡範囲から僅か50mほど東には、『続日本紀』に載る「道原寺」の名が見え(『長岡郡蚊居田村地検帳』では「トウケン」、現地割図では「道源寺」と表記)、付近には他にも寺坊に因んだ小字が残る。遺跡範囲内にも「エヒ寺」等の名が残り、今回調査した「室ノ内」・「岩路」の両地区とも、須恵器瓦片を出土している。

この里改田遺跡と周辺部に残る重要な古名が、歴史・考古研究家の関心を集めて来たが、未発掘のために地名考証の域に止まらざるを得なかった。今回の調査で姿を現した古代の掘立柱建物群の一角や須恵器瓦片の分布は、文献史料と相照合して開析すべき初の物的資料を添えた点で、極めて重要である。しかし、これら物的資料は、その年代の同定や性格付けを論ずるには余りにも部分的に過ぎると言わざるを得ず、現時点は、なお周辺の地歴や古代の測量法ならびに既出資料に対する考察を深めると共に、今後における調査事実の蓄積を待つべき段階と考える。(武吉眞裕)

注釈

注1：『高知県地質鉱山図』改訂版—高知県商工課発行1968年(調査編集：甲藤次郎・小島丈児・須鎗和己・沢村武雄・鈴木堯士)。

注2：日本の地質8『四国地方』—日本の地質『四国地方』編集委員会編；共立出版1991年。

注3：『高知地盤図』—高知地盤図編集委員会編；社団法人高知県建築設計監理協会1992年。

注4：建設省国土地理院、明治40年測図(本報告書Fig.78参照)。

注5：『土地分類基本調査：地形・表層地質・土壤調査—高知』経済企画庁総合開発局国土調査課。編集発行1996年。

注6：『南海地震津波—土佐』間城龍男著・土佐津波の会1983年。同著では、「この地方の海岸砂丘を駆け上がった津波の高さは東の岸本・赤岡で9m、西の浜改田で10m程度であったと推定をされる」とする。

注7：『高知地盤図』—高知地盤図編集委員会編；社団法人高知県建築設計監理協会1992年。

注8：『南国市史』下巻—南国市史編纂委員会編1979年。第五編第三章「宇賀家文書」(執筆. 高橋史朗)。

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査区の設定

平成10年度に発掘調査を先行した小字「室ノ内」地区の東南角は、かつて水田作地の経歴も持つが、調査前の段階では疎菜・果樹の路地畑であり、現用の地下敷設物が皆無であった。防御あるいは回避すべき構造物としては、東辺(沿長15.0m)と南辺に接する市道路肩および側溝(合計沿長約36.0m)に加え、永代墓地と伝えられる中央北部がある。これらと接続する1m幅目安の地面を余して実掘範囲を画定し、これをⅠ区とした。その平面形は南南西に傾いた錠前形に近く、北の凹入部が伝永代墓地に当たる(Fig.7)。

平成11年度の調査対象地は、小字「岩路」地区の南西角部附近を占め、Ⅰ区東辺の市道を挟んで東向きの角形平面形を呈する。調査前は宅地であり、現用の排水管が南北方向に並設されるところから、当該の2箇所を各々1~3m幅のバンクとして掘削範囲から除外した。県道と接する南辺(沿長36.4m)および市道側溝と接する西辺(沿長12.8m)での地面の引き幅は、Ⅰ区と同様に1m幅目安として実掘範囲を画定し、これをⅡ区とした。Ⅱ区内部では、上記2条のバンクに仕切られた三つの小区画を、東から順にⅡ-A区、Ⅱ-B区、Ⅱ-C区と名称している。なお、Ⅱ区の発掘調査に当たっては、北面の現宅地から県道・市道へのアクセス確保を目的として、臨時の仮設道が敷設され、その路肩がⅡ区の北限を画す(Fig.7)。

第2節 調査の方法

1. 測量：Ⅰ区とⅡ区ともに標高差の少ない一連の水平地面であり、相互に見通しの利く点から、水平・垂直位置の測量には両調査区の南面に既存する工事用の測量基準点J5・J6・T1(Fig.7)を共用した。視準・計測には光波測量器械(分解能=10秒)とレベル測量器械を併用し、調査用に設定した測点は公共座標と標高で記録した。

2. グリッドの設定：まず、調査区の位置付けや将来の調査の便に供するため、公共座標に基いて遺跡台帳上の里改田遺跡範囲全体を覆う大グリッドを設定した。立石地区北西のX=60880；Y=12760地点をA1-0とし、バー(-)左右のアラビア数字はX座標値が4減じる毎に1を加え、Y座標値が4加わる毎に1を加えるものとした。アルファベットの大きい文字は、直続するアラビア数字が10を越えたと後続文字に変わるものとする。例：A10-9の公共座標はX=60844；Y=12796となり、B1-10の公共座標はX=60840；Y=12800となる。この方式による南北200mメッシュの大グリッド設定図がFig.6であり、遺跡範囲全体の西端・中央・東端のメッシュ交点のデータのみ抜粋すれば下表の状況となる。

グリッド	X座標	Y座標	グリッド	X座標	Y座標	グリッド	X座標	Y座標
A1-0	60880	12760	A1-150	60880	13360	A1-300	60880	13960
F1-0	60680	12760	F1-150	60680	13360	F1-300	60680	13960
K1-0	60480	12760	K1-150	60480	13360	K1-300	60480	13960
P1-0	60280	12760	P1-150	60280	13360	P1-300	60280	13960
U1-0	60080	12760	U1-150	60080	13360	U1-300	60080	13960

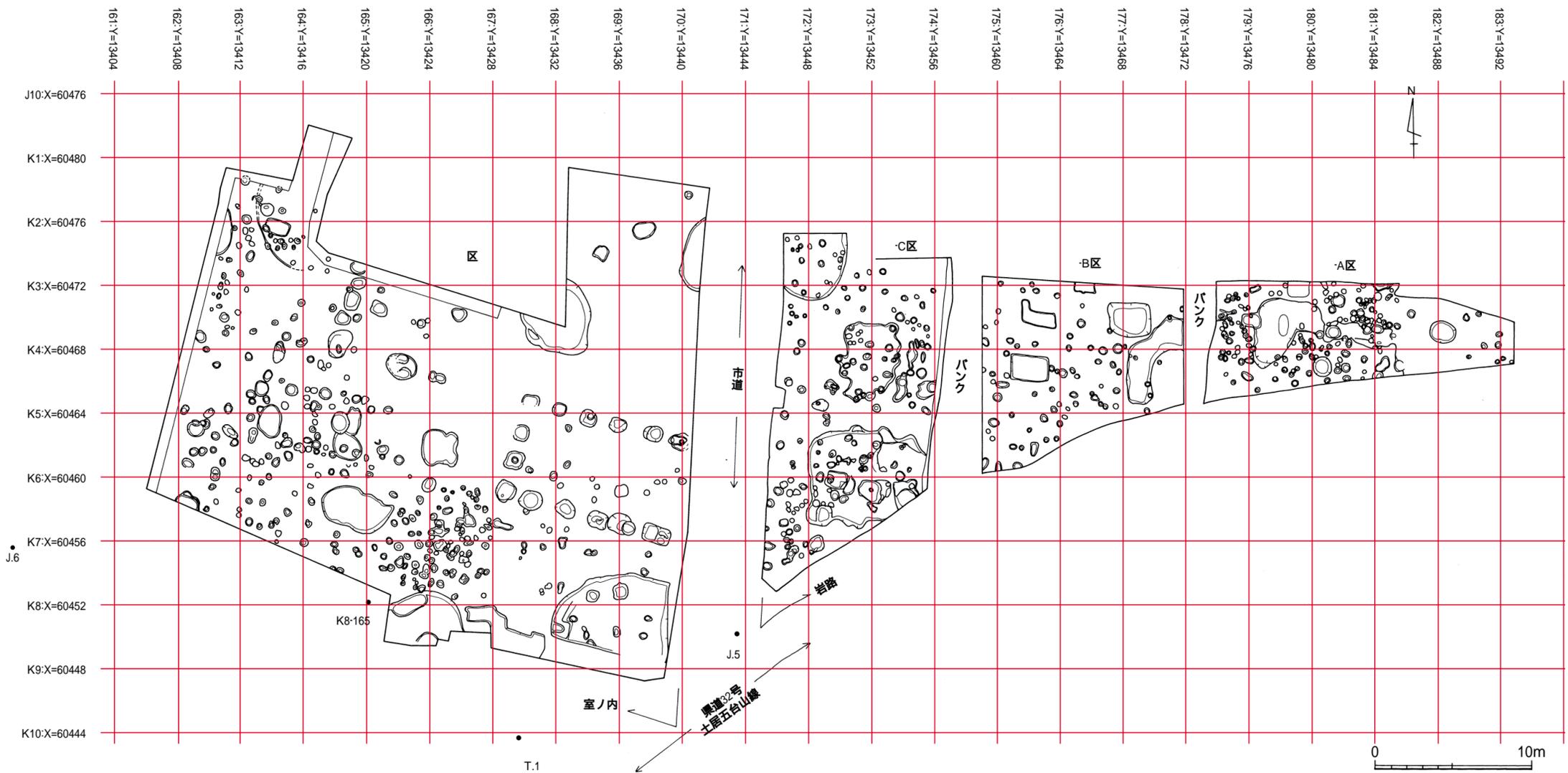
東西・南北各4m単位 of メッシュで区切られた正方形区画をグリッドの最小単位とし、メッシュ交



点を4の倍数の公共座標整数値とする。各グリッドの名称は、それぞれ北西角交点の番号で代表した。J10のX位番号にかかるI区北西端の一角を例外として、I区・II区はX位番号K1~K9、Y位番号161~183の範囲に含まれる (Fig. 7)。この方式に従って、調査区内では公共座標上の4の倍数値交点に杭を打ち、東西・南北各4m単位のグリッドを設定した。

3. 調査区内の測図：平面測図に当たっては、4mグリッド単位の手描とした。縮尺は、遺構について1/20、遺物の検出状況について1/10を採用している。断面図と高度変化図は、縮尺1/20の手描を原則とした。

4. 掘削：I区・II区ともに、遺構検出あるいは遺物集中の層準までを重機による水平剥ぎとし、それより砂礫堆の上面に至る層準を手掘りとした。



工事用測量基準点	X座標	Y座標	標高
J . 5	60450.163	13443.256	
J . 6	60455.210	13397.983	
T . 1	60443.626	13429.623	4.658m
光波測器機設置点	X座標	Y座標	標高
K 8 1 6 5	60452.000	13420.000	4.325m

第3節 I 区の概要と基本層序

調査前の地表高度は、標高4.20m前後の水準にあり、上面の平坦な河成砂礫堆を層厚0.10～0.40m程度の砂礫交じりシルト質土壌が薄く覆う。これらのシルト質土壌は、上位より畑作による鋤き返しを受けたI層(旧水田土壌を主成分とする耕作土)；水田に用いられた時期の作土・鋤床層(I'層)；中世の堆積と見られる遺物包含層(II層)；弥生時代～古代の堆積と見られる遺物包含層(III層)に大別し得る。I'層とII層は、主として凹低箇所での局所的な分布を示し、水害による流失や最近まで鋤き返しの継続したI層中に解消した可能性も考えられる。表部土壌の層厚が0.10～0.20m程度の部分では、I層の直下に河成砂礫堆が露呈することが多い。

遺物包含層の主体はIII層であり、弥生時代～古墳時代初頭期の土器片と石器類が圧倒的に優勢である。III層の土色は黒褐色～暗灰褐色であり、同層内での切り合いやラミナの捕捉が容易でない。このため、稀に混在する古代前後の遺物片と堆積年代の関係を、一律には言明し難い。III層の低位亜層と見られる部分には、上位より「III'」「III''」の層位記号を当てた。

III層と河成砂礫堆との間には、両成分の混層が断続的に介在し、これをIV層とした。IV層には少量の土器細片が含まれる。類似の混層は、砂礫堆積の中にも稀に介在するが、トレンチの掘削範囲では遺物の包含を見ない。

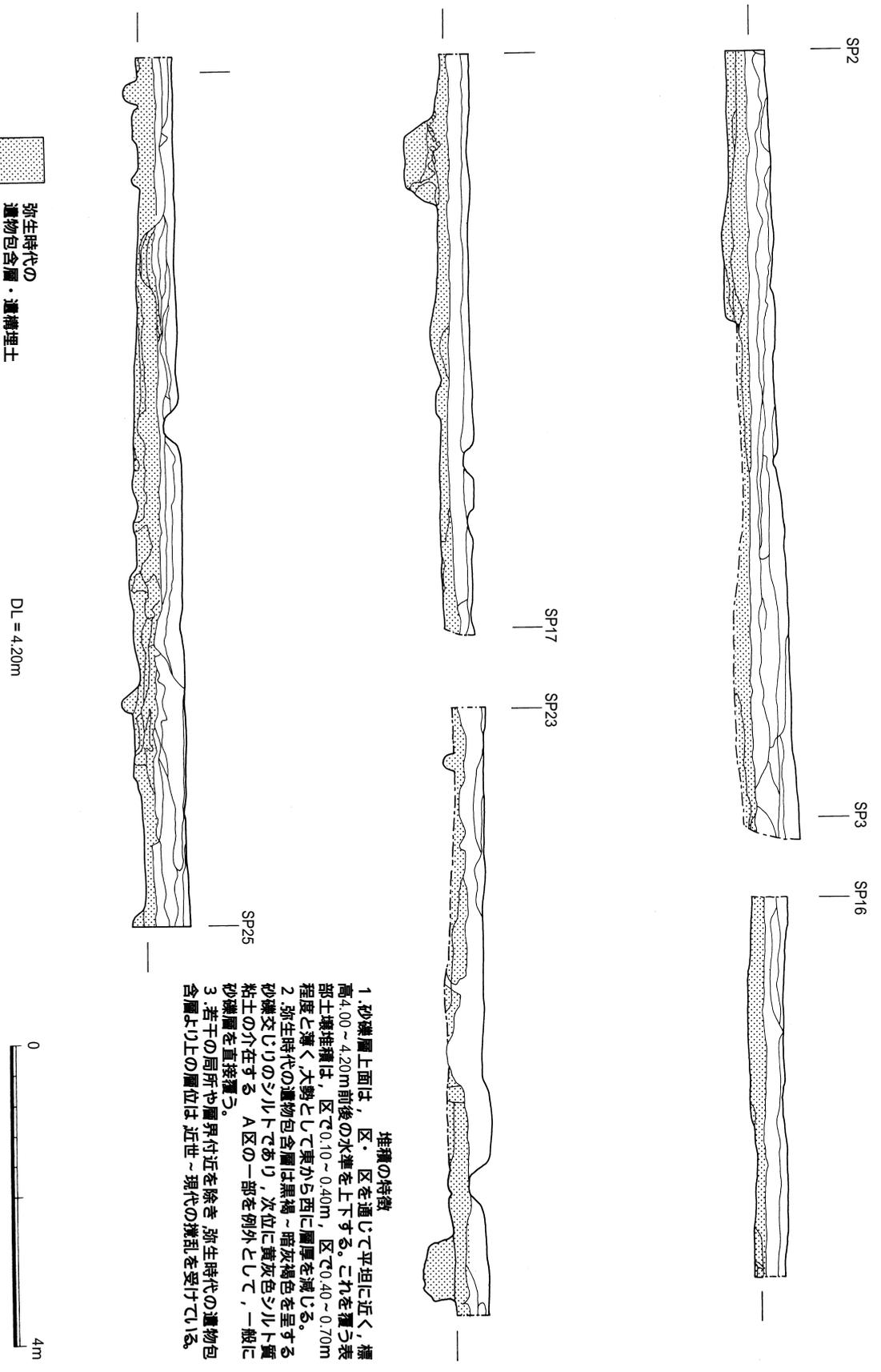
河成砂礫堆は円礫と粗粒砂から成り、粒度組成によって明瞭に識別可能な各型の斜交ラミナが観察される。これらの斜交ラミナには平面型(planar type)・谷型(trough type)・峰型(ridge type)があり、円礫堆・砂礫堆・粗粒砂堆・黒褐色土混じり砂礫堆等の単位に細分される。トレンチ壁に露呈した標高4.00～3.30m範囲の斜交ラミナは、大勢的に見て北東→南西向き水流による形成であることを示し、上面から掘り込まれた弥生時代以後の各種遺構との関係から、弥生時代以前の堆積と判定される。この河成砂礫堆をV層とし、層内ラミナの単位を上位から順にアラビア数字で表記した。

集石や近世土坑の一部を除く掘り込み遺構の大部分は、IV層あるいはV層(河成砂礫堆)の上面で検出しており、基本的にIII層やIV層と判別不可能な土壌成分が埋積する。古代以後の敷石と見られる集石1を充填する土壌や近世土坑SK11の埋積土は、水田耕作土あるいは鋤床と同様の灰白～黄白色シルト質土壌であり、年代幅の広い雑多な遺物を含む。これらの遺構埋積土を「埋土」・「M」と略称・略号し、内部にラミナを捕捉し得る場合には、上位よりアラビア数字を付した。I区における主要層位とその属性を整理すると、下表の状況となる。

層位記号	土色	土性	包含遺物の時期
I層	暗灰褐色	砂礫混じりのシルト	弥生～近現代
I'層	灰白～黄白色	砂礫少含のシルト～粘土質シルト	弥生～近現代
II層	暗灰褐色	小礫混じりの砂質シルト	弥生～中世
III層	黒褐色～暗灰褐色	砂礫混じりのシルト	弥生(～古代前後?)
IV層	黒褐色～黄灰褐色	シルト混じりの砂礫	弥生
V層	暗灰色～黄灰色	砂礫	—無遺物—

— I 区 基本層序整理表 —

I区で検出された遺構としては、竪穴住居跡2棟(ST1・ST2；弥生時代～古墳時代初頭)、掘立柱建物跡2棟(SB1・SB2；古代)、土坑12基(SK1～12；弥生～近世)、集石2基(集石1・集石2)、井戸跡1基(近世頃)、柱根石2基(近世)のほか、性格を特定し難い部分12箇所(SX1～12；弥生時代以降)



堆積の特徴

1. 砂礫層上面は、区・区を通じて平坦に近く、標高4.00～4.20m前後の水準を上下する。これを覆う表部土壌堆積は、区で0.10～0.40m、区で0.40～0.70m程度と薄く、大勢として東から西に層厚を減じる。
2. 弥生時代の遺物包含層は黒褐～暗灰褐色を呈する砂礫交じりのシルトであり、次位に黄灰色シルト質粘土の介在する。A区の一部を例外として、一般に砂礫層を直接覆う。
3. 若干の局所や層界付近を除き、弥生時代の遺物包含層より上の層位は、近世～現代の擾乱を受けている。

弥生時代の
遺物包含層・遺構埋土

DL = 4.20m



が挙げられ、柱穴が主と見られるピットの総数は343基の上る。

出土遺物は弥生時代～古墳時代初頭の土器片が22,885点と圧倒的に多く、弥生時代の石器が24点を数える。この他には、古墳時代～古代の須恵器片68点、古代の須恵器瓦片6点、古代の土師器片3点、中世の瓦器片3点、中国産青磁片1点、近世陶磁片286点である。

出土遺物で特に目を引くものとしては、弥生前期初頭の本葉紋土器片2点や古い型式の打製石鎌身1点、磨製・打製の石包丁各2点、古墳時代初頭の東阿波型土器片約350点等が挙げられる。

また、弥生式土器片からは、出土量の上で中期初頭・中期末・後期後半の3つのピークが見られ、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器片も多い。

第4節 II区の概要と基本層序

II区では、地表面が西から東に微高(標高4.40→4.70m)するが、河成砂礫堆上面の高度水準は、I区と同様に平坦であり、標高4.00～4.20m附近を上下する。調査前まで宅地であったことが表土流失阻止に作用した故か、河成砂礫堆を覆う表部土層は、I区より若干厚めの0.40～0.70m厚を測る。上位0.25～0.60m厚の表土は全て近世～現代の攪乱を受けており、旧耕作土の多くは、これに解消したものと見られる。弥生式土器片の多い遺物包含層(Ⅲ層)の遺存は、I区に比して厚めであり、0.30mを超える部分も見られる。Ⅲ層と河成砂礫堆(V層)に介在する両者の混層(Ⅳ層)は、I区と同じく断続的に分布する。

河成砂礫堆を構成する粗粒砂には、I区との相異を認め得ないが、円礫の粒度は一般に大きめであり、長径20cmを超えるものも頻見される。この点は、円礫の粒径が概ね15cm以下に止まっていたI区の状況と比較すると、II区の砂礫堆は、更に強力な水勢がもたらした河成作用の結果と言える。II区における深掘トレンチとしては、西端C区の中央に開削した短い基層確認トレンチ1条を数えるのみであり、連続的な断面の様相を記録するに至らなかった。その基層確認トレンチの南壁と西壁では、北から南の流向を示す谷型ラミナの一部を検出ししている。また、河成砂礫堆上面の所々に認められる葺瓦状の円礫分布から復原可能な通過水流の方位は、II区全体を通じて北北東→南南西が主勢である。

Ⅲ層下に黄灰色シルト質粘土の堆積を見るII-A区の東半附近を除き、掘り込み遺構の大部分を砂礫堆の上面附近で検出している。これらの遺構としては、弥生時代後期～終末頃の竪穴住居跡4棟、古代の掘立柱建物跡2棟の他、弥生時代の土坑数基、中世の溝跡2条、近世の井戸跡1基、弥生時代を主とするピット群(合計380基)等が挙げられ、弥生式土器を主とする遺物の出土量も多い。これらについては、V章で詳述する。(武吉眞裕)

第Ⅳ章 I 区の調査成果

第1節 遺構・遺物の遺存状況と水理作用

海岸砂丘後背のデルタにかかる南辺域を除くと、里改田遺跡範囲の地形区分は沖積扇状地の扇端に属す点が過去の国土調査等によって確認されている。扇端とはいえ、今回の発掘調査による基層（無遺物層）確認トレンチで捉えた河成砂礫堆（捕捉範囲：標高4.10～3.30m）の粒度分布が、ほぼ大礫から粗粒砂の範囲に限定される点は、地形分類上の扇中央に匹敵する河成作用の働きを示す。

既に前章で指摘したように、東西に隣接するⅠ・Ⅱ両区の砂礫堆から復原可能な河成作用の主ベクトルを総合すると、北ないし北東→南ないし南西の水流方位が導かれる。このうち、Ⅰ区の河成作用に関しては、特に西トレンチ（Fig.10）と北トレンチ西端（Fig.11）で観察した砂礫堆（Ⅴ層）の斜交葉理照合により北東→南西方向のベクトルが得られる。この方位は、表層の水平剥ぎによる遺構検出工程で平面に露呈した砂礫堆の微折線（Fig.9 西部のP60～P94附近を結ぶ実線：局地的な南西高―北西低を記録したもの）とも一致する。この砂礫堆（Ⅴ層）は無遺物であり、上覆するⅢ層・Ⅳ層の包含遺物が多量の弥生式土器片および同時代の石器類である点から、弥生時代以前の河成作用による産物であろう。その表面には斜交葉理の削平とともに、後世に掘り込まれた多数の遺構が分布する。Ⅰ区におけるⅤ層斜交葉理の削平原因としては、人的削平よりも、むしろ水流による侵食作用が主力と考えられる。後者の形跡は、シルト質土壌を基質とするⅢ層と無遺物の河成砂礫堆Ⅴ層の間に、中間的性質のⅣ層が介在する点に認められ、Ⅴ層の葉理と同様に、Ⅳ層も後世の遺構による切断を受ける部分が多い。この種の流水による侵食削平は、遺構群形成以後も頻発したと見られ、弥生時代および弥生末～古墳時代初頭の竪穴住居跡2棟をはじめ、古代の掘立柱建物跡2棟や中世の土坑、更にはピット群の多くにおいても、埋積土の上部が周囲に拡散した状況を認め得る。これら拡散層の土色・土性は、トレンチの断面観察において断続的分布の認められるⅣ層と区別し難く、同種の成因による可能性が高い。いずれにしろ、遺構検出面の状況は、近現代の耕作に伴う畝凹部や園芸施設・電信柱の敷設跡等を例外として、流水による侵食を最終の痕跡としており、付随の混入遺物から判断すれば、少なくとも近世段階に及ぶ。

この侵食作用との関連で留意すべき状況として、遺構検出面のみならず多数の上る遺構の内部にも火の使用痕が皆無であり、間接的資料としてもSBIのピット埋積土から採取した木炭の小片1を挙げ得るに過ぎない。また、柱穴が主と見られるピット群には深浅の差が顕著なほか、竪穴住居跡の底面で検出した個々のピットは、いずれも浅い碗状の断面形を呈し、明瞭な掘方を留めるものが少ない。更に、竪穴住居跡ST1・ST2の底面附近では、礫混じり粗粒砂にⅢ層類似のシルト質土壌が深く混在しており、当初の底面水準を確定し難い部分が多い。これらの点からは、近隣のⅡ-C区で検出した竪穴住居跡ST-4の底面附近を厚さ10cm前後の流入砂礫層が覆う現象と同根異枝の関係が窺える。洪水性の通過流水は、表層の面的侵食のみならず軽質量かつ粒子間結合の脆い部分に集中作用する洗掘や、逆に重質量粒子の沈降をもたらすが、地表や地中に存在する土器・石器等の諸々の遺物も例外ではない。包含層出土遺物のみならず、遺構出土遺物に関しても、水理に従う流去・流入の可能性について、一定の留意が必要となろう。

第2節 弥生時代の遺構

弥生時代および弥生～古墳初頭の遺構と考えられるものには、竪穴住居跡2棟（ST1・ST2）、性格を特定し難い掘り込み遺構2基（SX1・SX2）がある。

1. 弥生時代の竪穴住居跡ST2

I区中央寄りの南辺で検出した。市道・側溝や電柱が間近に迫るため、Fig.9・Fig.14に見るような変則的な平面範囲での調査を限界とした。不整円形もしくは隅丸方形の平面プランを持つ竪穴住居跡の北半と見られる。図示する平面プランは、標高3.90m前後まで水平剥ぎを進め、砂礫面に接近した時点で確認した。しかし、中央ベルト壁面の観察では、SP41～SP39区間において標高4.05m前後に埋積土上面が遺存しており、約15cmの削失であることが判明した。すなわち、この遺構が掘り込まれた時点では、周囲の砂礫堆を少なくとも15cm程度の厚みを持つ暗灰褐色～黒褐色シルト質土壌が覆っていたことになる。遺構の底面附近では、埋積土M4から基底の礫混じり粗粒砂へと深く漸移する様相を呈し、本来の底面を確定し難いが、現状では標高3.6m前後の水平面を保つように観察される。底面では2基の土坑SK7・SK8を検出しており、北西の側壁際で検出した前者の底面最深部は標高3.35m、いわゆる中央ピットに当たる可能性を持つ後者の底面最深部は、標高3.45m附近である。いずれも浅い碗～皿形の断面を呈す。

SK8の上面には、1個体として復原可能な弥生時代中期末の壺形土器碎片（Fig.14土器集中2・Fig.15・Fig.25-3）を得ているが、より古い中期初頭頃の壺細片も混じる。SK7からは、特徴乏しい少量の土器細片を得たに止まる。このほか、側壁寄りの上位埋積土M2からは、中期末の壺形土器口頸部と後期後半の小型甕形土器が出土している。いずれも住居跡埋積過程において流入した可能性が強く、遺構年代を弥生時代後期後半以降と捉えるのが妥当であろう。

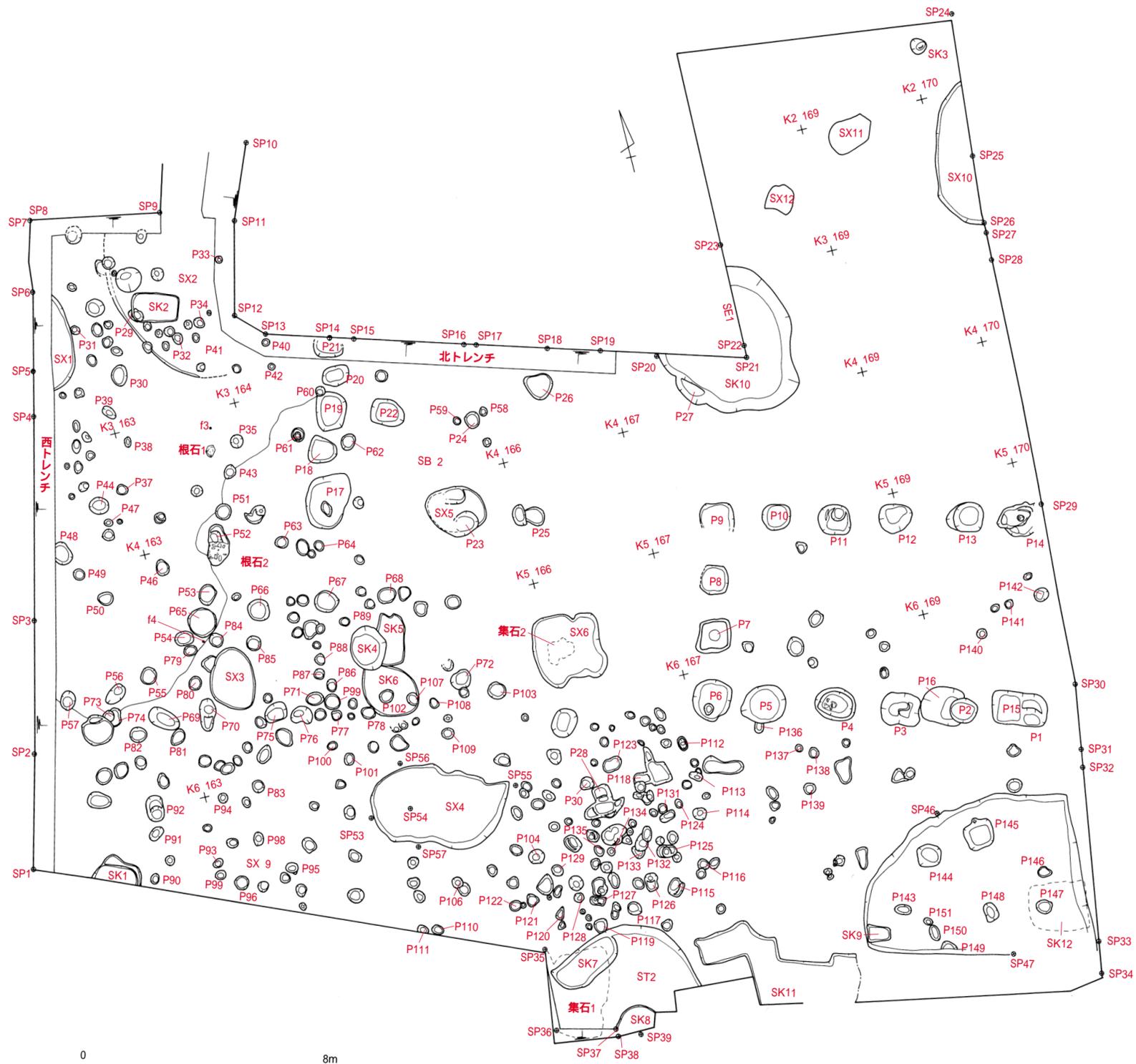
ST2の西部は、浅い掘り込みを伴う古代以降の集石1に覆われ、その折りの掘削によって上位埋積土が除去されたと見られる（Fig.14平面図、Fig.14断面図SP39～SP35区間・SP36～SP35区間）。

層位記号	土色	土性	備考
I層	灰色	粗粒砂・細礫混じりシルト	旧水田耕作土
M1	黒褐色	粗粒砂・細礫混じりシルト	住居跡埋積土
M2	暗灰褐色	小礫混じりシルト	住居跡埋積土；土器集中1
M3	暗灰褐色	粗粒砂混じりシルト	住居跡埋積土
M4	暗灰褐色	粗粒砂多混シルト	住居跡埋積土；土器集中2
M5	同上	粗粒砂多混シルト	ピット埋積土と見られる

Fig.14 所載断面図 SP42-SP35, SP56-SP35 区間の層位

層位記号	土色	土性	備考
V-1	灰褐色	礫	河成砂礫堆水平葉理
V-2	灰色	砂礫	河成砂礫堆水平葉理
V-3	灰色	砂	河成砂礫堆水平葉理
M1	黒褐色	小礫混じりシルト	土坑埋積土

Fig.14 所載断面図 SP43-SP45 区間の層位



2. 弥生時代の竪穴住居跡ST1

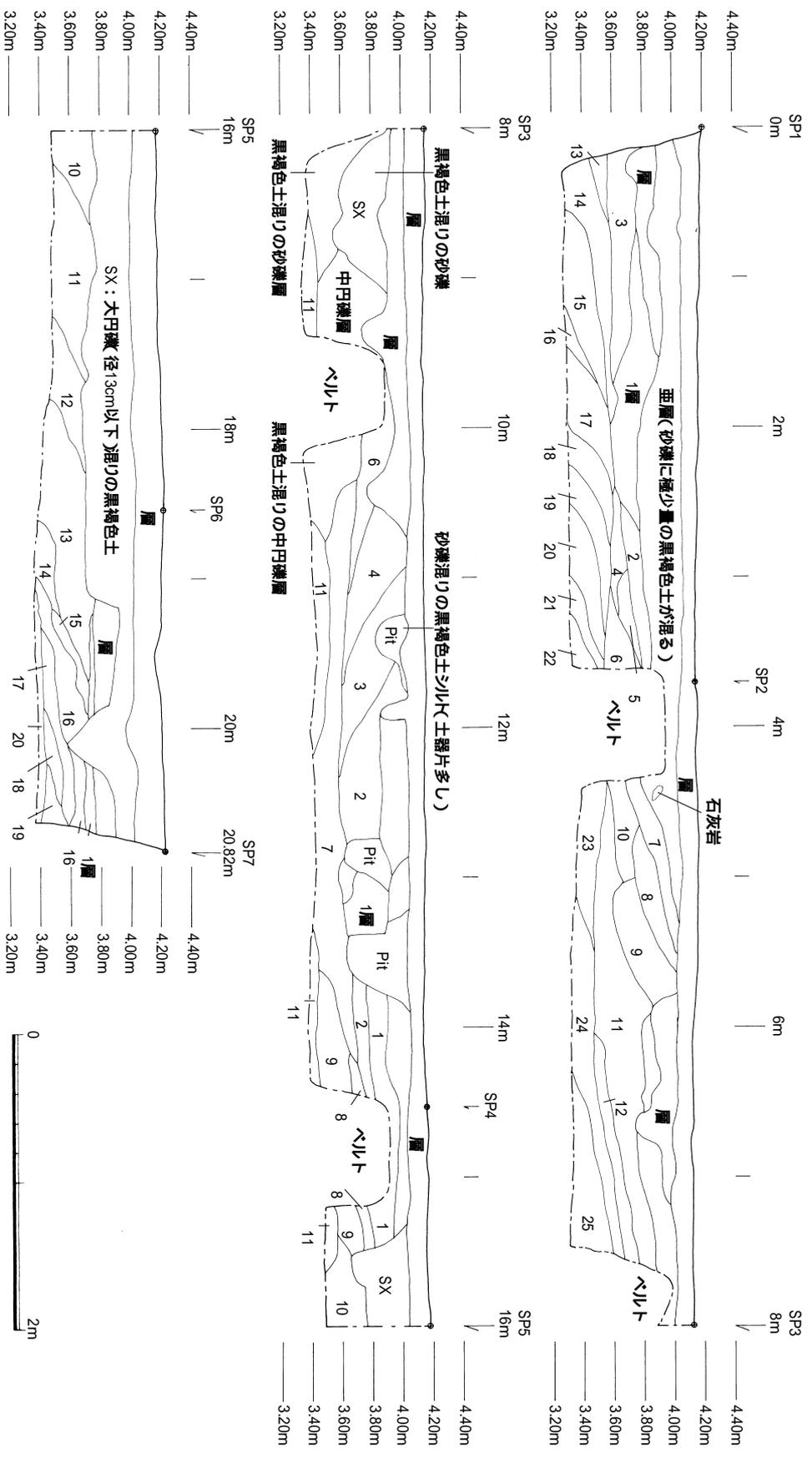
I 区の南東角部で検出した大型の掘り込み遺構であり、竪穴住居跡の一部と見られる。南部と東部南寄りには、それぞれ近世後期の大型土坑SK11・SK12に切られている。検出範囲に限ると、東西長7.20m、南北長5.14mの規模を持つ。掘り方プランが不整弧形を呈するため、全貌の推定が困難である。周囲の河成砂礫堆の標高水準は4.04m前後であり、これを10cm程上回る水準で拡散した遺構埋積土の上面プランを検出している。中央ベルト壁面SP505－SP506区間に露呈した遺構埋積土は上下二層に分かれる (Fig.16断面図)。いずれも暗灰褐色の粗粒砂混じりシルトであるが、下層がより暗い。両層ともに多量の土器片を含む。下位埋積土と底面基層は漸移的、もしくは混和した状況を呈す。中央ベルト壁面の観察では、底面最深部の水準が標高3.60m附近と見られるが、より鮮明な東壁SP32－SP33区間 (Fig.13最下段の断面図) の観察では、3.50m附近が最深と見られる。なお、後者の壁面では、ST1埋積土に複雑なラミナ (下表に観察を記載) が見られ、平面に露呈する近世土坑以外にも、古い時期の掘削が加わった可能性がある。

層位記号	土 性	備 考	層位記号	土 性	備 考
Ka	シルト	攪乱	Mn	Mmより粗粒砂を増す	土坑埋土?
Kb	石灰小碎礫	道路敷礫	Mo	大円礫混り砂質シルト	ST1埋土
Kc	石灰・泥岩混りシルト	旧水田土	Mp	シルト混じり粗粒砂	ST1埋土
Kd	泥岩小碎礫	道路敷礫	Mq	砂礫混じりシルト	性格不明
Ke	—————	—————	Mr	粗粒砂	砂礫堆
Kf	砂礫混りシルト	SK11埋土	Ms	砂礫	砂礫堆
Kg	シルト混り大円礫	SK11埋土	Mt	細円礫	砂礫堆
Kh	細円礫混りシルト	SK11埋土	Mu	小円礫混じり粗粒砂	砂礫堆
Ki	シルト混り大円礫	K11埋土	Mv	粗粒砂	砂礫堆
Kj	砂礫	砂礫堆?	Mw	粗粒砂	砂礫堆
I層	石灰・円礫混りシルト	旧水田土	Mx	小円礫混じり粗粒砂	砂礫堆
ⅢK層	大円礫混り砂質シルト	Ⅲ層成分	My	小円礫混じり粗粒砂	砂礫堆
MI	大円礫混り砂質シルト	土坑埋土?	Mz	粗粒砂	砂礫堆
Mm	MIより粗粒砂を増す	土坑埋土?	——	—————	—————

Fig.13最下段の断面図に用いるST1埋積土記号と土性の対照 (シルト成分の土色は、暗灰褐色)

構造面に関しては、西端側壁沿いに標高3.77～3.65m水準の平台 (最大幅1.02m) を掘り残しており、ベッド状部の遺存と考えられる。底面附近で大小9基のピット (P143～151) を検出したが、いずれも浅い碗状～皿状の断面形を呈し、柱痕を留めない。平面プランは、P145が正方形を呈する他は、楕円もしくは不整形円形に類す。

敲石1点、石器剥片1点を除く出土遺物は、全て土器類である。これら土器類の様式年代幅は広く、弥生前期初頭・中期・後期、更に古墳時代初頭に跨る。弥生前期初頭の木葉紋土器片は、他にもI区・II区で各1片を得ており、附近に同時期の遺構が存在した可能性を示唆する。当住居跡の築造から埋積に至る時期との関連で重要な遺物は、弥生後期末から古墳時代初頭にかけての土器群であ



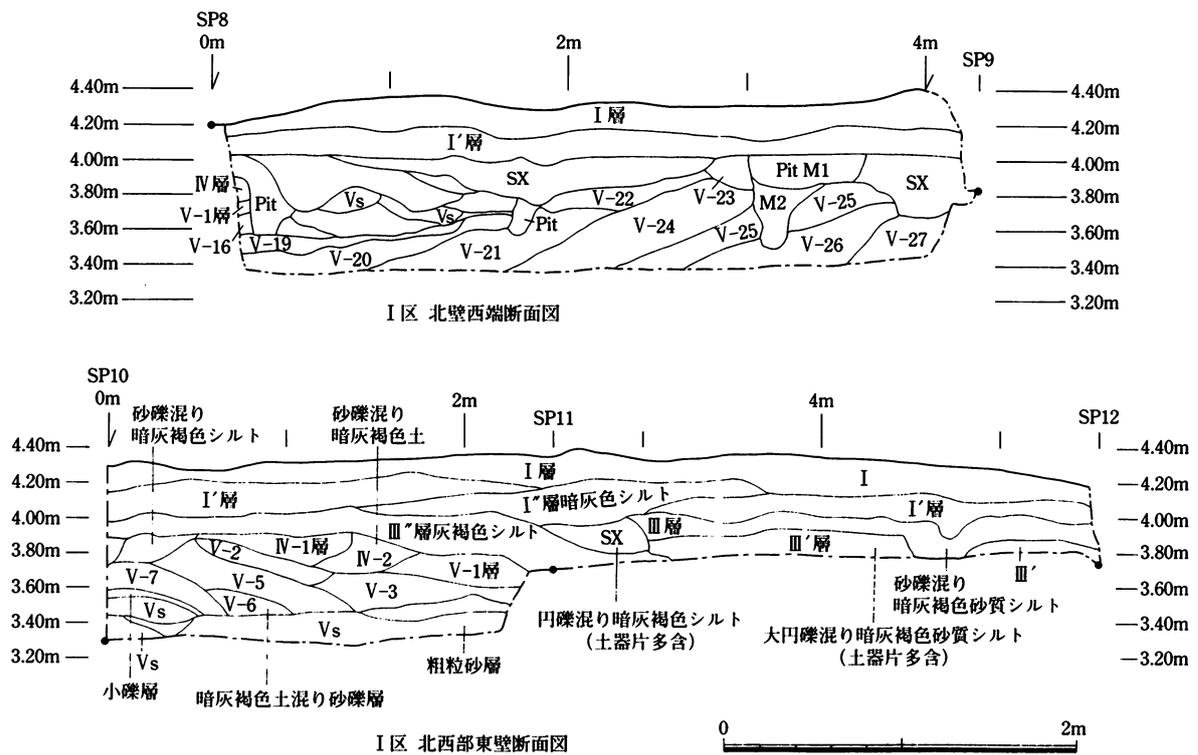
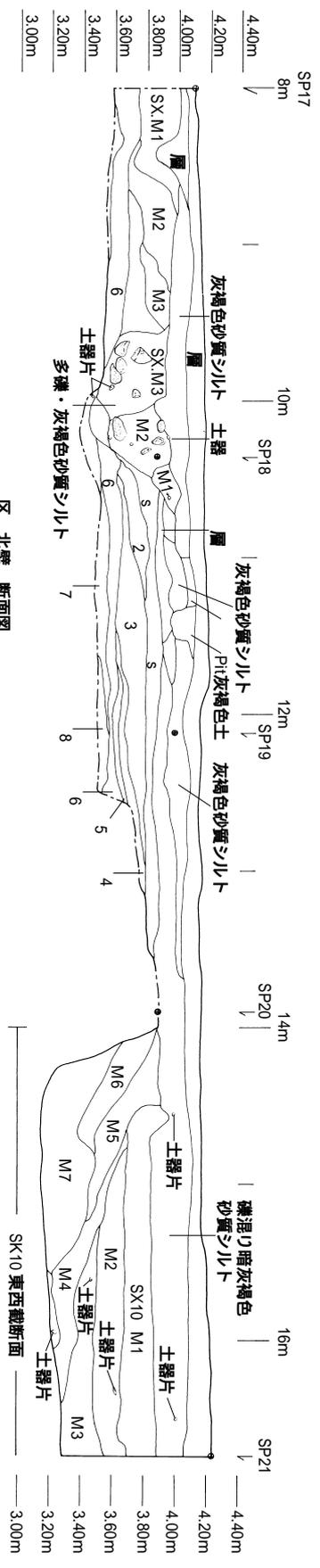
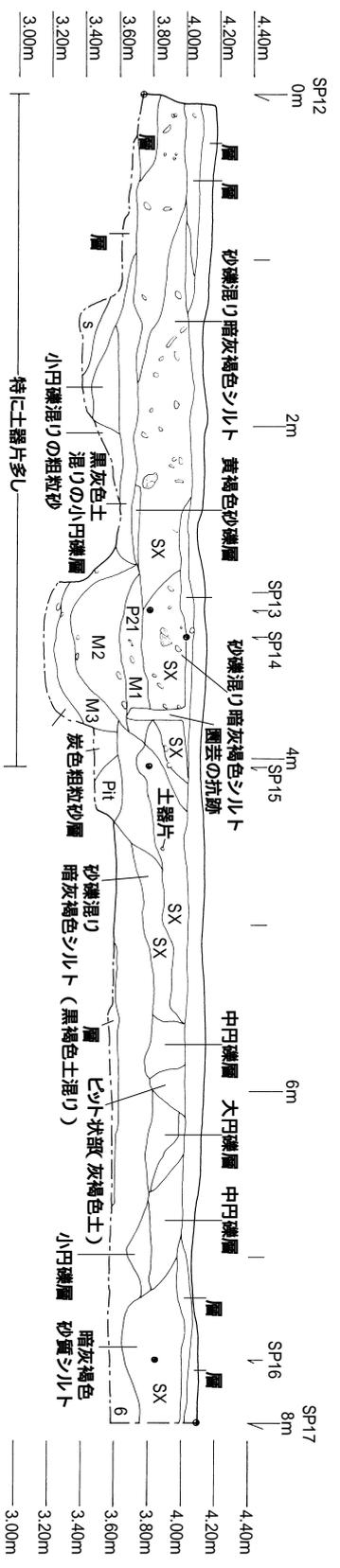


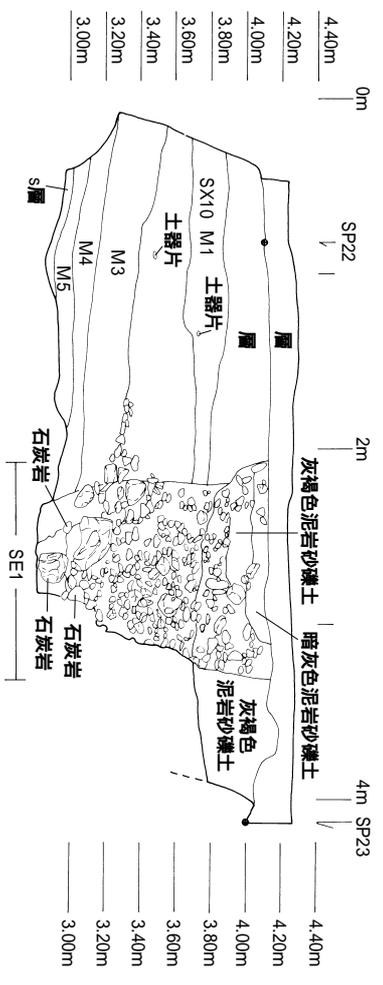
Fig.11 I区北壁西端および北西部東壁の断面図

層位記号	土色	土性	備考
I層	灰色	粗粒砂・細礫混じりシルト	旧水田耕作土
I'層	黄灰色	粗粒砂・細礫混じりシルト	旧水田鋤床
Ⅲ層	暗灰褐色～黒褐色	砂礫混じりシルト	弥生～古墳初頭の遺物を多含
Ⅳ層	黒褐色～黄灰褐色	シルト混じり砂礫	Ⅲ層とⅤ層成分が混在
Ⅴ層	暗灰色～黄灰色	砂礫	河成砂礫堆の上部
V-1～27	同上	同上	V層内葉理の相対的新旧を示す

注：Fig.10, Fig.11の断面に露呈するピット (Pitで表記) 埋土は、いずれも砂礫混じりの黒褐色シルトで、土器片を含む。SXは、性格を特定し難い遺構であるが、Fig.10中段の15.30mポイントからFig.11上段のSP.9附近にかけては、竪穴住居跡の可能性も考えられる。

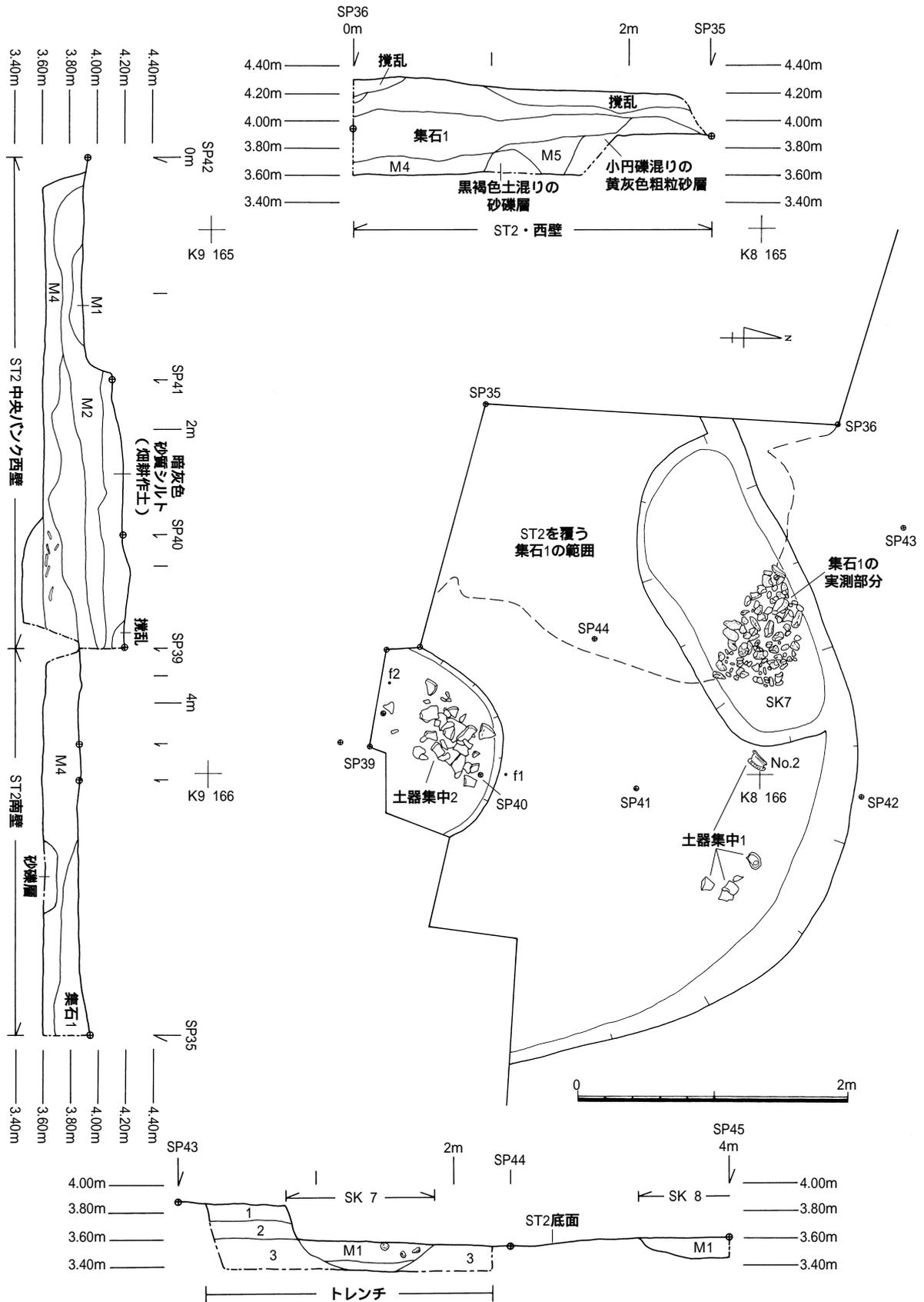


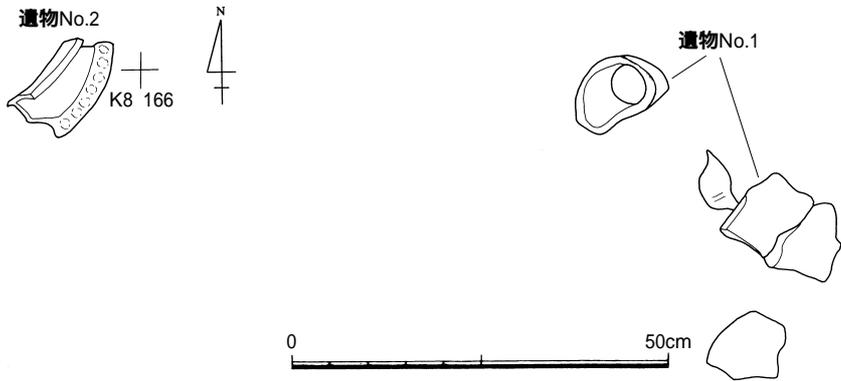
区 北壁 断面図



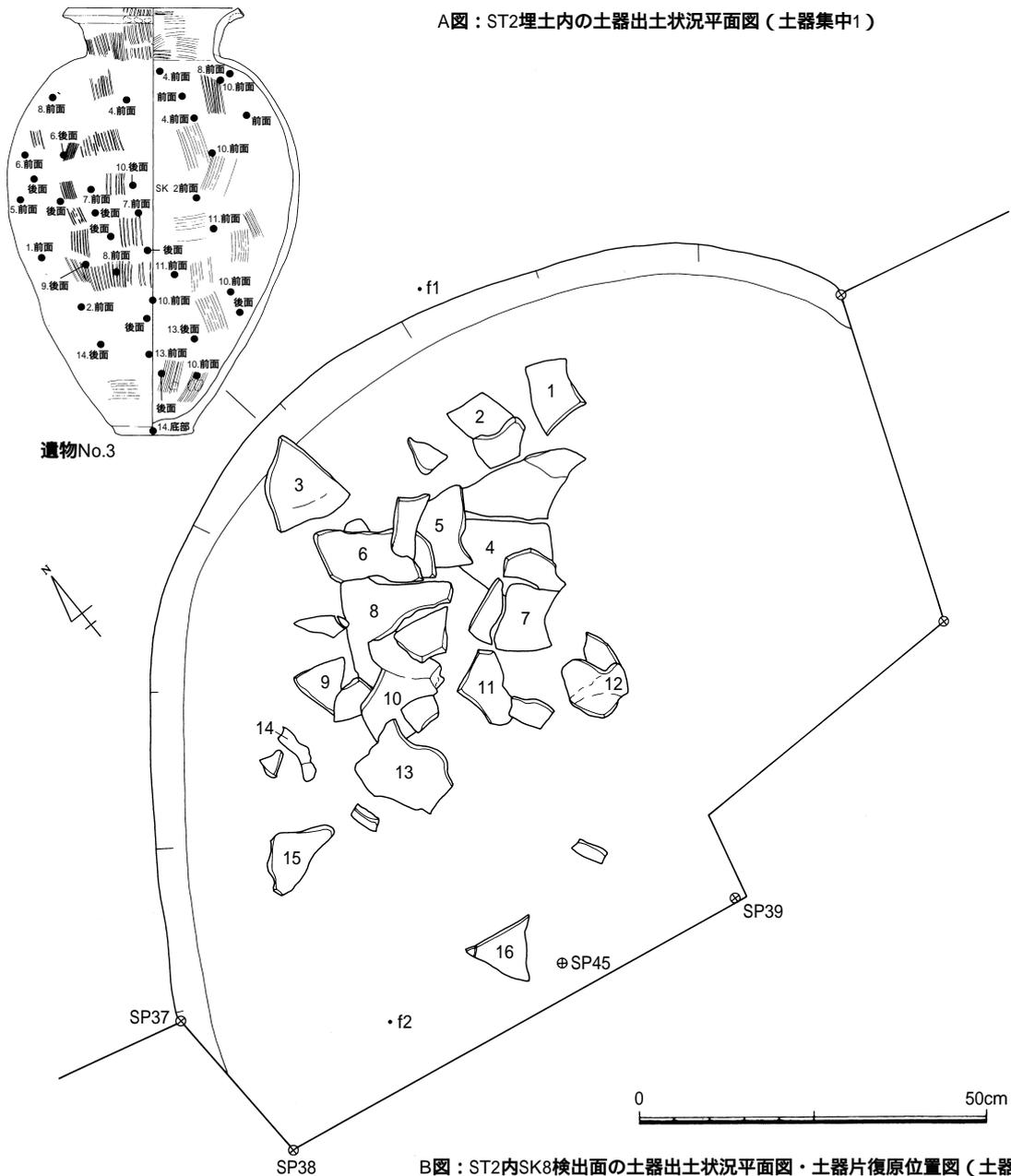
区 SK10 南北断面



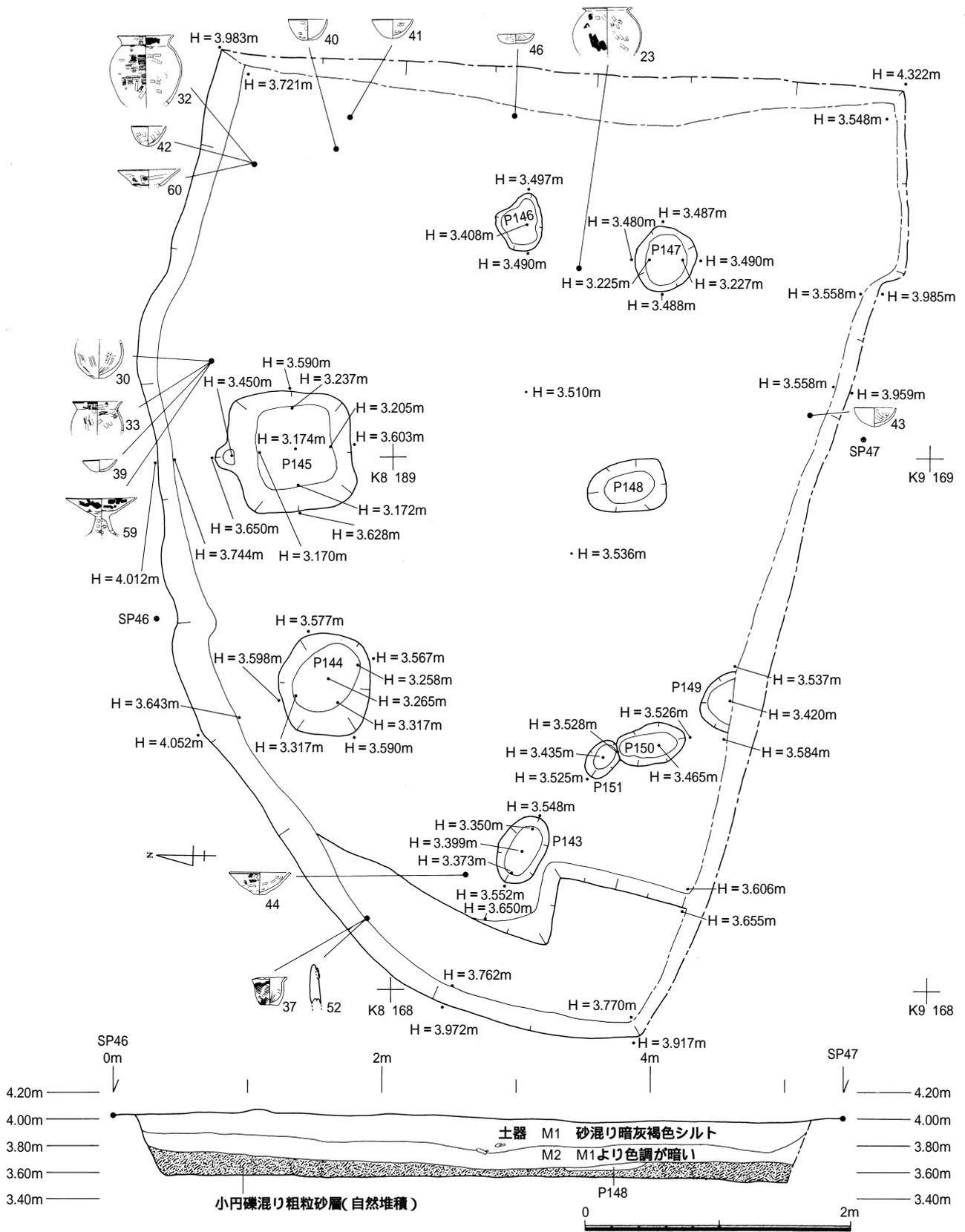




A図：ST2埋土内の土器出土状況平面図（土器集中1）



B図：ST2内SK8検出面の土器出土状況平面図・土器片復元位置図（土器集中2）



り、在地産と共に東阿波型土器の搬入品 (Fig.27-23~27) が高率を占める。東阿波型土器は、弥生時代終末期に完成する規格性の強い土器群とされるが、ST1その他 I 区で得られた復原度の比較的高い個体片は、既に古墳時代初頭の型式に属す。これらと共に、従来の研究で弥生時代後期末から古墳時代初頭に位置づけが試みられる在地産土器群が時期的末尾を画す点により、ST1の築造から埋積に至る時期を、同期間もしくは古墳時代初頭と想定するのが最も妥当であろう。

3. 弥生時代の性格不明遺構SX1 (Fig.17・Fig.18)

I 区西トレンチ際の標高3.88m前後の水準で検出した掘り込み遺構の東端部である。検出部分の平面形は不整円弧形を呈す。トレンチ壁面に露呈した埋積土の断面形との照合から、あるいは削平された竪穴住居跡の底部遺存とも考えられる。平面検出範囲の底面(最深部標高3.70m)にはピットが認められないが、西トレンチ西壁の断面には、ピット形の掘り込みが見られる。また、SX1周りのピット群には、同心円状の分布が見られ (Fig.17のEV1-EV7ラインにかかるピット群)、遺構規模の想定に課題を残す。

SX1の埋積土からは、弥生時代中期末～後期前半頃の甕片 (Fig.5-65・66) を得た。復原胴径に小差を来すが、1個体に帰属する可能性が強い。

4. 弥生時代の性格不明遺構SX2 (Fig.17・Fig.18)

I 区北西部で検出した掘り込み遺構の浅い遺存である。標高3.80m前後の水準に露呈した平面形は円弧形に近く、底面最深部は標高3.70mを測る。ピットの分布密度は縁部で高く、弥生後期末の土器片が多い。埋積土は、IV層に類する暗褐色シルト交じり粗粒砂～砂礫である。縁辺内側の一部が近世後期の方形ハンダ遺構SK2に切られる。削平された円形竪穴住居跡の底部遺存とも見られる。

5. 弥生時代の性格不明遺構SX3 (Fig.9)

I 区西部K5-163グリッドの標高約3.85m水準で検出した掘り込み遺構の浅い底部遺存であり、平坦な底面水準は標高3.70mを前後する。出土遺物としては弥生式土器の細片少量のほか、太型磨製蛤刃石斧の断片 (Fig.29-71) を得た。他に遺物の混在を見ず、弥生時代の遺構と考えられる。

6. その他ピット群

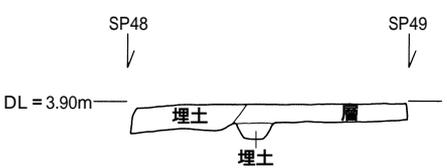
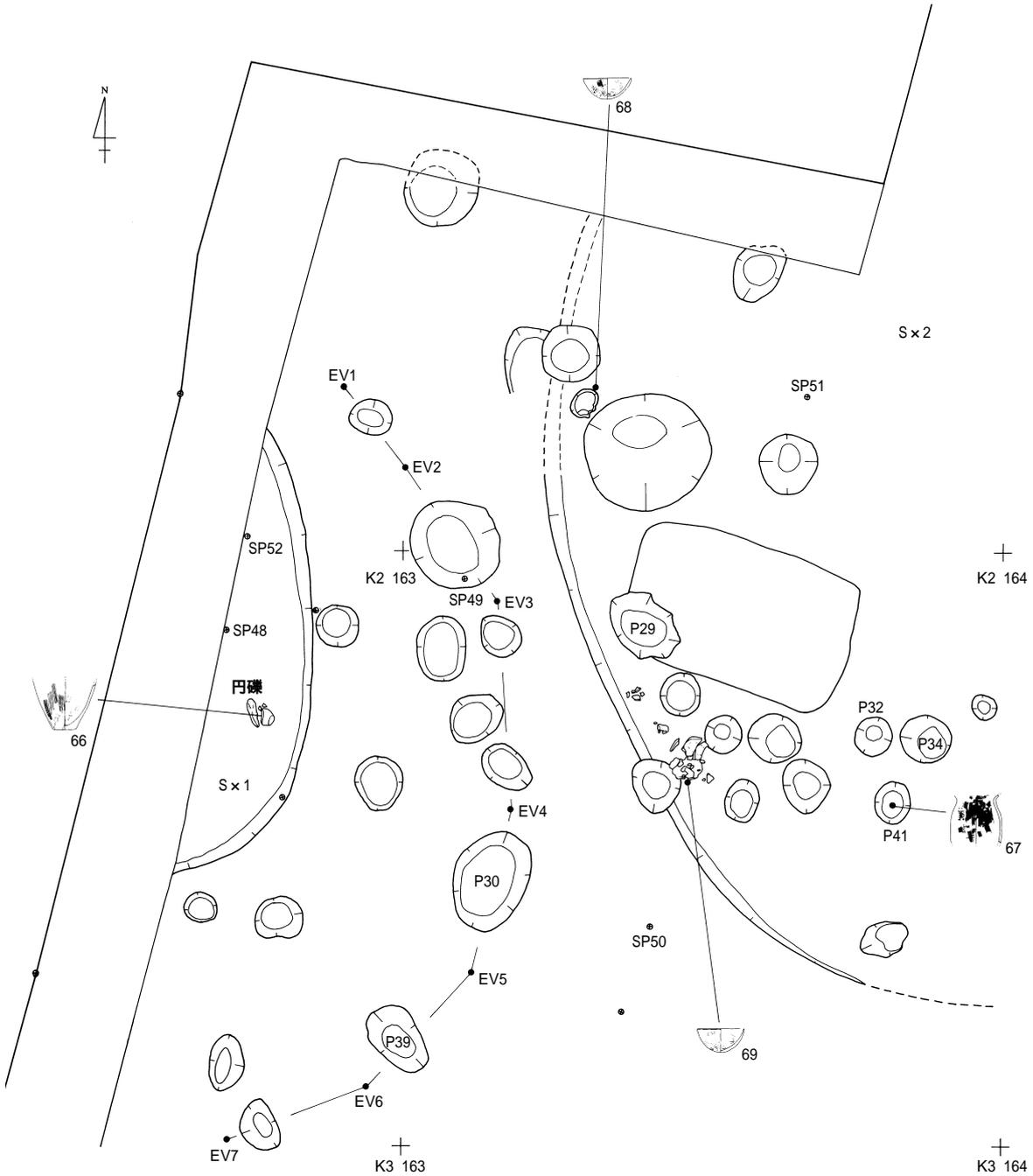
既述以外のピット群では、一般に出土遺物の量が少なく、年代を確定し得ないものが多い。I 区南西部のSX9例のような円形プランの分布が随見され、主体部を削失した建物跡の少残等が重複するとも考えられる。

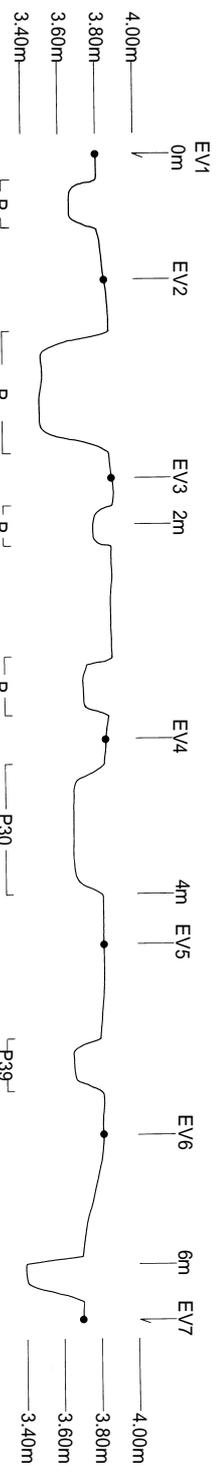
第3節 古代の遺構

1. 掘立柱建物跡SB1 (Fig.19・Fig.20・Fig.21)

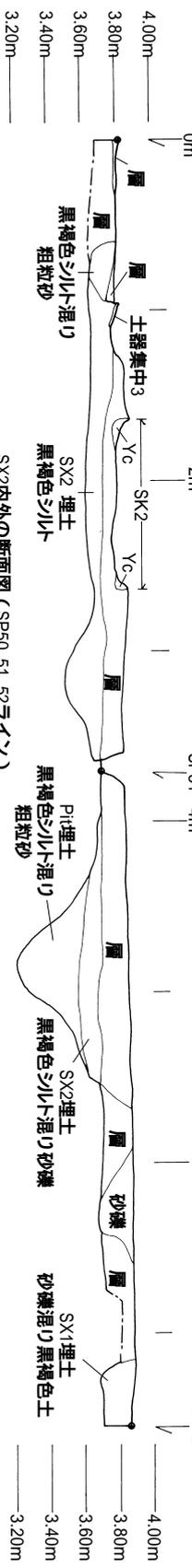
I 区西部のST1北で検出した遺存良好な長方形プランの掘立柱建物跡であるが、その東部を現用市道が覆うため、5間・10mを超える棟行規模を確定するに至らない。西側の梁間は3間であり、総長6.30mを測る。方形プランを基本とする合計14基の柱穴 (P1~P14) を確認したほか、少なくともP1・P2の2基に対して各々P15・P16が新たに掘り込まれるため、ほぼ同位置での建て替えが行われた可能性がある。

個々の柱穴径は0.92m (P10) ~1.48m (P5) の範囲を伸縮する。柱痕芯部を基準とする柱間は、最短1.59m (P11-P12) から最長2.52m (P12-P13) の範囲にあり、それらの平均値は2.04mとなる。

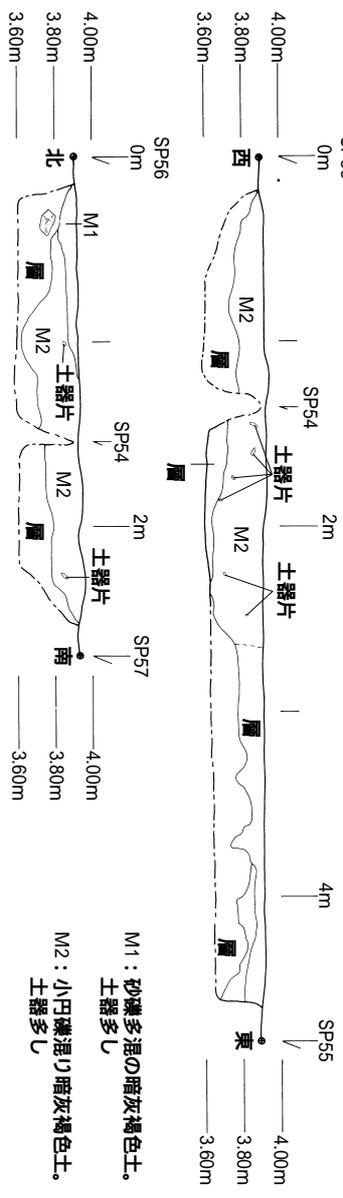




SX1外周のピット群 エレベーション図 (EV1~7ライン)



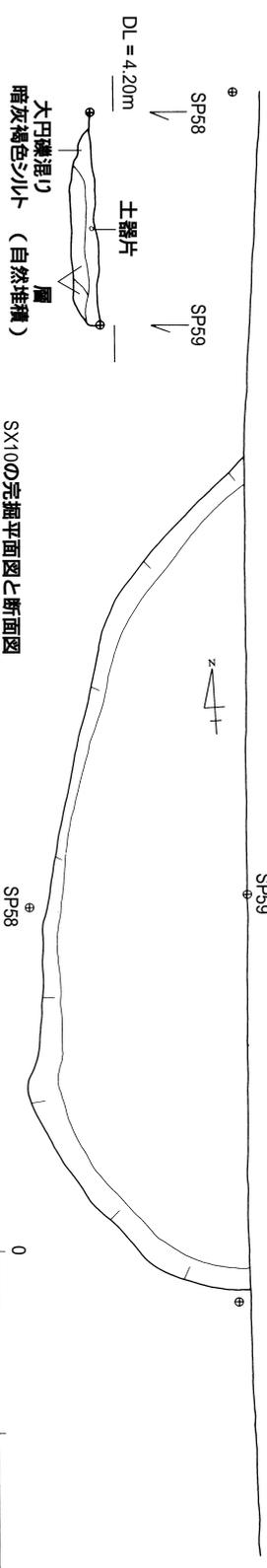
SX2内外の断面図 (SP50 51 52ライン)

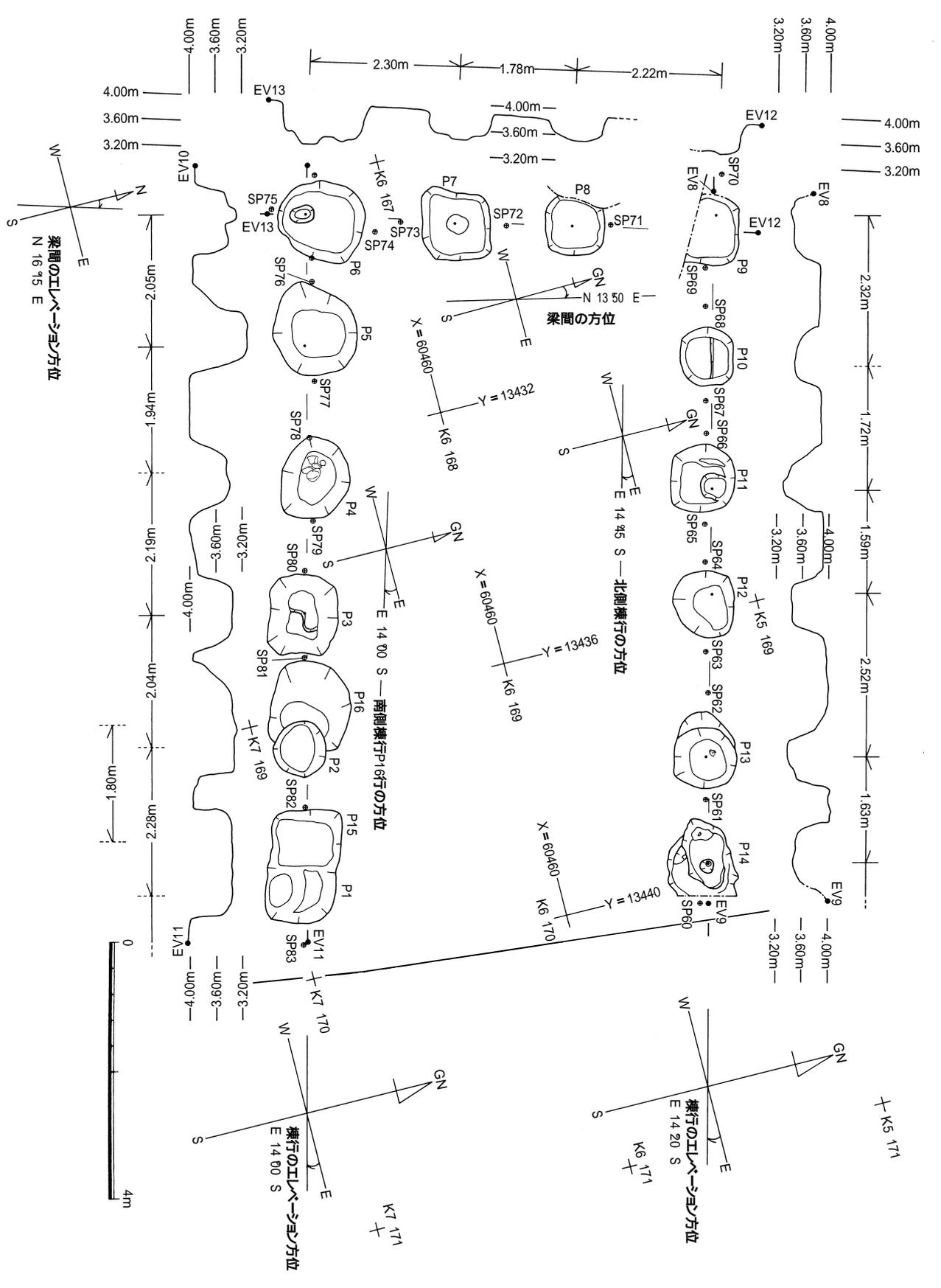


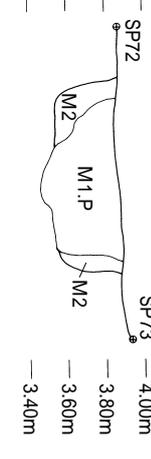
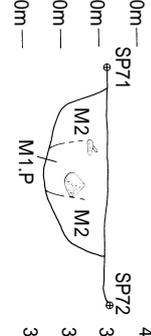
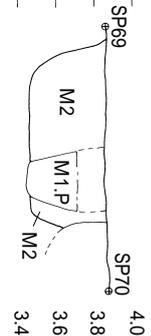
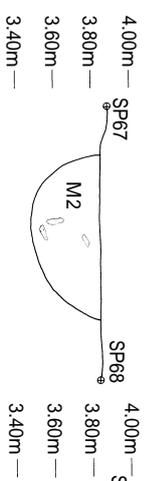
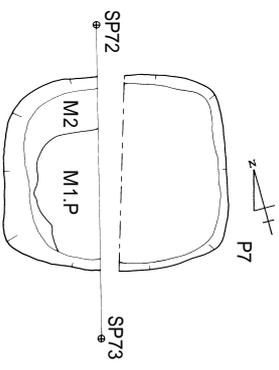
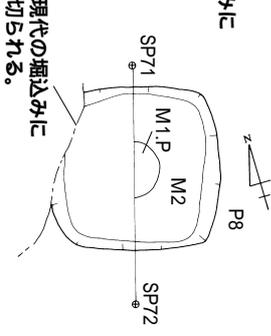
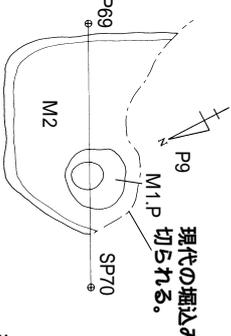
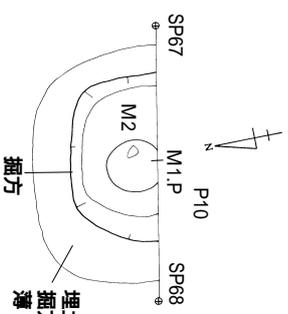
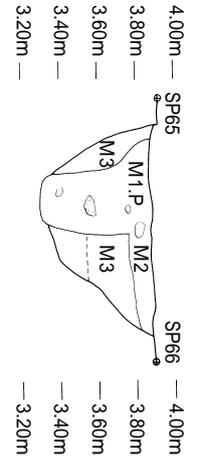
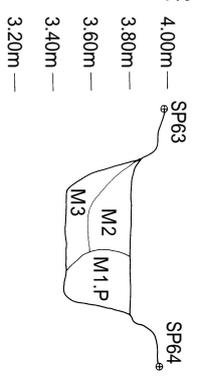
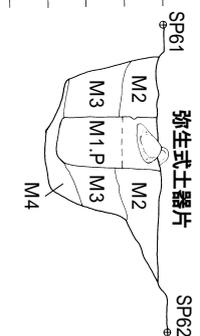
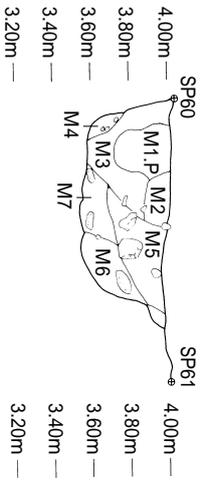
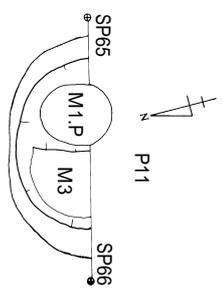
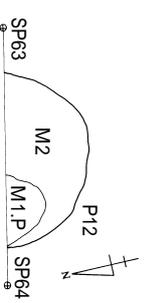
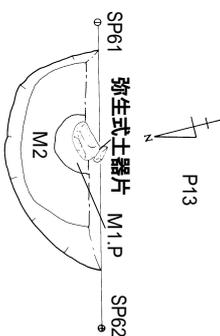
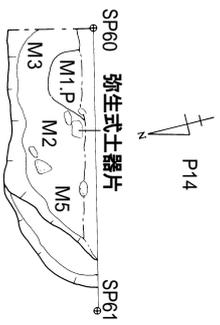
SX4のクロス断面図 (SP53 54 55ライン)

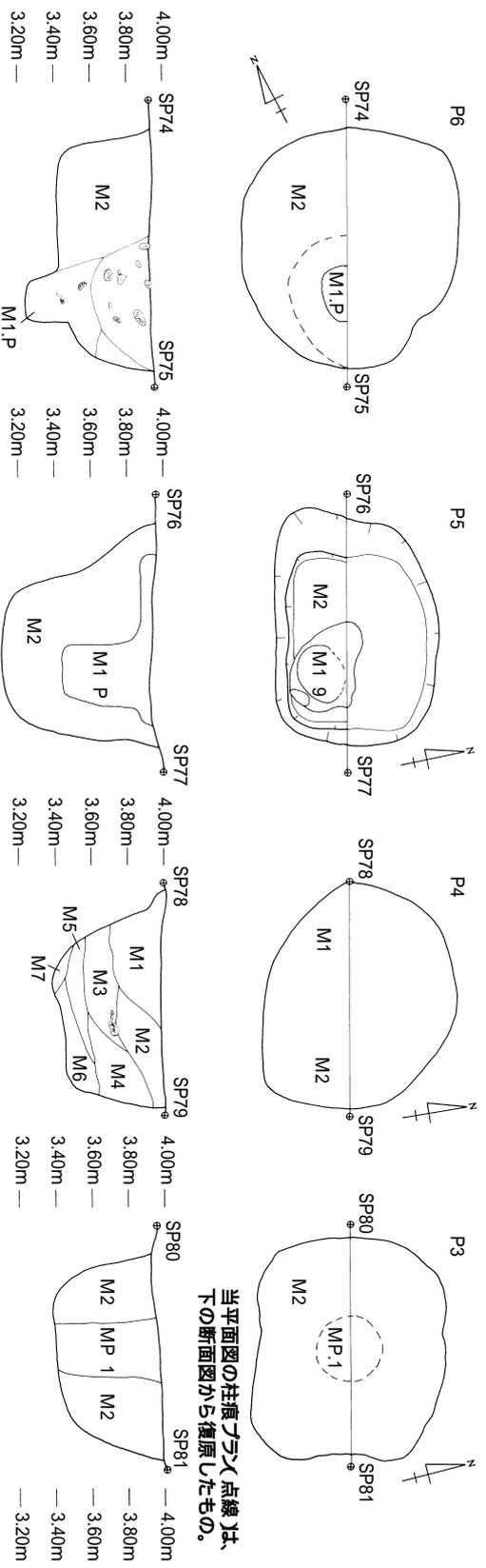
M1: 砂礫多混の暗灰褐色土。
 土器多し
 層: 粗粒砂混り黒褐色シルト

M2: 小円礫混り暗灰褐色土。
 土器多し
 層: 砂礫層。自然堆積で無運物。



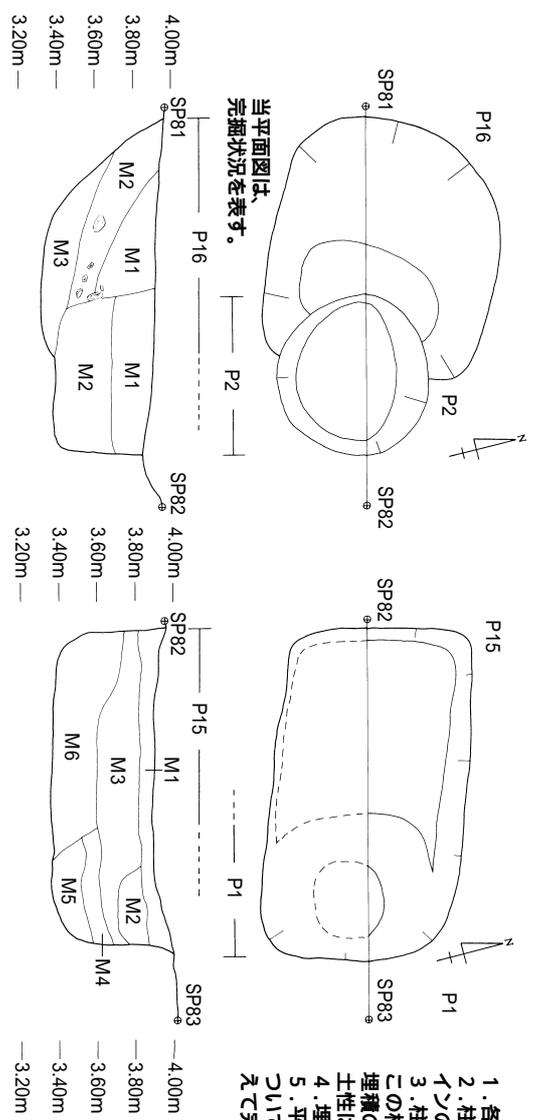






当平面図の柱痕ヲソク点線ヲハ、
下の断面図から復原したものである。

- S B 1 関係図面についての凡例及び注記事項
1. 各ピットの半截は、棟・梁方位に対して建築物の外側とした。
 2. 柱痕の検出と完全な半截断面の記録確保を最優先し、半截ラインの設定を個別に調整しつつ掘削を進めた。
 3. 柱痕そのものは遺存せず、その部分は土壌に置換されている。この柱痕を含め、各ピット内の埋積土には、Mの記号を用い、埋積の新しい順にアラビア数字を付した(例 = M1.P)。これらの土性は、本文中に表示する。
 4. 埋積土中の大粒円礫にはドットを付して土器片と区別した。
 5. 平面上のラミナが不明なP2・P16のケースでは、断面についてのみ、ラミナを記録した。このケースでは、平面図にかえて完掘平面図を用いている。



当平面図は、
完掘状況を表す。



検出水準は、標高4.00m前後の河成砂礫堆上面であり、ピット埋積土上部の周囲砂礫面への拡散現象が顕著であった。砂礫堆に掘り込んだ柱穴底は比較的平坦であり、土砂に置換された柱痕(柱根そのものや柱片は遺留せず)直下に窪みを持つ例が多い。柱穴底の標高水準は、最浅3.50m (P8) から最深3.12m (P5) の範囲を上下し、深浅幅が大きい。

土砂に置換された柱痕芯央を結ぶ南北両側の棟行方位は、それぞれE-14°00′S、E-14°45′Sであり、西側の梁間方位はN-13°50′Eである。

いずれの柱穴も、出土遺物の圧倒的多数を弥生時代～古墳時代初頭の土器類や石器 (Fig.30-77～Fig.34-160) が占めるが、9基のピット (P2・3・6・9・10・11・12・13・14) では古墳時代～古代の須恵器細片も少量検出された。内面に同心円紋を残す須恵器甕類の破片が平安期まで存続する状況から断定には至らないが、調整手法や細部の特徴によって8世紀と推定される須恵器の杯・壺類が、時期的末尾に接近する遺物と見られよう。この点から、SB1の時期を8世紀か、8世紀をあまり降らない時期と捉えたい。

2. 掘立柱建物跡SB2 (Fig.22)

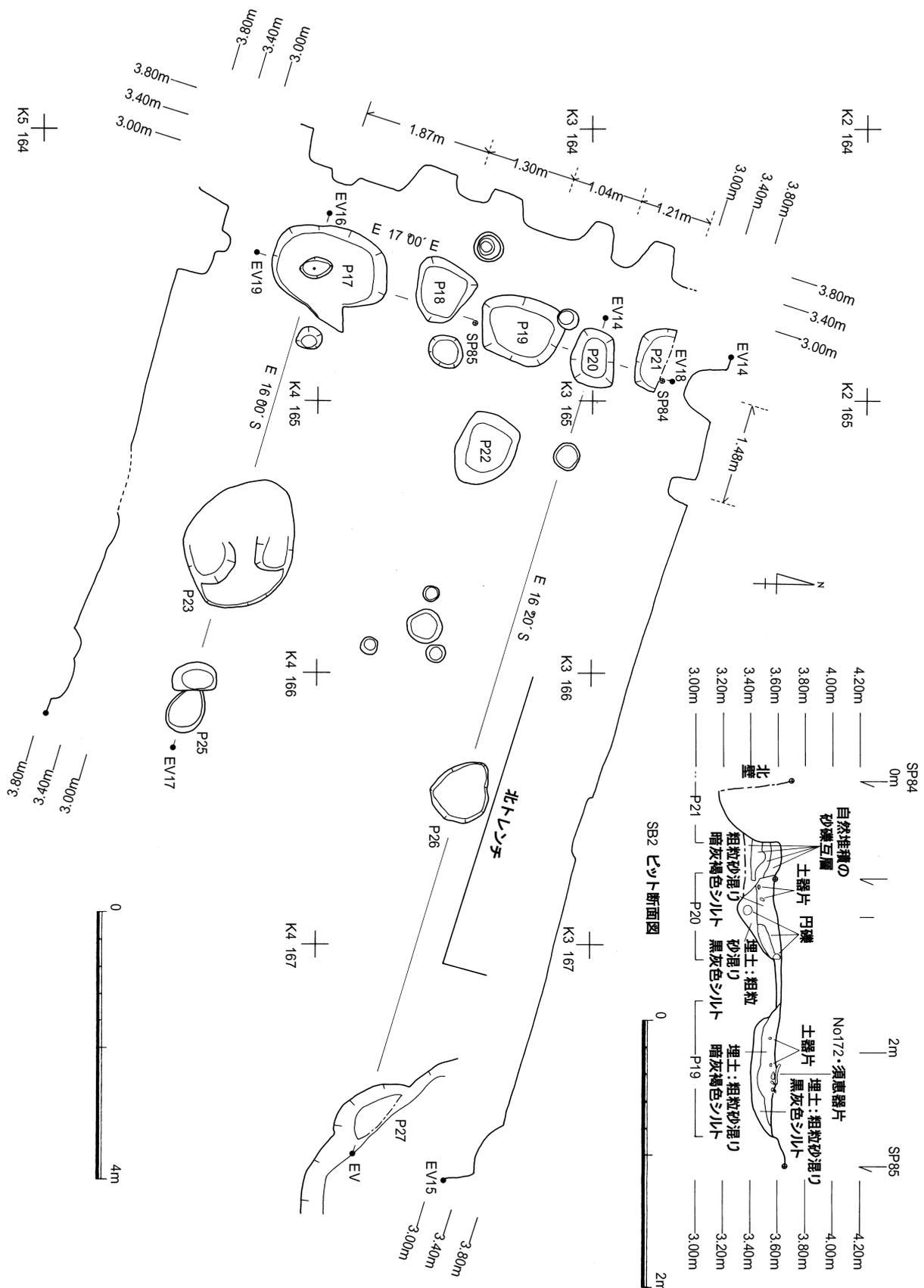
I区中央北の標高3.75m前後の水準で検出した長方形プランの掘立柱建物跡であり、上部が削平を受けている。北トレンチ (Fig.9) 北壁の観察では、北側の伝永代墓地において、SB1と同じ標高4.00m前後にSB2の一部が埋積する可能性がある。平坦なピット底の標高水準は、最浅3.56m (P25) から最深3.20m (P20) の範囲にあり、P17では土砂に置換された柱痕の芯央が窪む。いずれのピットも、柱根や柱根片は遺存しない。梁間と見られる西側のピット列 (P17・18・19・20・21) より東では、一部が底部を削失するため、棟行の規模や柱間も不明確である。また、総柱であった可能性を孕む一方、建て替えによって西側梁間の柱穴遺存に多密を来したことも十分に考えられる。

総長6.70m～11.80m範囲 (P20-P26あるいはP20-P27) と見積られる棟行は、E-16°00′S～E-16°20′Sの方位を測り、総長4.28m (P17-P20) もしくはそれ以上と見られる梁間は、N-17°00′Eの方位を測る。

ピット出土遺物の構成としては、SB1と同様に土器を主流とする弥生時代の遺物が突出するとともに、7基のピット (P17・18・19・20・22・26・27) から古墳時代後期～古代の須恵器片を少量得ている。これら須恵器片から推定されるSB2の年代に関しても、SB1と同じ状況により、8世紀か、8世紀をあまり降らない時期と見るのが妥当であろう。

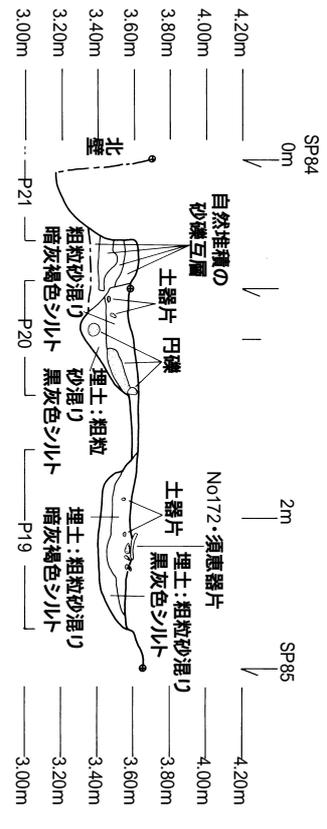
3. 性格不明遺構SX4 (Fig.9; Fig.18中段)

I区中央南寄りK6-164～165グリッドの標高3.90～3.96m水準で検出した不整形の掘り込み遺構であり、遺存は浅い。平面規模は、東西方位の長軸2.88m、南北方位の短軸1.52mを測る。底面は起伏に富み、最深部の標高は3.64mである。出土遺物には、弥生時代の直線刃半月形石包丁1や凹基式石鏃1のほか、古墳時代から古代の須恵器細片6片があり (Fig.36-187～Fig.37-194)、古代の遺構と見られる。



SB2 ビット断面図

版



4. 集石1 (Fig.14平面図・断面図に併載; PL5-23)

I区中央南端のST2中央以西を覆う平坦な敷石状の集石遺構であり、東西1.96m、南北2.56mの部分的検出に止まる。粒径15cm以下程度の円礫からなる集石の垂直範囲は、標高3.70~4.10mの水準にある。出土遺物には、弥生式土器や敲石の他、古墳~古代の須恵器甕片4片があり、古代以後の敷設と見られる。

Pit. No	埋土記号	土 性	Pit. No	埋土記号	土 性
P14	M1.P	柱痕：粘土混じりシルト	P6	M1.P	柱痕：円礫混じり粗粒砂
P14	M2	粘土混じりシルト	P6	M2	砂礫混じりシルト
P14	M3	粘土混じり砂質シルト	P5	M1.P	柱痕：砂礫混じりシルト
P14	M4	粘土混じり砂質シルト	P5	M2	砂礫混じり粘土質シルト
P14	M5	円礫混じりシルト	P4	M1	粘土・小礫混じり粗粒砂
P14	M6	円礫・粘土混じりシルト	P4	M2	円礫混じり粘土
P14	M7	砂礫・粘土混じりシルト	P4	M3	砂礫混じり粘土
P13	M1.P	柱痕：細円礫・粘土混じりシルト	P4	M4	円礫混じり粘土
P13	M2	小円礫・粘土混じりシルト	P4	M5	粘土混じり粗粒砂
P13	M3	小円礫・粘土混じりシルト	P4	M6	円礫・粘土混じり粗粒砂
P13	M4	粘土・シルト混じり粗粒砂	P4	M7	粘土混じりシルト
P12	M1.P	柱痕：粘土	P3	M1.P	柱痕：細円礫混じりシルト
P12	M2	粗粒砂混じり粘土	P3	M2	小円礫混じりシルト
P12	M3	シルト混じり粗粒砂	P2	M1	小円礫混じり砂質シルト
P11	M1.P	柱痕：砂礫混じりシルト	P2	M2	シルト混じり粗粒砂
P11	M2	粘土・シルト混じり粗粒砂	P1・P15	M1	砂礫交じりシルト
P11	M3	シルト混じり粗粒砂	P1・P15	M2	砂質シルト
P10	M1.P	柱痕：粘土混じりシルト	P1・P15	M3	砂質シルト
P10	M2	大円礫・粘土混じりシルト	P1・P15	M4	砂質シルト
P9	M1.P	粘土	P1・P15	M5	砂礫交じりシルト
P9	M2	砂礫・粘土混じりシルト	P1・P15	M6	シルト混じり粗粒砂
P8	M1.P	小円礫混じり砂質シルト	P16	M1	円礫混じりシルト
P8	M2	大円礫混じり砂質シルト	P16	M2	円礫混じりシルト
P7	M1.P	柱痕：粘土混じり砂質シルト	P16	M3	砂質シルト
P7	M2	円礫・粘土混じり砂質シルト	—————	—————	—————

Fig.20・21に用いるSB1埋積土記号と土性の対照 (シルト・粘土成分の土色は暗灰褐色~黒褐色)

第4節 中世の遺構

1. 土坑SK10 (Fig.9; Fig.12中段右・下段)

伝永代墓地の南東角部に掘り込まれた短径約4mの大型土坑であり、平面形は不整円を呈す。標高3.90m前後の河成砂礫堆上面で検出した。底面は平坦に近く、標高3.20~2.96mの水準にある。褐灰~暗褐灰色の粘土混じり砂質シルトを基質とする土坑内の埋積土は、平板状の斜交葉理を呈する。出土遺物には、中世の瓦器・瓦質土器・中国産青磁のほか、古代の上師器・須恵器・須恵器瓦・弥生式土器の細片 (Fig.38-206~Fig.39-229) があり、中世段階の遺構と見られる。

層位記号	土 性	備 考	層位記号	土 性	備 考
I 層	シルト	旧水田作土	M 4	円礫多含砂質シルト	SK10埋積土
II 層	礫混じり砂質シルト	中世包含層	M 5	円礫混砂質シルト	SK10埋積土
M 1	大円礫多含砂質シルト	SK10埋積土	M 6	砂質シルト混じりの円礫	SK10埋積土
M 2	大円礫混じり砂質シルト	SK10埋積土	M 7	円礫多含砂質シルト	SK10埋積土
M 3	円礫混じり砂質シルト	SK10埋積土	—	—	—

Fig.12中段右・下段の断面図に用いるSK10埋積土記号と土性の対照

第5節 近世の遺構

近世の遺構としては、ハンダ土坑3基(SK1・SK2・SK3)、大小の土坑4基(SK4・SK9・SK11・SK12)、井戸跡1基(SE1)、集石1基(集石1)を検出している。

1. ハンダ土坑SK1 (Fig.9)：I区西部の南端壁際で一部を検出した。平面プランは方形(径1.60m以上)と見られ、検出水準は標高3.92mの河成砂礫堆上面である。内部には、水田作土と同じ灰色シルトが埋積する。底面は平坦に近く、標高3.54m前後の水準を保つ。土坑内面には黄色粘土を厚く貼り付けている。包含遺物は特に無い。
2. ハンダ土坑SK2 (Fig.24)：I区北西部のSX2に上から掘り込まれた長方形の土坑であり、厚さ4～16cmの黄色粘土を内壁に貼る。土坑上部は削平を受けており、底部のみの遺存である。内部には、砂岩礫と共に石灰岩碎礫が投棄されている。遺物としては、肥前産の陶磁器類 (Fig.40-230, 231)がある。
3. ハンダ土坑状の遺構SK3 (Fig.9)：I区北東隅の河成砂礫堆に掘り込まれた径52cmの小穴であり、内面に黄色粘土を貼り付ける。遺存部が小さ過ぎ、原形を推定する手立てがない。内部は無遺物。
4. 楕円形土坑SK4 (Fig.9)：I区西寄りのK5-164グリッドで検出した楕円形土坑であり、東西の短径1.20m、南北の長径1.44mを測る。検出水準は標高3.85m前後の河成砂礫堆上面であり、水平な底面は、ほぼ標高3.40mの水準を保つ。弥生式土器片に混じり肥前の白磁ベニ皿が出土している (Fig40-232～235)。
5. 小型方形土坑SK9；不規則形の帯状土坑SK11；方形土坑SK12 (Fig.9)：SK9・SK12は、ST1に上から掘り込まれた方形土坑であり、ST1上面と同水準で検出した。SK11は、不規則な帯状形を呈し、ST1の南部を切る。SK12ではⅢ層成分、SK9・SK11では水田作土と同じ灰色シルトが埋積しており、廃棄された近世陶磁片や燻瓦類を多含する。
6. 井戸跡SE1 (Fig.12下段)：SK10の北縁部にII層上面から掘り込まれる。円礫と石灰碎礫で上径約1.26mの石組を施す。石灰碎礫の溶蝕度の低さから、近世以後の井戸跡と考えられる。
7. 柱根石 (Fig.23)：I区西部で集石型(円礫)と礎石型(緑色片岩)各1基を検出しており、相互の中心間はN-8°-E、距離3.28mを測る。前者には、溶蝕度の低い石灰岩碎礫が含まれる。
8. 集石2 (Fig.9)：I区中央のSX6上面で検出された短径0.28m、長径0.74mの円礫集石であり、近世陶の細片1点が含まれる。

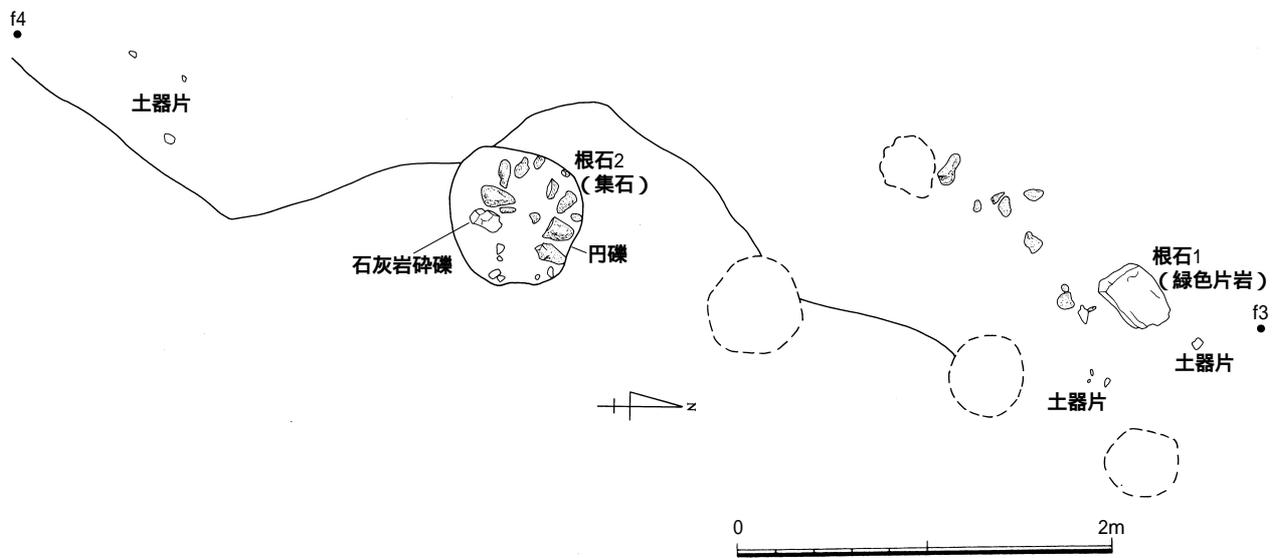
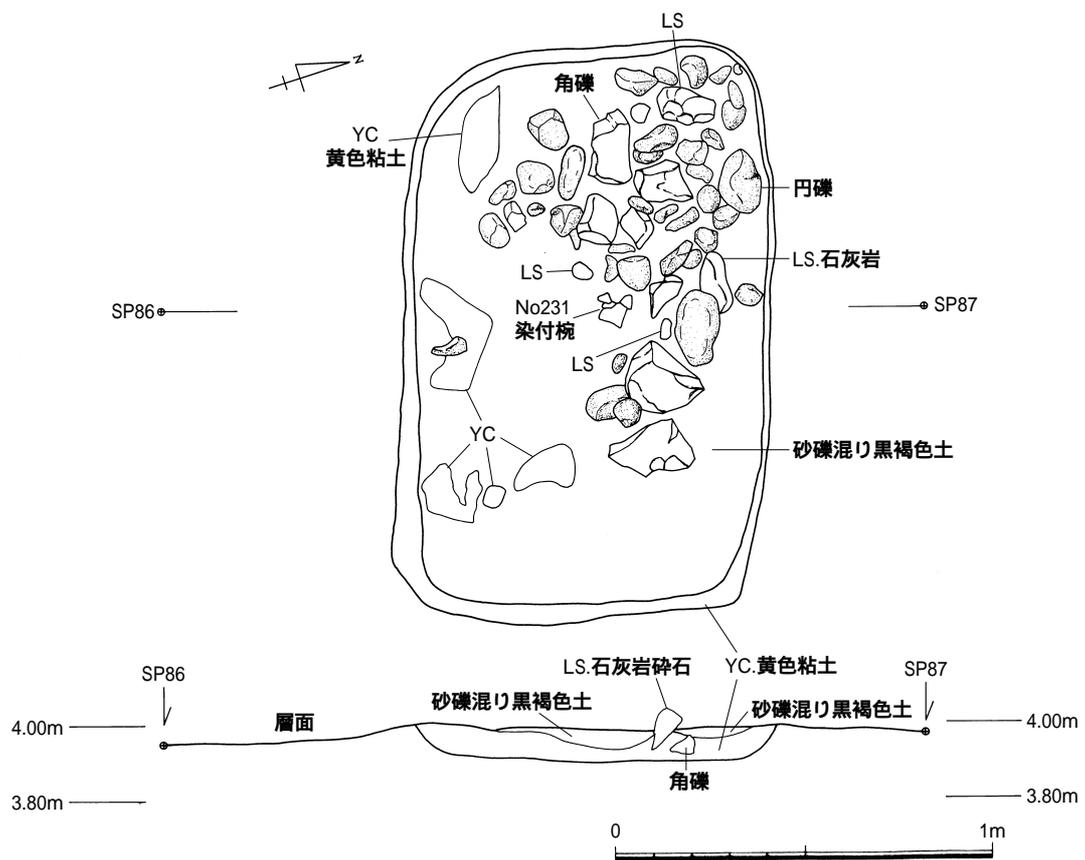


Fig.23 I区 近世建物の根石検出状況平面図



第6節 出土遺物

1. 出土遺物の内訳： I区の出土遺物は破片総数23,488点に及ぶが、その22,885点が弥生時代から古墳時代初頭の上器片であり、97.4%の突出した割合に達する（24点の石器類を加えると、97.5%）。次いで国産陶磁と燻瓦類・土鍋類を合わせた近世品が2.1%（494点）、須恵器と須恵器瓦類に若干の土師器を合わせた古墳時代後期～古代の品が0.3%（74点）を占める。これら出土遺物の量的割合は、突出した前者を別格としても、上記した三つの時期にウェイトを分かち点は、下表のように歴然としている。

器類	時代	破片数	重量小計(g)	平均重量(g)
土器	弥生時代～古墳初頭	22,885	140,375	6.134
石器	弥生時代	24	5,353	223.000
土師器	古代	3	35	11.667
須恵器	古墳時代～古代	68	1,245	18.309
須恵器瓦	古代	6	_____	_____
常滑陶	中世	1	_____	_____
中国産青磁	中世	1	_____	_____
瓦器	中世	3	39	13.000
瓦質土器	中世	6	45	7.500
国産陶磁器	近世	286	4,759	16.640
燻し瓦	近世	193	12,013	62.244
土鍋	近世	15	110	7.333

I区出土遺物の器類別破片数量対照表

2. 遺物の包含状況： 褐色～黒褐色シルトを基質とするⅢ層と、粗粒砂勝ちのⅣ層に弥生式土器細片の分布密度が高い。また、包含層成分が埋積する竪穴住居跡ST1・ST2や掘立柱建物跡SB1等の大型遺構から、遺存の比較的良好な破片資料が多出しており、深部埋蔵による保存効果を示す。更に、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の埋積と見られるST1やST2に比べ、むしろ古代の遺構であるSB1のピット群に弥生中期末以前の遺物が多在する点は、原初の土器分布を幾らか反映するものと推測する。

布目瓦を含む須恵器類は、同期の遺構であるSB1・SB2・SX4の他、中世の大型土坑SK10からも多出する点は、SB2（古代）の推定東端域をSK10（中世）が切り込む復原状況とも関連しよう。

近世の陶磁器類や燻瓦類は、大小の土坑（SK2・SK11・SK12等）からまとまって得られ、投棄によると考えられる。

3. 弥生式土器： 前期初頭では木葉紋土器の細片2点を得ている。Fig.28-52の口縁片では、刺突列点文帯下に無軸木葉紋をヘラ描する。同じ紋様構成は、出雲の西河津遺跡で出土したI-2様式の壺頸胴部破片に見られる。Fig.44-303では、縦軸木葉紋を壺の上胴部に施す。

多条直線紋帯間に刻目凸帯もしくは刻目列点を配置する壺碎片は、弥生前期末の大篠式の系譜を引くが、未だにヘラ描施条を維持するFig.26-16等の若干例を除き、既に中期初頭の目安となる櫛描施条に転換を遂げている（Fig.28-48；Fig.31-100～104；Fig.40-232・233等）。双線描の山形紋や重弧紋の細片も目に付くが、上下の直線紋帯がヘラ描施条の可能性を残すFig.25-8；Fig.43-280・281以外では櫛描手法の導入が見られ、（Fig.25-9・10；Fig.31-109～113）時期的比重は中期初頭に移行

している。畿内の影響下に中期初頭から中葉頃にかけて採用される簾状紋には、Fig.26-20；Fig.32-118のような櫛描波状紋との組み合わせが有り、Fig.26-19；Fig.45-313では扇形紋との組み合わせとなる。これらは、いずれも壺の破片と見られる。

中期末では、バーガ森北斜面遺跡（吾川郡伊野町奥名）出土土器の系譜に連なる壺形土器の破片が多出した。これらのグループは、いずれも素地帯の貼付によって口縁帯を外肥しており、体部の厚みが通常に近い部類と、極薄手の胎内に多量の砂礫を含む部類に大別し得る。前者はFig.25-2～4；Fig.28-49・50；Fig.33-144～146；Fig.45-326・327等であり、後者はFig.25-6；Fig.28-58；Fig.29-76；Fig.32-127～131；Fig.35-178等である。野市町龍河洞遺跡出土資料を標識とする同時期の龍河洞式土器は、凹線文を特色とするが、その系譜に連なる土器片の出土を確認していない。Fig.25-122では龍河洞式と類似の拡張口縁を持つが、その口唇面には凹線紋と異なり、2条の沈線紋が並走する。このほか、脚柱外面に多条の直線紋帯を回転櫛描する高杯（Fig.45-325）を得ており、上東式の範疇もしくは影響下の製品と見られる。

これらに続く中期末～後期前半の資料としては、あるいはFig.29-65・66の甕（同一個体の可能性が強い）が該当しよう。

後期後半の土器片は多く、甕類ではFig.25-1；Fig.27-31～35・37；Fig.29-67；Fig.43-291が該当し、叩目やハケメ調整を施す。壺類ではFig.43-287・293を得ている。287は、中部瀬戸内の影響を反映する特種壺（あるいは器台）と見られ、備中V-5様式などに近似の形態がある。また、本例のような水平口縁に櫛描列点紋を回らす例は、河内IV-3にも見られる。293は、直立する複式口縁の外面に振幅の大きい波状紋を櫛描しており、因幡・伯耆や安芸などに見られる。287の胎中に、径3mm以下の長石粒の多含が顕著な点を除くと、両者と在地型土器における混入岩片の一般的傾向に大差はない。鉢類ではFig.27-40・41・42・44・45；Fig.29-68等、高杯類では、Fig.28-59・60等が後期後半の資料に類する。

古墳時代初頭の土器片も、弥生後期後半に拮抗する量を得ている。在地型の甕類には、Fig.27-28～31；Fig.41-261があり、一般に口縁の短化や器胎薄化の傾向が見られる。搬入品は全て東阿波型に属し、ST1（Fig.27-23-27）・遺構検出面（Fig.43-292）・および遺物包含層（Fig.45-333～335）を中心に破片総数350片を得ている。薄手の胎中に結晶片岩の岩片を含み、上胴端附近から口縁にかけての内外面に回転ナデを加える。口縁の外反度は強く、端部を軽く上屈する。復原可能な底部は丸く、平均間隔1mmのハケ目が外底面に及ぶ（Fig.27-27）。これらの資料は、いずれも東阿波型土器の終末形態に類し、遺構や在地産土器の考古代に、照合・検討すべき一つの指標を加える。壺では回転台整形による複式口縁部の破片1点（Fig.33-152）をSBI-P14から得ているが、本調査区出土の土器資料に所見の少ない雲母片を含む点から、搬入あるいは遠隔地における所製の可能性も考えられる。鉢や器台では、ST1出土のFig.27-39・46；Fig.28-62等が古墳時代初頭の形態に類す。

4. 石器： 玻璃質安山岩製と見られる打製石鎌身（SBI-P7出土、Fig.33-155）は、縄文の形態を残す短形・直線刃型に属す点から、土器片分布も認められる弥生前期の製品であろう。石鎌は打製凹基式2点（Fig.33-156；Fig.37-194）を確認している。石包丁には、偏平な粘板岩の転礫に研磨を加えた双孔・片刃の直線刃半月型1点（Fig.37-193）と、粘板岩の転礫平坦面を剥離して打製調整を加

えた挟り付き方形の1点 (Fig.43-295) がある。前者の形態は弥生前期～中期、後者の形態は在地において弥生後期に多見される。他の石器類は、次の観察表に委ねる。

5. 須恵器 (貯蔵器・供膳器) : いずれも細片もしくは限定的部位の破片に止まるため、形態復原による編年付けが著しく困難である。

貯蔵器の破片では、外面を平行叩目、内面を同心円紋もしくはその磨り消しとするものが圧倒的に多く、次いで外面にカキ目やナデを施すものが散見される。この状況から、破片の多くは甕に帰属し、少数が壺類に帰属しよう。それらの年代は、古墳後期から古代に跨るものと考えられる。

供膳器の破片は少量であり、杯身・杯底・蓋が確認される。杯身には、口縁端が直立に近いFig.30-77・78があり、後者の体部外傾度の強さや短小な立ち上がりは7世紀中葉頃の特徴を示す。杯底は古代の2点を得ており、Fig.30-79では高台際を水平に張り、80では高台際から体壁を立ち上げる。前者は8世紀代に多く、後者の特徴は8世紀中葉以後に頻見される。

6. 土師器 : 古代の土師器片は3点に止まり、いずれも供膳器に類する。SK10底面出土のFig.38-209と遺構検出面出土のFig.44-302は、輪高台付き杯の底部片である。全面風化の前者では復原底径が約11cmと見積られる。復原底径8.0cmの後者では、全面に回転ナデの調整痕を留める。

7. 須恵器 (布目瓦) : 古代瓦の細片であり、瓦当を得ていない。側端片 (Fig.39-224・225) では端面を斜切とする。これら以外の破片では、平瓦・丸瓦ともに凸面を縄蓆紋、凹面を粗い布目とする。

8. 常滑陶 : 肩部の破片1点のみを耕作土から採取した (Fig.42-278)。中世の製品ながら微片に過ぎ、編年との照合に至らない。自然釉層の全面に、斜長石の針晶群を生じている。

9. 中国産青磁 : 龍泉窯系・刻花蓮弁紋碗の体部細片1点を得ている (Fig.38-208)。弁稜の削り出しを深い斜刻とする点から、13世紀後半の製品と見られる。

10. 瓦器 : 中世の瓦器片3点を得ているが、いずれも風化が著しい。Fig.38-207の底部片では、貼付高台が比較的厚重で接地は安定している。内底面には、ヘラ磨きの形跡が微かに残る。比較的早い段階の製品と見られるが、産地や年代の特定に至らない。

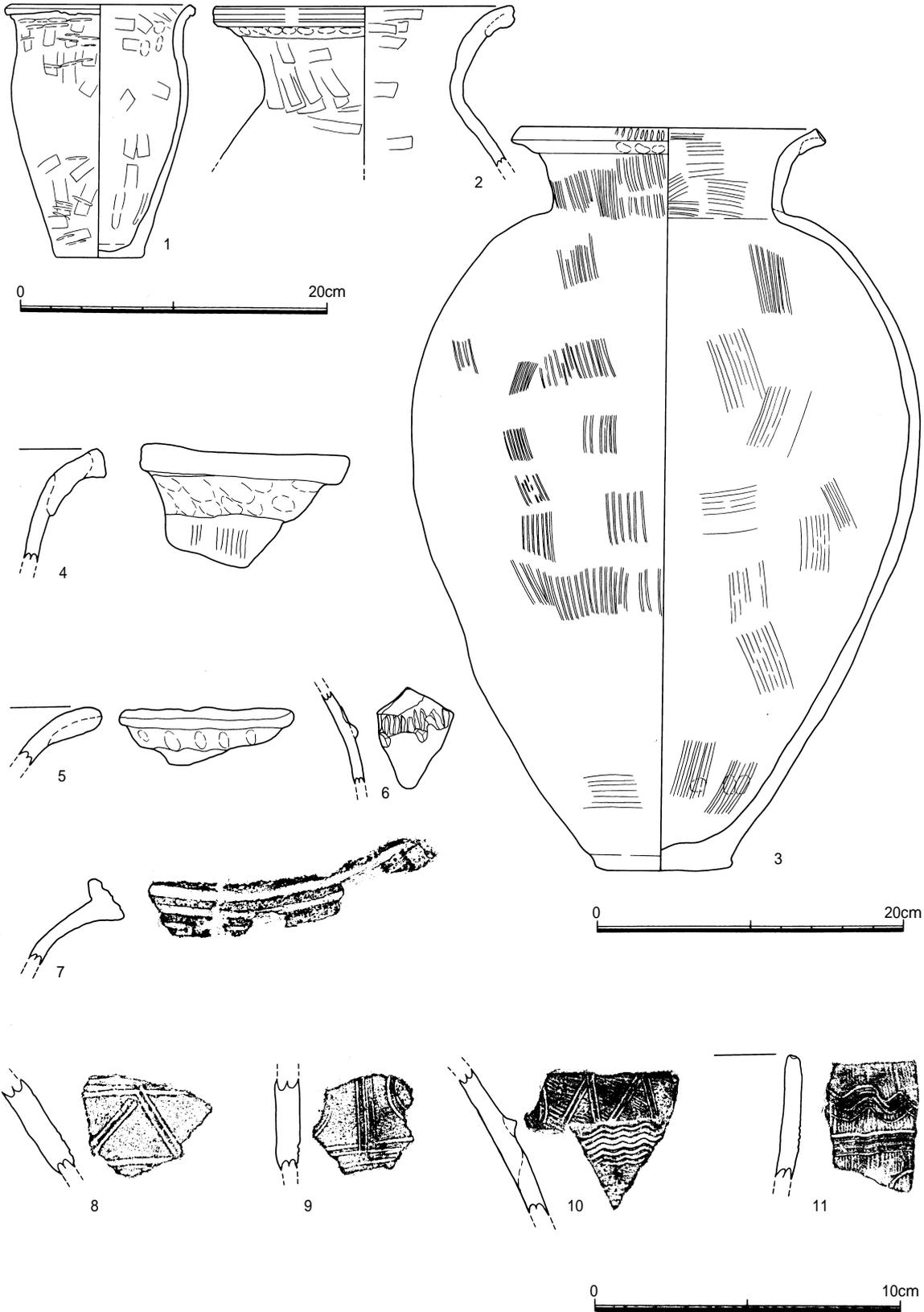
11. 近世国産陶磁器および燻瓦 : 近世の土坑を中心に、比較的まとまった量を得た。陶磁器類では、大勢を占める白磁染付の他、少量の白磁や銅緑釉陶を得ている。燻瓦類は、三巴紋を珠紋で囲む軒丸瓦当の他、簡略化の進んだ唐草紋の軒平瓦当が含むが、いずれも記号や屋号の刻印を欠く。これらの詳細も、次の観察表に委ねる。

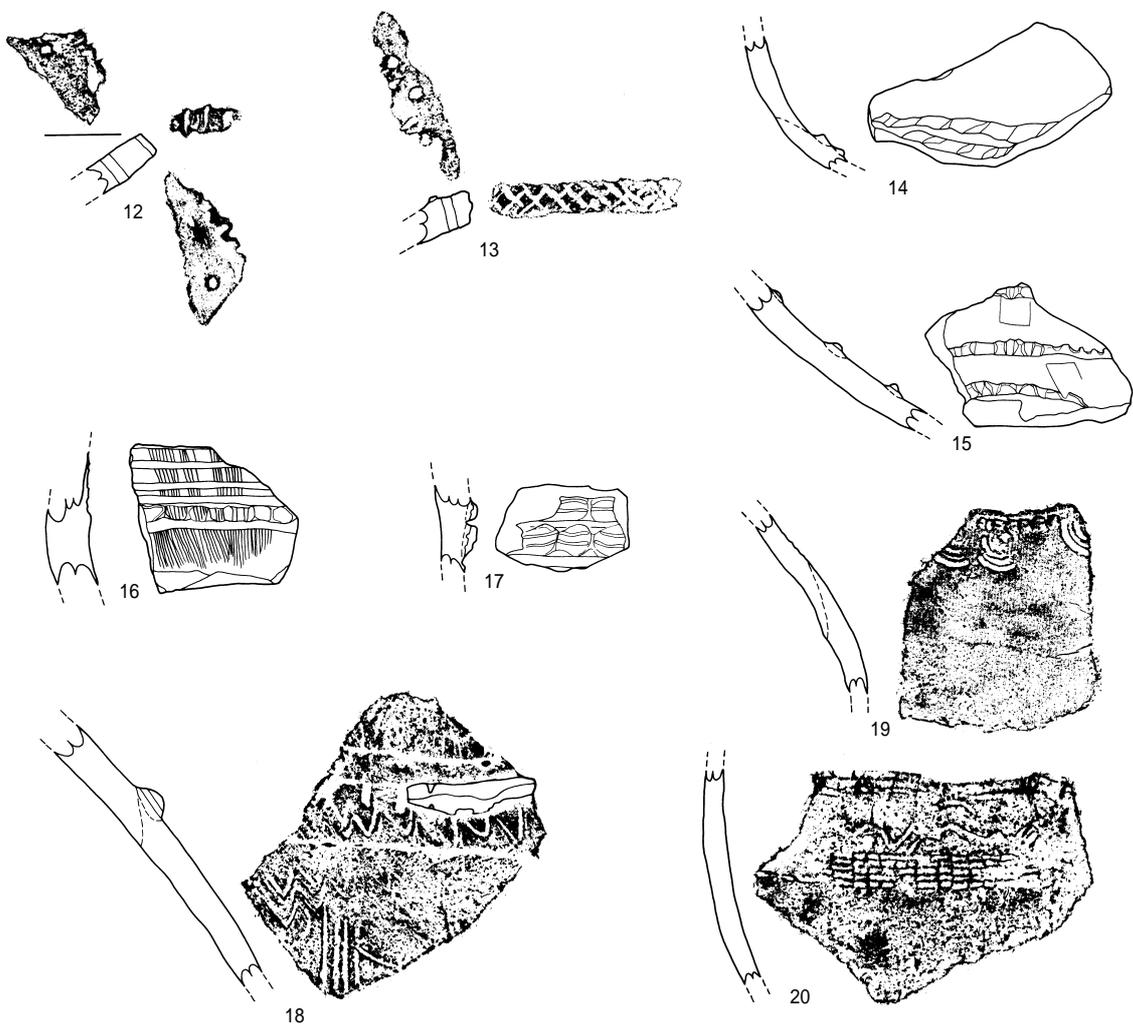
(武吉眞裕)

参考文献

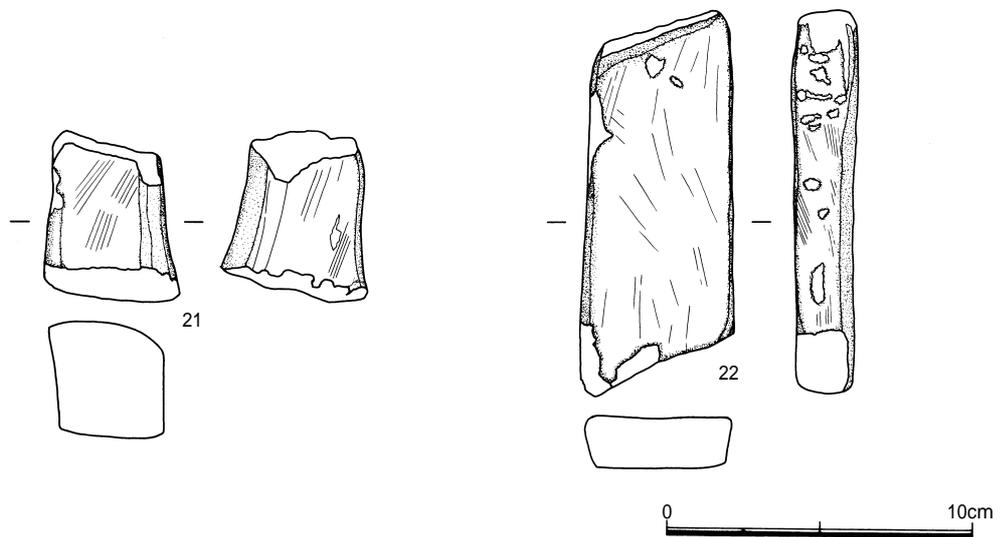
- 『ひびのき遺跡』 - 高知県土佐山田町教育委員会 1977年. 執筆. 岡本健児・広田典夫。
- 『弥生土器の様式と編年』近畿編 I - 寺沢薫・森岡秀人編著. 木耳社 1989年。
- 『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 - 正岡睦夫・松本岩雄編. 木耳社 1992年。
- 『高知県野市町本村遺跡調査報告書』 - 野市町教育委員会 1993年. 執筆. 坂本憲昭。
- 『図説・徳島の歴史』 - 河出書房新社 1994年. 収録「弥生時代の流通 - 吉野川流域の土器様相」執筆. 菅原康夫。
- 『下分遠崎遺跡 (高知県香美郡香我美町)』 - 高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994年. 出原恵三。
- 『高知県文化財団埋蔵文化財センター研究紀要 第一号』1994年3月「周辺地域における土師器の様相 - 1. 南四国の古式土師器 -」執筆. 廣田佳久。
- 『弥生時代中期の土器と集落』 - 古代学協会四国支部第8回大会資料 1994年. 収録 [高知県] 執筆. 松村信博。
- 『弥生後期の瀬戸内海』 - 古代学協会四国支部第10回松山大会資料 1996年. 収録 [阿波] 執筆. 近藤 玲。
- 『パーガ森北斜面遺跡』 - 高知県伊野町教育委員会 1999年. 執筆. 伊藤 強。

ST2



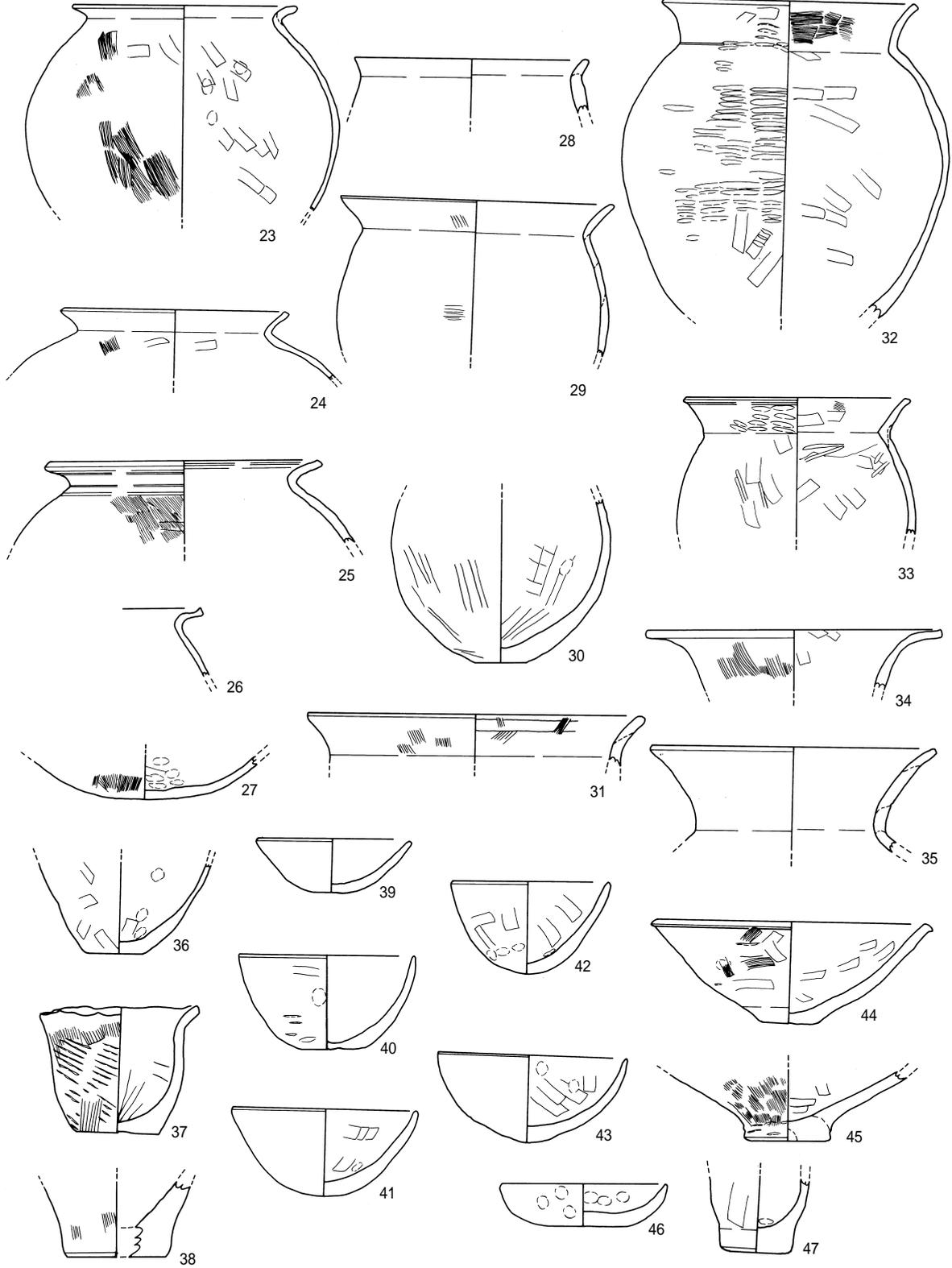


0 10cm



0 10cm

ST1



0 20cm

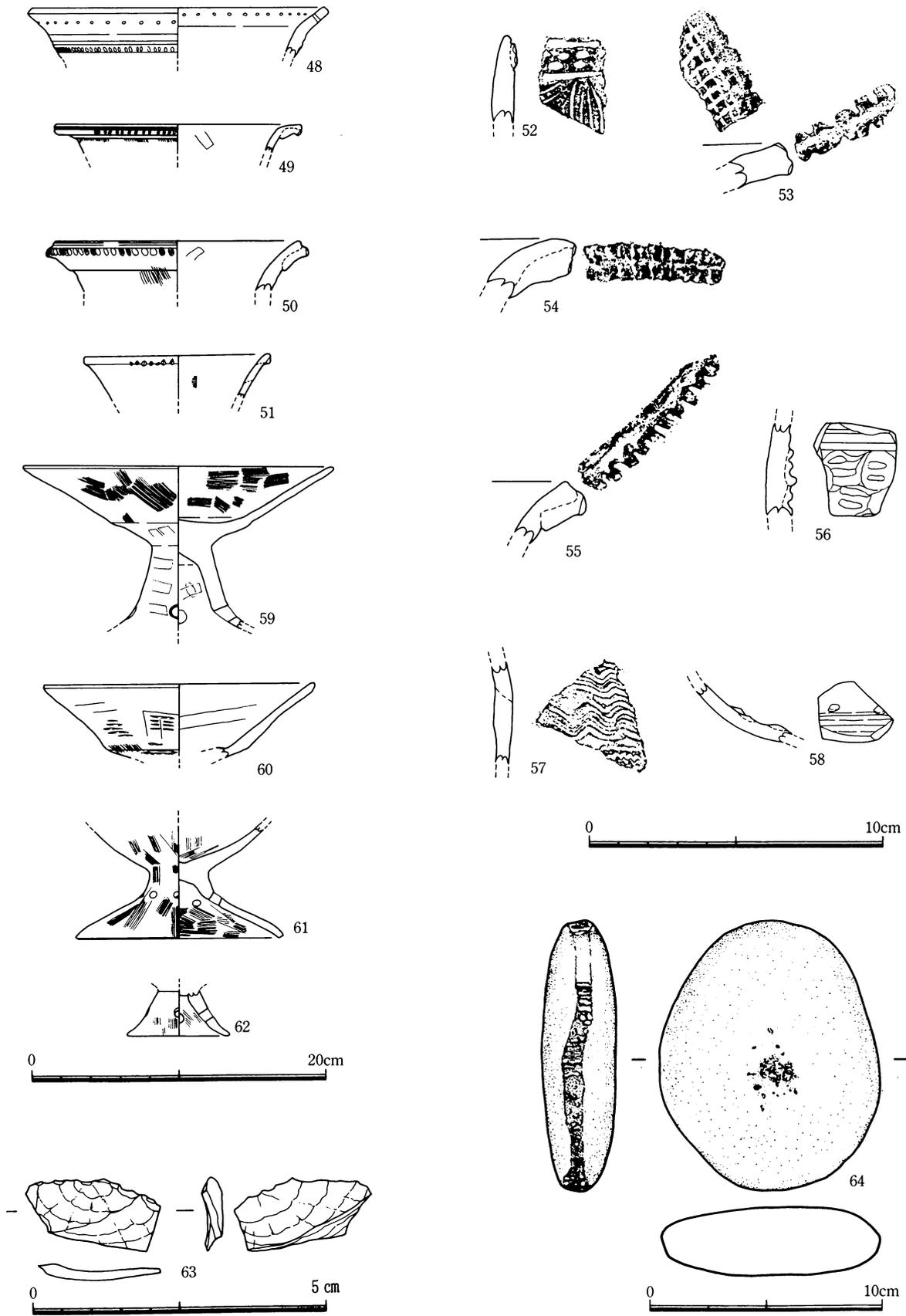
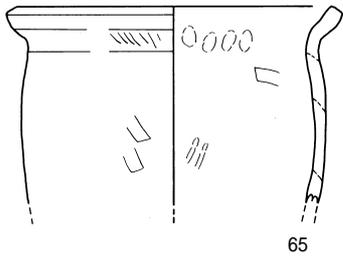
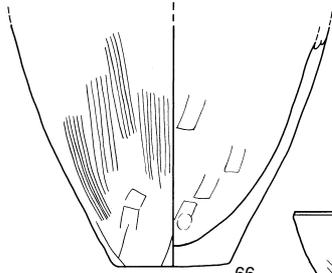


Fig.28 I 区出土遗物实测图 4

SX1(65 • 66)

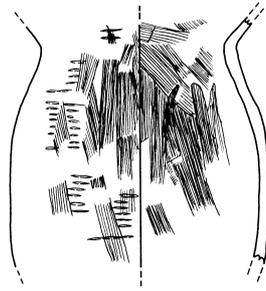


65

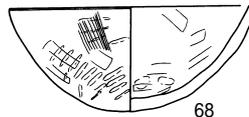


66

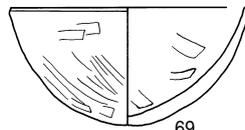
SX2(67 • 68 • 69 • 70)



67



68



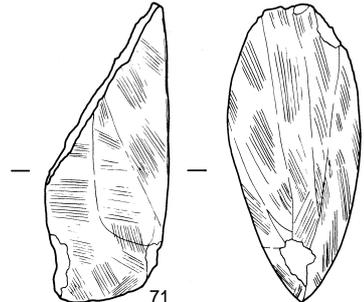
69



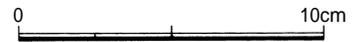
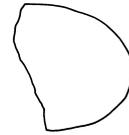
70



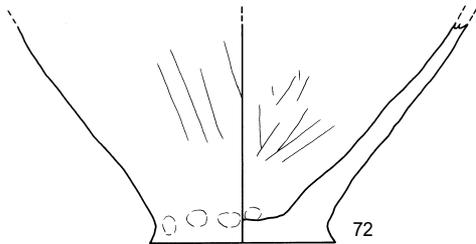
SX3(71)



71



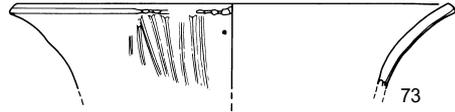
SX9(72)



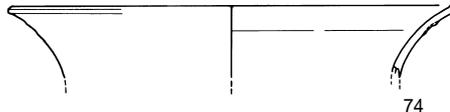
72



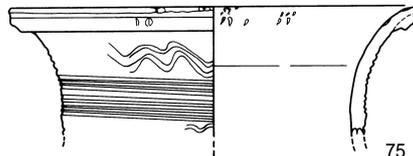
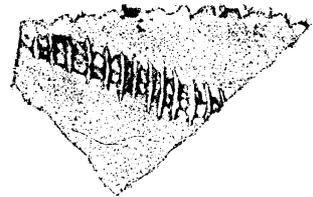
SK5(73 • 74 • 75 • 76)



73



74



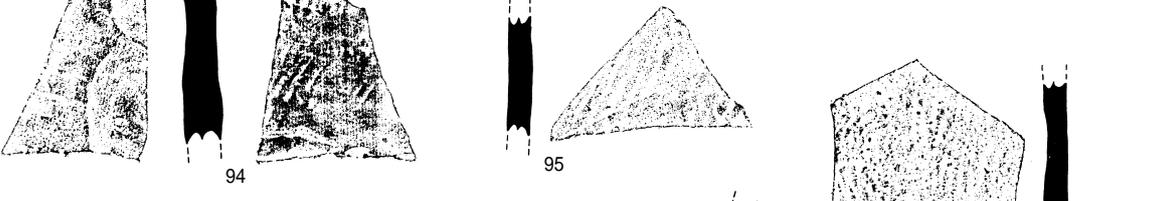
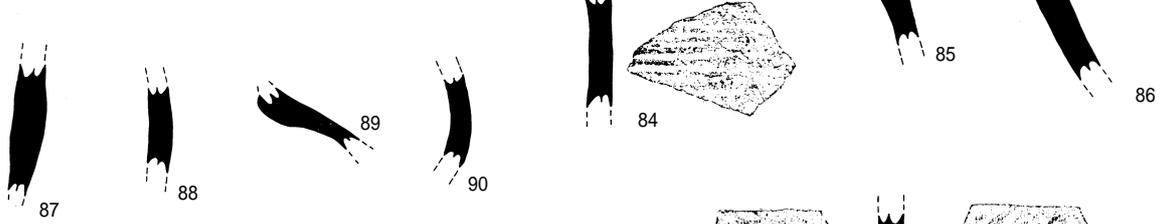
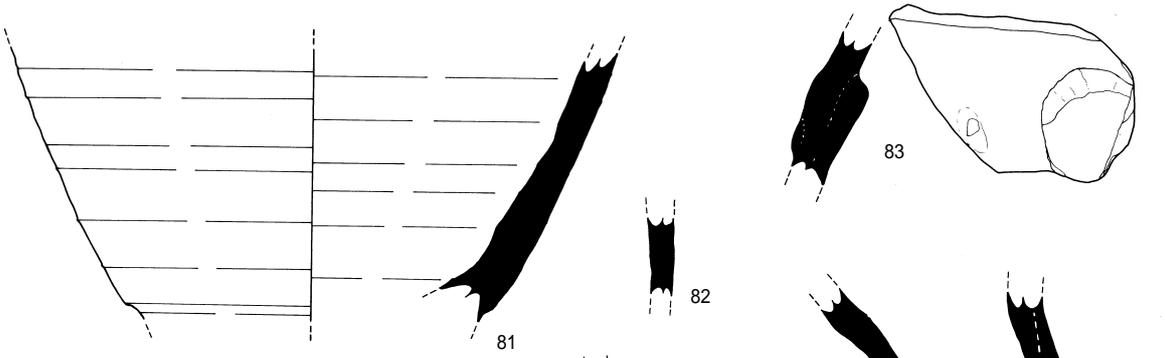
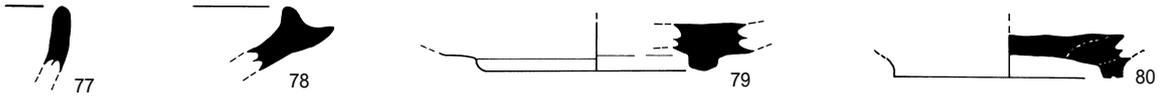
75

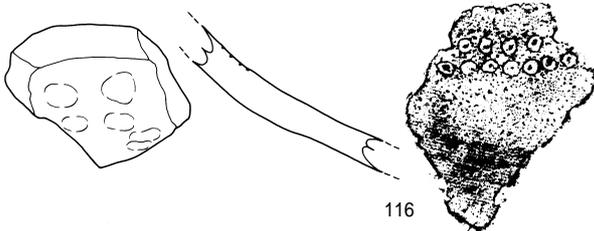
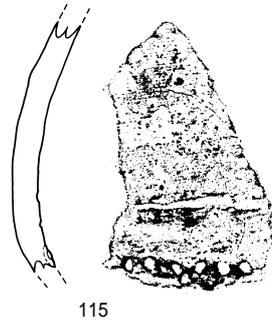
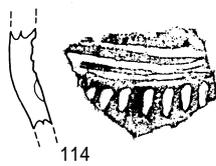
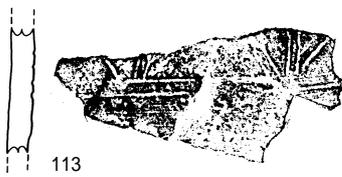
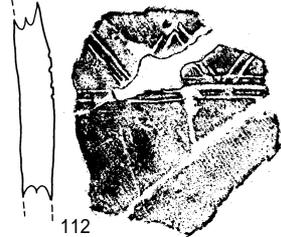
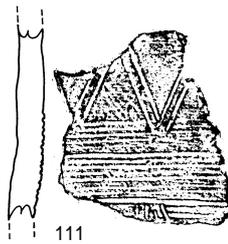
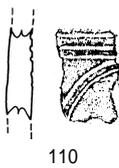
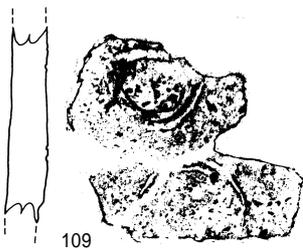
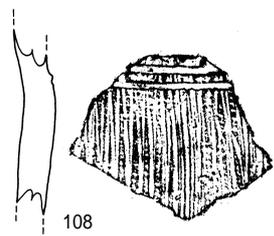
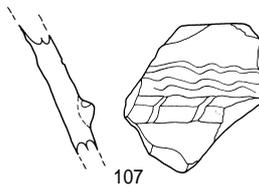
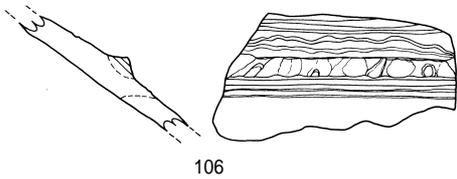
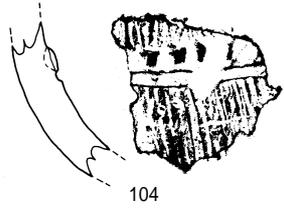
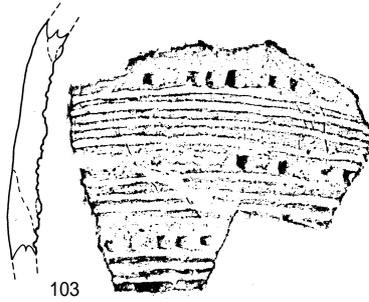
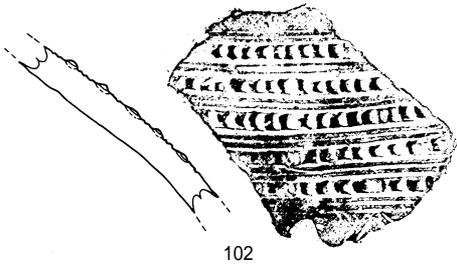
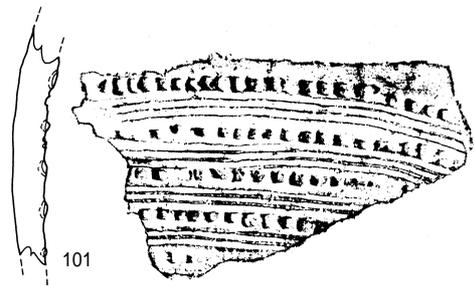
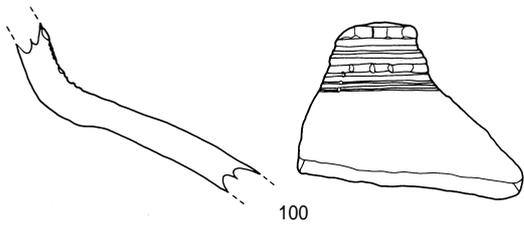


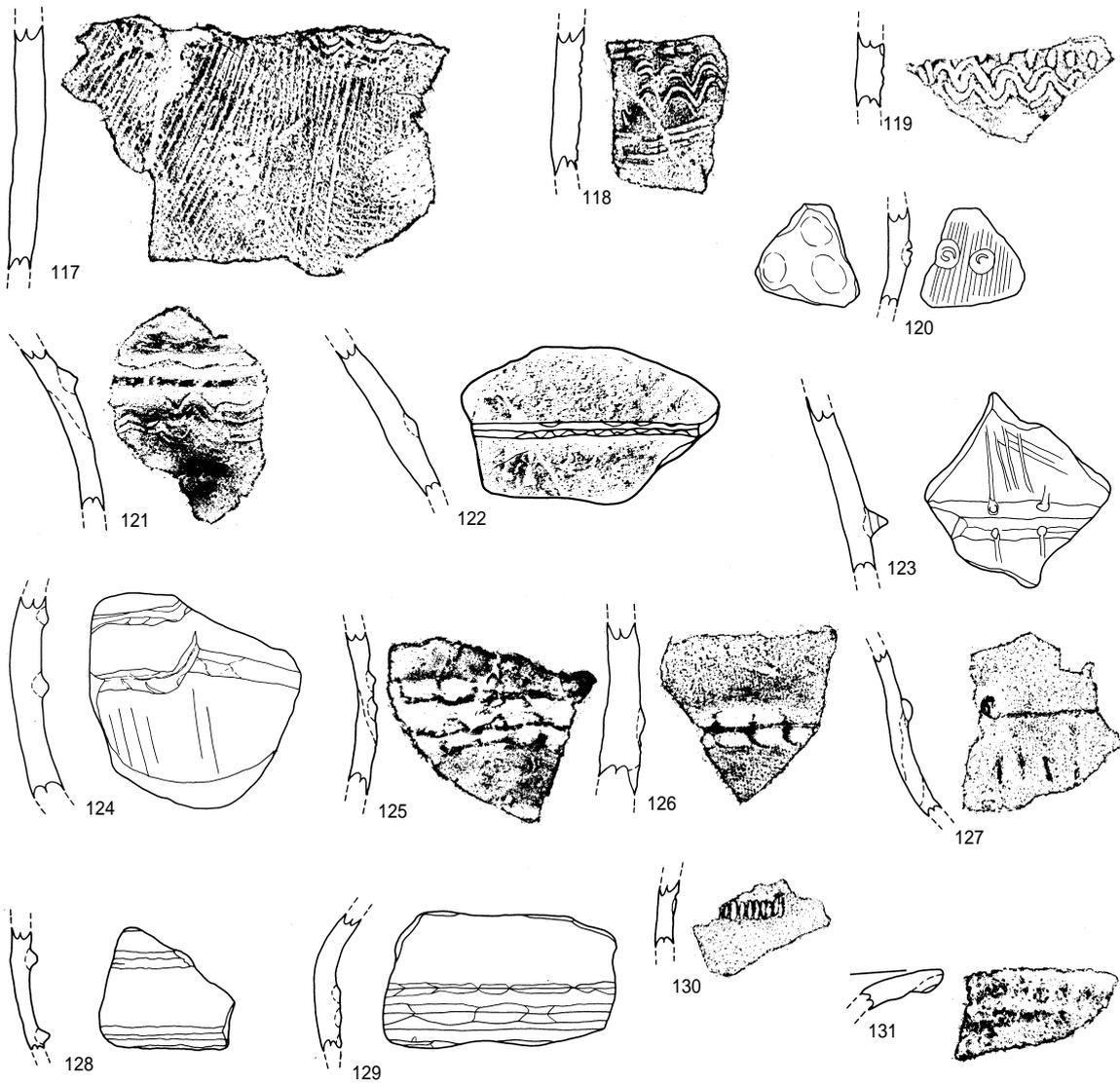
76



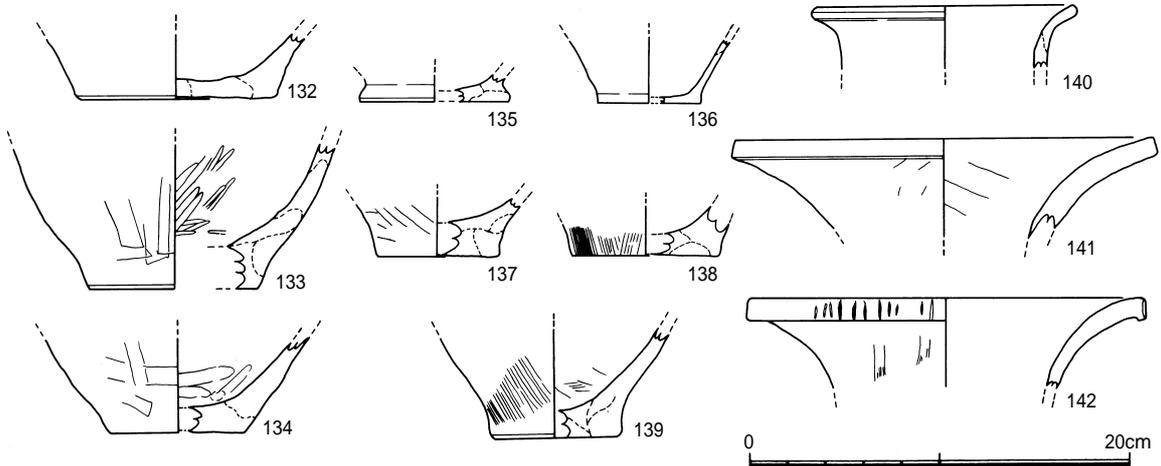
SB1.Pit







0 10cm



0 20cm

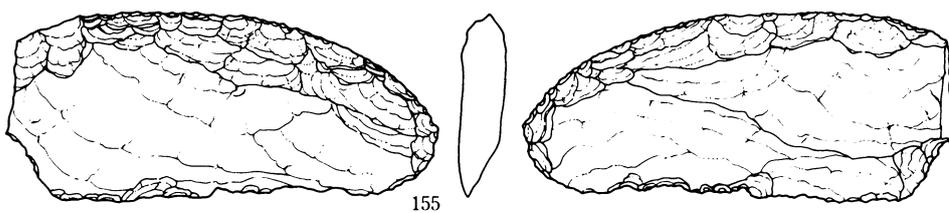
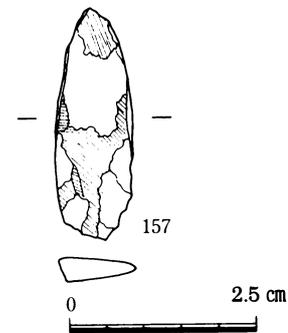
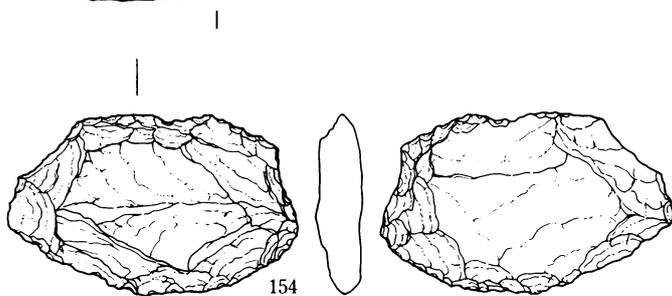
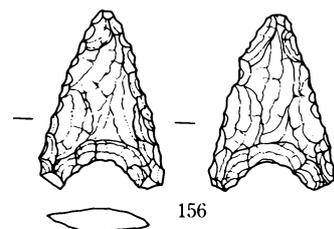
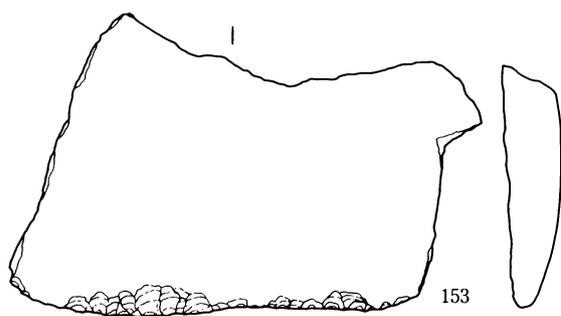
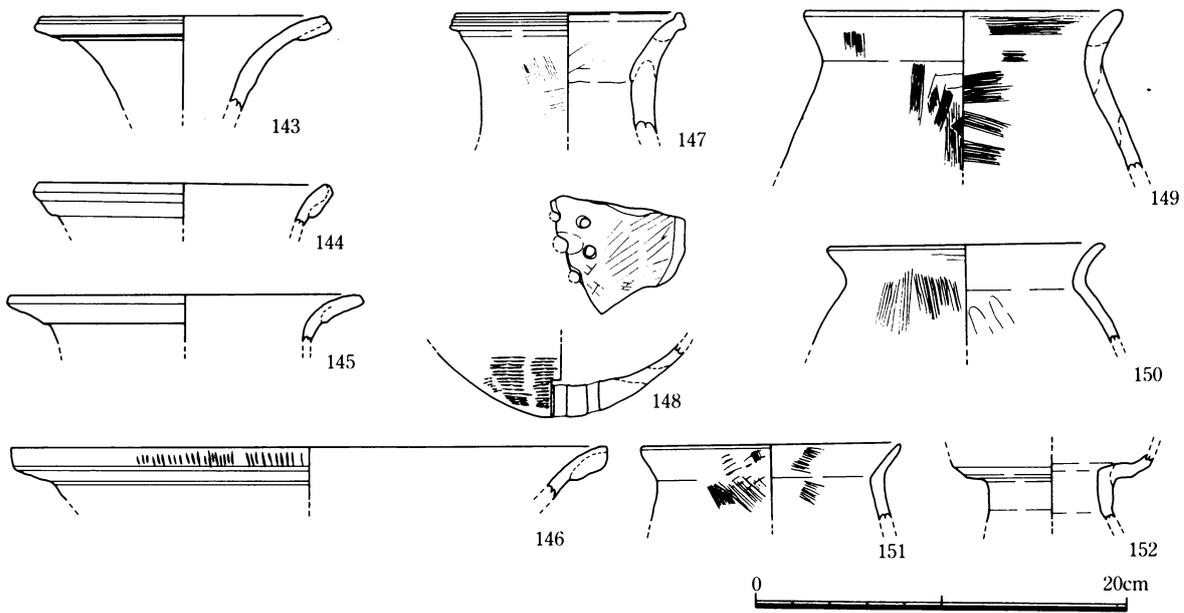
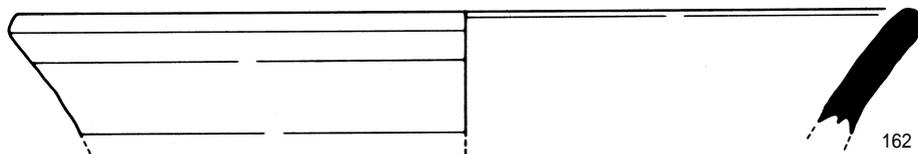
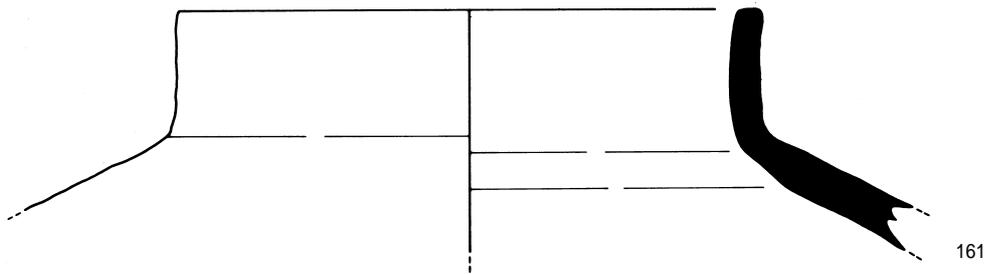
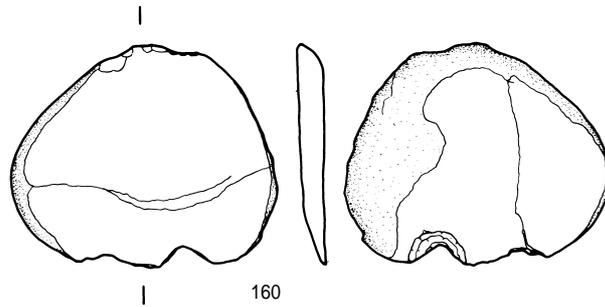
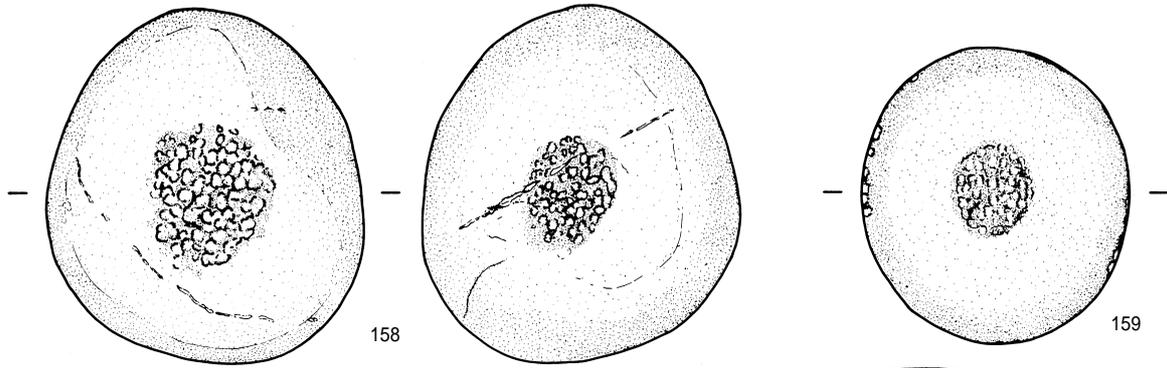
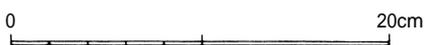
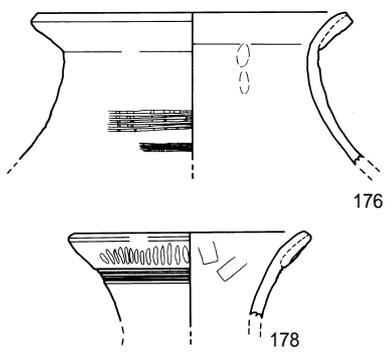
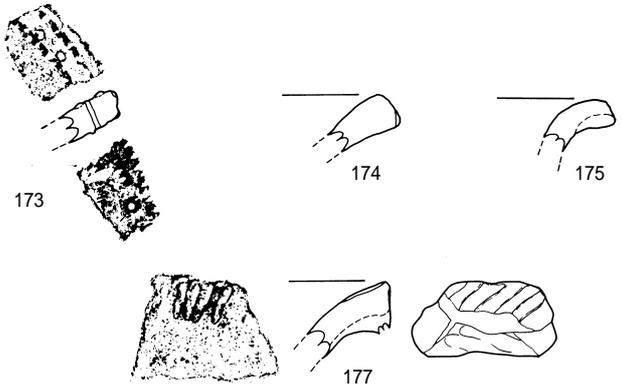
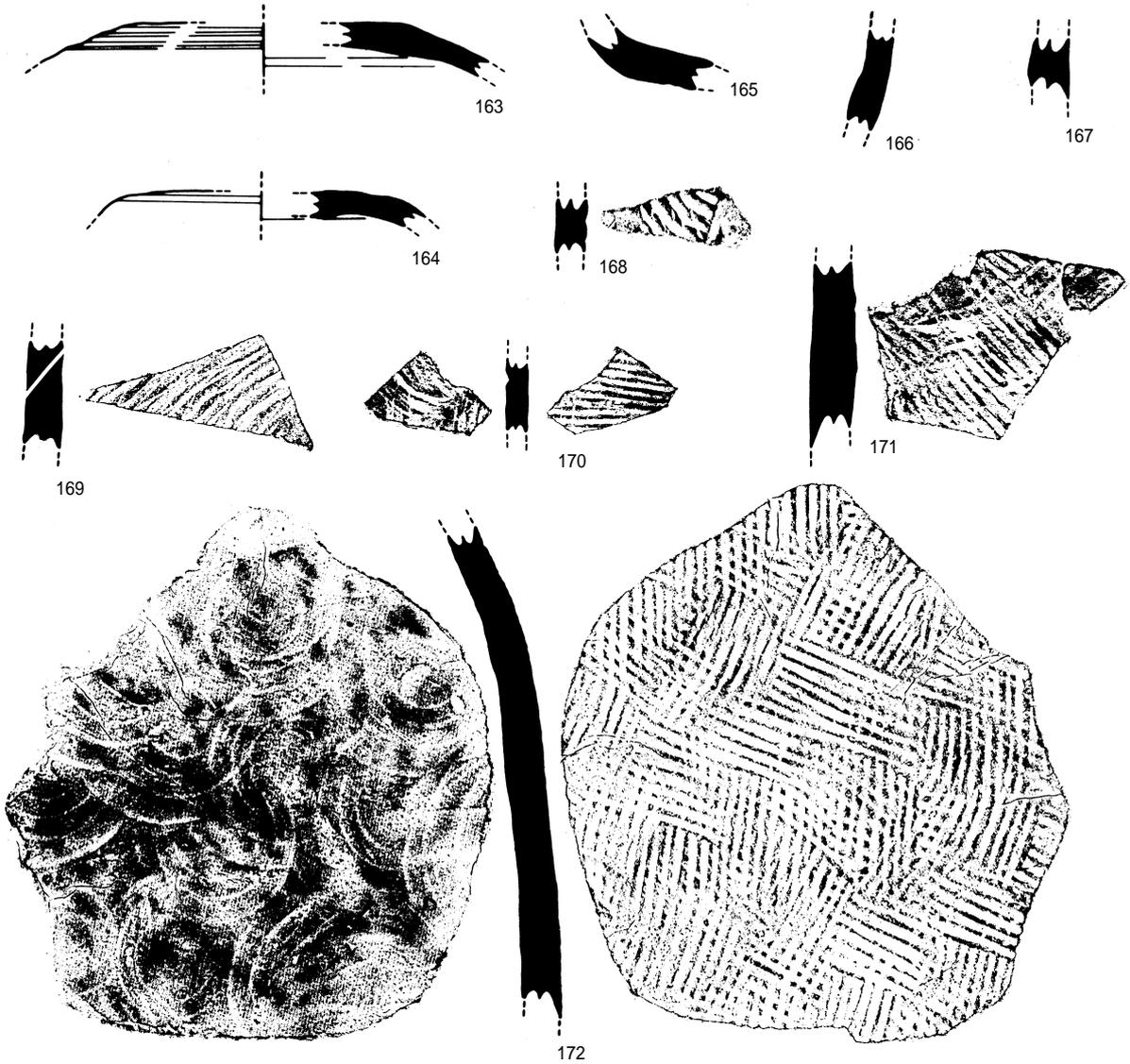


Fig.33 I区出土遺物実測図9

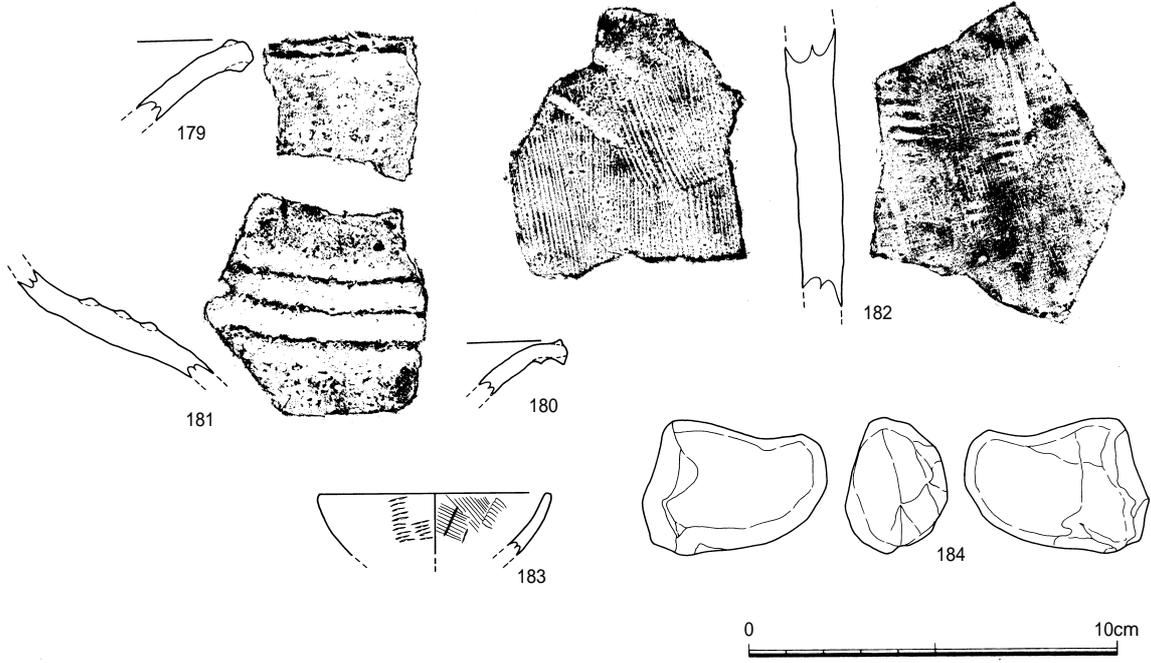


SB2. Pit

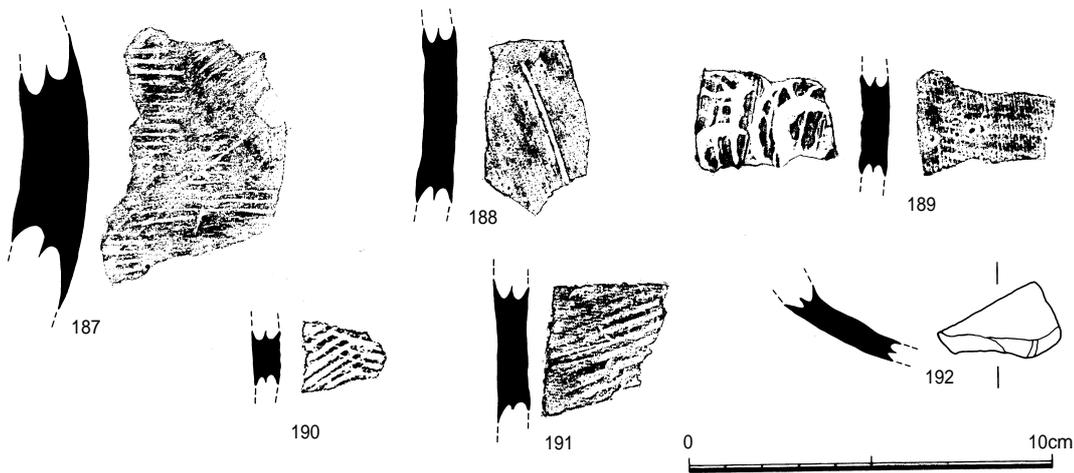
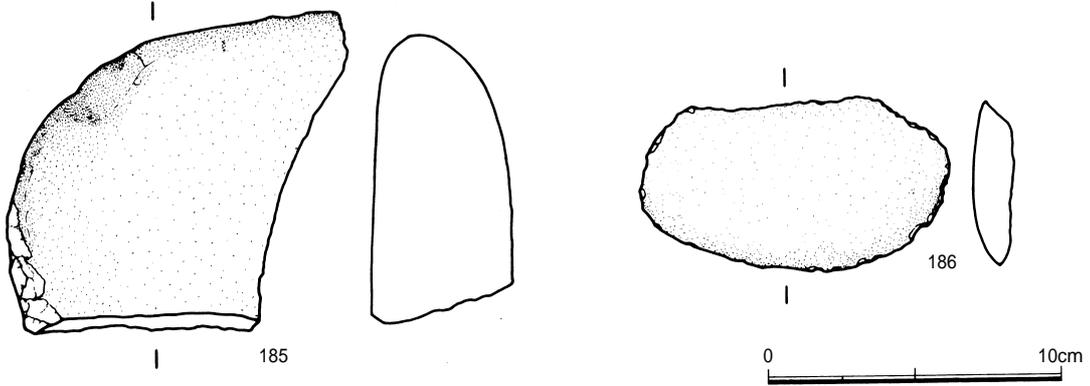


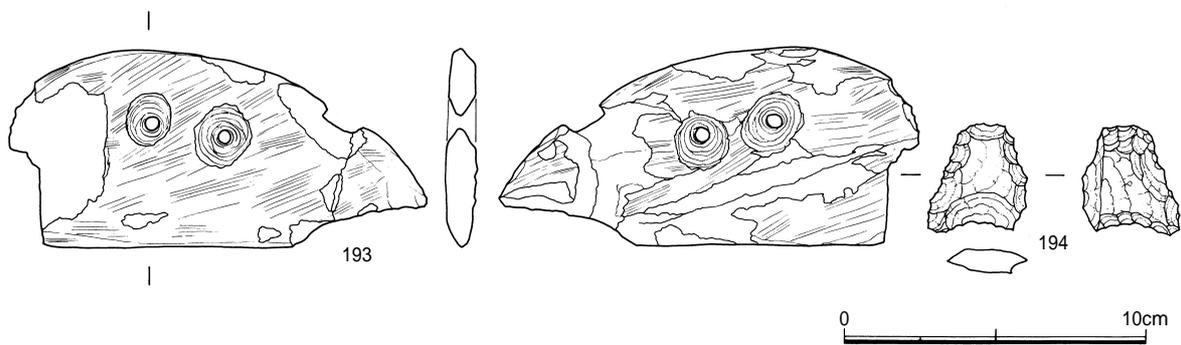
SB2. Pit (179 • 181)

SX4 (180 • 182 • 183 • 184)

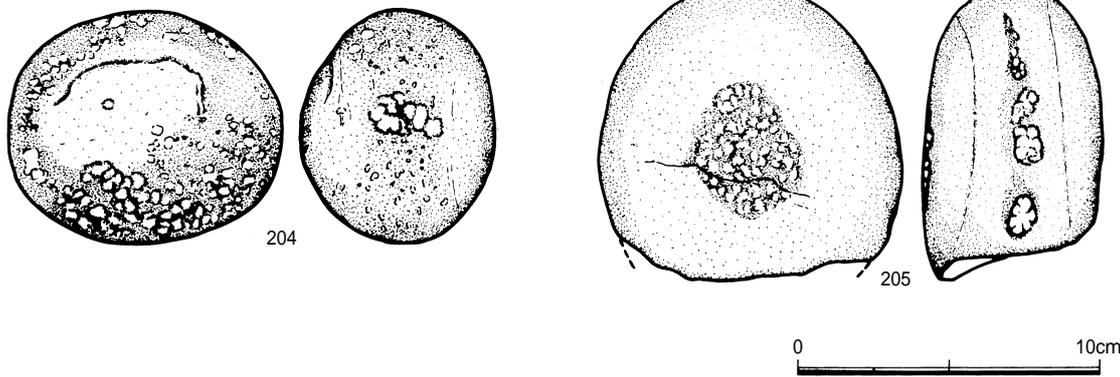
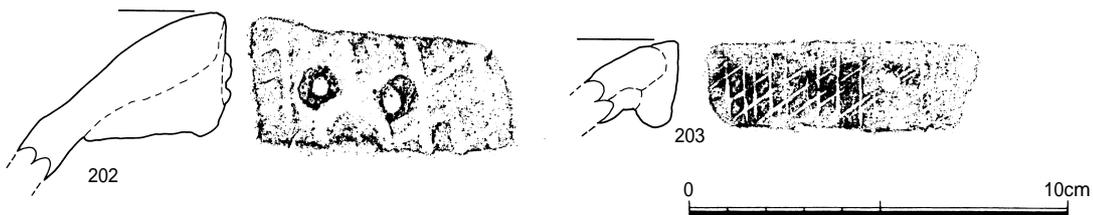
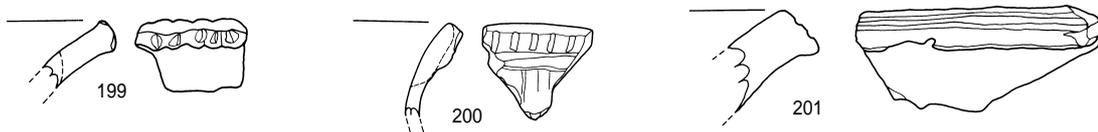
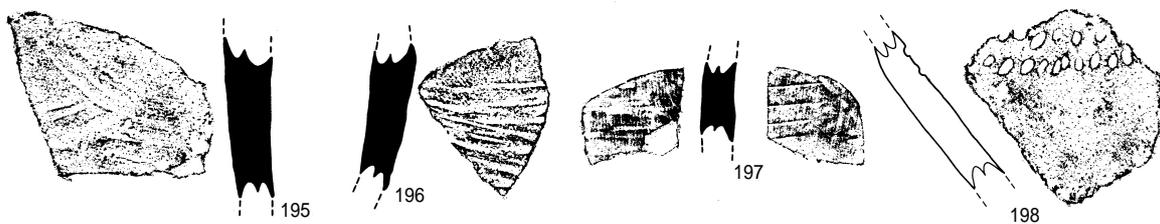


SX4

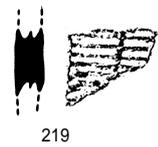
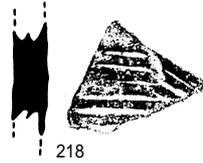
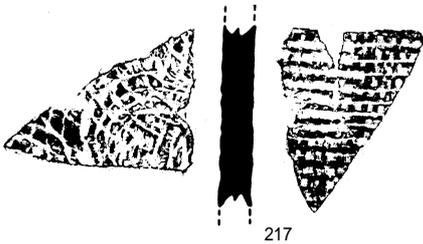
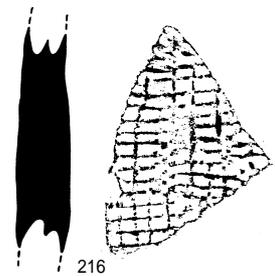
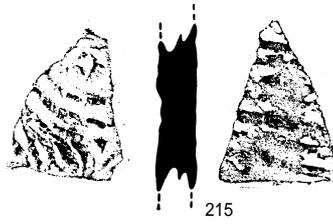
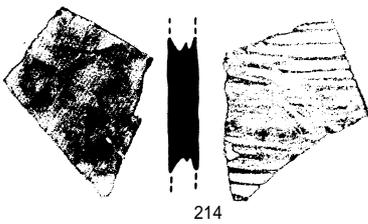
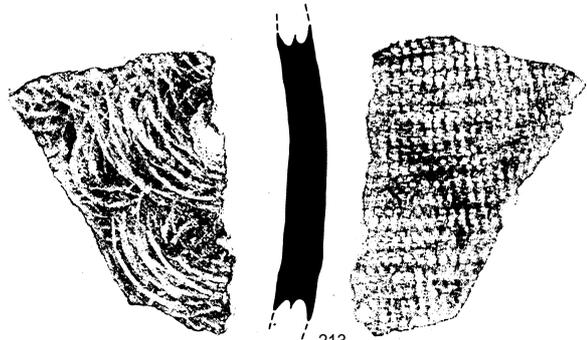
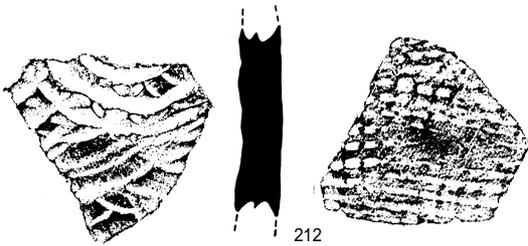
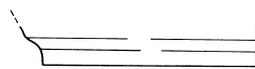
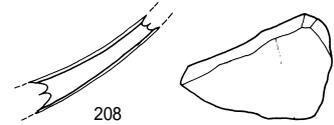
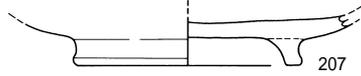
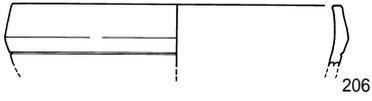


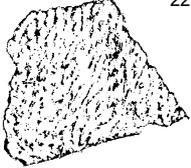
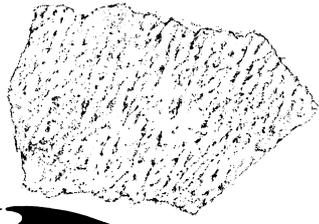
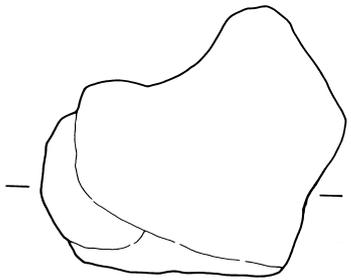
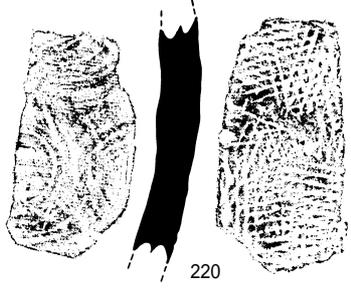


集石1

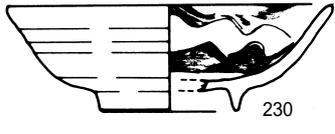


SK10

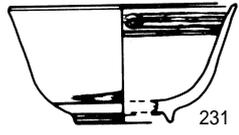




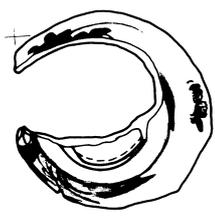
SK2



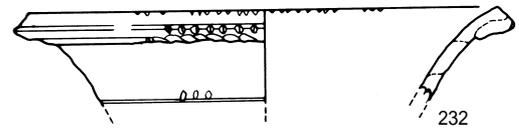
230



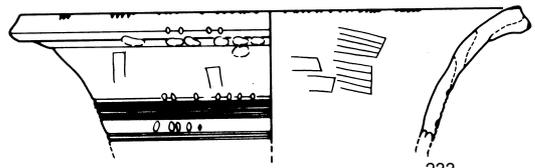
231



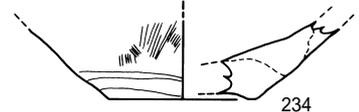
SK4



232



233



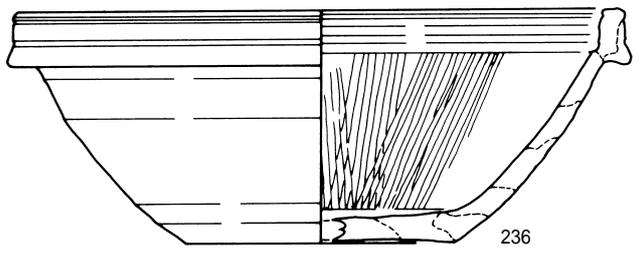
234



235



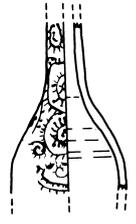
SK11



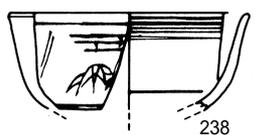
236



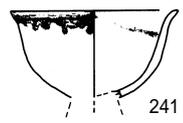
237



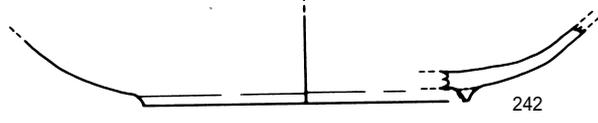
240



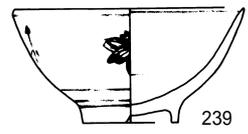
238



241



242



239

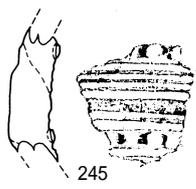


244



243

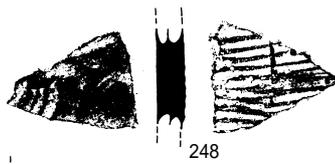




245



246



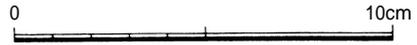
248



249



247



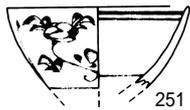
SK12



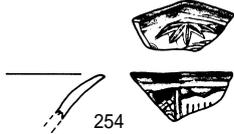
250



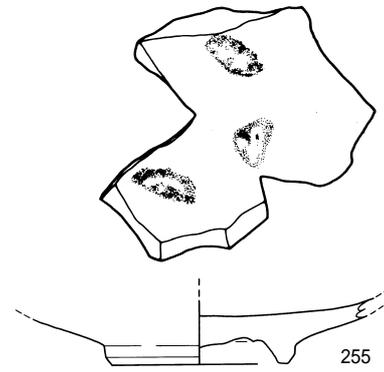
253



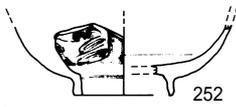
251



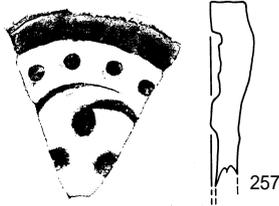
254



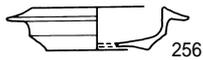
255



252



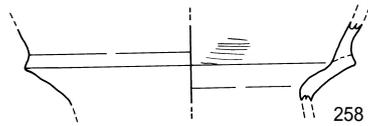
257



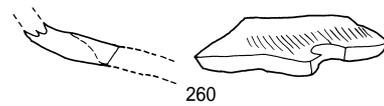
256



259



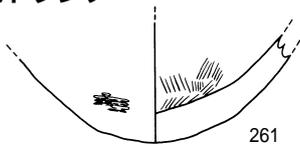
258



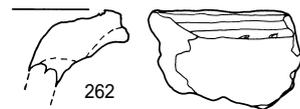
260



北トレンチ



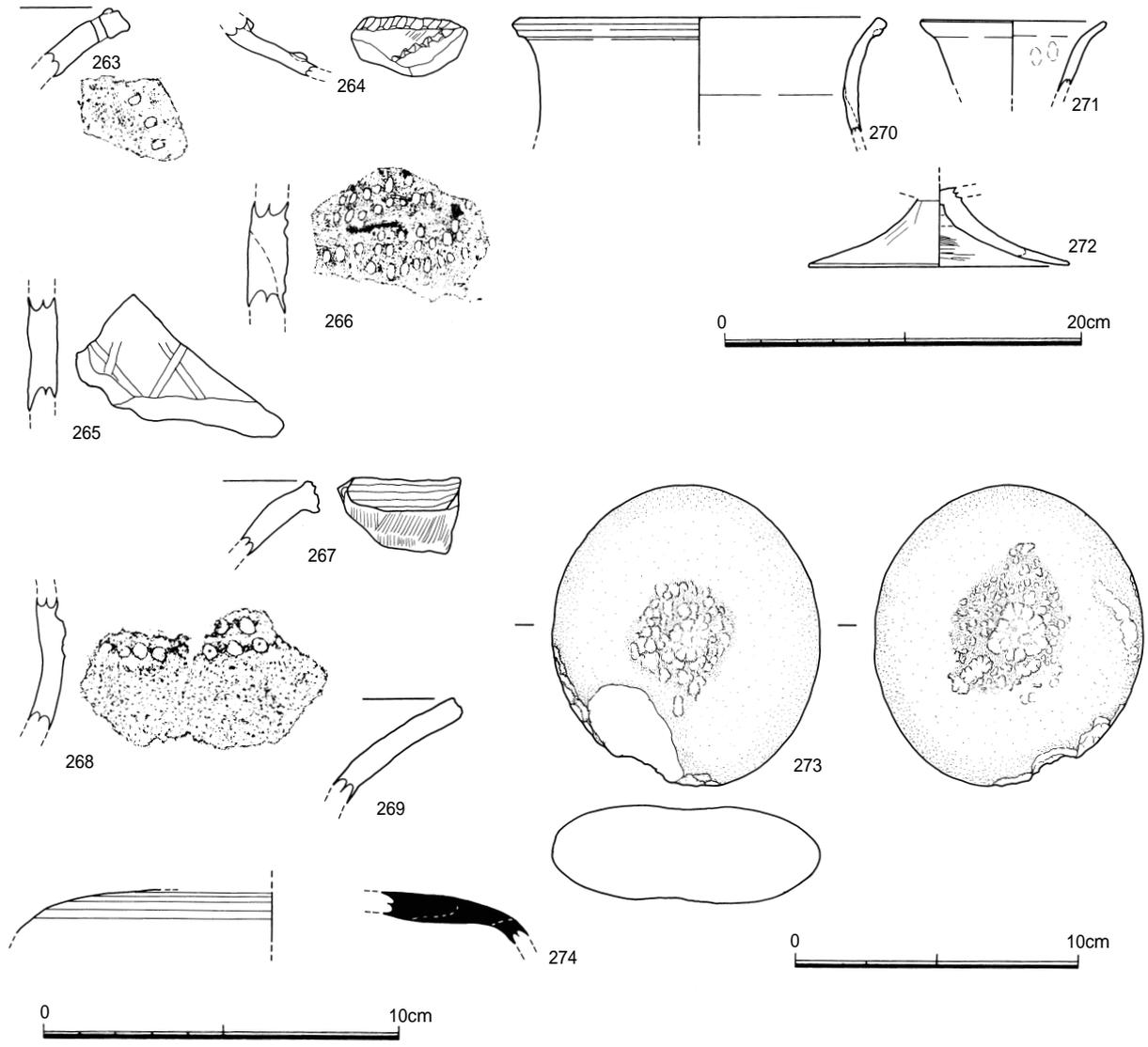
261



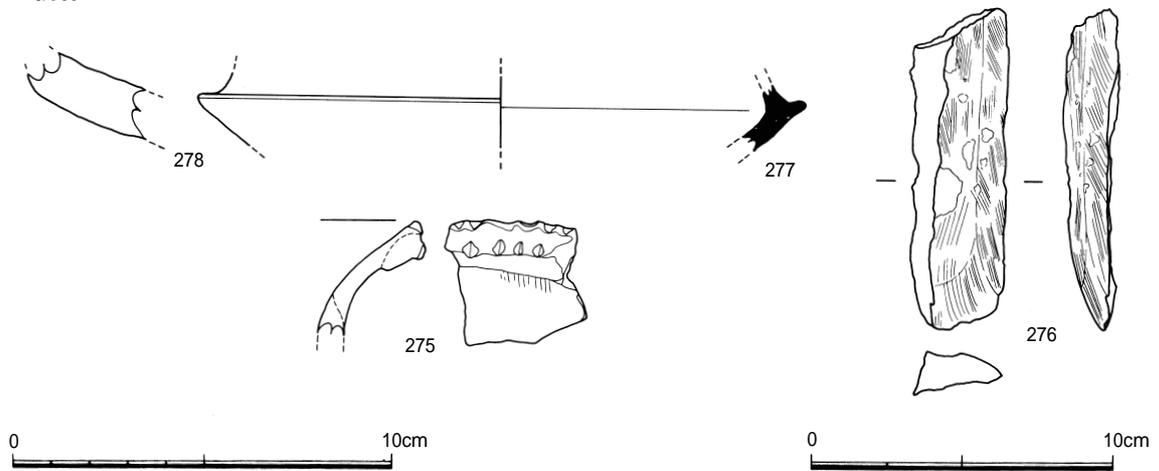
262



ピット群



耕作土



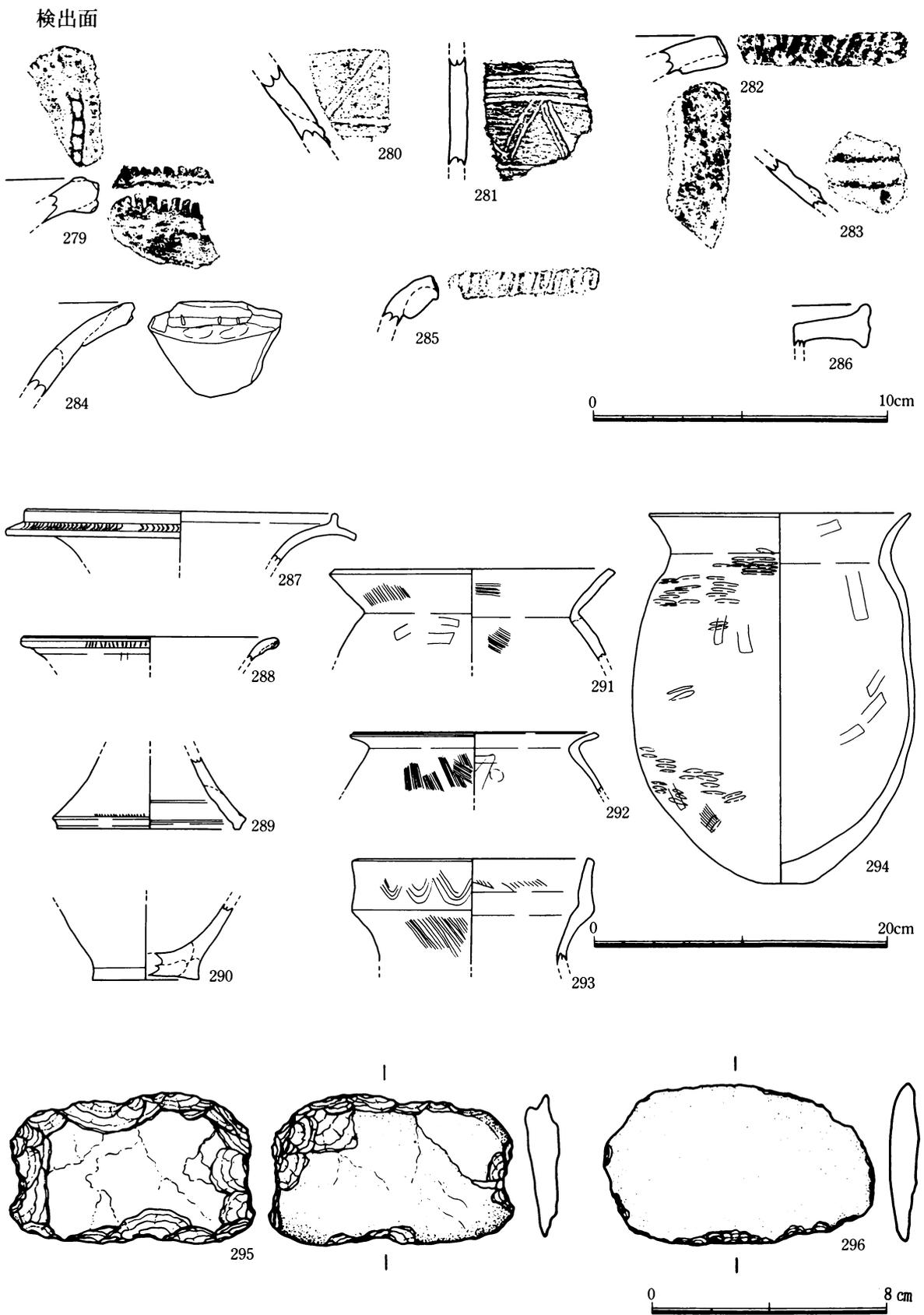
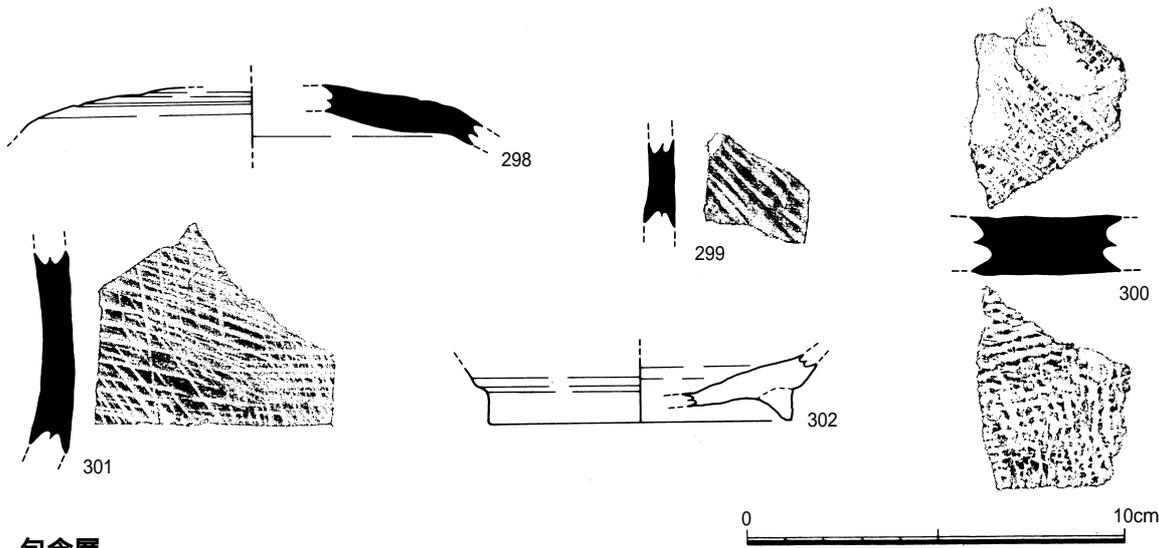
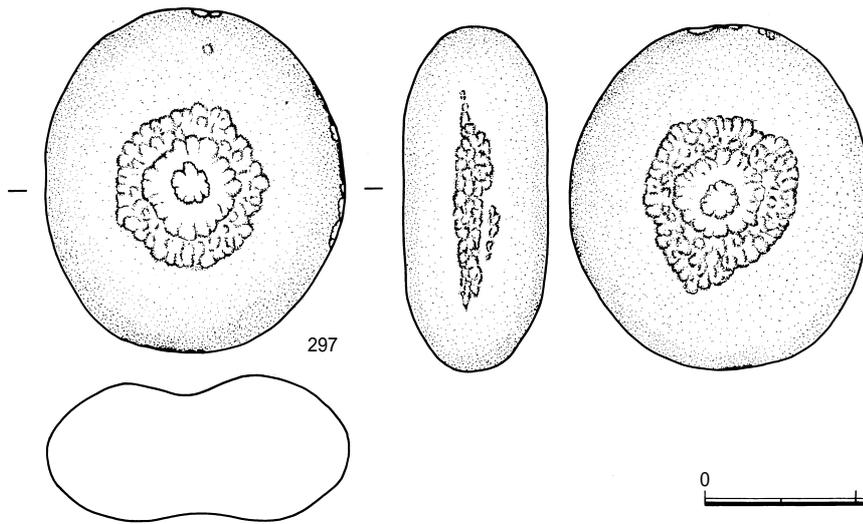
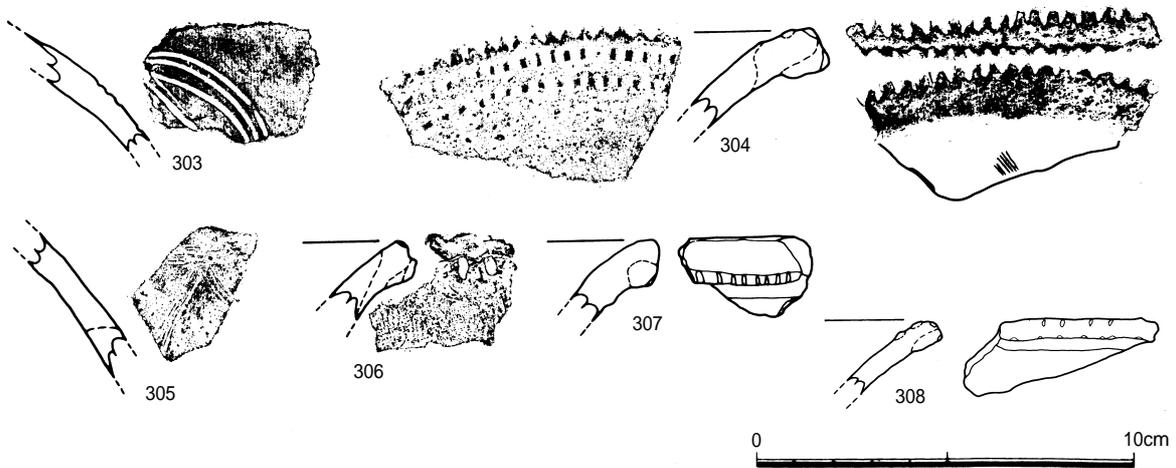
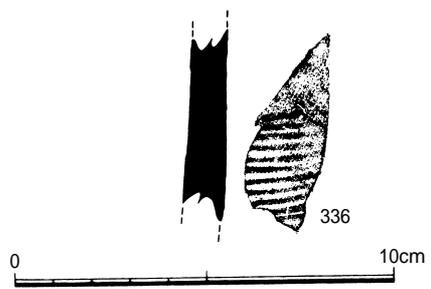
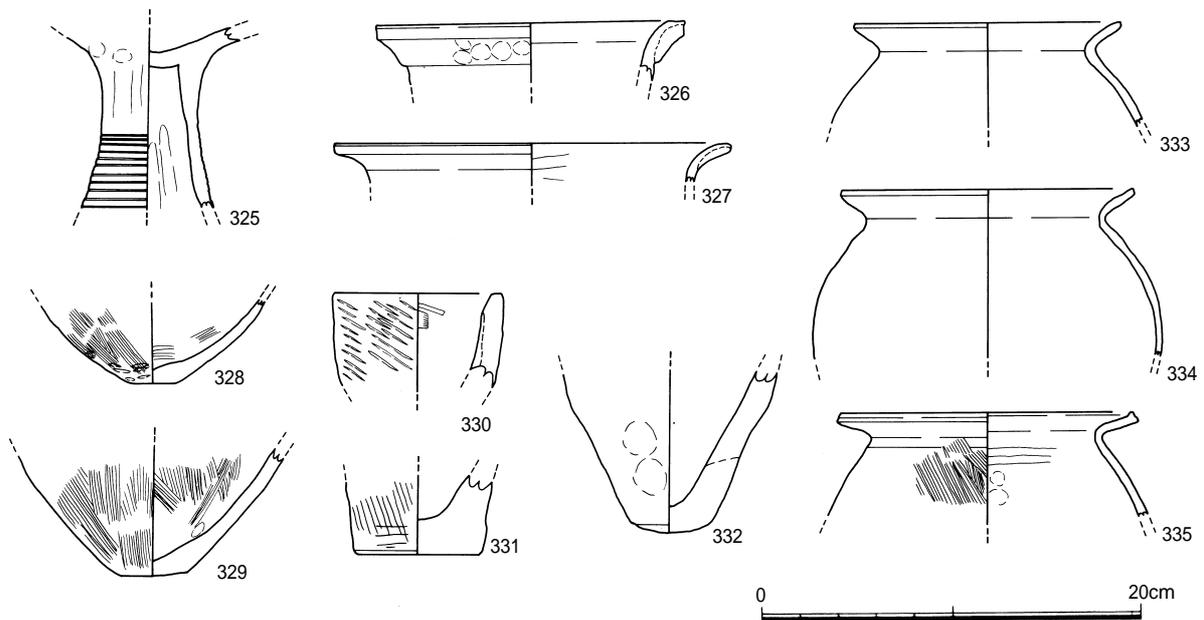
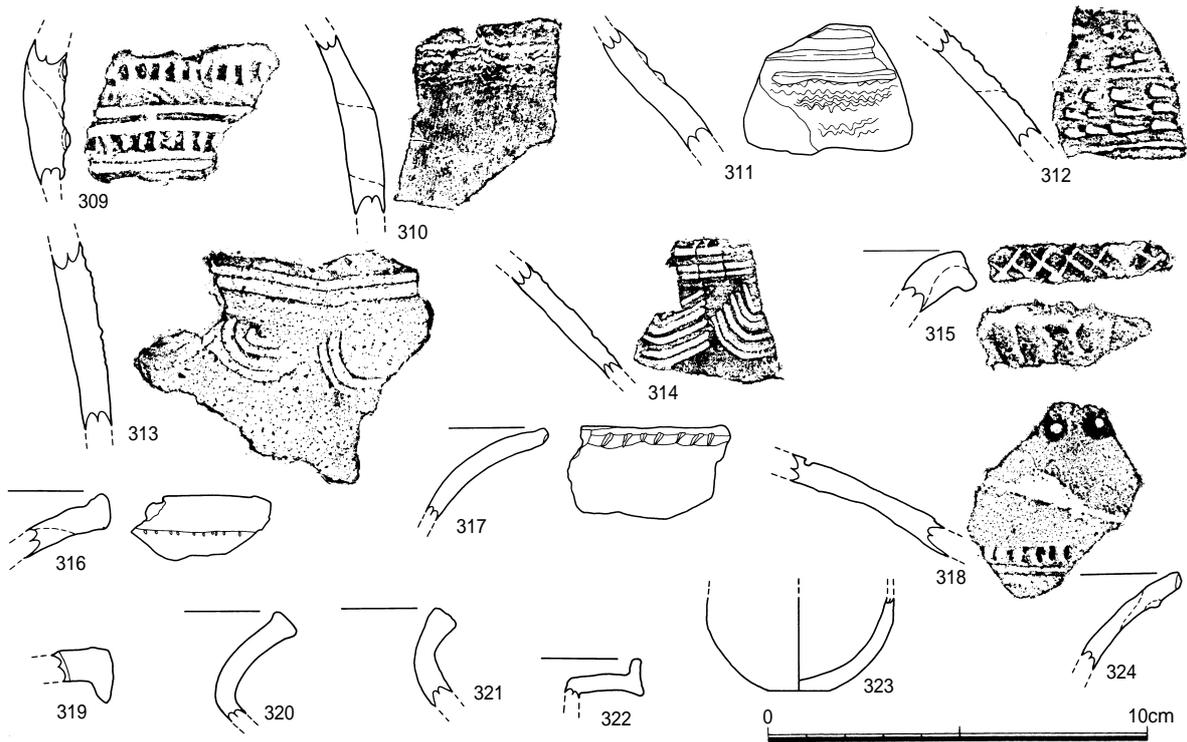


Fig.43 I区出土遺物実測図19



包含層





里改田遺跡 区出土遺物観察表 (1)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
1	ST2, 上部埋土, 土器集中1	土器	甕	11.7	16.6	11.6	5.6	安定した平底型の小型甕。口縁から肩部にかけて、如意形を呈す。平行刻目の印紋めを施し、内外面に縦ナデを加える。底部際と口縁には明瞭な印目が残る。頸部内面には指頭圧痕が横一列に巡る。砂礫 (少量) : 石英・長石・珪長岩・チャート。	胎色は灰白。外面の一部に見える縦長形の暗色箇所は、胎内残留炭素の露呈であり、煮炊き等の結果ではない。(弥生・後期後半)
2	ST2, 上部埋土, 土器集中1	土器	甕	19.2	(10.5)			広口形の口縁片。外端に素地帯を貼付して肥厚。肥厚面には横1列の指頭圧痕を残し、装飾を兼ねる。口唇面の中央を強く横ナデして窪ませる。頸部以下の内外面は、ヘラ調整。砂礫 (少量) : 石英・長石・珪長岩・泥質岩・チャート。	胎色は灰白。胎内の大部分に炭素が残留。円磨を受けた砂礫は少ない。(弥生・中期末)
3	ST2	土器	甕	19.0	49.0	32.8	8.8	平底、長胴型の広口壺。胴部最大径は上方に寄る。頸部を弱外傾で直線的に立ち上げ、外反口縁の外端に素地帯を貼付して肥厚。肥厚面には右から左に指頭圧痕を施す。外面と口縁内面は目幅の広いハケ目調整。砂礫 : 石英・長石・珪長岩・泥質岩。	胎色は、淡い黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期末)
4	ST2, 下部埋土, 土器集中2サイト	土器	壺		(3.7)			広口形の口縁細片。外端に粘土帯を貼付して肥厚。貼付外帯には、指頭圧痕が左から右の順に重なる。頸部は縦ハケ目。砂礫 : 石英・粗粒砂岩・泥質岩・珪岩。	胎色は淡い灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期末)
5	ST2, 埋土	土器	壺		(1.8)			広口型の口縁細片。外面に粘土帯を貼付して肥厚。貼付帯には、右傾の指頭圧痕が一列。砂礫 : 石英・長石・珪岩・チャート・粗粒砂岩・泥質岩。	砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期末)
6	ST2, 下部埋土	土器	不明		(3.0)			薄胎の上胴部細片。薄く貼付した素地帯に縦刻目を横列。刻目帯の縁辺に小浮紋を貼付。砂礫 (極多) : 石英・長石・珪長岩・粗粒砂岩・泥質岩。	胎色は淡い灰橙。胎内に微量の炭素が残留。砂礫中、砂岩と石英には円磨が見られない。(弥生・中期末)
7	ST2, 中位埋土	土器	壺		(2.8)			端部拡張の広口型口縁細片。口唇面に二条の洗線が巡る。口縁端下の内外面は横ナデ。器表の曳跡から、回転右旋の整形と見られる。砂礫 (少量) : 石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は灰橙。胎内には炭素が多残。泥質岩以外は、円磨の形跡が軽微。(弥生・中期末)
8	ST2, 下位埋土	土器	壺		(2.8)			上胴部細片。外面は斜位ハケ目を交叉した後、直線紋帯間に双線山形紋を配す。山形紋は、上方から下方、左から右の施順。胎内砂礫 : 石英・チャート・珪長岩・砂岩・泥質岩。	胎色は暗灰橙。外表を除き、炭素が残留。(弥生・前期末～中期初頭)
9	ST2, 中位埋土	土器	不明		(3.0)			胴部細片。外面には、斜位ハケ目を施した後、3線描きの直線区画紋間に双線重弧紋を配す。縦の区画紋に対し、横位の直線紋が先行。砂礫 : 石英・長石・細粒砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は灰橙。胎内残留炭素は不顕著。砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期初頭)
10	ST2, 下位埋土, 土器集中2 - No.2	土器	壺		(5.0)			上胴部細片。断面三角形の貼付凸帯を挟み、上位に双線山形紋、下位に7線描きの波状紋帯と直線紋帯を配す。これら櫛描紋に先行して、横斜のハケ目を施す。山形紋は、下方から上方、左から右の施順。砂礫 : 石英・長石・チャート・泥質砂岩・火山ガラス・磁鉄鉱。	胎色は灰。胎内に炭素が残留。(弥生・前期末～中期初頭)
11	ST2, 下位埋土	土器	不明		(4.1)			口唇に小さな刻目を連ねる直口状の口縁細片。縦ハケ目を施した後、直線文帯の上下に4歯の原体で波状紋帯を櫛描。波状紋の曳跡は、右から左。胎内砂礫 : 石英・長石・砂岩・泥質岩・風化殻・火山ガラス。	胎色は橙。胎内に火山ガラスの分布が顕著な他、泥質岩以外では円磨の形跡が見られない。(弥生・中期初頭)
12	ST2, 埋土	土器	壺		(1.6)			広口型の口縁細片。平坦な口唇面にヘラ先で縦刻目を一列。この口唇部から約1cm程下方に径2.5mmの円孔を貫通。砂礫 : 石英・珪長岩・チャート・粗粒砂岩・泥質岩。	胎内砂礫の円磨度は低い。(弥生・前期末～中期初頭)
13	ST2, 中位埋土	土器	壺		(1.3)			広口型の口縁細片。口唇面にヘラ刻を直交して格子紋とする。口縁端の手前には、径2mmの円孔を連ね、更に細凸帯を貼付して刻目を施す。砂礫 (少量) : 泥質岩・チャート・長石・玄武岩質熔岩・火山ガラス。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。熔岩片のほか、高円磨度のチャート粒を含む白質泥岩片見られ、メランジ相成分の混在と考えられる。(弥生・前期末～中期初頭)
14	ST2, 下位埋土, 土器集中2サイト	土器	壺		(3.6)			上胴部細片。断面三角形の突起を連ね、非平行な上下二条の間欠突帯とする。突起の貼付は下位が先行し、右から左の施順。砂礫 (極多量) : 石英・長石・砂岩・泥質岩。	胎色は暗灰。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は極低い。(弥生)
15	ST2, 中位埋土	土器	壺		(3.8)			上胴部細片。水平な3条の三角突帯に断面V字の深い刻目を施す。砂礫 (多) : 石英 (晶質・非晶質)・長石・結晶片岩・白雲母・珪長岩・チャート。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は極低い。砂泥岩に比べ、片岩や珪質岩片の含有が目立つ。(弥生)
16	ST2, 下位埋土, 土器集中2サイト	土器	不明		(3.6)			頸部細片。間隔の不揃いな多条直線紋帯の下位に偏平な粘土帯を貼付し、押圧によって列点紋を施す。調整・施紋は、縦ハケ目・偏平突帯・押圧列点紋・左から右への直線紋描きの順となる。砂礫 (少量) : 石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・風化殻。	胎色は灰白。胎内に少量の炭素が残留。砂礫の円磨度は極低い。(弥生・前期末～中期初頭)
17	ST2, 下位埋土	土器	不明		(2.3)			刻目貼付紋帯片。径1cm足らずの貼付紋を上下2段に繋ぐ。各貼付紋には、一律に横2条の刻目を施す。砂礫 : 砂岩・泥質岩・チャート・風化殻。	胎色は灰白。石英や泥質岩の一部を除き、砂礫は円磨を受けている。(弥生・中期初頭)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (2)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
18	ST2, 下位埋土, 土器集中2	土器	壺		(7.0)			上胴部片。断面三角形の有孔突帯下に波状紋を施し、その直下に縦位の櫛描4条直線紋帯で画した双線重弧紋を配す。施紋工程は、突帯貼付 円孔貫通・ハケ目 波状紋・直線区画紋 双線重弧紋の順。砂礫 (少量) : 石英・砂岩・泥質岩・チャート・風化殻・火山ガラス。	胎色は黄灰。胎内に炭素が残留。破片上端付近の外面に、一辺1.3mm正方面の微凹個所があり、凹底面には14×18本編の布目痕が観察される。胎内砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期初頭)
19	ST2	土器	壺		(4.9)			上胴部片。簾状紋を押し曳きした後、その直下に半径8mmの扇形紋を1列。いずれの施順も右から左向き。砂礫 (少量) : 石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・角閃石。	胎色は灰橙。外面を除き炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期中葉)
20	ST2, 埋土	土器	壺		(6.3)			頸部片。外面には、下方から順に5歯の櫛描簾状紋帯・多条波状紋帯・直線紋が見られる。施紋工程では、波状紋が直下の簾状紋に先行。簾状紋の曳跡は、左から右。砂礫 : 石英・長石・珪岩・粗粒砂岩・泥質岩。	砂礫の円磨度は、珪岩と泥質岩で高い反面、その他の粒子には形跡が見られない。(弥生・中期前半)
21	ST2, 中位埋土	石器	砥石	全長 5.70	全幅 4.45	全厚 3.80	重量(g) 153.9	灰白色のアルコース型砂岩製。断面四角の棒状を呈したと見られ、断口を除く全面に平滑な研磨痕が残る。	石材には空隙が多く、圧密度が低い。
22	ST2	石器	砥石	全長 12.80	全幅 4.80	全厚 1.80	重量(g) 227.7	灰色の泥質極細粒砂岩製。転石を転用。断面は偏平な台形を呈し、断口を除く全面に滑らかな研磨痕が残る。	石材には断面の長辺に平行な累帯構造が見られ、炭質物の濃淡による縞模様は明晰。
23	ST1, 埋土	土器	甕	14.4	(13.4)	20.2		下胴～口縁部。球胴から短い口縁を急外折する薄胎囊。口縁基部の粘接個所には、空隙が目立つ。外面には細かい胎ハケ目を施し、内面には指頭圧痕にヘラ削りを加える。胴部上端付近から口縁をヨコナデ。砂礫 : 石英結晶片岩・風化殻。	胎は粒界面に沿った裂開を多発しており、焼成時のガス放出量の大きさを物語る。結晶片岩片の最大粒子は、5×2mmを計る。風化殻は、粘土素材に伴う可能性が有り、含量は少ない。搬入の東阿波型土器。(古墳・初頭)
24	ST1, 埋土 b	土器	甕	14.3	(4.5)			薄胎囊の上胴～口縁部。口縁を「く」字形に外折。器表の風化が激しい。外面の一部には、約0.4mm間隔の微細なハケ目が残る。また、内外面の一部に、ヘラ削りの形跡が認められる。砂礫 : 石英結晶片岩・長石・角閃石。	結晶片岩片の最大粒子は、長さ6mmを計る。搬入の東阿波型土器。(古墳・初頭)
25	ST1, 埋積土 d	土器	甕	17.4	(5.5)			薄胎囊の上胴～口縁部。口縁を急外折して、その上端を小さく摘み上げる。上胴端から口縁にかけての内外面を回転ナデとし、胴部の外面には微細な縦斜のハケ目を留める。砂礫 : 石英・石英細粒砂岩・長石・角閃石・火山ガラス。	岩片粒子は径1mm以下の小粒が多く、ルーペ観察では、石英片の変成度を見極め難い。形態・手法の特長から、東阿波型に類した。(古墳・初頭)
26	ST1, 中央バンク, 埋土1	土器	甕		(4.5)			薄胎囊の上胴～口縁部。口縁を急外折して、その上端を小さく摘み上げる。全面の風化が著しく、胴部の内面に指頭サイズの圧痕が認められるのみ。砂礫 : 石英結晶片岩・アルコース型粗粒砂岩・長石・風化殻。	所含の結晶片岩は変成度が低いためか、石英粗粒砂岩状の集粒構造が見られる。胎内には、少量の炭素が残留。搬入の東阿波型土器。(古墳・初頭)
27	ST1, 埋土 b	土器	甕		(2.8)		(4.0)	薄胎囊の丸底片。外面の所々に平均間隔1mmのハケ目が残る。内面には指紋付の指頭圧痕が密在。砂礫 : 石英結晶片岩・石英細粒子の集合体・長石・白雲母・火山ガラス。また、粘土素材に由来すると見られる胎基中の石英微粒子は、約50μm以下の粒度で分布。	胎内に少量の炭素が残留。外底の中央付近に炭素が付着。岩片に交じって火山ガラスが多見され、器表では4片/20平方mm前後の検出頻度。搬入の東阿波型土器。(古墳・初頭)
28	ST1, 埋土	土器	甕	15.4	(3.5)			上胴～口縁部。短小な口縁を軽く外折。外面及び口縁内面を横ナデとするが、口縁基部以下の外面には、指頭圧痕が残る。砂礫 : アルコース砂岩・長石・石英・石英砂岩。	胎色は褐灰。胎内に炭素が残留。含砂から見ればアルコース砂岩相を反映しており、在地産の場合には調達地が相違に絞られる。(古墳・初頭)
29	ST1, 下位埋土	土器	甕	17.8	(10.0)	17.7		薄胎球胴甕の中胴～口縁部。口縁を緩やかに外反。全面風化するが、口縁外面にハケ目、胴部外面に平行叩目が僅かに残る。砂礫 (極多) : 石英・長石・砂岩・泥質岩・珪岩・角閃石。	胎色は黄桃。胎内砂礫の円磨度は低い。ヒビノキ 式土器の範疇 (古墳・初頭) と見られる。
30	ST1, 埋土, 土器No.1	土器	甕		(10.8)	14.3	3.2	丸底型球胴甕の底～胴部。胴部外面には縦ハケ目が見られ、外底付近に平行叩目、内底付近にはヘラ調整痕が残る。砂礫 : 石英・長石・泥質岩・チャート。	胴部外面には、二次被焼による横位のカーボン吸着帯が見られる。砂礫の円磨度は低い。ヒビノキ 式。(古墳・初頭)
31	ST1, 埋積土	土器	甕	21.8	(3.2)			緩い外反口縁であり、基部以下を欠損。内外面にハケ目が少残。砂礫 (極多) : 石英・長石・泥質細粒砂岩・火山ガラス (有色・無色)。	胎色は灰。胎内に炭素が少残。砂礫は径1mm以下の微粒子で占められ、円磨度は極低い。(古墳・初頭)
32	ST1, 埋積土, 土器No.4	土器	甕	16.4	(20.7)	21.2		外反口縁の球胴甕であり、底部を欠損。外面は口縁に至るまで平行叩目を留める。内面は、口縁を横位、胴部を斜位のハケ目調整とする。砂粒 (少量) : 石英・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色基調は灰橙。石英粒子以外は円磨度が高く、チャートの割合が多い。ヒビノキ 式。(弥生・後期後半)
33	ST1, 埋土, 土器No.3	土器	甕	14.6	(8.9)	15.6		球胴から口縁を「く」字形に外折。口縁の外面に叩き目、内面にハケ目を施す。胎内砂礫 (多) : 石英・珪長岩・チャート・角閃石。	胎色は黄橙。ヒビノキ 式。(弥生・後期後半)
34	ST1, NSバンク, 埋積土1	土器	甕	19.0	(4.0)			口縁片であり、ラッパ形に強く外反。外面に縦位ハケ目が残る。砂礫 : 石英・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄灰。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は高い。ヒビノキ 式。(弥生・後期後半)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (3)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
35	ST1, NSバンク, 埋積土2	土器	甕	18.4	(6.8)			伸びのある外反形の口縁片であり、ラッパ形に強く外反。風化が進行するが、外面には叩目の痕跡がかすかに残る。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。(弥生・後期)
36	ST1, 下位埋積土	土器	甕		(6.0)	4.0		底～下胴部。小平底を留め、内底面には指頭圧痕が残る。外底面には、所々に単葉植物の葉脈痕が見られる。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・珪岩・チャート・風化殻。	胎色は黄桃。胴部外面には炭素が強く吸着して黒く光沢する。砂礫は、円磨を受けた粒子が半ばを占める。
37	ST1, 埋積土, 土器No.1	土器	小型甕	10.0	8.5	8.7	5.5	背の低い平底甕形土器。外面は叩目に縦ハゲ目を重ね、内面は縦横ナデとする。砂礫：泥質岩・珪長岩・チャート・風化殻・石英微粒子。	屋様式胎色は灰白。砂礫の円磨度は低い。(弥生・後期後半)
38	ST1, 床面	土器	甕		(4.9)		6.5	平底部であり、外面は叩目に縦位のハゲ目を重ねる。砂礫(多)：石英・長石・砂岩・泥質岩。	胎色は黄灰。胎内に炭素が残留。砂礫は円磨を受けた粒子が多い。(弥生・後期)
39	ST1, 埋土, 土器No.3	土器	鉢	9.9	3.4		2.6	丸底型の小鉢であり、全面風化。砂礫(極少)：石英・チャート・風化殻。	胎色は橙色。砂礫の円磨度は高い。(古墳・初頭)
40	ST1, 埋土, 土器No.5	土器	鉢	11.4	6.2		3.6	小平底を留め、体部外面に叩目が残る。口縁は横ナデ。砂礫：石英・砂岩・泥質岩・チャート・風化殻。	胎色は黄橙。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度は高い。ヒビノキ式。(弥生・後期後半)
41	ST1, 埋土, 土器No.6	土器	鉢	12.0	5.7			丸底型であり、外面は既に風化。内面にはナデ跡が残る。砂礫：石英・珪長岩・砂岩・泥質岩・風化殻。	砂礫の円磨度は極低い。(弥生・後期末～古墳・初頭)
42	ST1, 埋土, 土器No.4	土器	鉢	10.2	6.1			丸底型であり、底部外面には押さえによる凹みが多。内面中央には押圧ナデの痕跡を留める。砂礫(多)：石英・珪長岩・チャート・風化殻・褐鉄鉱。	砂礫の円磨度は極低い。(弥生・後期末)
43	ST1, 埋土	土器	鉢	12.3	5.6			丸底型であり、外面は既に風化。内面の一部に指頭圧痕とヘラ調整痕が残る。砂礫(多)：石英・砂岩・泥質岩・チャート。	胎内には炭素が少残。砂礫の円磨度は高い。(弥生・後期末)
44	ST1, 埋土	土器	鉢	17.5	6.6		3.6	小平底を留め、体部の湾曲が緩い。口縁端を小さく外に揃む。体部外面の一部に、叩目とハゲ目が残る。胎内砂礫(極少)：石英・泥質岩・チャート。	胎色は橙。胎内には未分解炭素が残留。砂礫の円磨度は高い。ヒビノキ式。(弥生・後期後半)
45	ST1, NSバンク, 埋土2	土器	鉢或いは蓋		(4.6)		5.7	小径の平底から体部を低角度で直線的に伸ばす。叩目に縦ハゲ目を重ねる。内面は横位優勢のナデ調整。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス(有色・無色)。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の一部は円磨を受ける。(弥生・後期)
46	ST1, 埋土, 土器No.7	土器	鉢	10.8	2.8		5.4	皿形の鉢。内外面に指頭圧痕が残る。砂礫：石英・砂岩・チャート。	胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は極高い。(古墳・初頭)
47	ST1, 埋土b	土器	ミニチュア		(2.5)		2.0	甕形と見られる超小型器。上部を欠損。成形・調整痕と七に見極め難い。砂礫：石英・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄白。胎内には炭素が多残。砂礫の円磨度は極高い。(弥生・後期)
48	ST1, 埋土a	土器	壺	19.8	(3.4)			広口形の有孔口縁。外面は、2条の平行沈線間に双錐形の小さな刻目を1列する。砂礫：石英・珪長岩・泥質岩・チャート。	胎色は明褐。胎内に炭素が残留。器面に繊維の跡あり。(弥生・中期初頭)
49	ST1, 埋土a	土器	壺	16.6	(2.0)			広口形の外貼帯肥厚口縁。口唇面を回転ナデで窪ませた後、その中央に浅い沈線を一周。口唇下端に左傾の小刻目を1列。口縁端下の肥厚面には、右傾の指頭圧痕が並ぶ。頸部を縦ハゲ目とする。内面は横ナデ。砂礫(極少)：石英・チャート。	胎色は黄灰。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は高い。(弥生・中期末)
50	ST1, NSバンク, 埋土1	土器	壺	16.6	(3.4)			広口形の外貼帯肥厚口縁。口唇面を強く横ナデして窪ませた後、その下端に断面V字の深い刻目を1列。頸部には縦ハゲ目、口縁内面には横ナデを施す。砂礫：石英・長石・チャート・泥質岩。	胎色は明褐。砂礫の円磨度は極高い。川砂由来と見られる円磨粒子は、1mm前後のサイズに揃う。(弥生・中期初頭)
51	ST1, 埋土b	土器	壺	12.5	(3.0)			広口形の口縁であり、外端に断面三角形の凸帯を貼付して、その稜に断面V字形の刻目を1列。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩。	胎色は灰白。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は極低い。(弥生)
52	ST1, 埋土, 土器No.1	土器	不明		(3.0)			口縁細片。器種及び傾斜の度合いが不明。口縁外端に偏平な素地帯を貼付し、これに楕円形の列点を上下二段に刻む。列点紋帯の直下には、無軸の木葉紋を浅くヘラ描する。砂礫：石英粗粒子の集合体・泥質岩・風化殻・チャート。	胎色は黄灰。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。(弥生・前期初頭)
53	ST1, NSバンク, 埋土1	土器	壺		(2.1)			広口形の口縁細片。口唇面の中央を強く横ナデして窪ませ、内外両端に各々断面V字形の刻目を1列。内面には方形格子の刻目を押し刻。砂礫：石英・チャート・泥質岩。	胎色は褐。胎内の一部に炭素が残留。砂礫のうち、チャート粒子のみ円磨度が高い。(弥生・前期末～中期初頭)
54	ST1, 埋土b	土器	壺		(3.0)			外貼帯肥厚口縁の破片。浅い沈線で中央を画した口唇面に、断面V字の細い刻目を押し刻。外面肥厚部には、左傾の指頭圧痕が1列。砂礫：石英・珪長岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄褐。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は極高い。(弥生・中期末)
55	ST1, 埋土b	土器	壺		(2.4)			外貼帯肥厚口縁の破片。口唇面の内端寄りを強く横ナデして窪ませ、外端に断面V字形の深い刻目を1列。口唇端下の肥厚面を横ナデとする。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は灰褐。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は極高い。(弥生・中期初頭)
56	ST1, 埋土b	土器	壺		(3.2)			刻目貼付紋帯。径1.3cm前後の貼付紋を上下2段に繋ぐ。各貼付紋の中には、横位2条の窪みを設ける。胎内砂礫：石英・砂岩・泥質岩・風化殻・チャート。	胎色は黄灰。砂礫の円磨度は高い。(弥生・中期初頭)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (4)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
57	ST1, NSバンク, 埋積土2	土器	不明		(3.6)			胴部細片。5歯原体の櫛描波状紋帯と、更に微細な波状紋帯を施す。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・風化殻・角閃石。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は、チャートの一部を除き極低い。(弥生・中期初頭～中葉)
58	ST1, 埋土b	土器	壺		(2.0)			薄胎型の肩部。断面三角形の小突帯2条が水平に並走し、上位の凸帯に接して円形小浮紋を配す。砂礫：石英・長石。	胎色は黄灰。胎内に炭素が残留。所含の石英・長石は、可塑原料土に含まれた可能性もある。(弥生・中期末)
59	ST1, 埋土, 土器No.3	土器	高杯	20.8	(11.1)			杯部を有段とし、口縁を直伸。脚部には、杯を支える柱状部と接地面手前の開脚部の間に4つの円孔を設ける。外面は杯底以下をへら調整とするが、仕上げのハケ目は内面を含む全面に及び。砂礫：石英・砂岩・チャート。	胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は高い。ヒビノキ式。(弥生・後期後半)
60	ST1, 埋土, 土器No.4	土器	高杯	18.4	(5.0)			脚部を欠損。杯底際を有段とし、口縁を直伸。外面は段部にハケ目、口縁に叩目が残る。内面は既に風化。砂礫(少)：石英・砂岩・泥質岩・チャート。	胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は極高い。ヒビノキ式(弥生・後期後半)
61	ST1, SK2埋土	土器	高杯		(7.7)			口縁端を欠損。杯部は碗形とし、基部寄りの開脚部に6つの円孔を貫通する。脚内面の基部付近を除く全面にハケ目を施す。砂礫：石英・泥質岩・チャート。	胎色は黄白。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は高め。(弥生・後期末～古墳・初頭)
62	ST1, 下位埋土	土器	器台		(3.2)			脚高わずか2.8cmの小型器台であり、受け部を欠損。脚部の中位に4つの円孔を貫通。内外面を縦ハケ目で調整し、外面には磨きを加える。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩。	胎色は橙。胎内に微量の炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(古墳・初頭)
63	ST1, 埋土a	石器	剥片	全長 2.30	全幅 1.25	全厚 0.25	重量(g) 0.6	小型の剥片。石材は黒灰色の玻璃質安山岩と見られる。	貝殻状の裂痕が明瞭。表面は軽度で白化。
64	ST1, 東壁面, 埋土	石器	敲石	全長 11.65	全幅 9.30	全厚 3.00	重量(g) 485.3	暗灰色の泥質極細粒砂岩から成る偏平な転石。敲打痕は片理の方向と一致する側縁に集中するが、片方の偏平面中央にも若干の使用痕が認められる。	転礫の石材は圧密度が高く、硬質。(弥生)
65	SX1, 埋土	土器	甕	16.5	(10.4)	16.0		甕の中胴～口縁部。上胴端は僅かにくびれ、外傾度の弱い外肥口縁を付ける。外面は縦ハケ目を施した後、口縁付近を横ナデ。口縁基部の内面には、指頭圧痕が横列。砂礫：石英・長石・泥質岩・珪長岩・角閃石・磁鉄鉱・火山ガラス。	内面寄りの胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度はやや高め。(弥生・中期末～後期前半)
66	SX1, 埋土, 土器No.1	土器	甕		(12.8)		6.1	上頂の下部と見られるが、整合する断口を欠く。平底型であり、外面には縦ハケ目、内面には縦のナデ調整を施す。	内面寄りの胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度はやや高め。(弥生・中期末～後期前半)
67	SX2 - P41, 埋土	土器	甕		(13.0)	13.6		胴部片であり、縦長の倒卵形を呈する。口縁の立ち上げは、「く」字形とする。叩目は口縁に及び、調整の仕上げは全面ハケ目とする。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・角閃石。	特にチャート粒子の割合が多く、円磨度の高い粒子が目につく。ヒビノキ式。(弥生・後期末)
68	SX2, 埋土, 土器No.2	土器	鉢	12.6	5.5			左巻上げ成形の丸底型。外面は叩目に縦位のハケ目を重ね、内面には指頭圧痕とへら調整痕が認められる。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・風化殻・火山ガラス。	胎色は黄橙。砂礫の円磨度は低い。ヒビノキ式。(弥生・後期末)
69	SX2, 埋土, 土器No.3	土器	鉢	12.4	6.2			右巻上げ成形の丸底型。外底には粗い叩目が残る。体部外面には巻き上げ方向沿いにハケ目を施す。砂礫(多)：石英・長石・砂岩・泥質岩・珪長岩・チャート。	胎色は黄橙。砂礫の円磨度は低い。外底中央に煤が付着。ヒビノキ式。(古墳・初頭)
70	SX2, 埋土2	土器	高杯		(4.4)			杯基部。全面風化。接合部では、脚側が丸い凸面をなす。杯部の外底中央に円柱状工具の凹痕が残る。砂礫(極少)：石英・泥質細粒砂岩。	胎色は明橙。砂礫の円磨度は低い。(古墳・初頭)
71	SX3	石器	磨製石斧	全長 9.90	全幅 4.10	全厚 4.10	重量(g) 200.9	大型蛤刃石斧の刃部～右側縁。御荷鉾変成帯の玄武岩質緑色岩製。	断口を除く全面に研磨が加わり、特に刃面が滑らか。(弥生)
72	SX9	土器	壺		(11.5)			下胴～平底部。内外面には、左巻上げ成形時の段差が明瞭に残り、これに沿って指頭圧痕が並ぶ。胴部外面は縦位の粗いナデ調整とし、外底面は平滑。内面は、素地紐の粘接箇所に沿って、指頭痕にナデ調整が重なる。砂礫：石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は橙。砂礫の円磨度は低め。(弥生・前期末～中期初頭頃)
73	SK5, 埋土	土器	甕	22.7	(4.5)			緩弯外反形の薄胎口縁片。外端に断面V字の刻目を一列し、その直下には、断面三角の微隆起線紋を縦に並列する。砂礫(極多)：石英・長石・珪長岩・砂岩。	胎色は黄灰。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期)
74	SK5, 埋土	土器	甕	23.2	(3.8)			緩弯外反形の薄胎口縁片。外端に断面V字の刻目を一列する。その直下には、幅9mmの薄い素地帯を右下がりに貼付して、これに緩弧形の刻目を施す。砂礫(極多)：石英・長石・珪長岩・砂岩。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。上頂の口縁片(73)と同一固体に属す可能性がある。(弥生・中期)
75	SK5, 埋土	土器	壺	21.2	(7.0)			直頸・広口型。口縁を外貼帯で肥厚し、その上位に一条刻目凸帯を配す。口唇面にも刻目を一列。口縁内面に、逆三角形の刺突列点を4列施す。頸部外面は、縦ハケ目を下地として、直線文帯の上下に波状紋を櫛描。砂礫：石英・長石・珪長岩・泥砂岩・チャート・火山ガラス。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期初頭)
76	SK5, 埋土	土器	不明		(2.6)		7.0	薄胎型の平底部。器表は既に風化。摩擦が反復したと見られる外底のみ平滑。砂礫(極多)：石英・長石・泥質岩・石英砂岩。	胎色は灰褐。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は、低め。(弥生・中期末)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (5)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
77	SB1, 埋土	須恵器	杯身		(1.7)			口縁片。外面に回転ナデ, 内面に横ナデの調整痕が残る。砂礫 (少) : 石英<0.3mm。	胎色は灰色。焼成 : 中火度・酸化 還元。(古代)
78	SB1, 埋土	須恵器	杯身		(1.7)			口縁片。外傾度が強く, 立ち上がりは肉太で短い。砂礫 (少) : 石英<0.2mm。	胎色は灰白。焼成 : 低火度・還元。(7世紀中葉頃)
79	SB1, 覆土	須恵器	杯身		(1.2)		(6.2)	輪高台付底部。底壁は高台の外に張り出す。全面磨耗。砂礫 (少) : 石英<0.4mm。	胎色は黄白。焼成 : 低火度。(古代, 8世紀頃)
80	SB1 - P9, 覆土	須恵器	杯身		(1.1)		(6.0)	輪高台付底部。内底には縦横のナデ調整を交叉。外底は回転ヘラ切りとし, 轆轤右旋のナデ調整を加える。砂礫 (極多) : 石英<1.5mm。	胎色は灰。焼成 : 中火度・還元。(古代)
81	SB1 - P9, 覆土	須恵器	壺		(12.9)			下胴部。高台際の張り出しは短く, 胴壁の立ち上がりは斜直。内外面を轆轤右旋の回転ナデとする。砂礫 : 石英<0.4mm・石英粒集合体<1.7mm・長石<0.5mm。	胎色は灰白。焼成 : 中火度・還元 炭化冷却。(古代)
82	SB1 - P2, 埋土1	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目, 内面は同心円紋。砂礫 : 石英<0.3mm。	胎色は灰。焼成 : 低火度・還元。(古代?)
83	SB1 - P2, 埋土1	須恵器	壺		(4.1)			下胴部。窯内での他の器体と高温焙着。外面調整は全て轆轤右旋(器倒置)の回転ヘラ削りとする。砂礫 : 石英<1.0mm。	胎色は灰。自然釉中に斜長石の針晶を多発。焼成 : 高火度・強還元 炭化冷却。(古代?)
84	SB1 - P9, 覆土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目。内面は同心円紋を横にナデ消す。砂礫 : 石英<0.7mm・珪長岩2.5mm。	胎色は黄灰。焼成 : 中火度・酸化 還元冷却。(古墳 - 古代)
85	SB1 - P3, 埋土, 遺物No.1	須恵器	壺		(3.6)			肩部細片。外面は轆轤右旋のヘラ削りとし, 幅1mmの細沈線が1条見られる。砂礫 : 石英<2.0mm。	胎色は灰。焼成 : 低火度・酸化 還元。(古代?)
86	SB1 - P3, 埋土	須恵器	高杯		(4.6)			脚部細片。外面は轆轤使用のカキ目, 内面は横ナデとする。砂礫 : 石英<0.2mm。	胎色は灰褐。焼成 : 低火度・還元 酸化 還元。(古墳)
87	SB1 - P6, 覆土	須恵器	蓋		(0.9)			細片。全面風化。砂礫 : 石英<1.0mm・長石<0.1mm。	胎色は灰白。焼成 : 低火度・還元。(古代?)
88	SB1 - P6, 覆土	須恵器	不明					細片。全面風化。砂礫 : 石英<0.4mm・珪長岩<2.0mm。	胎色は灰白。焼成 : 低火度・還元。(古代?)
89	SB1 - P9, 覆土	須恵器	壺		(1.7)			肩部細片。外面調整は不明瞭。内面には回転ナデが認められる。砂礫 : 石英<0.4mm・長石<0.4mm・赤色チャート<0.2mm。	胎色は灰。焼成 : 中火度・還元。(古代?)
90	SB1 - P13, 柱痕	須恵器	不明					細片。外面はヘラ削り, 内面は回転ナデ。砂礫 : 石英<0.3mm。	胎色は黄白。焼成 : 低火度・弱酸化。(古代?)
91	SB1 - P10, 柱痕上位, 遺物No.1	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目, 内面は同心円紋。砂礫 : 石英<0.5mm・珪長岩<0.6mm・赤色粒子<0.2mm。	胎色は灰。焼成 : 還元。(古代?)
92	SB1 - P9, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目を交叉し, 一部にカキ目も見え。内面は同心円紋。砂礫 : 石英<0.3mm・珪長質粒子<0.3mm・明褐色粒子<0.3mm。	胎色は灰白。焼成 : 弱酸化 還元。(古墳)
93	SB1 - P10, 覆土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目を交叉。内面は同心円紋。砂礫 : 石英<1.5mm・長石<2.0mm。	胎色は灰。焼成 : 中火度・還元。胎内に炭素が残留。(古代?)
94	SB1 - P11, 上位埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目を交叉。内面は同心円紋。砂礫 (極多) : 石英<0.3mm。	胎色は灰。焼成 : 中火度・還元。胎内には, 石英以外に有色鉱物を多含。(古代?)
95	SB1 - P11, 柱痕, 遺物No.1	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目とし, 一部に横ナデを加える。内面は同心円紋を横にナデ消す。砂礫 : 石英<1.0mm。	胎色は灰。焼成 : 中火度・強還元。胎内には, 高純度の粘土塊(8×4mm)が挟まる。(古墳 - 古代)
96	SB1 - P11, 上位埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は刻目付平行叩目。内面は同心円紋。砂礫 : 石英集合体<3.0mm・他形石英<2.0mm。	胎色は赤灰。焼成 : 中火度・還元 急冷。(古代?)
97	SB1 - P14, 覆土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目を交叉。内面は同心円紋を磨り消す。砂礫 : 石英<0.4mm・長石<0.4mm。	胎色は灰白。焼成 : 低火度・還元。(古墳 - 古代)
98	SB1 - P14, 覆土	須恵器	甕		(2.3)			肩部細片。外面の下位にはヘラ削りを施し, 内面は粗い回転ナデとする。砂礫 (極多) : 石英粒子の集合体<2.0mm・灰色チャート<2.0mm。	胎色は灰白。焼成 : 低火度・酸化 還元。胎内に炭素が残留。胎内のチャートは, 円 - 亜円粒。(古代?)
99	SB1 - P12, 柱痕	須恵器	甕					胴部細片。内面は同心円紋, 外面は平行叩目。砂礫 (極多) : 石英<1.0mm・珪長岩<1.0mm・黒雲母<0.2mm・橙色粒子の集合体<0.5mm。	胎色は灰。焼成 : 中火度・弱酸化 強還元。(古代?)
100	SB1 - P13, 上位埋土	土器	壺		(4.4)			肩 - 頸基部。外面は, 頸基部に沿って多条直線紋を櫛描し, 内部に狭幅の偏平な列点紋帯を貼付する。無紋の肩は, 縦に磨く。頸基部以下の内面には, 指頭押さえの圧痕が縦3列に並ぶ。砂礫 : 石英・水晶・砂岩・泥質岩・風化殻・チャート。	胎色は橙灰。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は高い。櫛描直線紋の曳跡から見て, 回転台の旋向は右。(弥生・中期初頭)
101	SB1 - P13, 埋土2, 柱痕付近	土器	壺		(6.4)			広口壺の頸部。外面では, まず5条の偏平な列点紋帯を櫛描し, 次いで各列点紋帯の間に櫛描3条直線紋帯を配す。内面は横位の八ヶ目調整とする。砂礫 : 石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・風化殻・チャート。	胎色は褐灰。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は高い。櫛描直線紋の曳跡から, 回転台を用いる場合の旋向は右。(弥生・中期初頭)
102	SB1 - P13, 柱痕	土器	壺		(4.0)			広口壺の肩部。外面では, 偏平な列点紋帯5条の貼付施飾が先行し, それらの間隙に3条直線紋帯を櫛描する。次いで双線山形紋・右降八ヶ目の施順とする。内面には指頭痕が縦列。砂礫 : 石英・珪長岩・砂岩・泥質岩・風化殻・緑色チャート・磁鉄鉱。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。櫛描直線紋帯の曳跡から, 所用の回転台は右旋となる。(弥生・中期初頭)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (6)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
103	SB1 - P11, 柱痕	土器	壺		(6.5)			広口壺の頸部。外面では、まず縦位の八ケ目を施す。次いで4条直線紋帯を配した後、偏平な列点紋帯を貼付施飾。この施順は、上項(102)の例とは逆。内面では、横ナデに横位の八ケ目を重ねる。砂礫：石英・長石・珪長石・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は橙。砂礫の円磨度はやや高め。右巻き上げ成形の可能性が高い。直線紋帯の各沈線間に平行関係が希薄なため、ヘラ描の可能性も考え得る。(弥生・中期初頭)
104	SB1 - P14, 埋土1	土器	壺		(4.3)			肩部細片。縦八ケ目を下地とする。断面偏V字形のヘラ描一条直線文の直上に、幅7mmの列点紋帯を貼付施飾。内面は、横位と縦位の八ケ目を交錯。砂礫：石英・砂岩・泥質岩・風化殻・チャート。	胎色は暗灰褐色。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度はやや高め。(弥生・前期末～中期初頭頃)
105	SB1 - P14, 埋土1	土器	壺		(0.8)			広口型有孔口縁の細片。内端に細小な刻目凸帯を貼付施飾。この小凸帯には、鉄分の少ない優白粘土を用いる。外面は、横位の八ケ目調整。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・珪岩・ガラス。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は極低い。(弥生・中期初頭頃)
106	SB1 - P14, 埋土	土器	壺		(3.0)			肩部細片。外面には、断面三角形の有孔凸帯を挟んで、下位に細直線紋帯、上位に波状紋帯・細直線紋帯をそれぞれ櫛描。内面には、指頭の庄痕とナデ痕が明瞭。砂粒：石英・長石・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。火山ガラスの検出頻度が高い。(弥生・中期初頭頃)
107	SB1 - P14, 埋土	土器	不明		(3.5)			上胴部細片。外面は、横八ケ目を下地とし、断面三角形の刻目凸帯を貼付施飾。その上位に粗粒な波状紋を櫛描する。内面には、指頭庄痕を残す。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は高め。(弥生・中期)
108	SB1 - P14, 埋土5～6	土器	不明		(5.0)			胴部細片。外面は、横八ケ目に縦八ケ目を重ねた後、直線紋帯を櫛描する。内面は風化。砂礫：石英・水晶・砂岩・泥質岩・チャート・角閃石・火山ガラス。	胎色は灰褐。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度はやや低め。櫛描直線紋の曳跡から、回転右旋の施条と見られる。(弥生・中期)
109	SB1 - P14, 埋土1	土器	不明		(5.2)			胴部細片。双線重弧紋が上下に向かい合う。実測図で上位とした重弧紋の弧端は1条の直線文と接し、下位とした方の弧端は刻目列点帯と接する。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・角閃石。	胎色は黄橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は高め。(弥生・中期初頭頃)
110	SB1 - P11, 埋土1	土器	不明		(2.5)			胴部細片。双線重弧紋の弧頂が櫛描直線文と接する。重弧紋の下方は、八ケ目とする。砂礫：石英・水晶・長石・泥質岩・チャート。	胎色は灰橙。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期初頭)
111	SB1 - P3, 柱根付近, 埋土2	土器	不明		(5.2)			胴部細片。櫛描した多条直線文帯の上下に、双線山形紋を配す。直線文の曳跡は、回転右旋を示し、山形紋の施順は左から右。砂礫：石英・砂岩・泥質岩・風化殻・チャート。	胎色は橙灰。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は、やや高め。(弥生・中期初頭)
112	SB1 - P12, 柱痕	土器	不明		(5.4)			胴部細片。双線山形紋に接して3条直線紋帯を櫛描する。直線紋の曳跡は、回転右旋を示す。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・風化殻・チャート・角閃石・白雲母。	胎色は黄灰。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度は高い。(弥生・中期初頭)
113	SB1 - P13, 埋土1	土器	不明		(3.4)			胴部細片。櫛描した直線紋帯の上位に、双線山形紋を左から右に連ねた後、縦の双線で区画する。砂礫：石英・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は高い。(弥生・中期初頭)
114	SB1 - P13, 埋土	土器	甗		(2.7)			上胴部細片。ヘラ描した沈線文帯直下に刺突列点紋を配す。砂礫：石英・砂岩・泥質岩・緑色片岩・チャート。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は高め。(弥生・前期末)
115	SB1 - P14, 埋土1	土器	壺		(6.6)			広口壺の頸部細片と見られる。外面は頸基部に刺突列点付凸帯を貼付施飾し、直上に3条直線紋帯を配す。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は極低い。器面の風化が激しい。(弥生・中期)
116	SB1 - P14, 埋土1	土器	壺		(3.8)			壺肩部細片。外面には、管状本体による径3mmの刺突紋を横2列に並列。内面には、指頭庄痕が密に残る。砂礫：石英・砂岩・チャート。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は極高い。(弥生・中期頃)
117	SB1 - P8 ; SB1 - P11, P8下位埋土 ; P11埋土	土器	不明		(6.8)			胴部細片。外面は、横・斜・縦の八ケ目を重ねて調整した後、櫛描波状紋を施す。内面は、大部分が風化剥落。砂礫：石英・水晶・長石・砂岩・泥質岩・緑色岩・チャート。	胎色は黄橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は高め。優白質の粘土を可塑材とする。(弥生・中期前～中葉)
118	SB1 - P4, 埋土	土器	不明		(4.2)			胴部細片。外面は、波状紋帯と起伏を帯びる直線紋帯を櫛描する。砂礫：石英・砂岩・泥質岩・チャート・ガラス。	胎色は黄橙。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度は高い。(弥生・中期前～中葉)
119	SB1 - P2, 埋土1	土器	不明		(2.0)			胴部細片。外面は、横・斜の八ケ目調整を施し、直線文・刺突列点紋・3線の櫛描波状紋を配す。砂礫：石英・砂岩・泥質岩・チャート・ガラス。	胎色は黄褐。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期)
120	SB1 - P5, 柱痕	土器	不明		(2.7)			上胴部細片。外面は、縦位の八ケ目を下地とし、円形浮紋に管状の刺突を施す。内面には、指頭庄痕が残る。砂礫：石英・砂岩・風化殻・チャート。	胎色は灰橙。砂礫の円磨度は高い。(弥生・中期?)
121	SB1 - P2, 埋土	土器	壺		(4.5)			上胴部細片。外面は、断面三角形の貼付凸帯の直上・直下に細かい波状紋帯を櫛描。内面には指頭庄痕が残る。砂礫：石英・長石・砂岩・珪岩・風化殻。	胎色は褐。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。凸帯のナデ調整と波状紋の施向は右。(弥生・中期前～中葉)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (7)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
122	SB1 - P6, 覆土	土器	壺		(4.2)			上胴部細片。全面風化。外面には、断面三角形の貼付凸帯を施す。凸帯位置の内面には、指頭圧痕が横列。砂礫：石英・長石・チャート。	胎色は黄灰。胎内に炭素が少残。砂礫に円磨の形跡を見ない。(弥生・中期)
123	SB1 - P1, 埋土	土器	壺		(4.7)			上胴部細片。全面風化。外面は、右降のハケ目を下地とし、断面三角形の凸帯を貼付して、穿孔を施す。縦位の沈線帯には、明らかな穿孔時の疵も含まれ、装飾意図の有無は不明。砂礫：石英・珪岩・砂岩・泥質岩・風化殻・チャート。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は高め。(弥生・中期前半頃)
124	SB1 - P3, 埋土	土器	壺		(5.5)			頸部細片。外面には、断面三角形の凸帯を右方向に継ぎ足し、回帰点の段違いを凸帯の屈折で補う(装飾意図と見られる)。調整は、横ナデと縦ハケ目。砂礫：石英・長石・泥質岩・風化殻・チャート。	胎色は黄灰。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度は極めて低い。(弥生・中期中葉頃)
125	SB1 - P12, 埋土1	土器	不明		(4.5)			胴部細片。外面には、摘み出しによる横位の微隆起線紋を並列。内面では、微隆起線紋の裏側に指頭圧痕が集中。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・ガラス。	胎色は灰橙。砂礫の円磨度は低め。外面に二次付着と見られる煤が付く。(弥生・中期)
126	SB1 - P7, 覆土	土器	不明		(4.7)			胴部細片。上記と同じ微隆起線紋が一条見られる。肉薄の粘土紐を器面に押し付け、指先で中央に摘み上げる手法と考えられる。下地の調整は横ナデ。砂礫：石英・石英粒子の集合体・泥質岩・ガラス。	胎色は黄灰。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。外面に二次付着と見られる煤が付く。(弥生・中期)
127	SB1 - P14, 埋土	土器	不明		(4.6)			薄胎の体部細片。外面は、縦横の微隆起線を施し、横位の微隆起線には小さな鈎状の装飾を付ける。砂礫(極多)：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・白雲母。	胎色は黄灰。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期末)
128	SB1 - P3, 覆土	土器	不明		(3.2)			薄胎の体部細片。外面には、断面三角形の細突帯紋を横に並列。砂礫(極多)：石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度はやや低め。(弥生・中期)
129	SB1 - P11, 柱痕	土器	甕		(3.7)			薄胎の上胴部細片。外面には、断面三角形の薄い貼り継ぎ突帯紋を横に並列。砂礫(極多)：石英・長石・砂岩・泥質岩。	胎色は暗灰。胎内には炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。(弥生・前期末～中期)
130	SB1 - P4, 埋土	土器	不明		(1.8)			薄胎の体部細片。外面には、爪形に湾曲する小刻目を横列に連ねる。砂礫(極多)：石英・珪長岩・泥質岩。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は高い。(弥生・中期末)
131	SB1 - P4, 埋土	土器	壺		(1.0)			薄胎広口壺の口縁片。口縁下端に突帯を貼付し、これに6mm間隔で縦位の刻目を1列。砂礫(極多)：砂岩・泥質岩。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期末)
132	SB1 - P5, 埋土	土器	不明		(3.4)		10.6	大径の平底部。全面風化。砂礫(多)：石英・長石・砂岩・泥質岩・風化殻・珪長岩。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度はやや高い。(弥生)
133	SB1 - P13, 上位埋土	土器	不明		(7.6)		9.0	中径の平底～下胴部片。外面には粗略なハケ目、内面には磨きを施す。砂礫(少)：石英・長石・風化殻・チャート・雲母。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。(弥生)
134	SB1 - P1, 埋土	土器	不明		(5.0)		7.0	中径の平底～下胴部。外面には縦位の粗略な磨きを施し、内面には押さえの痕跡を残す。砂礫(多)：石英・長石・泥質岩・風化殻・チャート・火山ガラス。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生)
135	SB1 - P3, 埋土	土器	壺		(1.4)		8.0	中径の平底縁片。台形の断面を呈す。全面風化。砂礫：石英・石英の集合体・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は極高い。(弥生)
136	SB1 - P12, 柱痕	土器	不明		(3.5)		5.4	薄胎の平底(中径)～下胴部。器壁が均等に薄い。全面風化。砂礫(多)：石英・長石・砂岩・泥質岩。	胎色は灰。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期末頃)
137	SB1 - P12, 埋土	土器	不明		(3.1)		6.4	中径の分厚い平底部。外面はヘラ削りに横ナデを加える。植物繊維の圧痕あり。砂礫：石英・砂岩・泥質岩・角閃石。	胎色は灰褐。砂礫の円磨度は低い。(弥生)
138	SB1 - P11, 上位埋土	土器	不明		(2.6)		7.8	中径の平底部。底壁に対して胴部の立ち上げが分厚い。外面は縦位のハケ目。内面は指頭ナデ。砂礫(多)：石英・長石・砂岩・珪長岩・チャート。	胎色は灰褐。砂礫の円磨度は低い。(弥生)
139	SB1 - P14, 下位埋土	土器	不明		(5.8)		7.0	中径の分厚い平底をともなう下胴部。外面は胴部から底部にかけてハケ目調整。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・風化殻・チャート。	胎色は灰橙。砂礫の円磨度はやや高め。(弥生)
140	SB1 - P1, 埋土4	土器	壺	13.6	(3.3)			直筒型の頸部から、外肥気味の口縁を反る。全面風化。砂礫：石英・砂岩・チャート。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。チャートのみ円磨度が高い。(弥生)
141	SB1 - P14, 埋土5～6	土器	壺	22.0	(5.3)			分厚い広口型の頸口部。朝顔形に弧開して口唇を平坦とする。内面に斜位のハケ目が残るほかは風化。砂礫：石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・珪岩・チャート。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫はチャート・珪岩等の硬質岩片が優位で、しかも円磨度が極めて高い。(弥生・後期?)
142	SB1 - P7, 埋土	土器	壺	20.8	(4.7)			広口型の頸口部。口縁端に向けて器壁が漸厚。平坦な口唇を若干下垂して、口唇面に縦位の刻目をヘラで押刻。砂礫：石英・長石・泥質岩・チャート。	胎色は橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は極高い。(弥生・後期後葉?)
143	SB1 - P14, 埋土1	土器	壺	15.3	(5.0)			広口型の頸口部。朝顔形に弧開して口縁外端を貼付肥厚帯とする。全面風化。砂礫：石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・風化殻・珪質片岩・チャート・角閃石。	胎色は橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は極低い。(弥生・中期中葉)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (8)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
144	SB1 - P4, 埋土	土器	壺	15.5	(2.3)			外反形の外貼肥厚帯口縁部。全面風化。砂礫(少量) : 石英・長石・火山ガラス。	胎色は橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は極低い。(弥生・中期末)
145	SB1 - P2, 埋土1	土器	壺	18.8	(2.6)			やや薄手の外貼肥厚帯口縁部。全面風化。砂礫 : 石英・長石・チャート。	胎色は橙。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度は高め。石英・チャートが大勢を占める。(弥生・中期末)
146	SB1 - P2, 埋土2	土器	壺	32.0	(2.8)			径の大きい広口型外貼肥厚帯口縁片。口唇面にへら先で微右傾の縦刻目を1列。砂礫 : 石英・長石・砂岩・チャート。	胎色は黄橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は極高い。(弥生・中期末)
147	SB1 - P2, 覆土	土器	壺	12.0	(6.5)			小径の頸口部。筒状の頸部から口縁を外反し、端部を若干拡張。口唇面に2状沈線を並走。外面は横ナデに縦ハケ目を施し、内面の一部にもハケ目が見える。砂礫 : 石英・高温型 相石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は黄橙。砂礫の円磨度は低い。火山ガラスを含む点から、相石英もテフラ由来の可能性を帯びる。(弥生・中期中葉頃)
148	SB1 - P14, 埋土5~6	土器	甗		(4.0)			穿孔の丸底部。同心円形に配する穿孔の中軸線で破断しており、当初の孔数は約7孔と見られる。外面を叩目・内面を粗いハケ目調整とする。砂礫 : 石英・水晶・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫はチャート・珪岩等の硬質岩片が優位で、しかも円磨度が極めて高い。(弥生・後期末~古墳・初頭)
149	SB1 - P2, 埋土1	土器	甗	17.0	(8.6)			甗の上胴~口縁部であり、「く」字形を呈す。外面に縦ハケ目、内面に横ハケ目を施す。口縁の内外面に横ナデを加える。砂礫 : 石英・長石・砂岩・チャート。	胎色は橙。胎内に炭素が少残。チャートのみ円磨度が高め。(弥生)
150	SB1 - P13, 上位埋土	土器	甗	14.4	(5.5)			甗の上胴~口縁部であり、「く」字形を呈す。外面は横ナデに縦ハケ目を加える。内面には、指ナデ痕が残る。口縁の内外面に横ナデを加える。砂礫 : 石英・泥質岩・チャート。	胎色は黄灰。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は極高い。(弥生)
151	SB1 - P14, 埋土1	土器	甗	14.0	(4.1)			甗の上胴~口縁部であり、「く」字形を呈す。口縁は薄く直線的。叩目は口縁端に及び、縦斜のハケ目を重ねる。内面は横斜のハケ目調整とする。砂礫 : 石英・泥質岩・チャート・白雲母。	胎色は橙。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度は低め。ヒビノキ 式。(弥生・後期末)
152	SB1 - P14, 埋土1	土器	壺		(3.5)			複式口縁帯の口頸片であり、頸部は細い。整形・調整の両段階で回転台を用い、素地の曳跡から見て旋向は右。調整は内外面ともに横位の磨きとする。砂礫(極少) : 石英・灰色チャート・白雲母・黒雲母。	胎色は橙。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度は極低い。(古墳・初頭)
153	SB1 - P6, 埋土, 遺物No.3	石器	打製石器	全長 12.50	全幅 8.20	全厚 1.55	重量(g) 202.6	灰色泥質粗粒砂岩製。片理に沿って剥離した転石の長辺に、片面剥離を施して刃部とする。	(弥生)
154	SB1	石器	打製石器	全長 7.80	全幅 4.90	全厚 1.20	重量(g) 62.9	やや片理の発達した黒灰色の珪質頁岩製。片方の長辺に両面から階段状剥離を加えて、粗い外湾刃とする。他の縁辺には、敲打による刃潰しを施す。	片方の短辺(実測図では外側の辺)は、欠損を生じた可能性がある。
155	SB1	石器	打製石鎌身	全長 11.60	全幅 5.10	全厚 1.30	重量(g) 92.2	石材は、黒灰色の玻璃質安山岩と見られる。横長剥片に剥離調整を加え、短形の直線刃とし、基端を抉る。背部には、剥離・敲打による刃潰しを施す。	表面は軽度で白化。基部は短く平坦であり、欠損を生じた可能性もある。(弥生・前期頃?)
156	SB1	石器	打製石鎌	全長 2.45	全幅 1.70	全厚 0.30	重量(g) 1.10	石材は、黒灰色の玻璃質安山岩と見られる。小型の凹基無茎式に属し、基辺・側辺ともに両面から剥離調整を加える。	表面は軽度で白化。(弥生)
157	SB1	石器	半磨製品	全長 3.15	全幅 1.05	全厚 0.35	重量(g) 1.60	石材は黒灰色の玻璃質安山岩と見られる。小型横長剥片の一方の長辺に両面剥離でナイフ状の刃部を作り出した後、刃潰しの平滑な研磨を加える。研磨は他の部位にも施し、剥離によって生じた個々の凹面以外は、概ね平滑。	表面は軽度で白化。当初、石鎌あるいは石錐として打製された製品を、何らかの用途の磨製品に転用した可能性が考えられる。(弥生)
158	SB1 - P14, 埋土	石器	敲石	全長 11.75	全幅 10.50	全厚 3.50	重量(g) 628.0	灰白色シルト質粗粒砂岩製。偏円形の転石を用い、両平坦面の中央に敲打を集中する。	(弥生)
159	SB1 - P10, 埋土	石器	敲石	全長 9.90	全幅 8.85	全厚 2.65	重量(g) 337.3	灰色粗粒砂岩製。偏円形の転石を用い、片方の平坦面中央と側縁部の全周を敲打する。	(弥生)
160	SB1 - P6, 埋土	石器	剥片	全長 7.00	全幅 5.90	全厚 0.70	重量(g) 42.8	灰色泥質細粒砂岩製。片理に沿って敲打剥離した転石の剥片。	(弥生)
161	SB2 - P27, 埋土	須恵器	壺	14.4	(6.4)			直口壺の上部。最終調整は、全面を轆轤による水曳き回転ナデとするが、上胴の内外面には、それぞれ叩絞め成形工程の同心円紋と平行叩目が遺留する。砂礫 : 石英 < 0.2mm・長石 < 3.0mm・珪長岩 < 3.0mm。	胎色は灰。焼成 : 中火度・還元。(古代・8世紀頃)
162	SB2 - P20, 埋土, 遺物No.1	須恵器	甗	23.6	(3.3)			直反形の口縁片。内外面を水曳き回転ナデとする。砂礫 : 石英 < 0.3mm・長石 < 0.6mm・珪長岩 < 1.5mm・アルコース砂岩 < 1.0mm・泥質岩 < 1.0mm。	胎色は灰白。焼成 : 低火度・初期還元。(古代)
163	SB2 - P18, 埋土	須恵器	蓋		(1.5)			平坦な天井部から深い角度で縁部を斜降。縁部の整形は轆轤右旋のナデとし、内面には静止ナデを加える。砂礫 : 石英 < 1.5mm・長石 < 0.2mm・風化殻 < 1.0mm。	胎色は灰橙。焼成 : 低火度・酸化 弱還元。(古代・8世紀頃)
164	SB2 - P20, 中位埋土	須恵器	蓋		(1.0)			平坦な天井部から深い角度で縁部に移行。天井部上面は轆轤右旋のへら削りとし、内面には回転ナデ痕が残る。砂礫 : 石英 < 1.5mm・長石 < 1.5mm。	胎色は灰。焼成 : 中火度・還元。(古墳~古代)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (9)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
165	SB2 - P22, 最下位埋土	須恵器	甕		(1.7)			上胴端細片。外面は横ナデ調整。内面では同心円紋に横ナデを重ねる。砂礫：石英<0.7mm・長石<0.2mm。	胎色は灰白。焼成：低火度・初期還元。(古墳～古代)
166	SB2 - P22, 埋土	須恵器	壺		(1.1)			肩部細片。回転ナデ整形とし、外面には轆轤右旋のヘラ削りを加える。砂礫：石英<0.8mm・長石0.7mm・珪長岩<1.0mm・チャート<0.2mm。	胎色は灰白。焼成：中火度・還元。(古墳～古代)
167	SB2 - P22, 最下位埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目にナデ調整を加える。内面には同心円紋を残す。砂礫：石英<0.7mm・長石<0.2mm。	胎色は灰白。焼成：低火度・初期還元。(古代?)
168	SB2 - P22, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は刻目付き平行叩目、内面は同心円紋。砂礫(多)：石英<0.2mm・長石<0.05mm。	胎色は灰白。焼成：低火度・還元。(古代?)
169	SB2 - P17, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目を交叉、内面は同心円紋を磨り消す。砂礫(多)：石英<1.8mm・長石<0.6mm・泥質岩<1.8mm。	胎色は灰。焼成：中火度・還元。(古墳～古代)
170	SB2 - P19, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目、内面は同心円紋。砂礫：石英<0.2mm・長石<0.2mm。	胎色は灰。焼成：中火度・還元。
171	SB2 - P20, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目、内面は同心円紋。砂礫：石英<0.8mm・長石<2.0mm・チャート<0.6mm。	胎色は黄灰。焼成：低火度・弱酸化。(古代?)
172	SB2 - P19, 埋土, 遺物No.1	須恵器	甕					胴部片。外面は平行叩目を交叉、内面は同心円紋。砂礫(多)：石英<0.3mm・長石<3.0mm・珪長岩<1.0mm・粗粒砂岩<1.0mm。	胎色は黄白。焼成：低火度・弱酸化。(古代?)
173	SB2 - P17, 埋土	土器	壺		(1.2)			広口型の有孔口縁部。内端と外端のそれぞれに、断面V字の縦刻目を1列。端部付近の穿孔列を挟んで刻目小凸帯を配す。砂礫：石英・粗粒砂岩。	胎色は褐灰。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期初頭)
174	SB2 - P22, 埋土	土器	壺		(1.5)			広口型の口縁片。外端に、縦刻目を1列。内端面には、格子目状の沈線紋帯を施す。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄橙。砂礫の円磨度は低め。(弥生)
175	SB2 - P17, 埋土	土器	壺		(1.4)			広口型の外貼肥厚口縁片。外端に肥厚帯貼付時の指頭圧痕が1列。砂礫：石英・長石・珪長岩・シルト岩・火山ガラス。	胎色は黄橙。砂礫の円磨度は極低い。(弥生・中期末)
176	SB2 - P17, 埋土	土器	壺	16.3	(8.0)			頸口部。頸部には横方向の磨きを施した後、右方向の櫛ガキで簾状文帯を横列する。口部全体に外貼肥厚帯を施し、基部から外反する。内面は口縁基部とその直下に成形時の指頭痕が集中する。砂礫：石英・長石・泥質岩・火山ガラス。	胎色は黄灰。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。石英・長石を主とし、有色岩片は極少。(弥生・中期前半)
177	SB2 - P22, 埋土	土器	壺		(2.0)			広口型の外貼帯口縁片。外端の下方拡張部を欠損。垂直な口唇面には左降の浅い刻目、内端面には縦の刻目を施す。砂礫(多)：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・黒雲母。	胎色は橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。(弥生)
178	SB2 - P20, 埋土	土器	壺	12.2	(4.6)			薄胎広口壺の頸口部であり、径は小さい。口縁外端を貼付肥厚帯とする。先ず横ナデを施した後、口縁下に6条直線紋帯を描描。次いで口縁肥厚面にヘラ押しによる縦刻目紋帯を配す。砂礫(極多)：石英・長石・砂岩・泥質岩・珪長岩。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期末)
179	SB2 - P17, 埋土	土器	甕		(2.2)			器壁の薄い口縁片。内外端に断面三角形の小凸帯を貼付。全面風化。砂礫(極多)：石英・長石・砂岩・泥質岩・火山ガラス。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期末頃)
180	SB2 - P26, 埋土	土器	壺		(1.6)			広口壺の口縁片であり、器壁が薄い。口縁端は水平に反り、その上面に1条、下面に2条の断面三角形突帯を貼付する。砂礫：石英・泥質岩・風化殻。	胎色は灰褐。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生)
181	SB2 - P17, 埋土	土器	壺		(3.0)			肩部細片。外面には断面三角形の貼付突帯3条が横に併列し、内面には指頭圧痕が縦列する。全面風化。砂礫：石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・珪岩・石英質片岩・チャート・火山ガラス。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。
182	SB2 - P17, 埋土	土器	甕					胴部細片。外面に平行叩目を施した後、内外面を縦ハケ目調整とする。外面には、更に縦ナデを加える。砂礫：石英・長石・砂岩・チャート・白雲母・火山ガラス。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。(弥生・後期)
183	SB2 - P20, 埋土	土器	鉢	12.0	(3.4)			弯弧形の口縁片であり、外面に平行叩目、内面に右降のハケ目を施す。砂礫：石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は橙。砂礫の円磨度はやや低め。所用のハケ原体は、幅21mm以上、先端の厚さ1.5mm前後の薄板と見られる。(弥生・後期末)
184	SB2 - P19, 埋土	土器	把手		(3.7)			犀角形の把手であり、指頭圧痕以外に製作の痕跡を留めない。砂礫：石英・長石・珪長岩・泥質岩。	胎色は黄灰。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。
185	SB2, 埋土2	石器	敲石	全長 11.85	全幅 11.55	全厚 4.70	重量(g) 720.1	灰色泥質粗粒砂岩製。偏平な大型転礫の破片であり、円磨面の側縁2箇所に古い敲打痕、1箇所により新しい敲打痕が見られる。	より新しい敲打箇所を破砕し、現状の破片となっている。(弥生)
186	SB2 - P20, 埋土	石器	刃器	全長 8.30	全幅 4.55	全厚 1.10	重量(g) 55.1	灰色粗粒砂岩製。転礫の円磨面を打ち採り、全縁に両面剥離を施して全刃とする。	挟りを持たず全刃とする形態から、石錘や石包丁としての用途は考え難く、ここでは刃器とした。(弥生)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (10)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
187	SX4, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目を交叉, 内面には不明瞭な圧痕が残る。砂礫: 石英<1.0mm・珪長岩<1.0mm・極細粒砂岩<1.0mm。	胎色は灰白。焼成: 還元。(古墳~古代)
188	SX4, 埋土	須恵器	不明					胴部細片。外面には, 植物繊維の擦痕が残る。内面には横ナデと指頭の痕跡が見られる。砂礫: 石英粒子の集合体<4.0mm・長石<3.0mm・珪長岩<5.0mm・磁鉄鉱<0.05mm。	胎色は灰白。焼成: 中火度・弱酸化 還元。(古墳~古代)
189	SX4, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は, 平行叩目に縦ハケ目を重ねる。内面には同心円紋を残す。砂礫: 石英<0.2mm。	胎色は黄灰。焼成: 高火度・初期還元。外面に自然釉を生じている。(古代?)
190	SX4, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は, 平行叩目を交叉し, 内面はナデ調整とする。砂礫(極多): 石英粒子の集合体<1.2mm・長石<1.0mm・アルコース粗粒砂岩<1.0mm・赤色チャート<2.0mm。	胎色は青灰。焼成: 中火度・還元。(古墳~古代)
191	SX4, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面には平行叩目, 内面には同心円紋が残る。砂礫(極多): 石英粒子の集合体<2.0mm・長石<1.0mm・珪長岩<1.0mm。	胎色は灰白。焼成: 中火度・還元。(古代?)
192	SX4, 埋土	須恵器	壺					上胴部細片。外面では縦のカキ目に回転ナデが重なる。内面は回転ナデ。砂礫: 石英粒子の集合体<1.0mm・石英<1.0mm・珪長岩<1.5mm・泥質極細粒砂岩<3.0mm。	胎色は灰白。焼成: 低火度・還元 炭化冷却。(古墳)
193	SX4, 上位埋土	石器	石包丁	全長 11.00	全幅 5.25	最大厚 0.80	重量(g) 64.7	灰色粘板岩製の石包丁。自然の風化・円磨作用の過程で片理に沿って偏平化した転石を用いる。片刃の半月形直線刃に属し, 背部寄りに穿孔した双孔を持つ。外弯する背部は研磨によって刃遣しを施す。	刃面は, A面の直線にのみ3段に分けて研ぎ出す。双孔は, 粗細2種の銚具を用いて両面から穿孔する。(弥生・前期~中期)
194	SX4	石器	打製石 鏃	全長 1.45	全幅 1.30	最大厚 0.30	重量(g) 0.5	石材は, 黒灰色の玻璃質安山岩と見られる。小型の凹基無茎式に属し, 基辺・側辺ともに両面から剥離調整を加える。先端部を欠損。	表面は軽度白化。図版No.15 6よりやや小型の同類に属す。(弥生)
195	集石1	須恵器	甕		(2.5)			上胴部細片。外面は平行叩目とし, 内面は同心円紋に横ナデを加える。砂礫: 石英<0.3mm・桃色粒子<0.1mm。	胎色は灰白。焼成: 高火度還元 還元冷却。外面に自然釉を生じるが, 半ば風化剥落している。(古墳~古代)
196	集石1	須恵器	甕					上胴部細片。外面は平行叩目とし, 内面は同心円紋をナデ消す。砂礫: 石英<1.3mm・長石<1.2mm。	胎色は灰白。焼成: 中火度・弱還元。(古墳~古代)
197	集石1	須恵器	不明					胴部細片。外面はカキ目の一部にナデを重ねる。内面はへら削りにナデを重ねる。砂礫: 石英<0.05mm。	胎色は灰白。焼成: 中火度・還元。(古墳)
198	集石1	土器	不明					上胴部細片。2列の刺突点紋を横に並施する。内面は風化。砂礫: 石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・風化殻・チャート。	胎色は黄橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。(弥生)
199	集石1	土器	不明		(1.8)			外反形口縁の細片。口唇面を左向に横ナデした後, 内外端に断面V字の刻目を押刻する。内面は横ハケ目とする。砂礫: 長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・風化殻・チャート・角閃石。	胎色は黄橙。赤色チャートを除く砂礫の円磨度は低い。胎基中の石英粒子は極めて微細。(弥生・中期初頭?)
200	集石1	土器	甕		(2.5)			薄胎の口縁細片。外端を貼付帯で肥厚し, 肥厚面に断面V字の刻目をへら先で押刻する。貼付帯直下の縦線は, ハケ目が沈線か判然としない。内面は横ナデ。砂礫(極多): 石英・長石・砂岩・チャート。	胎色は灰橙。胎内には炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期)
201	集石1	土器	不明		(2.7)			厚手の口縁細片。下方に小さく拡張した平坦な口唇面に極浅い12条の沈線を並走。内外面の調整は横ナデ。砂礫: 石英・高温型 石英・長石・砂岩・泥質岩・角閃石。	胎色は灰橙。胎内には炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。大粒の正長石 3mmの他, 石英や角閃石を含む点が注目される。(弥生)
202	集石1	土器	壺		(4.5)			広口型外肥口縁の細片。断面三角の分厚い素地帯を外貼してハケ目で均した口唇面に, 斜格子紋をへら押刻した後, 径14mmの環形浮紋を横列。貼付帯には指頭圧痕が右向きに連なる。内面調整は横ミガキ。砂礫(多): 石英・砂岩・泥質岩・火山ガラス。	胎色は黄灰。胎内には炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。(弥生・後期)
203	集石1	土器	壺		(2.3)			広口型外肥口縁の細片。断面から見ると, 口唇自体を下垂形の貼付帯とする。平坦な口唇面に斜格子紋をへら先で押刻。外面には, 貼付時の指頭圧痕が貫瓦条に並び, 施順は右向。砂礫: 石英・長石・砂岩・泥質岩・風化殻・チャート。	胎色は黄橙。胎内には炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。(弥生・後期)
204	集石1	石器	敲石	全長 9.00	全幅 7.75	全厚 6.40	重量(g) 551.6	灰白色アルコース細粒砂岩。片理の発達が弱い石質のため, 円磨の形状は球形に近い。ほぼ, 全面に敲打痕が分散する。	石材が脆質のため, 風化過程の自然剥落と敲打痕を識別し難い箇所もある。(弥生)
205	集石1	石器	敲石	全長 10.00	全幅 9.90	全厚 5.90	重量(g) 796.0	灰色泥質細粒砂岩。円磨を受けた偏平形の転石であり, 片方の平面中央と側縁面に敲打痕が集中する。	転石は, 主として石英粒子・泥質物・炭質物の細かい累層から成り, 直線的な平行ラミナが明瞭。(弥生)
206	SK10	瓦質土器	火鉢	16.0	(3.2)			口縁を若干内傾するため, 口・胴の境界に稜をなす。全面に炭素吸着を生じ, 内面には初期的なラスタ効果を生じている。砂礫: 石英<0.2mm・珪岩<2.0mm・チャート<1.0mm・黒色粒子<0.1mm。	胎色は灰。胎内には炭素が少残。砂礫の円磨度はやや低め。(中世)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (11)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
207	SK10	瓦器	碗		(1.3)		5.8	埋土。輪高台付き底部片。輪高台は貼付とし、その内外に横ナデを施す。炭素吸着を生じた内面には、不規則なヘラ磨きが見られる。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は黄白。砂礫の円磨度は低め。輪高台は7mmの高さを持ち、接地部は安定している。(中世)
208	SK10, 埋土	青磁	碗		(2.6)			刻花蓮弁紋青磁の体部片。彫りの深い斜刻によって弁稜を削り出す。	胎色は灰白。釉色は淡い緑灰。(中国産龍泉窯系・13世紀後半頃)
209	SK10, 土坑底面	土師器	杯		(1.2)		11.0	輪高台付き杯の細片。高台際の細片であり、全面風化。砂礫：石英・珪長岩・褐鉄鉱。	胎色は黄橙。(古代)
210	SK10, 土坑底面	須恵器	杯		(1.3)		8.0	平底部。糸切りの外底面が揚げ底状に歪む。内面は回転ナデ。砂礫：石英・長石。	胎色は灰橙。焼成：中火度・弱酸化 還元冷却。(古代・平安後期)
211	SK10, 埋土	須恵器	蓋		(1.0)			天井周縁部の細片。外面は回転ヘラ削り、内面は横ナデ。砂礫：石英・長石・珪長岩・橙色粒子。	胎色は灰褐。焼成：中火度・初期還元。(古代)
212	SK10, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は格子叩目、内面は同心円紋。砂礫：石英<1.5mm・長石の微粒。	胎色は灰。焼成：強還元。(古代?)
213	SK10, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は刻目付き平行叩目、内面は同心円紋。砂礫：石英<1.0mm・長石<0.3mm。	胎色は灰。焼成：還元。(古代?)
214	SK10, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目、内面は同心円紋をナデ消す。砂礫：石英<0.7mm・珪長岩<0.4mm。	胎色は灰。焼成：中火度・還元。(古墳~古代)
215	SK10, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目を交叉。内面は同心円紋。砂礫：石英<0.2mm・珪長岩<3.0mm。	胎色は灰。焼成：初期還元。(古代?)
216	SK10, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は格子叩目。内面は同心円紋の磨り消し。砂礫：石英集粒<4.0mm・長石<1.0mm。	胎色は灰。焼成：中火度・弱還元 還元。(古墳~古代)
217	SK10, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目を交叉。内面は同心円紋。砂礫：石英<2.0mm・長石<2.0mm。	胎色は灰。焼成：中火度・初期還元。(古代?)
218	SK10, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目。内面は同心円紋のナデ消し。砂礫：石英<1.0mm・長石<0.1mm・泥質砂岩<2.0mm。	胎色は灰。焼成：低火度・弱還元。(古墳~古代)
219	SK10, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は刻目付き平行叩目。内面は同心円紋のナデ消し。砂礫：石英<0.2mm・長石<1.0mm。	胎色は灰。焼成：還元。(古墳~古代)
220	SK10, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目を交叉。内面は同心円紋。砂礫：石英<0.3mm・長石<1.0mm。	胎色は灰白。焼成：中火度・還元。(古代?)
221	SK10, 埋土	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目を交叉。内面は同心円紋のナデ消し。砂礫：石英<0.3mm・長石<0.4mm・珪長岩<2.0mm。	胎色は灰。焼成：低火度・還元。(古墳~古代)
222	SK10, 埋土	須恵器	不明					胴部細片。外面はカキ目。内面はナデ。砂礫：石英<0.3mm。	胎色は灰白。焼成：高火度・還元。外面には、自然釉を生じる。(古墳)
223	SK10, 埋土	須恵器	壺		(3.1)			肩部細片。外面は降灰に覆われ、不明。内面は静止横ナデ。砂礫：石英<0.3mm。	胎色は灰白。焼成：還元。(古墳~古代)
224	SK10, 埋土	須恵器	平瓦					側端部片。端面を斜切する。上面は粗い布目痕、下面は縄蓆紋。砂礫：石英<1.0mm; 珪長岩<2.0mm。	胎色は黄橙。焼成：酸化。(古代)
225	SK10, 埋土	須恵器	平瓦					側端部片。端面を斜切する。上面はナデ、下面には糸線が残る。砂礫：石英<2.0mm; 珪長岩<3.0mm。	胎色は褐灰。低火度・初期還元。(古代)
226	SK10, 埋土	須恵器	平瓦					側端部片。端面を二段に切る。全面風化。砂礫：石英<0.1mm・長石<2.0mm・砂岩<2.0mm・シルト質風化殻<3.0mm。	胎色は灰白。低火度・還元酸化。(古代)
227	SK10, 埋土	須恵器	平瓦					細片。凹面は粗い布目、凸面は縄蓆紋。砂礫：石英<2.0mm・長石<1.5mm。	胎色は青灰。低火度・還元酸化 還元。(古代)
228	SK10, 埋土	須恵器	丸瓦					細片。凸面は縄蓆紋、凹面は粗い布目。砂礫：石英<4.0mm・長石<1.5mm・泥質岩<7.0mm。	胎色は青灰。焼成：還元 酸化 還元。黒褐色の鉄斑を多見。海綿状気泡の発生個所有り。(古代)
229	SK10	土器	壺		(1.2)			薄胎広口壺の口縁細片。口縁外端に断面三角形の突帯を貼付し、縦位弧形の刻目を一列する。その下に、細かな微隆起線を施すが、手法は貼付と見られ、突帯と区別する意味はない。砂礫(極多)：石英・砂岩・泥質岩・珪岩。	胎色は黒灰。胎内には炭素が残留。砂礫の円磨度は高い。(弥生・中期末)
230	SK2, 埋土	施釉陶器	碗	16.9	5.6		7.4	唐津産の粉引施紋鉢。高アルミナ白土と珪砂の混漿を煉瓦色の陶胎にハケ塗りする。この粉引は、内底では重焼時の熔結を防ぐ円筒形とし、体部内面では波形の装飾とする。砂礫：石英<0.2mm・長石<0.5mm・珪長岩<2.5mm・酸化鉄<2.5mm。	胎色は橙。焼成：酸化。胎内には、0.2mm以下の気孔が多在。外底面には、軸輪左旋の削整痕を留める。(近世)
231	SK2, 埋土, No.1	白磁染付	碗	11.9	6.2		5.2	肥前産白磁染付碗。口縁内面の口縁帯中央に渦巻紋を配し、体部外面に花蝶紋を描く。渦巻紋は17世紀に多用され、花蝶紋はそれ以後も流行する。胎内の未熔石英は、粒径約0.03mm以下。	胎のガラス化度は高く、粒界面に沿って気孔を多発。釉の粘性は高めで、約2mm画の貫入を生じている。コバルト青料の呈色は、微かに紫を帯びる青であり、40μm以下の未溶顆粒を稀に見る。(近世)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (12)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
232	SK4, 埋土	土器	壺	24.6	4.8			広口壺の口頸片。外貼帯口縁の口唇を斜平とし、内外端に断面V字形の縦刻目を施す。外端下の肥厚面に、指頭による右向きの連続押圧痕を一行。頸部外面には、直線紋帯の上端に刺突列点紋を一行。内面調整は横位のハケ目。砂礫(多):石英・長石・珩長岩砂岩・チャート。	胎色は黄橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期初頭)
233	SK4, 埋土	土器	壺	26.1	7.0			外貼帯口縁の口唇を斜平とする広口壺の口頸片。調整・紋飾は、上例(No.220)と同じ。頸部外面には、施紋に先立ち横ナデを施す。砂礫:石英・長石・珩長岩・泥質岩・チャート・非磁性の黒色晶体。	胎色は黄橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度はやや低め。(弥生・中期初頭)
234	SK4, 埋土	土器	壺		4.1		7.8	揚底型の平底片であり、外面は縦位のハケ目にヘラ磨きを重ねる。砂礫:石英・珩長岩・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は橙。外面を除き、炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。珩長岩とチャートの多含が特徴的。泥質岩には、粘板岩が含まれる。(弥生・前期~中期)
235	SK4, 埋土	白磁	ペニ皿	4.0	1.3		1.8	型押による肥前産のペニ皿。高台底の一部に、0.4mm画の布目状圧痕が残る。	胎のガラス化度は高い。釉中には、径0.1mm以下の気泡が多留し、失透気味。(近世・江戸中期~幕末)
236	SK11, 埋土	粗陶	擂鉢	29.7	12.3		14.0	外端突起型に肥厚した口縁帯の内外面には、回転横ナデ痕が残る。体部外面は、回転ヘラ削りとする。体部内面の溝溝は、1単位当たり8条とし、各単位の間隔は狭い。砂礫:石英・長石・珩長岩・シルト質粗粒砂岩。	胎色は赤褐。焼成:酸化還元酸化。シルト質粗粒砂岩を除き、所含の砂礫に円磨は見られない。外面には、珩砂が付着する。(近世)
237	SK11, 埋土	白磁染付	広東碗	10.1	6.5		5.8	小型の広東碗であり、外面には高台際に1条圏線、体部に草花紋を描く。内面には、腰部に1条圏線、口縁部下に2条圏線を配す。	胎のガラス化度は高く、釉の粘性は強い。鉄斑の分布は低密で偏在気味。コバルト青料の呈色は、やや灰色味を帯びた青。(近世・18C末~19C前半)
238	SK11, 埋土	白磁染付	碗	12.5	(5.1)			肥前産あるいは肥前系の碗。外面は、腰部と口縁部下の1条圏線間に笹と竹竿を描く。内面は、口縁帯に7条圏線、腰部に1条圏線を回らす。	胎のガラス化度が高い反面、粒界面に沿った最長3mmの裂開気泡が多見される。釉中気泡は径0.1mm以下で、釉面の光沢は強い。コバルト青料は、やや紫色を帯びた淡青を呈し、50μm以下の未溶顆粒が多在。(近世)
239	SK11, 埋土	白磁染付	碗	12.1	6.0		5.0	肥前産あるいは肥前系の碗。外面は、高台際に2条圏線を回らし、腰部と口縁部下の1条圏線間に折枝竹と花卉を描く。内面は、口縁内端と腰部に1条圏線を回らし、見込紋を描く。	胎中には0.3mm以下の気泡が多在し、0.3mm以下の鉄斑を小見。釉層は厚めで0.25mmを測り、径0.2mm以下の気泡が多留。コバルト青料は、暗い青灰色を呈し、40μm以下の未溶顆粒が低密分布。(近世)
240	SK11, 埋土	白磁染付	細頸瓶		(9.0)		6.0	肥前産の鶴首型細頸瓶であり、外面を蛸唐草で覆う。内面は無釉で、胎表が酸化。	胎のガラス化度は低く、径0.1mm以下の石英粒子が目につく。径0.5mm以下の黒色鉄斑が少量分布。厚さ0.25mmの釉層と胎の接触面には、白色のムライトを多生。コバルト青料は青灰色を呈す。(近世・江戸後期)
241	SK11, 埋土	銅緑釉陶器	小碗	8.8	(4.5)		(2.6)	口縁帯の内外面に酸化銅を呈色剤として塗り、腰部以上の全面に透明釉を漬掛する。	石英粒子が0.2mm以下と粗めな磁器素地を胎材とし、陶器の低火度焼成に止める。胎中には0.3mm以下の気泡が残り、粒子間の固結は脆い。胎釉の接触面で白色の微晶が密生し、釉層は失透している。(近世・江戸中期)
242	SK11, 埋土	白磁染付	大皿		(3.9)		17.0	花卉紋を描く肥前産大皿の細片であり、墨弾の技法を併用すると見られる。	胎は透光性の低い白色を呈し、径0.03mm以下の石英粒子を含む。0.2mm以下の鉄斑が低密分布。輪高台の内壁には、径0.3mm以下の粒子から成る石英の集塊が熔着。高台際の溜釉は緑灰色を呈す。コバルト青料は青灰色を呈し、20μm以下の未溶顆粒が低密分布。(近世・江戸中後期)
243	SK11, 埋土	白磁染付	大皿		(2.1)		20.4	復原底径は異なるが、上例(No.242)と同じ花卉紋の一部が見られる。	胎・釉・コバルト青料の特徴も、上例(No.242)と同じ。
244	SK11, 埋土	燻瓦	軒平瓦当		(4.2)			燻焼の軒平瓦当であり、簡略化の進んだ唐草紋を押し刻する。砂礫:石英<0.3mm・長石<0.1mm。	胎色は灰白。胎内に炭素が残留し、胎表には炭素が吸着。焼成:還元炭化冷却。平瓦と瓦当部は粘接とし、接合部や角部の調整には、横ナデと削りを併用。(近世)
245	SK11, 埋土	土器	壺		(3.6)			広口壺の頸部細片。縦ハケ目を施した後、2条と4条の直線紋帯を櫛描し、これらを挟んで貼付した凸帯を5.5~7.0mmの間隔で浅V字形に刻み取り、断面三角の列点帯を作り出す。砂礫:石英・砂岩・泥質岩・珩岩・チャート。	胎色は黄白。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期初頭)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (13)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
246	SK11, 埋土	須恵器	甕					体部細片。外面は平行叩目、内面は同心円紋を磨り消す。砂礫：石英<0.2mm・珪長岩<1.0mm・赤色チャート0.2mm。	胎色は灰。焼成：中火度・強還元。(古墳～古代)
247	SK11, 埋土	須恵器	甕					体部細片。外面には平行叩目が微かに残り、内面は深い同心円紋とする。砂礫：石英<0.2mm・チャート<0.2mm。	胎色は灰白。焼成：低火度・還元。(古代?)
248	SK11, 埋土	須恵器	甕					体部細片。外面は刻目付きの平行叩目、内面は同心円紋。砂礫：石英<0.5mm・珪長岩<1.9mm。	胎色は灰。高珪酸胎。焼成：中火度・強還元・炭化冷却。(古代?)
249	SK11, 埋土	須恵器	甕					体部細片。外面は既に風化。内面は横ナデとする。砂礫(極多)：石英<0.3mm・石英粒子の集合体<1.0mm・長石<0.3mm。	胎色は灰。焼成：低火度・還元。(古墳～古代)
250	SK12, 埋土	白磁染付	そば猪口	8.4	(4.7)			体部外面に山水を略描し、口縁内面に雷紋帯を回らす。	胎のガラス化度は高めながら、0.2mm以下の気孔が残留。釉層には、径厚さ0.2mm以下の気泡が多留。コバルト青料は藍色を呈し、外面の濃所では黄灰色の針晶群を浮現。未溶顆粒は最大径300μmを測り、分布にムラが大きい。(近世・江戸後期)
251	SK12	白磁染付	小碗	9.5	(4.3)			外面は、腰部に単圈線を記し、体部に枝付きの花弁紋を筆描する。内面は、腰部に単圈線、口縁部に双圈線を記す。	白色の磁胎には、径0.3mm以下の気孔が多在。厚さ約0.25mmの釉層には、径0.1mm以下の気泡が多留。コバルト青料の呈色は、微かに紫を帯びた青であり、50μm以下の未溶顆粒が低密分布。(近世)
252	SK12, 埋土	白磁染付	碗		(3.7)		5.2	外面は高台際に3条圈線を回らし、体部の区画には風景画と見られる紋様を描く。腰部内面に1条圈線を回らす。	胎の透光性は低く、0.3mm以下の気泡が多留。釉層には平均1mm画程度の貫入が密生し、径0.1mm以下の気泡が多留。コバルト青料は、灰色味を帯びた青を呈し、50μm以下の未溶顆粒と、0.1mm以下の鉄錆斑が低密分布する。(近世)
253	SK12, 埋土	白磁染付	角鉢		(3.0)			口縁細片であり、内面に松紋を描く。外面の施紋は不明。	胎のガラス化度は低く、径0.1mm以下の石英粒子を含む。釉の粘性は低めながら、釉面の光沢は非常に強く、平均2mm画程度の貫入網を生じている。コバルト青料は青灰色を呈し、100μm以下の未溶顆粒が高密分布する。(近世・江戸後期)
254	SK12, 埋土	白磁染付	角鉢		(2.4)			口縁細片であり、内面に笹紋、外面に区画紋を描く。	胎内には、粒界面に沿って0.3mm以下の細長形気孔が多留する。鉄斑は見られない。釉層は0.3mmの厚さを測り、釉面の光沢は強い。(近世・江戸後期)
255	SK12	施釉陶器	施釉陶器		(1.7)		5.0	輪高台付き底部片。高台内を除く全面に淡緑灰色の半透釉を漬掛する。高台は轆轤左旋の削り出しとする。内底には、高台と同径の90度分割位置に砂敷目跡が熔着する。	胎は灰白色。所含の石英は透明で、粒径0.2mm以下。釉の呈色から、微量の酸化鉄または酸化銅を含むと見られるが、外見からは特定不能。(近世)
256	SK12	施釉陶器	平縁型小鉢	6.9	2.2		5.4	水挽によって平縁形とした後、腰部以下を旋削して折腰形とする。平縁端から内面にかけて淡い緑灰色釉を施す。	胎は灰色。粒径0.1mm以下の石英粒子を多含し、高珪酸胎に属す。焼成：還元。釉厚約0.2mmで、貫入が密生する。釉の呈色剤は、微量酸化鉄と見られる。(近世)
257	SK12, 埋土	燻瓦	丸瓦当					燻焼の軒丸瓦当であり、三巴紋と珠紋を押し刻する。砂礫：石英<0.3mm・珪長岩<0.3mm。	胎色は灰。胎内に炭素が多残し、胎表には炭素が吸着。焼成：還元 炭化冷却。瓦当面には、版木の木目が残る。(近世)
258	SK12, 埋土	土器	壺		(4.1)			複式口縁片であり、段部の稜が突起する。内外面ともに風化するが、内面の一部に横八ケ目が残る。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄灰。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(古墳・初頭)
259	SK12, 埋土	土器	壺		(2.3)			広口壺の外縁片。垂直な口唇面に矢羽形の刻目紋帯を施す。砂礫：砂岩(石英砂岩を含む)・泥質岩。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。(弥生)
260	SK12, 埋土	土器	高杯		(1.5)			高杯の脚裾片で開脚度は強い。径9mmの円孔を貫通し、外面に縦八ケ目を施す。砂礫(極多)：石英・砂岩・泥質岩・珪岩。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生・後期)
261	N - TR, 埋土	土器	甕		(5.6)			丸底部。外面は平行叩目、内面では八ケ目が交叉。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・磁鉄鉱。	胎色は黄白。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度はやや高め。(古墳・初頭)
262	N - TR, 埋土	土器	壺		(2.0)			広口壺の口縁片。急反した口縁の内端を小さく摘み出す。外端に貼付した断面三角形の突帯頂に、小さな刻目を1列する。砂礫：石英・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート・角閃石・高温型 石英・火山ガラス。	胎色は淡橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度はやや低め。所含の泥質岩には、千枚岩が含まれる。(弥生)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (14)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
263	P67, 埋土	土器	壺		(1.9)			広口壺の有孔口縁片。口縁内端に貼付した幅4mmの素地紐で、1列の小列点帯を作り出し、その直下に径1.5mm前後の円孔を貫通する。外面は、右降のハケ目とする。砂礫：石英・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート・角閃石。	胎色は淡い灰橙。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期初頭)
264	P109	土器	壺		(1.6)			外面は、縦位のハケ目とナデ調整を下地とし、幅3mm前後の細い貼付刻目凸帯を斜交する。内面は風化、剥落。砂礫：石英・珪長岩・砂岩・泥質岩・火山ガラス。	胎色は淡い黄橙。内壁に炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。所見の火山ガラスは、平板状のバブルウォール型。(弥生・中期初頭)
265	P92	土器	壺		(3.2)			胴部細片。外面に菱格子状の直線紋を双線描きする。砂礫：石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・黒雲母・火山ガラス。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。所見の火山ガラスは、平板状のバブルウォール型。(弥生・中期中葉)
266	P73	土器	壺		(3.2)			頸部細片。酸化鉄多含の1条突帯を貼付した後、その上下に各々3列と2列の刺突列点文帯を施す。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・火山ガラス。	胎色は黄橙。砂礫の円磨度は低い。所含の火山ガラスは、バブルウォール型。(弥生)
267	P120, 埋土	土器	壺		(2.1)			広口壺の口縁片。内外に小さく拡張した口唇面に、2条の細凹線もしくは沈線と並走する。外面調整の仕上げは、縦ハケ目。砂礫：石英・砂岩・泥質岩。	胎色は黄橙。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度は高め。(弥生・中期未頃)
268	P75, 埋土	土器	壺		(3.7)			壺の肩部細片。横に並走する断面三角形の2条微隆起線紋に、それぞれ6~7mm前後の間隔で竹筥刺突を1列する。砂礫(極多)：石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度はやや高め。(弥生・中期)
269	P103, 埋土	土器	甗		(3.0)			開口度が強めの口縁片。口唇から外面にかけては横ナデ、内面は横ハケ目とする。砂礫：長石・珪長岩・砂岩・泥質岩。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度はやや高め。(弥生・後期)
270	P52, 埋土	土器	甗		(6.6)			角張った口縁外端の直下に断面三角形の1条突帯を貼付する。全面の風化が著しい。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩。	胎色は黄橙。胎質は極脆い。砂礫の円磨度は低い。比較的粒径の大きい長石の含有が特徴的。(弥生)
271	P62, 埋土	土器	小鉢	10.2	(3.9)			口縁を斜折形とする。内面に指頭痕を留める他は、全面風化。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。(弥生)
272	P, 埋土	土器	高杯		(4.4)		14.6	開脚部の強い脚部。外面は縦ハケ目、内面は中央から左旋回ハケ目とする。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・磁鉄鉱・火山ガラス。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生・後期末~古墳・初頭)
273	P72	石器	敲石	全長 10.65	全幅 9.30	全厚 3.40	重量(g) 520.9	灰色粗粒硬質砂岩の偏平な転礫。両平坦面の中央が、敲打によって微凹する。側縁は全周を敲打する。	側縁は、剥離箇所左右の打耗が特に著しい。(弥生)
274	P92, 埋土	須恵器	蓋		(1.4)			天井部の細片であり、縁部に転じる屈下度は強い。外面は、韃靼右旋のヘラ削りとする。内面は回転ナデ。砂礫：石英<0.3mm・長石<0.4mm。	胎色は青灰。焼成：中火度・還元。(古墳・後期)
275	耕作土	土器	壺		(3.0)			広口壺の外貼帯口縁細片。口唇面の中央を強く横ナデして窪ませ、その外端に断面V字の刻目、内端に断面U字の刻目を施す。外肥帯の直下には、縦ハケ目が見られる。砂礫：石英・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は高め。(弥生・中期初頭)
276	耕作土	石器	石斧	全長 (10.60)	全幅 (2.90)	全厚 (1.45)	重量(g) 70.6	大型蛤刃石斧の側縁~刃部破片であり、断口を除く全面に研磨が加わる。特に刃面は滑らか。	石材は玄武岩質緑色岩。(弥生・中期頃)
277	耕作土	須恵器	杯身	(13.8)	(1.8)			受部の細片であり、立ち上がりは上端を欠く。全面に回転ナデの調整痕が残る。砂礫：石英<0.05mm。	胎色は灰。焼成：還元。(古墳・未期・7C前半頃)
278	耕作土	陶器	甗		(2.3)			常滑産。上胴部細片。外面には緑灰色の自然釉を生じ、酸化した内面には横ナデ痕が残る。砂礫：石英<0.2mm。	胎色は灰白。焼成：高火度・還元 急冷。自然釉層の全面に斜長石の針晶群を生じている。菊花状の針晶は最大径0.25mmを測り、最長の単針晶も0.25mmを測る。(中世・13C前後)
279	検出面	土器	壺		(1.5)			広口壺の口縁細片。外端の貼付突帯と口唇中央の円凸面に、それぞれ深浅の縦位刻目を1列する。内端には、有機物を含む高アルミナ土の細紐を1条貼付し、これに押圧を連ねて列点帯を作り出す。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・火山ガラス。	胎色は橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。所含の火山ガラスには、無色と黒褐色がある。(弥生・前期末~中期初頭頃)
280	検出面	土器	壺		(2.9)			上胴部細片。外面に縦ハケ目を施した後、(3条)直線紋帯の上に、3条山形紋を櫛描する。砂礫(多)：石英・長石・珪長岩・泥質岩・チャート・白雲母。	胎色は褐。砂礫の円磨度は低め。(弥生・前期末~中期初頭)
281	検出面	土器	不明		(2.4)			上胴部細片。外面に横斜ハケ目を施した後、多条直線紋帯の間に2歯原形で双線山形紋を右向きに描き連ねる。砂礫(多)：石英・珪長岩・砂岩・泥質岩。	胎色は褐灰。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。(弥生・前期末~中期初頭)
282	検出面	土器	壺		(1.3)			広口壺の外貼帯口縁細片。平坦な口唇面に斜位(左傾)の刻目を横1列する。その下の外肥帯には、指頭圧痕が並ぶ。砂礫(多)：石英・石英粒子の集合体・長石・泥質岩・風化殻。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は高め。(弥生・中期末)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (15)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
283	検出面	土器	壺		(1.9)			薄胎壺の上胴部細片。断面三角の2条突帯が横に並走する。砂礫 (極多) : 石英・珪長岩。	胎色は灰橙。外表を除き、炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期末)
284	検出面	土器	壺		(3.2)			広口壺の外貼帯口縁細片。外端に断面V字の小刻目を1列する。外肥帯の表面には、右方向に粘接した指頭圧痕が並ぶ。砂礫 (多) : 石英・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は暗灰。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期)
285	検出面	土器	壺		(1.7)			広口壺の外貼帯口縁細片。平坦な口唇面に断面V字の浅い縦刻目を1列する。外肥帯の表面には、左方向に粘接した指頭圧痕が並び、外肥帯の直下には、縦ハゲ目が残る。砂礫 (多) : 石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄灰。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期)
286	検出面	土器	壺		(1.3)			端部を上下に拡張した外折平縁であり、全面回転ナデとする。砂礫 : 石英・長石・砂岩・泥質岩・緑色岩・チャート。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。チャートと緑色岩を除く岩片は、いずれも砕屑性の堆積岩片に属す。(弥生・中期末)
287	検出面	土器	特種壺 あるいは特種器台	20.7	(3.6)			下垂気味の水平縁に直口を貼付する。水平縁の上には、矢羽状の櫛描列点紋を回らす。砂礫 : 石英・長石・砂岩・泥質岩。	胎色は黄橙。所含の泥質岩は円磨を受ける。径3mm以下の長石粒の多含が目を引く。(弥生・後期後半)
288	検出面	土器	壺	17.4	(1.6)			広口壺の外貼帯口縁細片。外端に貼付した突帯に、断面V字の縦刻目を1列する。砂礫 (多) : 石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は黄灰。胎内の一部に炭素が残留。所含の火山ガラスは、極少量。(弥生・中期)
289	検出面	土器	高杯		(4.9)		12.4	開脚度の緩い脚裾片であり、接地部を内屈する。脚縁の稜上には、細小な刺突列点を1列する。砂礫 : 石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。所含の火山ガラスは少量であり、黒褐色を帯びたバブルウォール型に属す。(弥生)
290	検出面	土器	甕または壺		(5.1)		7.2	揚底気味の平底部。全面風化。砂礫 : 石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート・角閃石・火山ガラス。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。所含の火山ガラスはバブルウォール型に属す。(弥生)
291	検出面	土器	甕	18.5	(6.3)			上胴から口縁にかけて、「く」字形を呈す。口縁は、外面を縦ハゲ目、内面を横ハゲ目とする。体部内面には斜位のハゲ目が残る。砂礫 (多) : 石英・砂岩・泥質岩・風化殻。	胎色は橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。(弥生・後期後半)
292	検出面	土器	甕	16.3	(4.2)			上胴から短い口縁を「く」字形に強く外反する。口唇面の中央が沈線状に窪む。口縁基部以下の外面を縦ハゲ目とし、口縁の内外面を回転ナデとする。胴部の内面は、指頭痕に回転ナデが重なる。砂礫 (多) : 石英・石英結晶片岩・珪長岩・泥質岩・角閃石・白雲母・火山ガラス。	胎色は橙灰。砂礫の円磨度は低い。所含の火山ガラスは無色のバブルウォール型。搬入の東阿波型土器。(古墳・初頭)
293	検出面	土器	壺	15.6	(7.2)			複式口縁帯の口頸片。口縁は、外反形に立ち上げた後、稜を経て直口に転じる。直口の外面に角折形の4条線波状帯を櫛描する。直口内面と稜下の外面では、横ナデに右降のハゲ目が重なる。砂礫 : 石英・珪長岩・砂岩・チャート。	胎色は橙。砂礫の円磨度は高い。チャートの多含が特徴的。(弥生・後期後半)
294	検出面	土器	甕	17.7	25.2	19.0	3.4	胴部は卵形を呈し、丸底に近い。外面は、底部から口縁に至る全面に平行叩目を施す。下胴の一部に、ハゲ目が残る。砂礫 : 石英・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は黄橙。砂礫の円磨度は高め。火山ガラスの検出頻度は極低い。(弥生・後期末～古墳・初頭)
295	検出面	石器	石包丁	全長 8.30	全幅 5.20	最大厚 1.10	重量 (g) 71.0	軋礫の平坦面を剥ぎ取り、主として剥離面側から敲打・剥離調整を加え、刃部を作り出す。背部には粗い刃潰しを施し、左右両端に挟り設ける。	石材は、粘板岩。(弥生・後期)
296	検出面	石器	刃器	全長 9.10	全幅 5.45	最大厚 1.00	重量 (g) 53.9	円礫の平坦面を剥離し、ほぼ全縁に両面剥離を施した剥片刃器。	石材は、硬質の灰色細粒砂岩。(弥生)
297	検出面	石器	敲石	全長 11.40	全幅 9.85	最大厚 4.75	重量 (g) 82.5	偏円形の軋石を用い、両平坦面の中央とほぼ全側縁を敲打する。	石材は、硬質の灰色粗粒砂岩。(弥生)
298	検出面	須恵器	蓋		(1.6)			内面と蓋縁移行部付近の外面は回転ナデとし、天井部外面には轆轤右旋の高速回転ヘラ削りを施す。天井部中央寄りの内面に指頭圧痕が残る点から、摘みを付けた可能性が高い。砂礫 : 石英<1.0mm・珪長岩<0.8mm・風化殻<0.7mm。	胎色は青灰～褐。焼成 : 中火度 初期還元。(古代・8世紀頃)
299	検出面	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目、内面は同心円紋にナデを加える。砂礫 : 石英粒子の集合体<1.0mm・長石<2.5mm。	胎色は青灰～褐。焼成 : 低火度 初期還元。(古墳～古代)
300	検出面	須恵器	平瓦		(1.5)			細片。凹面は粗い布目紋、凸面は縄縞紋とする。砂礫 : 石英<1.0mm・長石4.0mm。	胎色は青灰。焼成 : 低火度 還元。(古代)
301	検出面	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目を重ね、内面は同心円紋をナデ消す。砂礫 : 石英<0.3mm・長石<0.2mm。	胎色は灰白～黄灰。焼成 : 中火度 初期還元。(古墳～古代)
302	検出面	土師器	杯		(1.7)		8.0	貼付輪高台付き杯の底部片。全面に回転ナデ調整を施す。砂礫 (極少) : 石英・長石・半透明褐色の粒子。	胎色は橙。(古代)
303	包含層	土器	壺		(3.2)			外面には、木葉紋を浅くヘラ描する。内面は全面風化剥落。砂礫 : 石英・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は橙。砂礫の円磨度は低い。(弥生・前期初頭)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (16)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
304	包含層	土器	壺		(2.5)			広口壺の外貼帯口縁細片。内外端に断面V字の縦刻目をヘラ先で押刻して1列する。また、内端下に優白土の細い素地紐を2条回らし、それぞれに刻目を連ねて偏正方形の列点文帯を作り出す。外貼肥厚帯下には、縦ハケメが残る。礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・風化殻。	胎色は黄橙。砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期初頭)
305	包含層	土器	壺		(3.9)			上胴部細片。右向きに施した双線山形紋の上に、多条直線紋帯を右向きに櫛描する。砂礫(多)：石英・砂岩(石英砂岩を含む)・泥質岩・珪岩。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期前半)
306	包含層	土器	壺		(2.2)			広口壺の口縁細片。外面に縦ハケメを施した後、口縁外端に凸帯を貼付。この凸帯と口縁内端に断面V字の縦刻目をそれぞれ1列する。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は褐。胎内の一部に炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。所含の火山ガラスはバブルウォール型。(弥生・中期初頭頃)
307	包含層	土器	壺		(2.1)			広口壺の口縁細片。口縁外端に凸帯を貼付し、その頂部に細小に縦刻目を1列する。砂礫(極多)：石英・珪長岩・砂岩・泥質岩。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度はやや低め。(弥生・中期末)
308	包含層	土器	壺		(2.0)			広口壺の外貼帯肥厚口縁細片。外貼帯の幅は、約9mmと狭い。口縁の内外端に各々細小な微左傾の刻目を1列する。内面の口縁端直下には、2条の細凸帯を貼付する。内外面の調整は横ナデ。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は橙。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度はやや低め。(弥生・中期)
309	包含層	土器	壺		(4.0)			広口壺の頸部細片。外面は、右降の縦ハケ目調整の後、浅い沈線上に偏平な刻目凸帯を回らす。その間に、櫛描と見られる直線紋帯を施す。内面は横ハケ目。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄橙。砂礫の円磨度はやや高め。(弥生・中期)
310	包含層	土器	壺		(4.8)			胴部細片。外面は、斜位右降のハケ目を下地とし、振幅の小さい4~5条線1単位の櫛描波状紋を施す。内面調整は、縦ナデと見られる。砂礫：石英・長石・泥質岩・火山ガラス。	胎色は橙。外表を除き、炭素が多残。砂礫の円磨度は低い。火山ガラスの含量は多い。(弥生・中期中葉)
311	包含層	土器	壺		(1.7)			上胴部細片。外面は、断面三角の貼付凸帯を横に並施した後、その下に微細な櫛描波状紋を施す。砂礫：石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・珪岩。	胎色は黄橙。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度は低い。(弥生・中期中葉)
312	包含層	土器	壺		(3.3)			上胴部細片。外面は、1条直線紋と3条1単位の簾状紋を横に並走する。簾状文の押し曳きは、左から右。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は高め。(弥生・中期中葉)
313	包含層	土器	壺		(3.1)			上胴部細片。外面は、4条1単位の櫛描扇形紋を横列した後、その直上に多条直線紋帯を櫛描する。砂礫(極多)：石英・長石・砂岩・泥質岩。	胎色は黄白。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は高い。風化度の低い長石粒子(径約3mm以下)の含有が特徴的。(弥生・中期中葉)
314	包含層	土器	壺		(3.0)			上胴部細片。外面は、6条1単位の櫛描波状紋を施した後、その直上に簾状文を押し曳きする。これらの曳跡は、いずれも右方向。砂礫(多)：石英・泥質岩。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期中葉)
315	包含層	土器	壺		(1.6)			広口壺の外貼帯肥厚口縁細片。口唇面に斜格子紋をヘラ先で押刻する。肥厚面には、右上位の押圧痕が1列する。砂礫(多)：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は低め。火山ガラスの含量は多く、無色優位のバブルウォール型に属す。黒褐色の火山ガラスには、裂泡前の泡径を約0.5mmと推定し得るものが含まれる。(弥生・中期末)
316	包含層	土器	壺または高杯		(1.7)			広口壺の口縁(または高杯脚縁)細片。内外面を横ナデした後、外端下(上)に微少な列点紋を1列する。実測図では、一応壺として描いているが、Fig.42-289の高杯と同類の可能性も有る。砂礫(極多)：石英・砂岩。	胎色は黄橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度はやや低め。(弥生)
317	包含層	土器	壺		(2.4)			薄胎型広口壺の口縁片。口縁外端に左傾の小刻目を1列する。砂礫(極多)：石英・砂岩・泥質岩・チャート・黒雲母。	胎色は黄灰。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生・中期末)
318	包含層	土器	壺または甕		(3.1)			薄胎仕様の口縁細片。口唇面に断面V字の刻目を1列し、外端下に断面三角形の1条突帯を貼付する。調整は、外面の突帯以上を横ナデ、突帯以下を縦ハケ目とし、内面を横ハケ目とする。砂礫(極多)：石英・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄灰。砂礫の円磨度は極低い。(弥生・中期末)
319	包含層	土器	甕または壺		(1.4)			水平口縁の細片。端部を下屈(あるいは上屈)する。砂礫(多)：石英・長石・黒色粒子。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。破片に付着する砂質シルト中には、比較的高密度のバブルウォール型火山ガラスが分布する。(弥生)
320	包含層	土器	甕		(2.8)			口縁細片。口縁の基部から端部にかけて、「く」字形を呈する。内端を小さく内屈する。内外面ともに、回転ナデ調整とする。砂礫(多)：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は黄橙。胎内に炭素が少残。砂礫の円磨度は低め。(弥生・後期後半)

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (17)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
321	包含層	土器	甕		(2.6)			口縁細片。短い口縁を軽度外反する。内面に横ハケ目を留める他は、全面風化。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は高い。(古墳時代初頭)
322	包含層	土器	壺		(1.0)			複合口縁の細片。水平縁の端部を上方に拡張する。全面回転ナデとする。砂礫：石英・珪長岩・泥質岩・砂岩。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。(弥生・後期後半)
323	包含層	土器	鉢		(5.0)			口縁端を欠く。概ね丸型を呈するが、径3cmの平坦な接地面を持つ。全面風化。砂礫：石英・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄橙。砂礫の円磨度は高め。(古墳・初頭頃)
324	包含層	土器	壺		(2.8)			薄胎の上胴部細片。貼付刻目列点紋を1列した後、その直上に櫛描直線紋帯を施す。破片の下方には、円形浮紋を横列し、それらの中央に円形刺突を加える。貼付刻目列点紋の施順は、左から右。砂礫(極多)：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は灰橙。胎内に炭素が多残。砂礫の円磨度は極低い。(弥生・中期末)
325	包含層	土器	高杯		(9.5)			杯底～脚柱。杯部内底はナデ調整。脚柱外面には、横ナデに縦ハケ目を重ねた後、回転台右旋の多条直線紋帯を櫛描。脚基部外面には指頭圧痕が横列。脚柱内面は、ヘラで削り回す。砂礫(多)：微粒石英・石英粒子集合体・長石・珪長岩・泥質岩・火山ガラス・角閃石・磁鉄鉱。	胎色は橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低い。比較的大粒の長石と共に降下テフラ(無色・有色の火山ガラスが主体)を胎内に含有する点が際立ち、県西南部産あるいは搬入品の可能性も否定出来ない。(弥生・中期末)
326	包含層	土器	壺	16.2	(3.2)			広口壺の外貼帯肥厚口縁細片。口唇面は垂直であり、外肥面には左から右の順に指頭圧痕が並び、外肥面の直下には縦ハケ目、内面には斜位右降のハケ目を施す。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・火山ガラス。	胎色は橙。砂礫の円磨度は低い。火山ガラスの分布密度は高く、胎表面では4片/20平方mm程度の検出頻度。いずれもバブルウォール型(無色・有色)に属し、長径0.8mm以下で、一般に他の土器片に含まれるガラス片よりサイズが大き目。(弥生・中期末)
327	包含層	土器	甕	20.8	(2.1)			広口壺の外貼帯肥厚口縁片であり、器壁は薄め。全面の風化が著しく、調整痕は判然としない。砂礫(多)：石英・長石・珪長岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は黄橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度は低め。火山ガラスの検出頻度は高く、バブルウォール型の他に、管型が少見される。(弥生・中期末)
328	包含層	土器	甕		(4.4)		2.4	下胴～底部片。外面は、平行叩目に縦ハケ目を重ねる。内面は、底部中央に指頭圧痕を留め、胴部では左旋回でハケ目を上昇する。砂礫(多)：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は灰橙。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度はやや低め。所含の火山ガラスは、バブルウォール型に属す。所含のチャート粒子は円磨度が高い。(弥生・後期末)
329	包含層	土器	甕		(6.8)		3.4	下胴～底部片。外面は、平行叩目に縦ハケ目を重ねる。内面は、底部に指頭圧痕とナデ痕を留め、胴部では縦斜のハケ目を施す。砂礫(多)：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・黒雲母。	胎色は灰橙。砂礫の円磨度は高い。特にチャート粒子の円磨度が高い。外面および内面の一部に炭素吸着を生じている。(弥生・後期後半)
330	包含層	土器	鉢	7.8	(4.9)			体部。外傾度は低く、体壁は直筒形に近い。外面は口縁に至るまで斜位の平行叩目とし、内面には指頭痕とナデ痕を留める。口縁端から胎切れを生じている。砂礫：石英微粒子・長石・珪長岩・砂岩・泥質岩・チャート。	胎色は黄灰。胎内に炭素が残留。砂礫の円磨度はやや高め。特に円磨を受けたチャート細礫の多含が特徴的。(弥生・後期後半)
331	包含層	土器	小型器		(2.1)		3.4	平底部。小型ながら、成形・調整手法は通常の場合と同軌。外面には平行叩目を施した後、縦ハケ目を重ねる。砂礫：長石微粒子・石英粗粒砂岩・シルト質細粒砂岩・砂質シルト岩。	胎色は黄灰。砂礫の円磨度は高め。(弥生・後期後半)
332	包含層	土器	甕		(4.3)			尖底気味の底部。内面の一部に指頭圧痕を留める他は、全面風化。砂礫：石英・長石・砂岩・泥質岩・チャート・火山ガラス。	胎色は黄灰。砂礫の円磨度は高め。所含の火山ガラスは、バブルウォール型に属す。(弥生・後期末)
333	包含層	土器	甕	14.0	(5.5)			薄壁の上胴～口部であり、「く」字形の断面を呈す。外面の一部に遺留する約1mm間隔の細かいハケ目を除き、全面風化。砂礫：石英結晶片岩・微粒長石・黒雲母・火山ガラス。	胎色は灰橙。胎内に少量の炭素が残留。砂礫に円磨の形跡を見ず。所見の火山ガラスは、平板状のバブルウォール型に属す。石英結晶片岩の長径は、4.0mm以下。搬入の東阿波型土器。(古墳・初頭)
334	包含層	土器	甕	15.3	(8.9)			薄壁の中胴～口部であり、口基部の上下は「く」字形の断面を呈す。口縁外面に横ナデ痕を留める他は、全面風化。砂礫：石英結晶片岩・石英微粒子・風化珪長岩。	胎色は灰橙。胎内に少量の炭素が残留。砂礫に円磨の形跡を見ず。石英結晶片岩の長径は6.5mm以下。搬入の東阿波型土器。(古墳・初頭)
335	包含層	土器	甕	15.3	(5.6)			薄壁の上胴～口部。口胴の屈折が強い。口縁内端を上方に小さく摘み上げ、口唇中央が窪む。胴部外面は右降ハケ目、内面は指頭圧痕。口基部以上の内外面は回転ナデ。砂礫：石英結晶片岩・石英粗粒砂岩・石英微粒子・長石微粒子・風化珪長岩・桃色微粒子・角閃石・火山ガラス。	胎色は灰橙。砂礫に円磨の形跡を見ず。石英結晶片岩の長径は2.0mm以下。火山ガラスの検出頻度は高く、器表面で5片/20平方mm程度。これらは、いずれも無色・有色のバブルウォール型に属し、平板型とY型が観察される。搬入の東阿波型土器。(古墳・初頭)
336	包含層	須恵器	甕					胴部細片。外面は平行叩目とし、内面には同心円紋の形跡が微かに残る。砂礫：石英<0.2mm・長石<2.0mm・珪長岩<1.0mm。	胎色は黄灰。焼成：低火度・弱酸化。(古代)

第V章 II区の調査成果

第1節 弥生時代の遺構

II区の調査成果だが、弥生時代の遺構について具体的な記載に入る前に、まず、II区における調査区の概要的な説明と、土層断面図(Fig.49~Fig.53)の説明をしておく。II区はI章等でも述べたようにII-A区・II-B区・II-C区と三つの調査区に分けて調査を実施した。本章では各時代に応じて、その調査区も記しながら説明する。各調査区の中で遺構毎ではない土層断面図の説明はこの節で行い、遺構毎のものはその都度行う。まず、II区において各調査区の土層断面図の説明をしておく。

II-A 北壁 東壁 (Fig.49)		II-B 北壁 (Fig.51)	
盛土	盛土	盛土	盛土
攪乱盛	攪乱盛土	攪乱	攪乱
攪乱	攪乱	II-1	褐灰色シルト・小礫混
I-1	黄色砕礫	II-2	褐灰色シルト・粗粒砂混
I-2	黄灰色砕礫	小円礫	小円礫
I-3	暗灰色シルト・黄色砕礫混	III-1	黒褐色シルト・小礫混
II-1	灰褐色シルト・円礫混	円礫	円礫
II-2	灰黄色粘質シルト・灰黄色砕礫混	IV-1	小礫・黒褐色土・粗粒砂
II-3	黒褐色土・黄灰色粘土混	IV-2	大礫(砂岩・珪岩・チャート)・粗粒砂
II-4	黄灰色シルト・黄色砕礫混	M-1	灰褐色シルト・粗粒砂混
II-5	暗黄褐色シルト	M-2	黒褐色シルト・粗粒砂混
礫	大礫・中礫・灰色粗粒砂混	M-3	大礫・小礫・粗粒砂混
II-6	オリーブ灰色シルト・粗粒砂混	M-4	黒灰色粗粒砂・中礫混
III-1	黒褐色シルト		
III-2	黒褐色シルト・粗粒砂混	II-B 東壁 (Fig.51)	
III-3	黒褐色シルト・黄色砕礫少混	盛土	にぶい黄橙色土・石灰岩小礫混
III-4	黒褐色シルト・黄色砕礫多混	I	褐灰色粘質土・黄色小礫混
III-5	黒褐色シルト・黄色砕礫混	II-1	灰黄褐色粘質土・黄色小礫混
M-1	黒褐色極細粒砂・シルト混	II-2	黒褐色土・細粒砂混
M-2	黒褐色シルト・細粒砂・円礫混	III	黒褐色土
IV-1	にぶい黄褐色シルト	M-1	黒褐色砂・円礫多混 (2.5Y3/1)
IV-2	黄灰色粘土	V	黒褐色砂・円礫多混 (7.5YR3/2)
IV-3	黄灰色粗粒砂		
IV-4	オリーブ灰色シルト・黒褐色シルト混		
IV-5	暗灰色シルト・中礫混		
IV-6	黒褐色シルト・粗粒砂・大礫混		

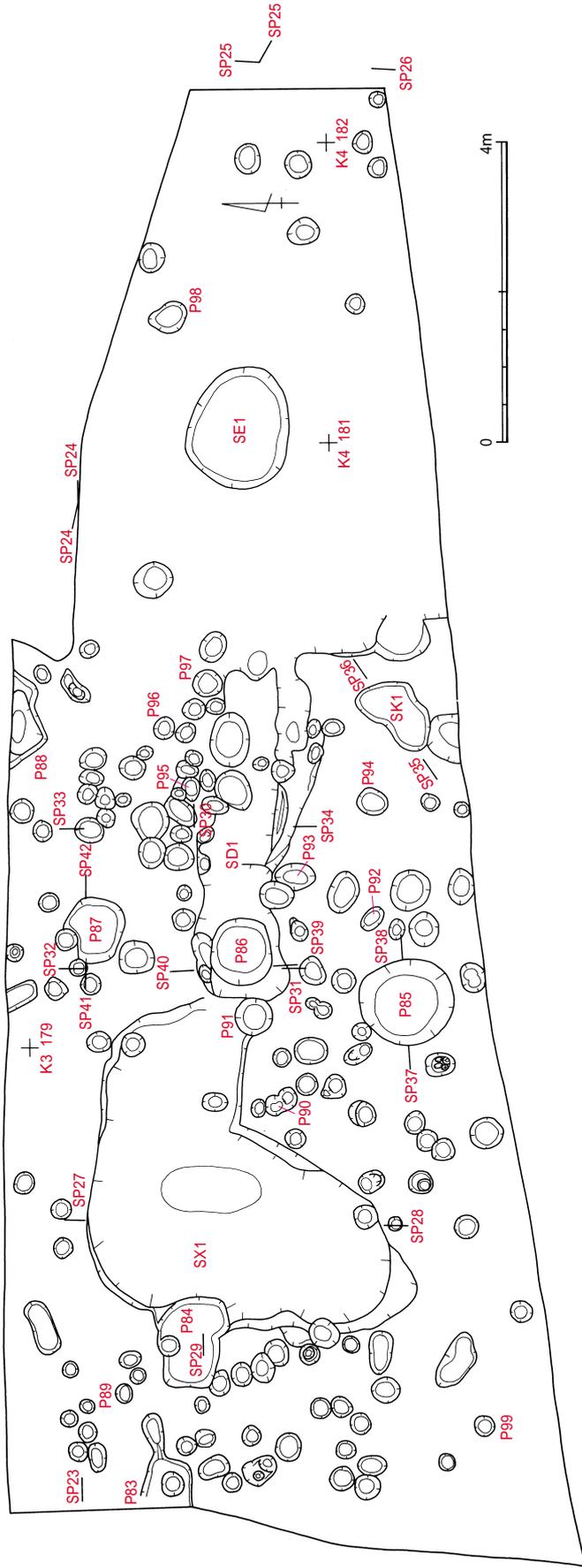
II-C区 西壁～北壁・東壁～南壁 (Fig.52)

盛土	盛土	M2-1	黒褐色シルト・砂混
K-1	攪乱	M2-2	灰褐色シルト・粗粒砂混
I-1	灰色粗粒砂・円礫少混	M2-3	黒褐色シルト・砂粒少混
I-2	灰色シルト・砂粒混	M2-4	黒褐色シルト・粗粒砂・細礫混
I-3	石灰岩小礫	M2-5	黒褐色シルト・小礫混
I-4	褐灰色シルト・粗粒砂混	M2-6	黒褐色シルト・粘土・多量の土器混じり
II-1	灰色シルト・細粒砂混	M3-1	黒褐色シルト・粗粒砂・小礫混
II-2	黄灰色シルト・細粒砂・小円礫・黄褐色碎礫混	M3-2	黒褐色粗粒砂・細礫混
II-3	黄灰色シルト・黄色碎礫少混	M3-3	黒褐色シルト・砂礫混
III-1	黒褐色シルト・砂礫混	M3-4	黒褐色シルト・砂礫混
III-2	黒褐色シルト・粗粒砂・小円礫混	M3-5	黒褐色シルト・砂礫少混
III-3	暗灰褐色粗粒砂・円礫混	M3-6	黒褐色シルト・礫砂微少混
IV-1	灰色砂礫	M3-7	黒褐色シルト・中礫微少混
IV-2	黒褐色シルト・粗粒砂混	M3-8	黒褐色シルト・粗粒砂・細礫混
V-1	黒褐色粗粒砂・小円礫混	M3-9	暗褐色シルト・粗粒砂・細礫混
V-2	灰色粗粒砂・細礫少混	M3-10	黒褐色シルト・粗粒砂・礫混
V-3	灰褐色粗粒砂	M3-11	黒褐色シルト・礫砂多混
V-4	オリーブ灰色粗粒砂・小礫混	M3-12	黒褐色シルト・砂礫少混
V-5	円礫	M3-13	黒褐色シルト・砂礫混
V-6	暗灰色粗粒砂・大礫混	M3-14	黒褐色土・砂礫混
M1-1	黒褐色シルト・小円礫・粗粒砂混	M3-15	黒褐色粗粒砂・礫混
M1-2	褐灰色シルト・円礫・粗粒砂混	M3-16	黒褐色砂礫
M1-3	灰褐色粗粒砂・小円礫混	M3-17	黒褐色シルト・灰色シルト混
M1-4	灰褐色シルト・粗粒砂・円礫混	M3-18	黒褐色土・粗粒砂・細礫混
M1-5	灰褐色粗粒砂・小円礫混	M3-19	黒褐色粗粒砂・小礫混
M1-6	黒褐色粗粒砂・小円礫混	M3-20	黒褐色粗粒砂・中礫混

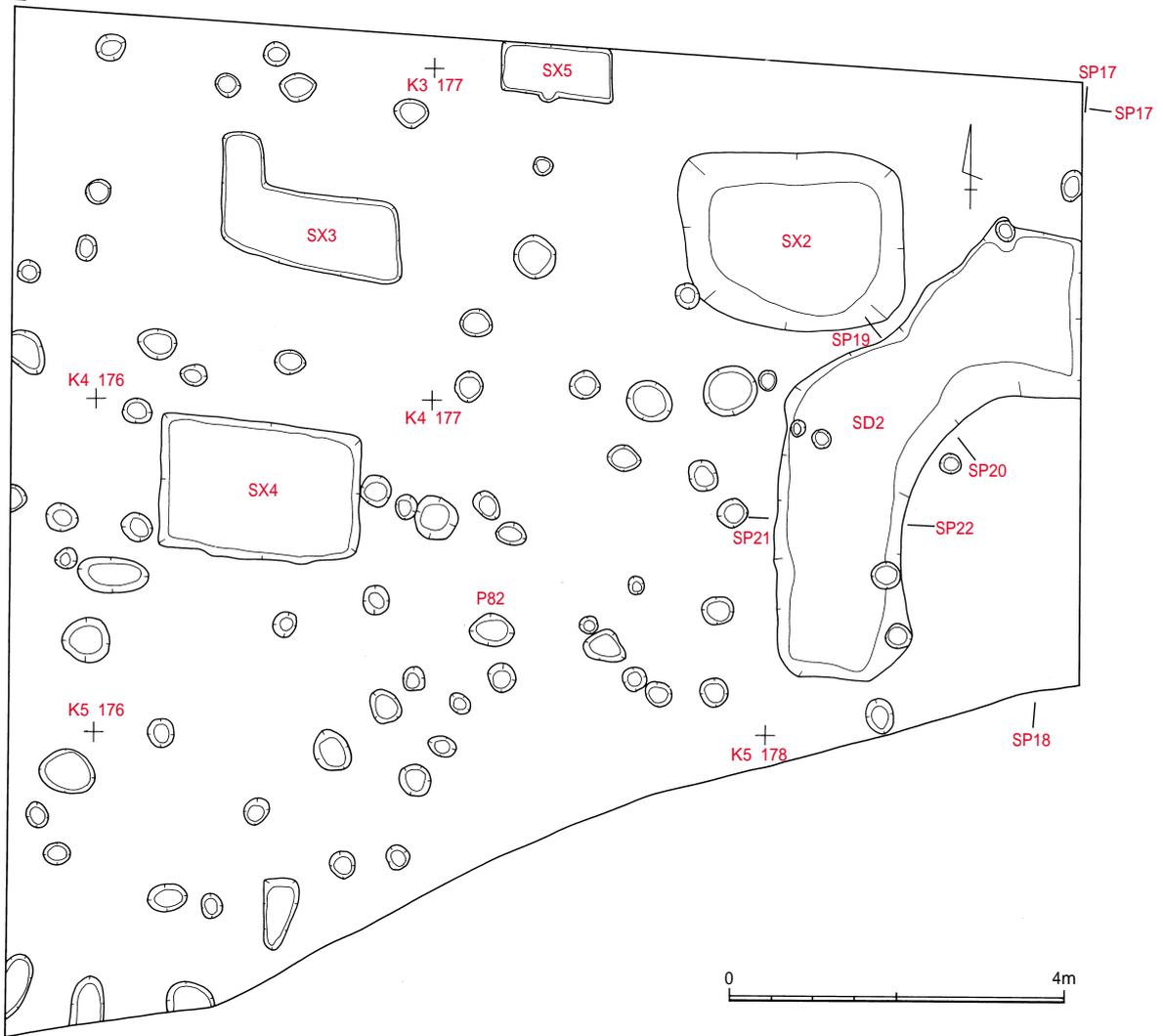
以上に示したものが各調査区の土層断面図の説明である。

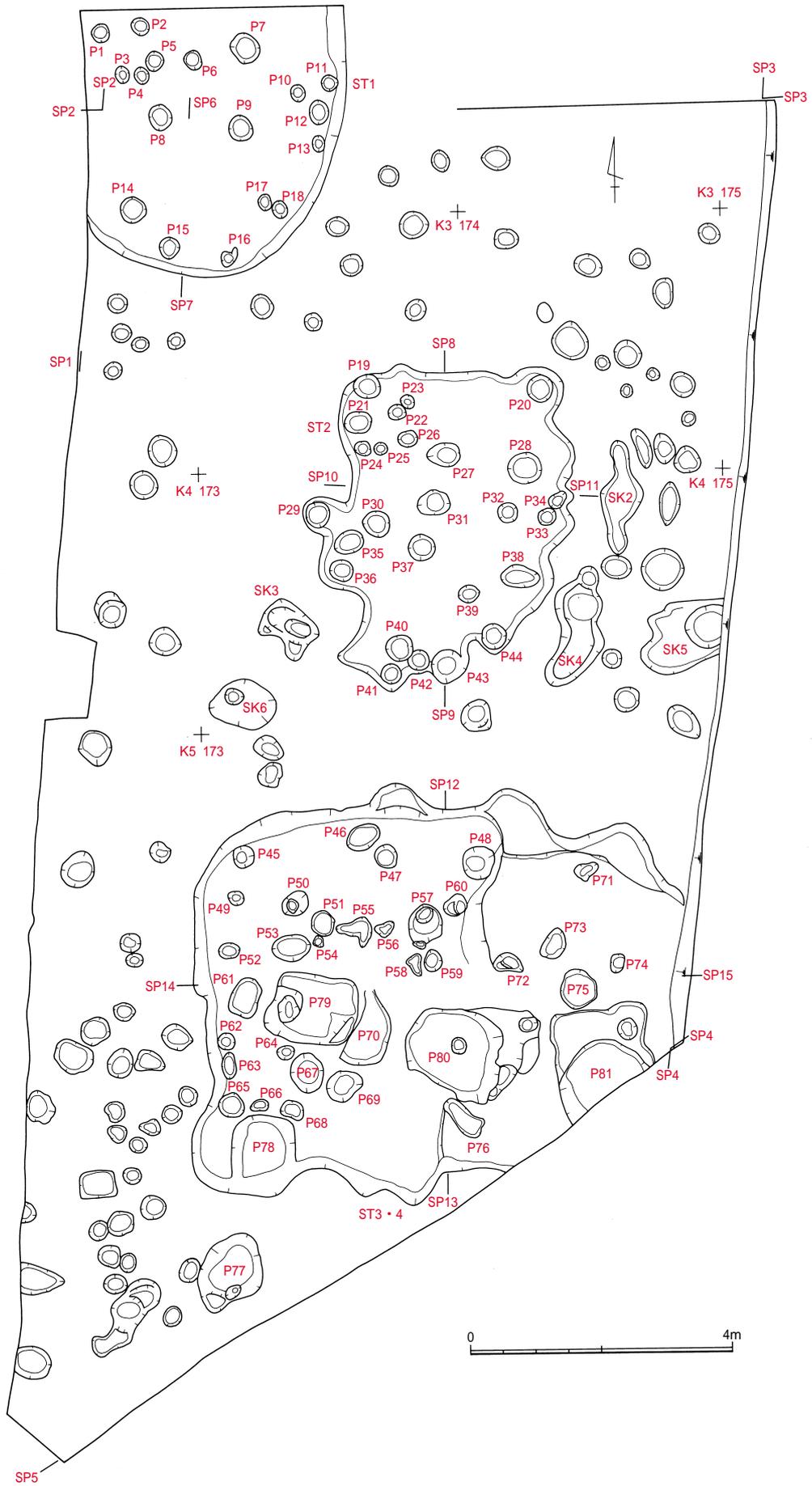
次に各調査区の遺構についてだが、II-A区では、弥生時代、古代、中世、近世の遺構が同一面で検出されるため埋土の堆積状況や色・種類、包含される遺物等によって時期の違いを判断した。その結果約150のピットが弥生時代の遺構であると考えられる。埋土に中世の遺物を包含するピットが数個見られたが、掘立柱建物跡として確認するには至らなかった。II-B区では約70のピットが弥生時代の遺構であると考えられる。II-C区では約160のピットが弥生時代（弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられるものも含む。）の遺構であると考えられる。

これより、各時代の遺構について具体的に紹介していく。まず初めに弥生時代の遺構の内容である。

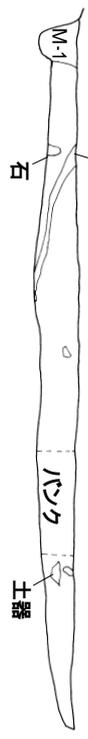


SP16





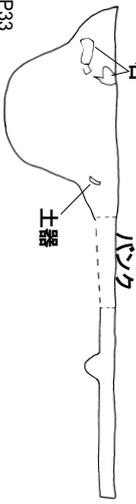
SP28 A区 SXI 南北バツク



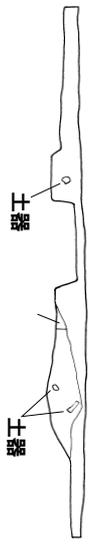
SP29 A区 SXI SDI 東西バツク



SP31 A区 SDI 南北バツク(西側)



SP33 A区 SDI 南北バツク(東側)



SP35 A区 SKI 南壁



SP39 A区 P86 東壁



SP27

SP30

SP32

SP33

SP34

SP35

SP37

SP38

SP36

SP41

SP42

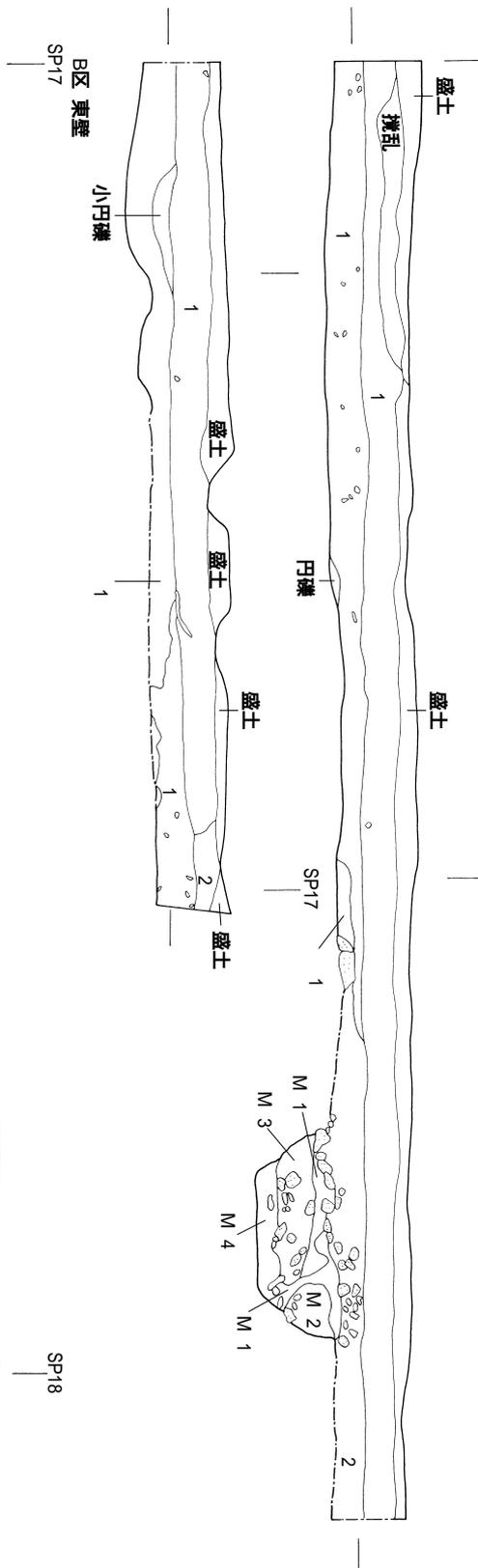
SP39

SP40

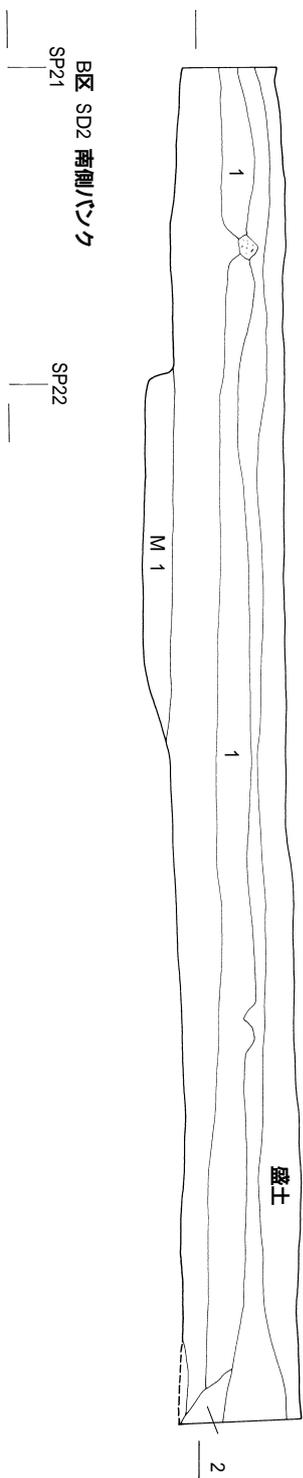
DL = 4.40m



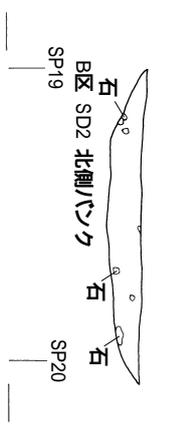
B区 北壁
SP16



B区 SD2 南側バツク
SP21



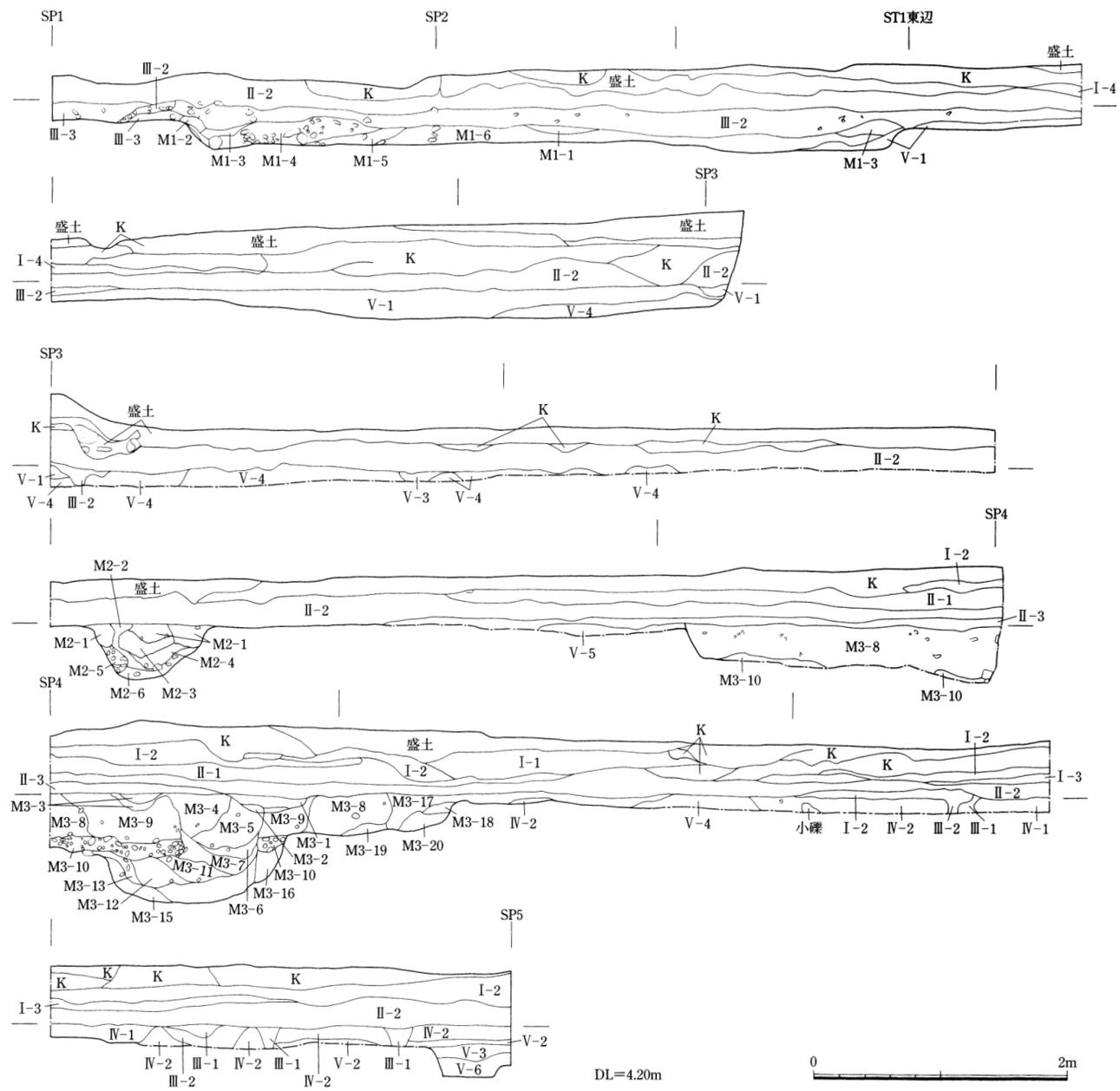
B区 SD2 北側バツク
SP19

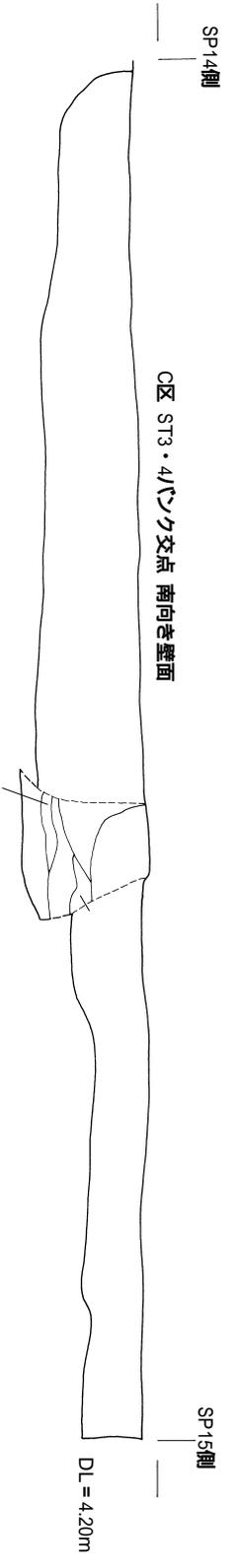
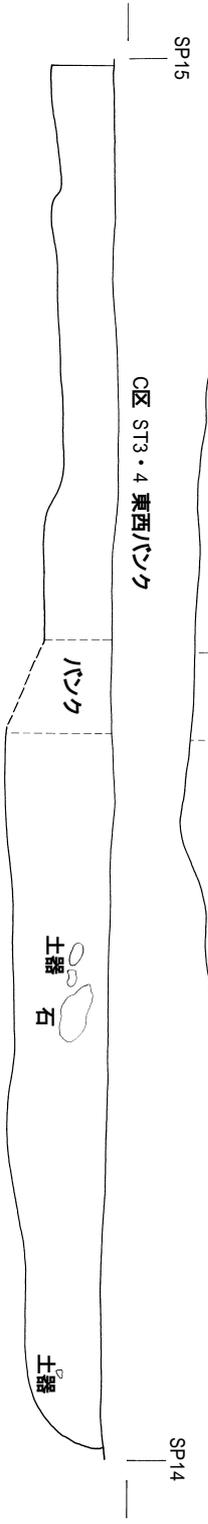
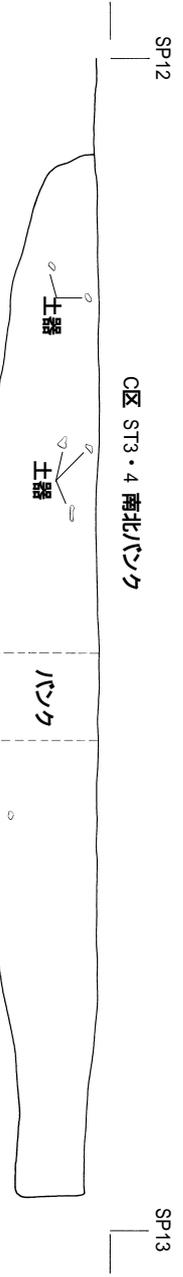
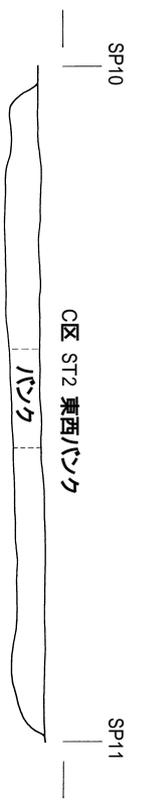
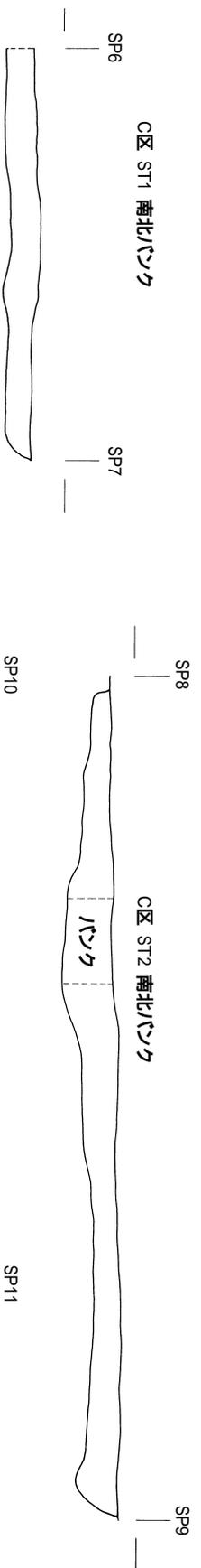


DL = 4.20m



II-C区 西壁~北壁・東壁~南壁





1. SK 1 (Ⅱ-A区) (Fig.46、56)

長径は約114cm、短径は約54cm、深さは約17cmを測る。埋土の状況は次の通りである。

Ⅱ-A区 SK 1 南壁 (Fig.50)

I 黒褐色土

2. ST 1 (Ⅱ-C区) (Fig.48、54)

ST 1は調査区Ⅱ-C区の北西角に位置する。楕円形プランであると考えられるが一部、道路、溝等の関係で消失した部分と、調査不可能な部分がある。長径は5.6m、短径は4.8mが推測できる。推定面積は約22㎡である。残存状況は良好ではないが、深さは平均25cm程度である。砂礫面に造られた竪穴住居跡であり、水害によって削平された可能性が考えられる。また古くない時期の人為的な削平も行われたようである。柱穴の位置関係は不明であるが、住居跡内のピットの法量は紹介しておく。P1が径26cm、深さ11cm。P2が径24cm、深さ19cm。P3が径20cm、深さ15cm。P4が径20cm、深さ9cm。P5が径28cm、深さ19cm。P6が30×26cm、深さ17cm。P7が径40cm、深さ17cm。P8が径31cm、深さ7cm。P9が径36cm、深さ28cm。P10が径20cm、深さ17cm。P11が径24cm、深さ30cm。P12が38×30cm、深さ18cm。P13が26×18cm、深さ16cm。P14が径40cm、深さ16cm。P15が径30cm、深さ12cm。P16が径20cm、深さ11cm。P17が径20cm、深さ16cm。P18が径22cm、深さ10cmを測る。主柱穴を推測しかねるので主柱間距離も不明である。弥生時代後期に埋まったものと考えられる。

Ⅱ-C区 ST 1 南北バンク (Fig.53)

I 褐灰色土・砂礫混

3. ST 2 (Ⅱ-C区) (Fig.48、54)

ST 2は調査区Ⅱ-C区のほぼ中央に位置する。方形に近い不定形のプランである。長辺は4.8m、短辺は3.6m、面積は約17㎡を測る。残存状況はST 1同様良好ではない。深さは平均20cmを測る。砂礫面に造られた竪穴住居跡であり、水害、人為的な削平等の影響を受けている。柱穴の位置関係もST 1同様である。住居跡内のピットの法量は次の通りである。P19が径40cm、深さ16cm。P20が径38cm、深さ18cm。P21が径40cm、深さ20cm。P22が径25cm、深さ11cm。P23が径20cm、深さ10cm。P24が径25cm、深さ10cm。P25が径20cm、深さ9cm。P26が径28cm、深さ18cm。P27が50×36cm、深さ13cm。P28が51×47cm、深さ27cm。P29が径38cm、深さ14cm。P30が径40cm、深さ22cm。P31が48×40cm、深さ11cm。P32が径30cm、深さ14cm。P33が径28cm、深さ17cm。P34が径22cm、深さ14cm。P35が46×35cm、深さ16cm。P36が径30cm、深さ20cm。P37が径40cm、深さ29cm。P38が60×34cm、深さ18cm。P39が32×25cm、深さ22cm。P40が径40cm、深さ24cm。P41が径30cm、深さ12cm。P42が径30cm、深さ15cm。P43が径50cm、深さ16cm。P44が径35cm、深さ19cmを測る。弥生時代後期に埋まったものと考えられる。埋土の状況は次の通りである。

Ⅱ-C区 ST 2 南北バンク (Fig.53)

I 褐灰色土・砂礫混

Ⅱ-C区 ST2 東西バンク (Fig.53)

I 褐灰色土・砂礫混

4. ST3 (Ⅱ-C区) (Fig.48、54)

ST3は調査区Ⅱ-C区の南方に位置する。方形に近いプランである。長辺6.4m、短辺4.8m、推定面積31m²を測る。残存状態はST1、ST2と比較すると良い方であるが、東側の一部を竪穴住居跡ST4によって削られ、また、古代の建物跡の柱穴によっても壊されている。深さは平均50cmを測る。ST3でも水害による影響が堆積の中に見られた。砂礫面に造られた竪穴住居跡である。中央ピット(P70)はほぼ床面の中心部に位置するが、古代の柱穴(P79)によって壊され、多くの部分を失っている。P70の埋土には多くの炭等を含んでいた。P70の法量は110×100cm、深さ18cmである。柱穴の位置関係は、床面が砂礫であることと、前に述べたような理由により明確ではない。住居跡内のピットの法量は次の通りである。P45が径30cm、深さ16cm。P46が55×36cm、深さ32cm。P47が径32cm、深さ20cm。P48が径50cm、深さ28cm。P49が径23cm、深さ14cm。P50が42×36cm、深さ41cm。P51が径37cm、深さ14cm。P52が30×20cm、深さ10cm。P53が60×40cm、深さ12cm。P54が径15cm、深さ8cm。P55が50×40cmの不定形、深さ10cm。P56が30×20cm、深さ7cm。P57が60×52cm、深さ22cm。P58が35×23cmの不定形、深さ10cm。P59が径30cm、深さ13cm。P60が径33cm、深さ27cm。P61が60×40cm、深さ11cm。P62が径25cm、深さ8cm。P63が40×20cm、深さ7cm。P64が27×20cm、深さ11cm。P65が径38cm、深さ12cm。P66が26×18cm、深さ13cm。P67が60×50cm、深さ35cm。P68が32×24cm、深さ10cm。P69が60×44cm、深さ23cmを測る。弥生時代後期に埋まったものと考えられる。

5. ST4 (Ⅱ-C区) (Fig.48、54)

ST4は調査区Ⅱ-C区の南方に位置する。方形に近いプランである。部分的に道路等により未検出であり、調査では長辺5.2m、短辺3.2mを測る。面積は調査部分のみで約14m²である。ST4はST3に一部重なる形で造られている。また、古代の建物跡の柱穴により壊された部分が多い。深さは平均40cmを測る。ST3同様に水害によって影響を受けている痕跡が土層断面図(Fig.52)に見られる。住居跡内の主なピットの法量は次の通りである。P71が35×23cm、深さ10cm。P72が44×30cm、深さ15cm。P73が50×30cm、深さ15cm。P74が径24cm、深さ18cm。P75が径57cm、深さ11cm。P76が70×30cm、深さが12cmを測る。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて埋まったものと考えられる。

ST3・ST4の土層断面図の説明は次の通りである。

Ⅱ-C区 ST3・4 南北バンク (Fig.53)

I 黒褐色土

Ⅱ-C区 ST3・4 東西バンク (Fig.53)

I 黒褐色土

Ⅱ-C区 ST3・4 バンク交点 南向き壁面 (Fig.53)

- I 黒褐色シルト・円礫・砂多混
- Ⅱ 黒褐色シルト・小円礫・砂少混
- Ⅲ 洪水性灰色礫層 (礫は10cm以下)
- Ⅳ 洪水性灰色礫砂層 (礫は4cm以下)
- V 黄灰色粗粒砂層・小礫混
- Ⅵ 黄灰色粗粒砂層・円礫混 (古代柱穴の底)

6. SK2～SK6 (Ⅱ-C区) (Fig.48)

それぞれの土坑の法量は次の通りである。SK2は172×64cm、深さ11cm。SK3は90×50cm、深さ29cm。SK4は192×72cm、深さ44cm。SK5は140×90cm、底面に径64cmのピットを持つ、深さ39cm。SK6は105×76cm、深さ20cmを測る。

第2節 古代の遺構

古代の遺構は、掘立柱建物跡の柱穴と見られるもの、及びその可能性のあるものがⅡ-A区とⅡ-C区で検出された。

1. Ⅱ-A区SB (Fig.46、55)

調査区Ⅱ-A区中央部で検出したP85、P86、P87で構成される。方向はN-15°-Eである。柱間寸法は2.0m、2.24m。柱穴の法量は、P85が126×114cmの楕円形、深さは48cm。P86が径86cmのやや方形に近い円形、深さは69cm。P87が径86cmの一部凹凸のある丸みを持つ方形、深さは38cmを測る。これらの遺構と関連し同一の建物跡の柱穴となるかどうかは不明だが、同時期に存在した別の建物跡の柱穴である可能性を持つピットが次である。P83は一辺が58cmの方形で、底に円形のピットを持ち、深さは19cmである。P84は長辺120cm、短辺80cmの丸みを持つ長方形で、深さは37cmである。埋土の上部は部分的に中世の影響を受けている。P88は100×40cmで一部未調査地にあり全体の形は不明である。深さは73cmである。

Ⅱ-A区 P85 (Fig.50)

- I 黒褐色土

Ⅱ-A区 P86 (Fig.50)

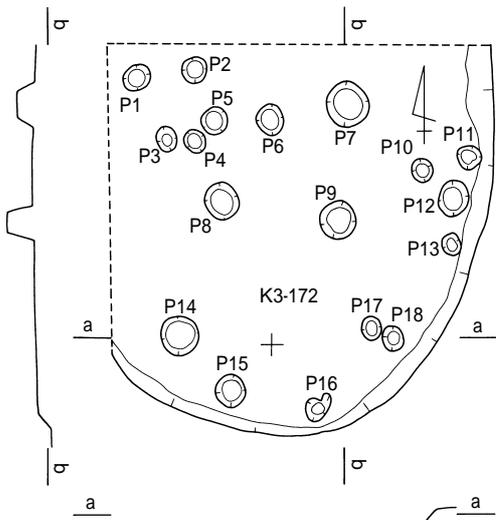
- I 黒褐色粘質土 (弥生土器片・礫混)

Ⅱ-A区 P87 (Fig.50)

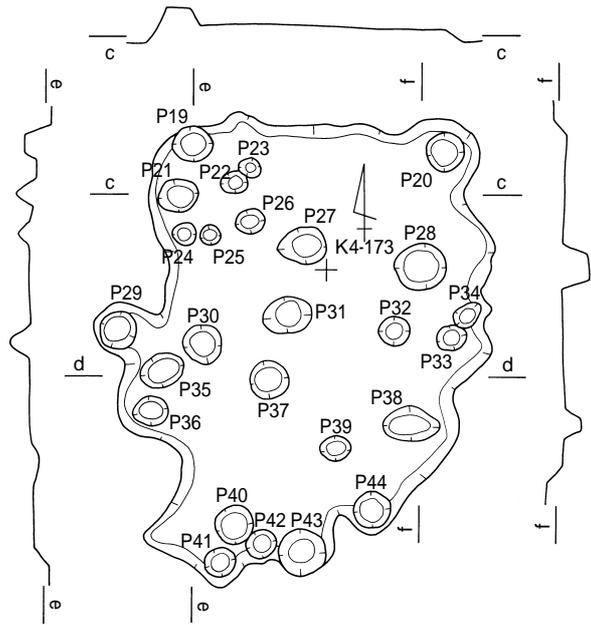
- I 黒褐色土 (土器片・礫混)

2. Ⅱ-C区SB (Fig.48、55)

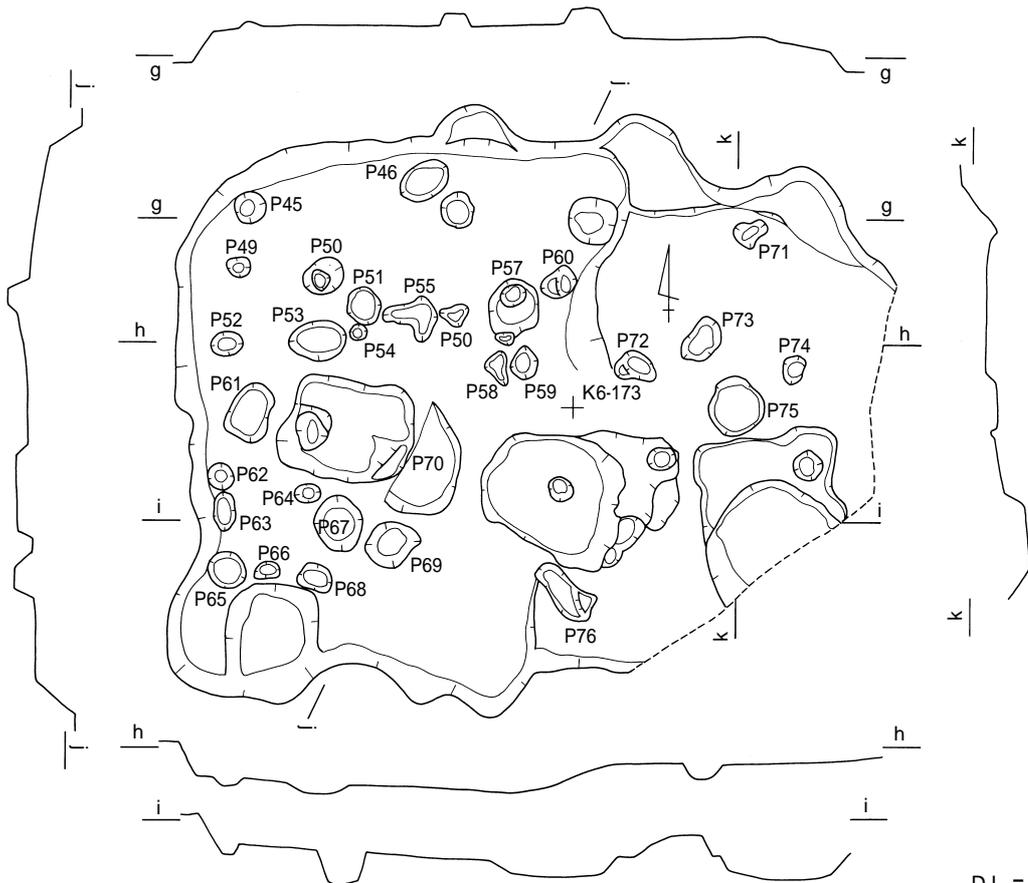
調査区Ⅱ-C区南方のST3・4と重なる位置で検出した。P77、P78、P79、P80、P81で構成される。残りの柱穴は既存の県道があり発掘調査対象地外となる。方向はN-15°-Eである。柱間寸法は1.92m～2.32mである。柱穴の法量は、P77は長辺140cm、短辺100cmの丸みを持った方形、深さは35cm。P78は長辺120cm、短辺100cmの丸みを持った方形、深さは68cm。P79は長辺140cm、短辺



ST 1



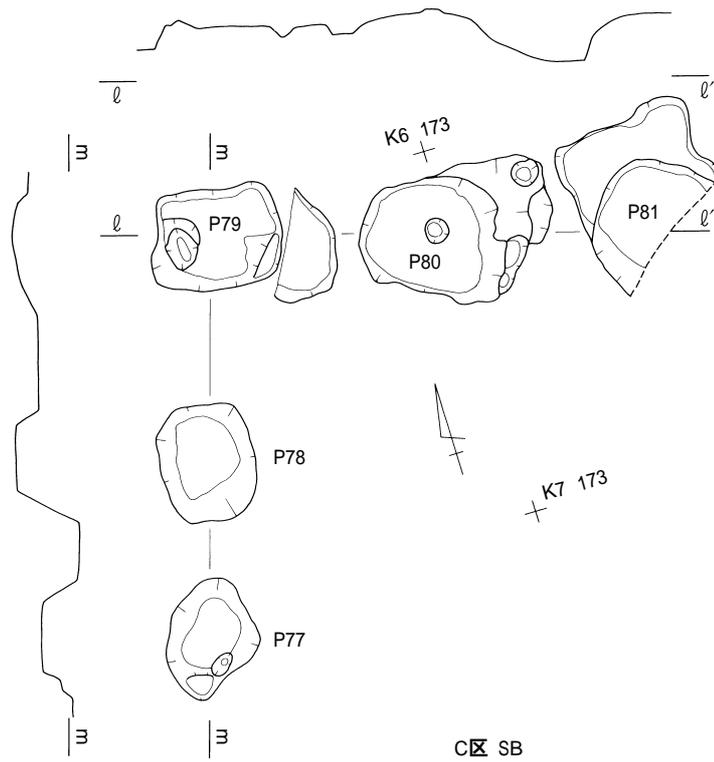
ST 2



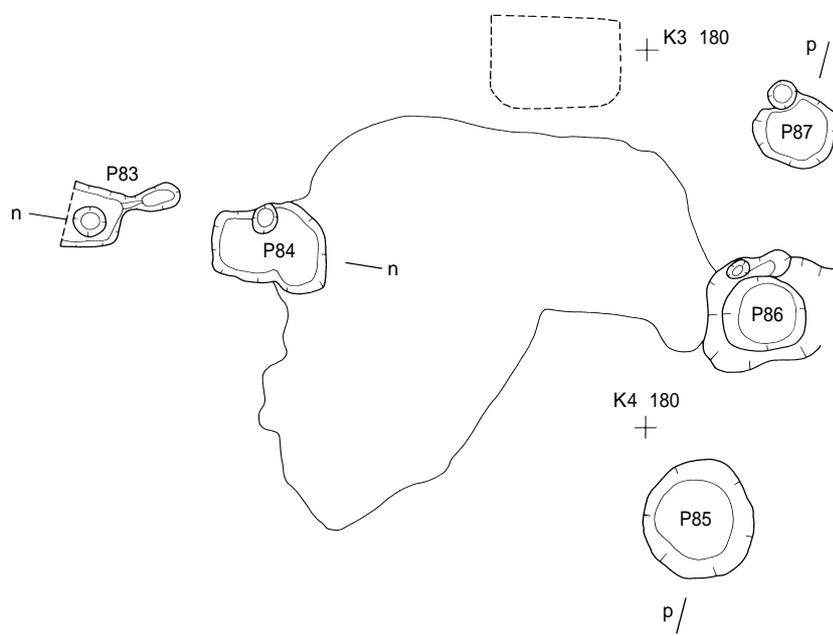
ST 3+4

D.L = 4.00 m

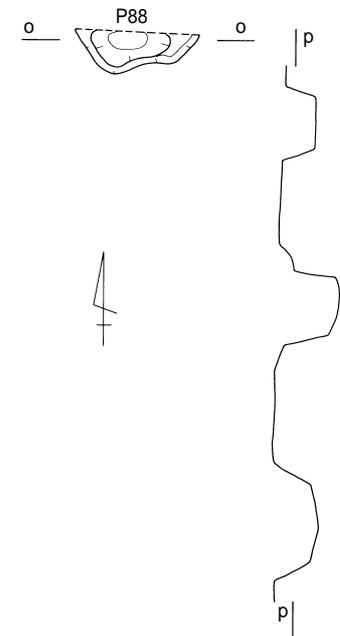




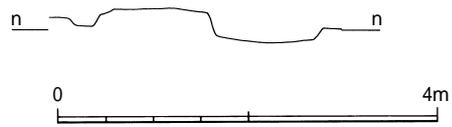
C SB



A SB



DL = 4.00m



100cmの丸みを持った方形、深さは75cm。P80は長辺140cm、短辺120cmの丸みを持った方形、深さは82cm。P81は一辺が140cmの方形だが底で円形の掘り込みとなる。深さは75cmを測る。

第3節 中世遺構

中世の遺構は、Ⅱ-A区ではSD1、SX1と数個のピットが検出された。SD1をSX1が切る形である。Ⅱ-B区ではSD2が検出された。後の掘削を受ける前まではSD1とSD2は一つの流れを形成していた可能性がある。

1. SD1 (Ⅱ-A区) (Fig.46、56)

調査区Ⅱ-A区の中央部に位置し東西方向に流れる。本来は、調査区の東端西端間を流れていたものと考えられるが、Ⅱ-A区の東部は、近世以後の掘削で調査区の広い範囲で影響を受けているため、SDの痕跡はない。SD1は、幅は約184cmから120cmで、検出部分のみで長さ約6mを測る。深さは平均20cmである。

Ⅱ-A区 SD1 南北バンク (西側) (Fig.50)	Ⅱ-A区 SD1 南北バンク (東側) (Fig.50)
I 黒褐色土	I 黒褐色土 10YR3/2
	II 黒褐色土 10YR3/1
	III にぶい黄褐色土

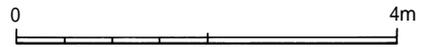
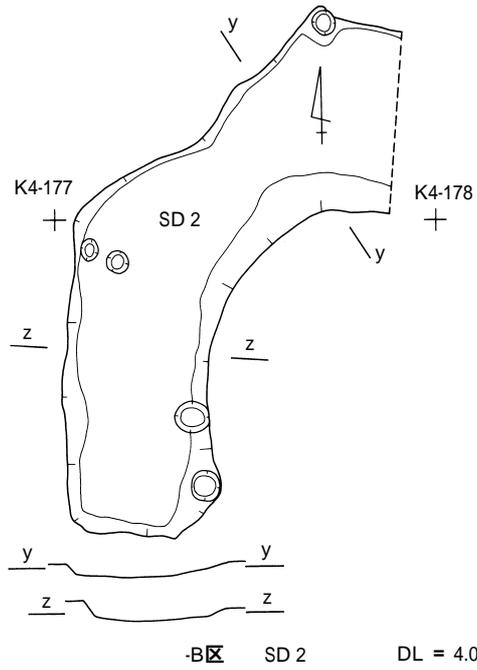
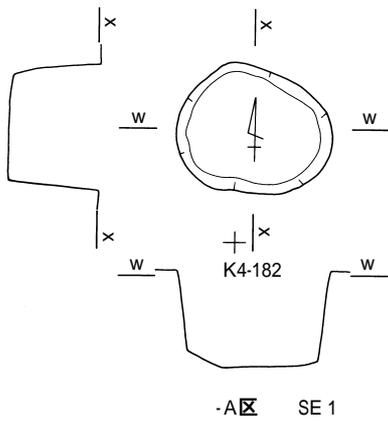
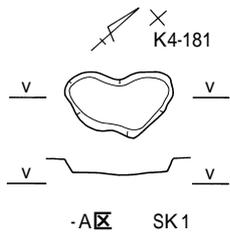
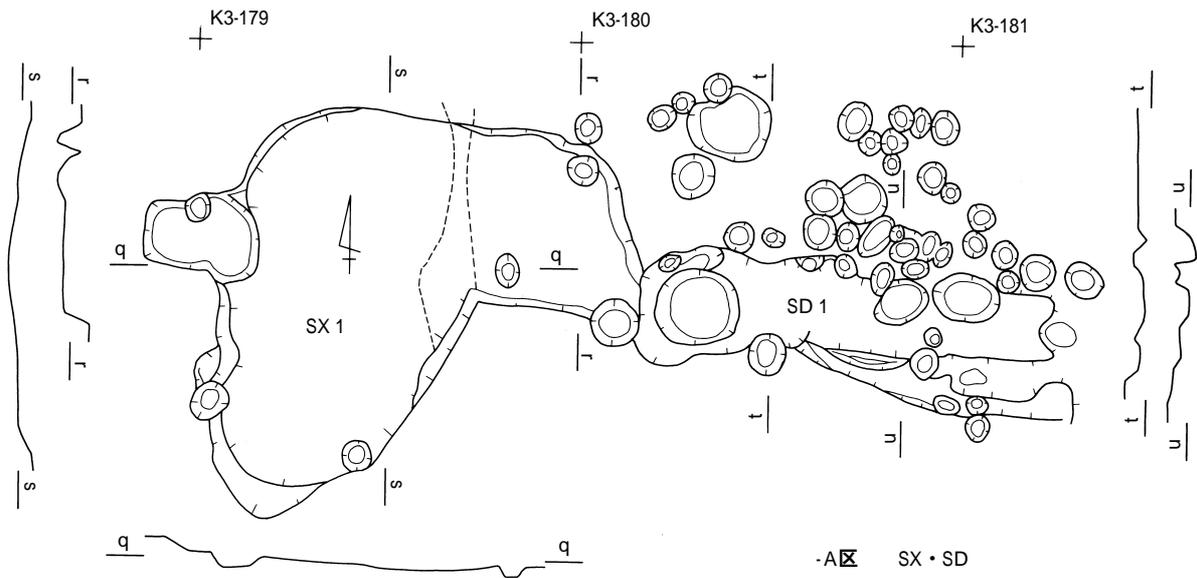
2. SX1 (Ⅱ-A区) (Fig.46、56)

調査区Ⅱ-A区の西方に位置する。SD1との時期差はそれほど無いと思われる。長径が440cm、短径が280cmで南北方向に長い楕円形である。皿状にやや東よりの最深部に向かって徐々に深くなっていき深さは約30cmを測る。埋土の堆積は3層を形成している。

Ⅱ-A区 SX1 南北バンク 東壁 (Fig.50)	Ⅱ-A区 SX1 東西バンク 南壁 (Fig.50)
I 黒褐色土 7.5YR3/1	I 黒褐色土 7.5YR3/1
II 褐灰色土	II-1 黒褐色土 10YR3/2
III 黒褐色土 10YR3/1	II-2 褐灰色土
M-1 黒褐色土 7.5YR3/2	II-3 灰黄褐色土
	III 黒褐色土 10YR3/1
	M-2 黒褐色土 7.5YR3/1

3. SD2 (Ⅱ-B区) (Fig.47、56)

調査区Ⅱ-B区の東方に東端から南壁に向かって曲線を描く形で位置する。幅は200cmから160cm、全長は検出部分のみで約6.5mを測る。深さは平均25cmである。SD2もSD1同様、後の時代の削平によって検出部分しか現存していないと考えられる。



II-B SD2 南側バンク 南壁 (Fig.51)
I 黒褐色砂・円礫多混

II-B SD2 北側バンク 南壁 (Fig. 51)
I 黒褐色砂・円礫多混

4. その他 (II-A区) (Fig.46)

調査区 II-A区において数個のピットから中世の遺物の出土が見られた。出土実測図に記載している遺物を出土した遺構はP93とP96である。P93は54×34cmの楕円形で、深さ23cmを測る。P96は径28cmの円形で深さ23cmを測る。

第4節 近世の遺構

近世の遺構は、II-A区ではSE1 (Fig.46、56)。II-B区ではSX2、SX3、SX4、SX5 (Fig.47)がある。なおSXについては、近世以降の遺構という表現がふさわしいと思われる。

1. SE1 (II-A区) (Fig.46、56)

調査区 II-A区の東方に位置する。SE1の位置する部分はこの遺構の時期より後の近世の攪乱的な掘削のあった場所で、その攪乱層の下に深さのあったSEと、弥生時代のものと思われるピットを検出した。SE1は長径が160cm、短径が130cmの楕円形である。機能していた時の井戸の大きさは径130cmの円形と考えられる。検出時にはこの大きさと周囲に石を組んで作られていた。160cmの径になる部分は、井戸を造る際に掘り下げるために広げられていた部分と考えられる。深さは攪乱層を取り除いた検出面から101cmである。

2. SX2～SX5 (II-B区) (Fig.47)

SX2は268×214cmの丸みを持つ長方形であり、深さは平均66cmを測る。SX3は210×95cmの長方形で部分的に45×45cmの突出部分を持ち、深さは平均84cmを測る。SX4は236×160cmの長方形で、深さは27cmを測る。SX5は130×60cmの長方形で、深さは47cmを測る。

第5節 出土遺物

遺物はII-A区からII-C区全体で数えることができる個体で約15,000点の出土がみられた。内容は大半が弥生時代の遺物で、約96%を占めている。時期は弥生時代中期から弥生時代後期終末にかけてである。そして若干の弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物も出土した。その中には搬入品である東阿波型土器も見られた。次に、古代の須恵器 (図版番号352、353、354、609、610、611)の出土が見られた。これらはいずれも掘立柱建物跡の柱穴と考えられる遺構から出土している。8世紀後半から9世紀にかけての時期のものである。また、数点の須恵器瓦の出土もその時期の遺構の状況を考える上で興味を引くところである。中世については若干の遺物しか出土していない。土師器、白磁、青磁等である。これらはSD、SX1等から出土している。近世以降については、同時期の遺物の大半はII-B区 SXからの出土である。また約80点の出土があった瓦も多くがSXからの出土である。陶磁器は約100点の出土が見られた。

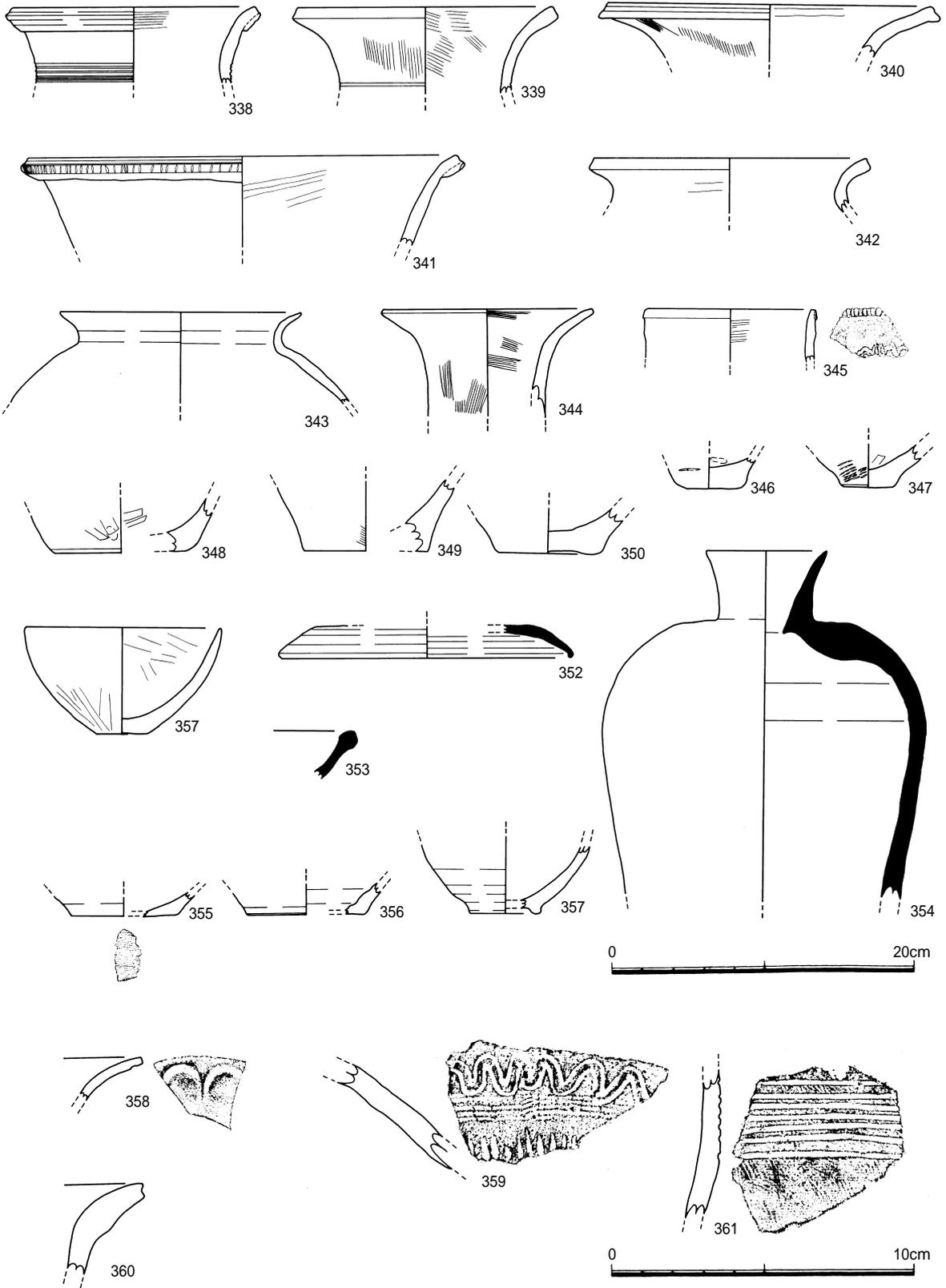
弥生時代の遺物について見てみると、II-A区では約3,100点の土器の出土があり、割合は弥生時

代後期よりも中期の土器のほうがやや多めであった。石器は約50点の出土である。Ⅱ－B区では約900点の土器の出土があり、ここではほとんどが後期の土器であった。石器は約20点の出土である。Ⅱ－C区では、約11,000点の土器の出土があり、そのうち約8,000点がST3からの出土である。(出土遺物観察表での表現で出土場所ST3の中には約20%のST4出土の遺物を含む。)Ⅱ－3区での中期と後期の割合は、ほぼ1：1であるが、STに限って言うとやはり後期の遺物が若干ではあるが多めになってくる。石器については約100点の出土が見られた。弥生時代遺物の中でひとつ前期の遺物と考えられる木葉文を施文した壺の破片がST3より出土していた。(図版番号590)

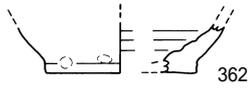
古代、中世、近世については先に述べたとおりである。出土遺物については以上である。

(江戸秀輝)

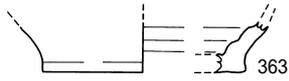
A Pit • SK



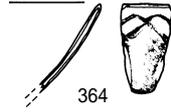
A区 SDI · SXI · 集中



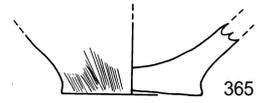
362



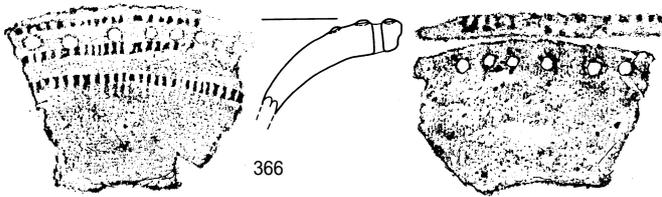
363



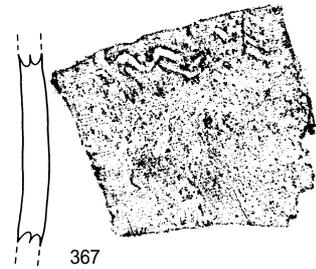
364



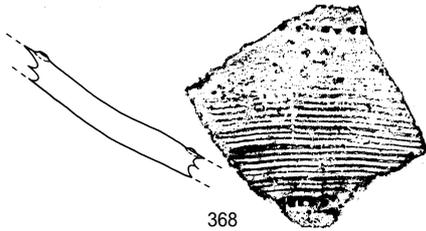
365



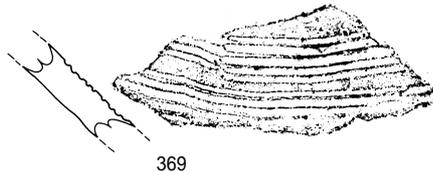
366



367



368



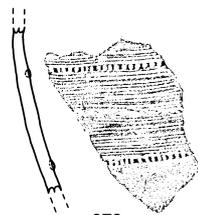
369



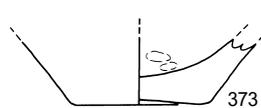
370



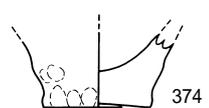
371



372



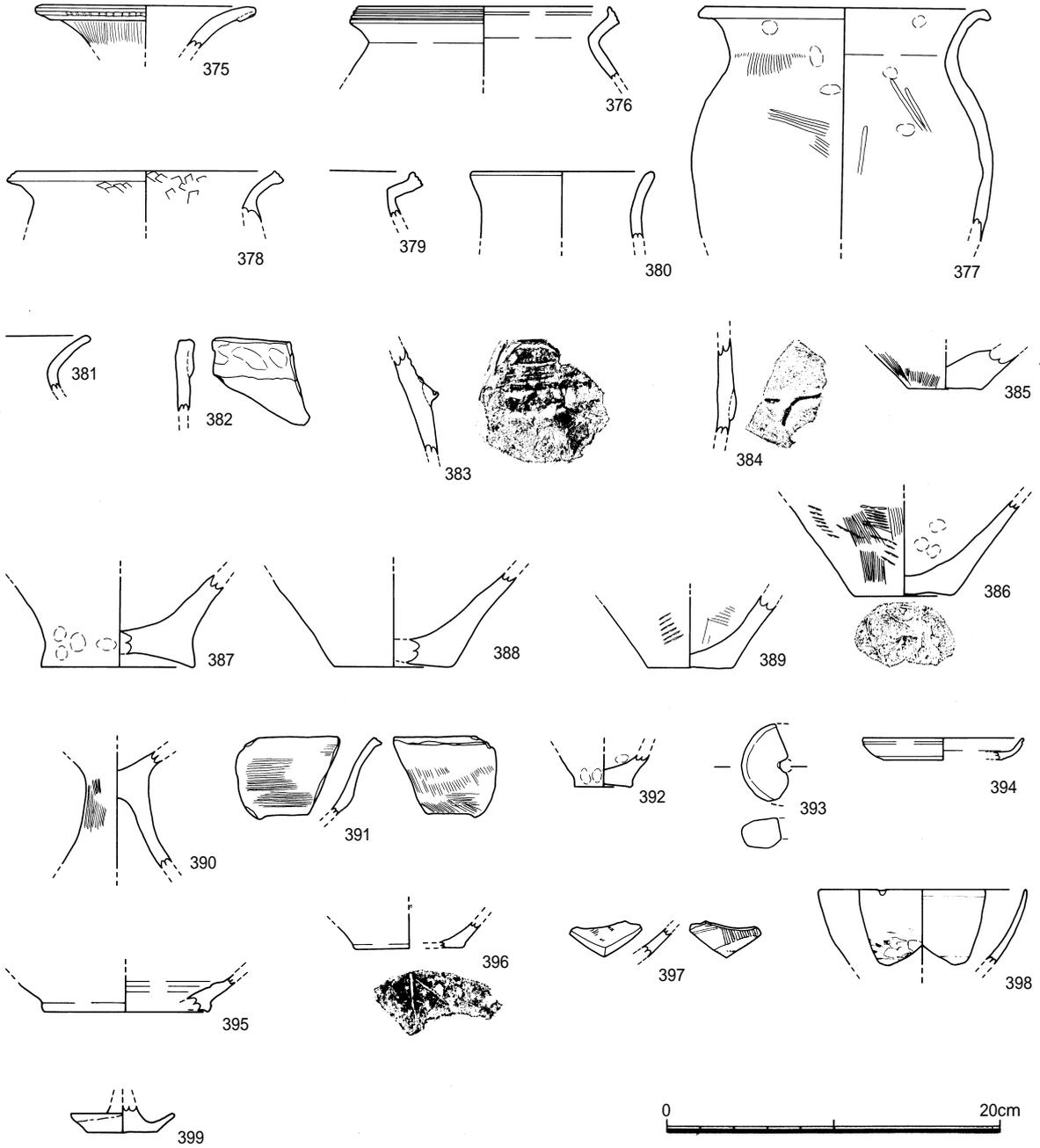
373

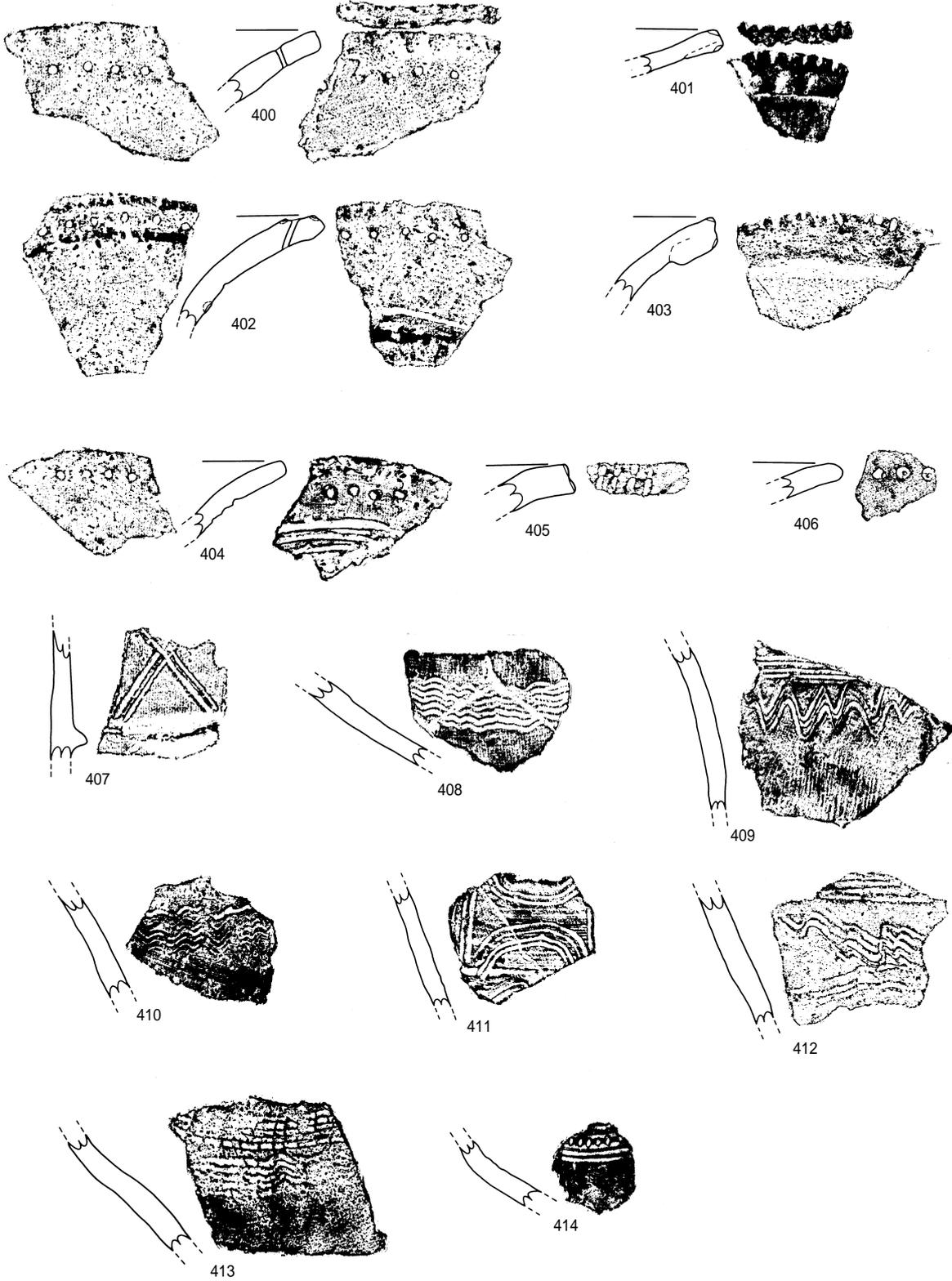


374



A区 包含層

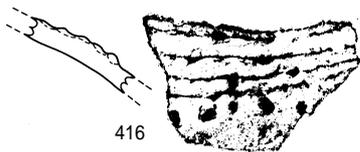




0 10cm



415



416



417



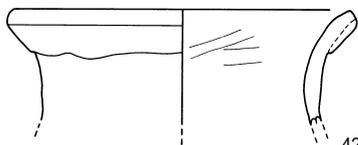
418



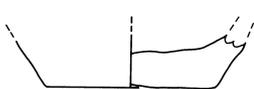
419



A区 東側 包含層



420



421



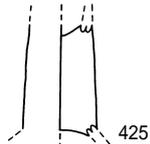
422



423



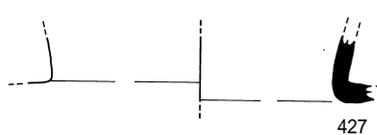
424



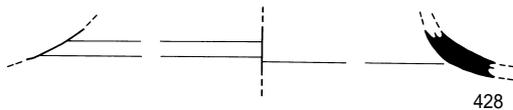
425



426



427



428



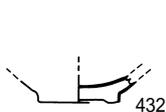
429



430



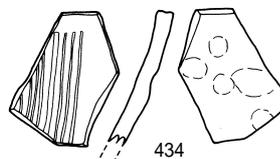
431



432

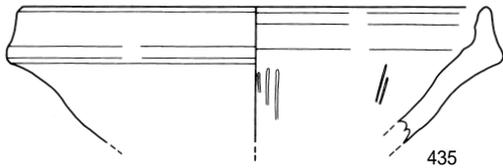


433

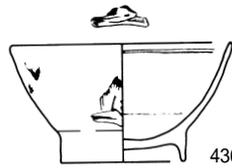


434

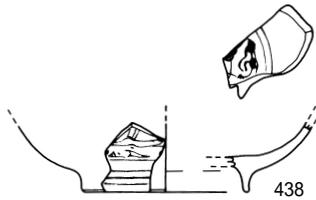
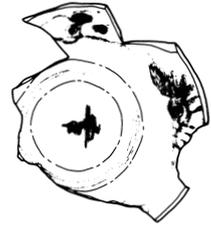




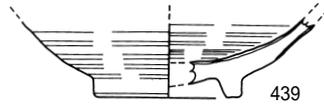
435



436



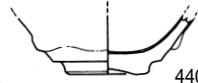
438



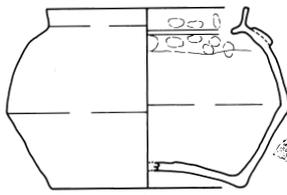
439



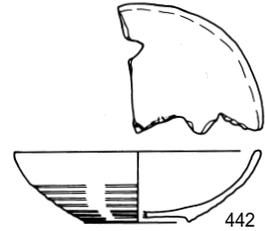
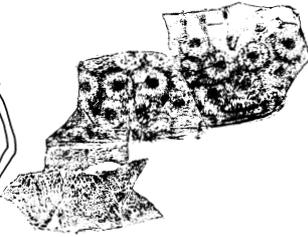
437



440



441



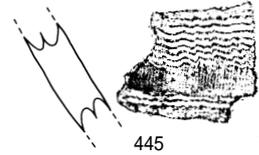
442



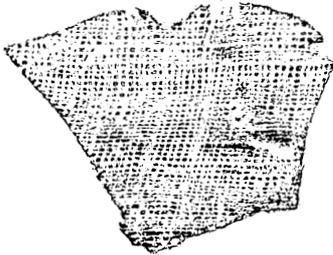
443



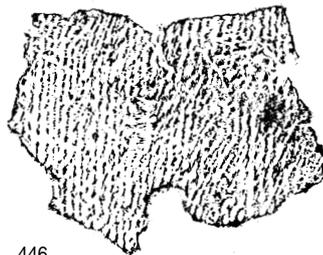
444



445



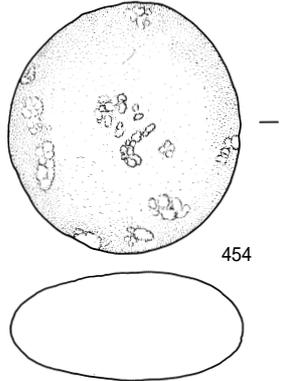
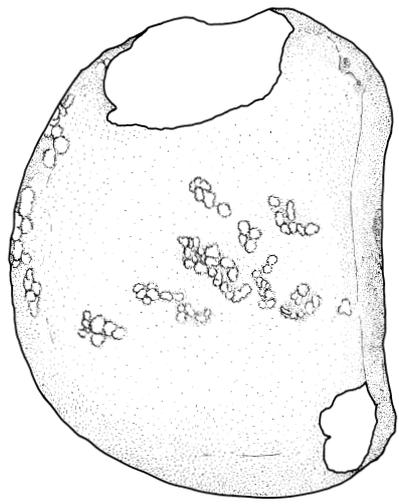
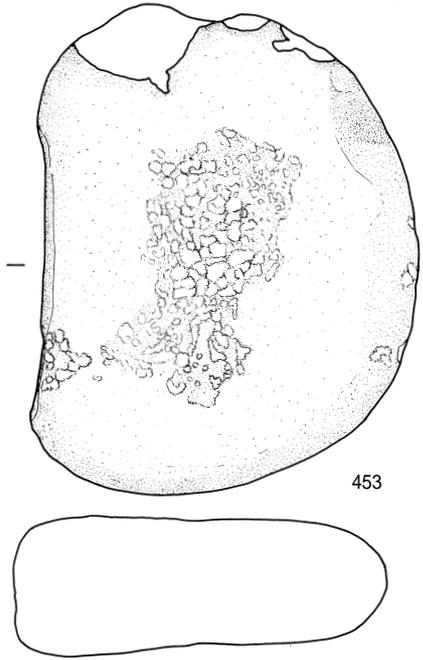
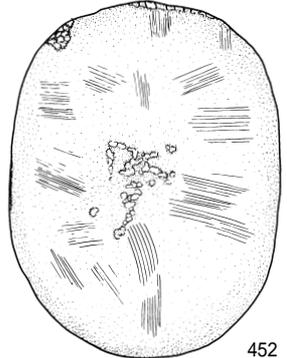
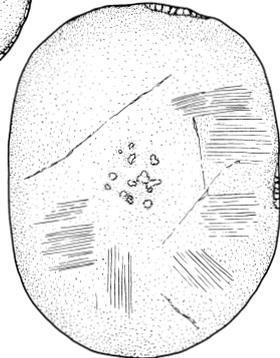
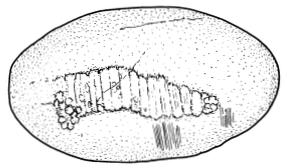
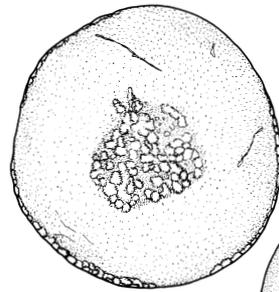
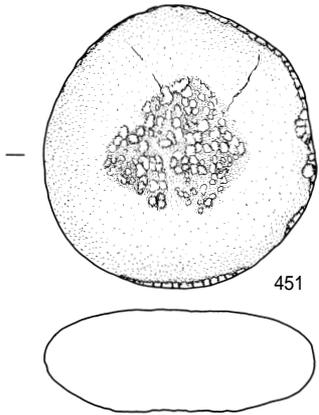
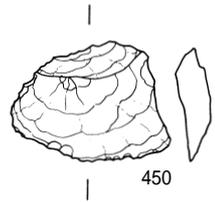
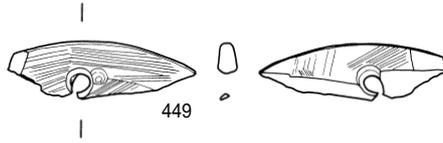
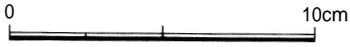
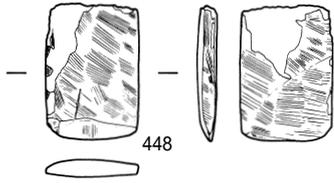
446



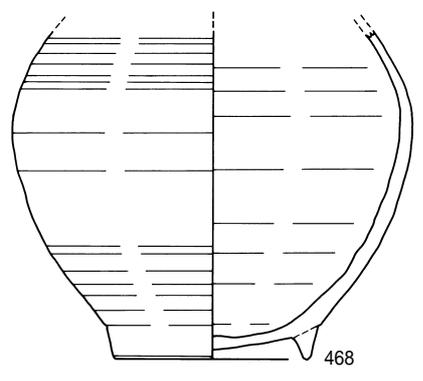
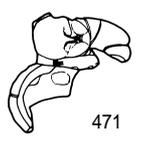
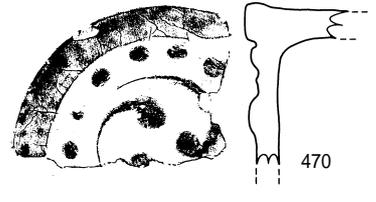
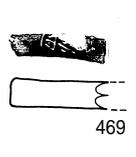
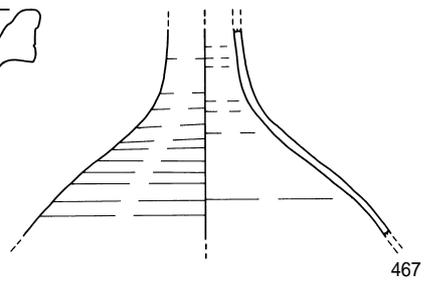
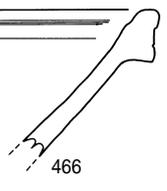
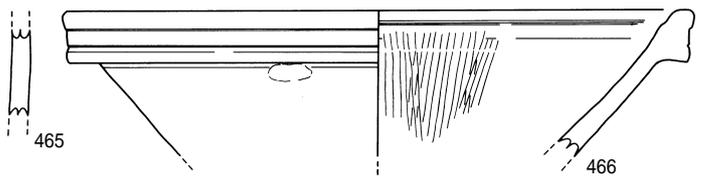
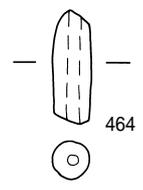
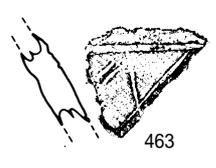
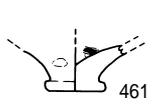
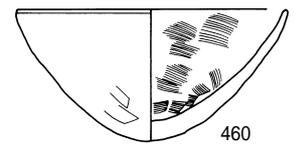
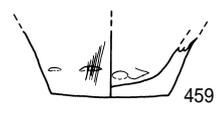
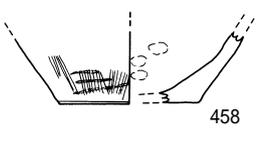
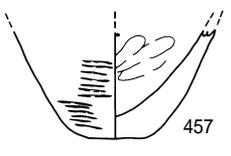
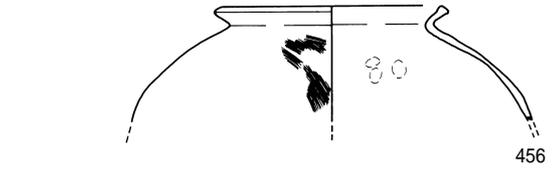
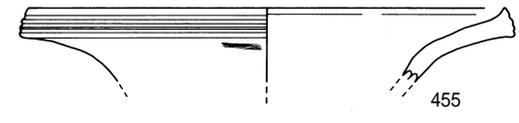
447



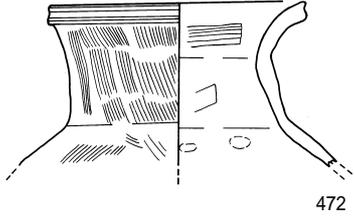
A区 石器



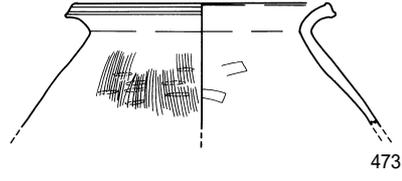
B区



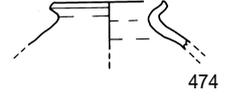
C ☒ ST1



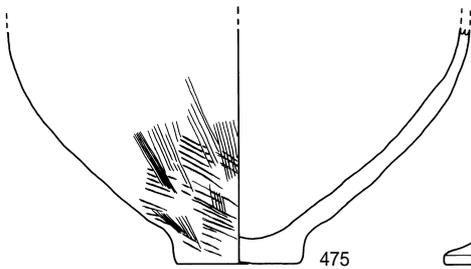
472



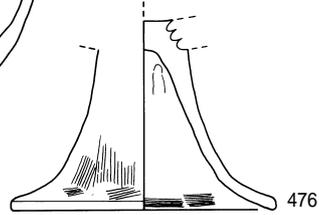
473



474

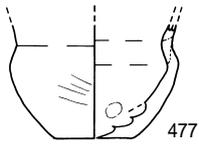


475

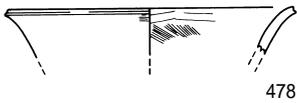


476

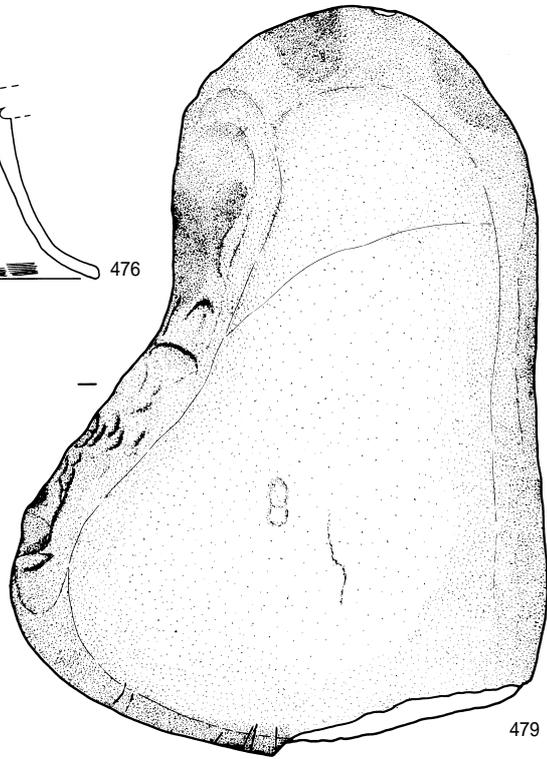
C ☒ ST2



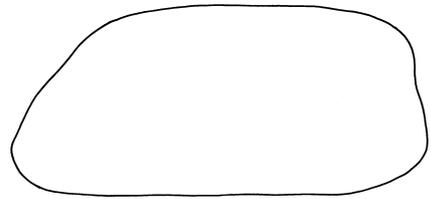
477



478

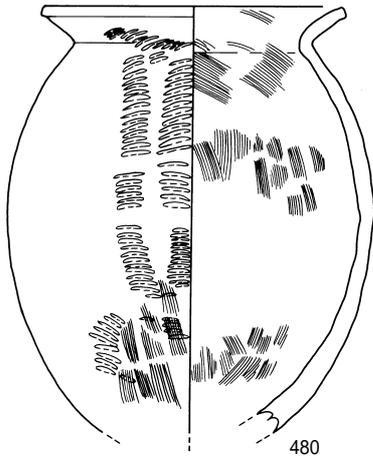


479

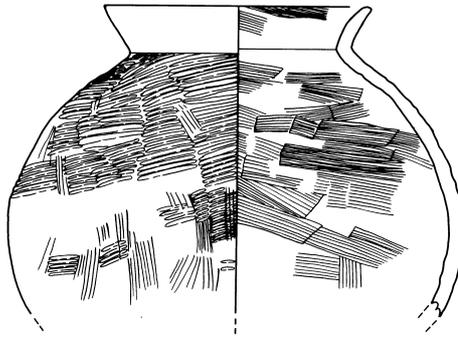


0 20cm

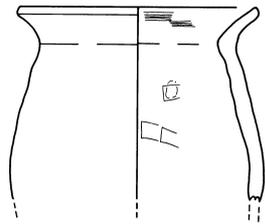
C ☒ ST3



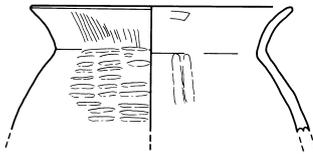
480



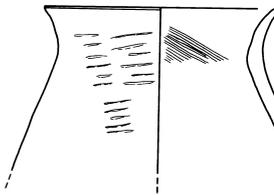
481



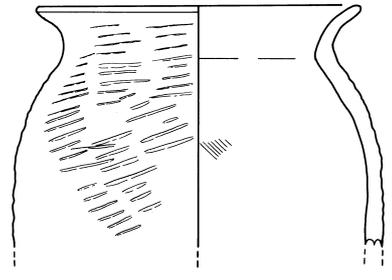
482



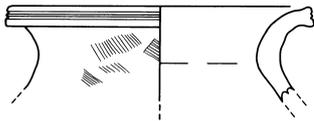
483



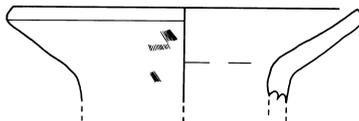
484



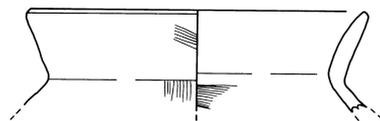
485



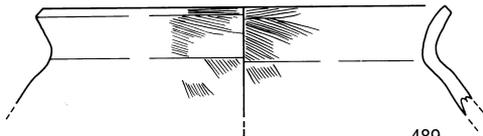
486



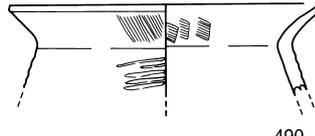
487



488



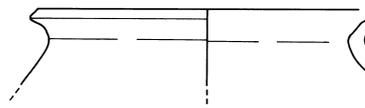
489



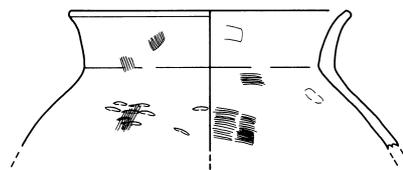
490



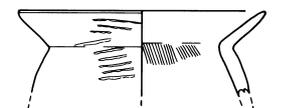
491



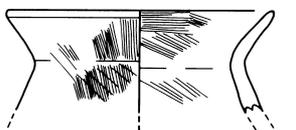
492



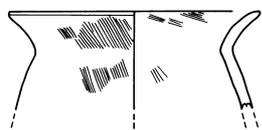
493



494



495



496

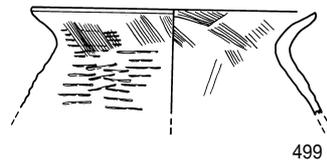


497

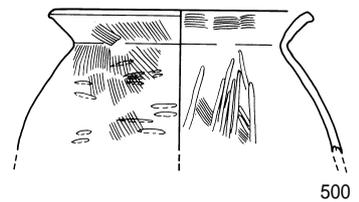




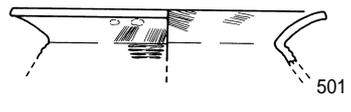
498



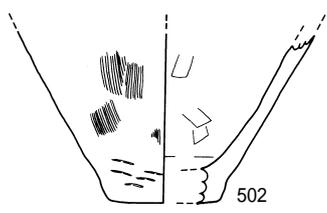
499



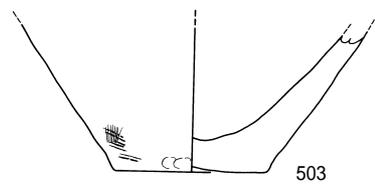
500



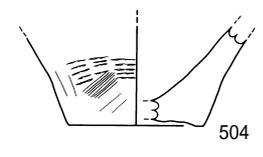
501



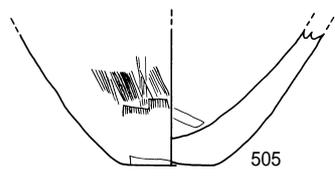
502



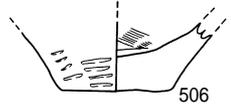
503



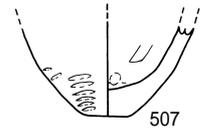
504



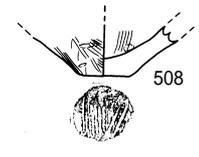
505



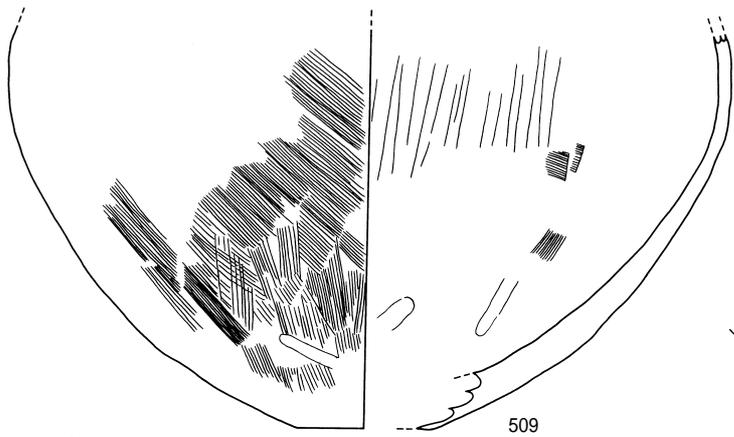
506



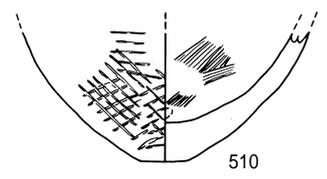
507



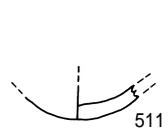
508



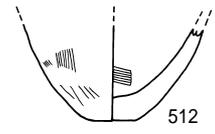
509



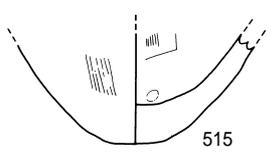
510



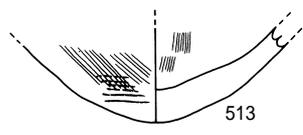
511



512



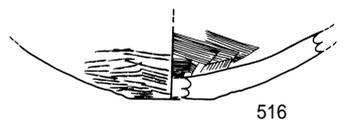
515



513



514



516

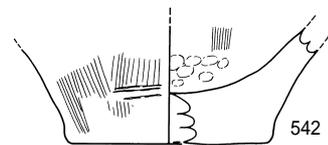
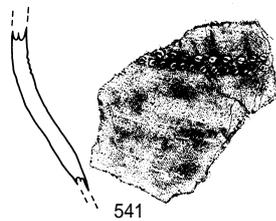
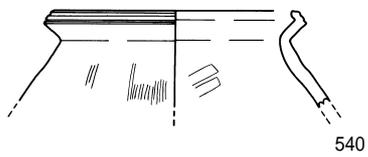
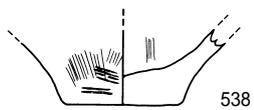
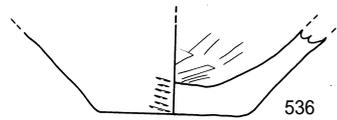
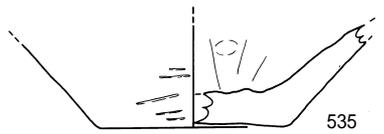
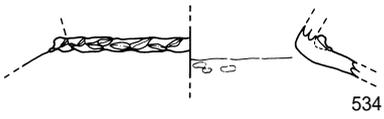
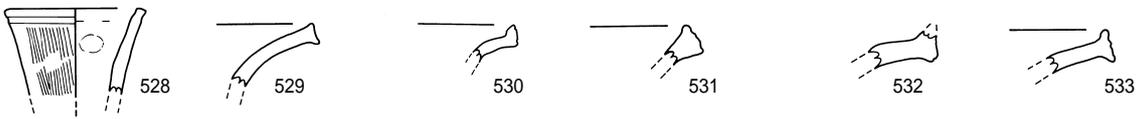
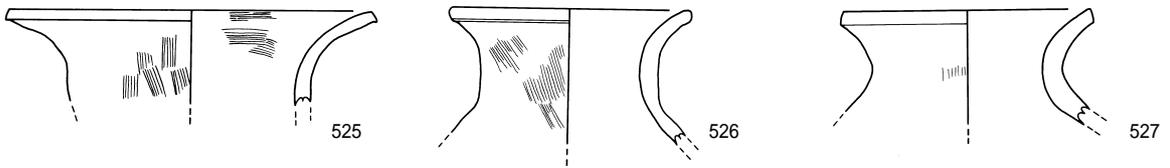
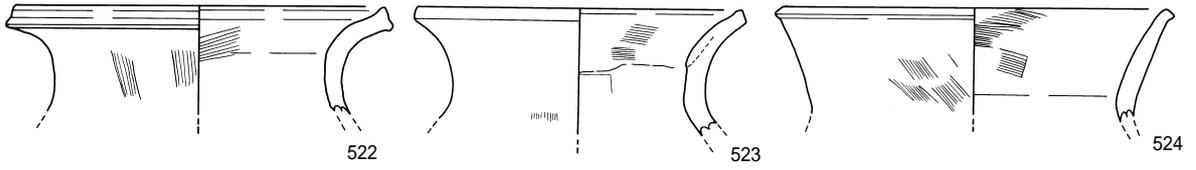
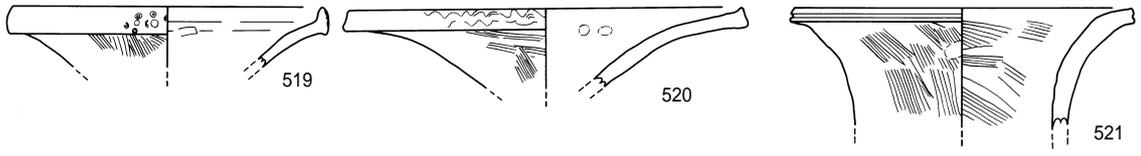


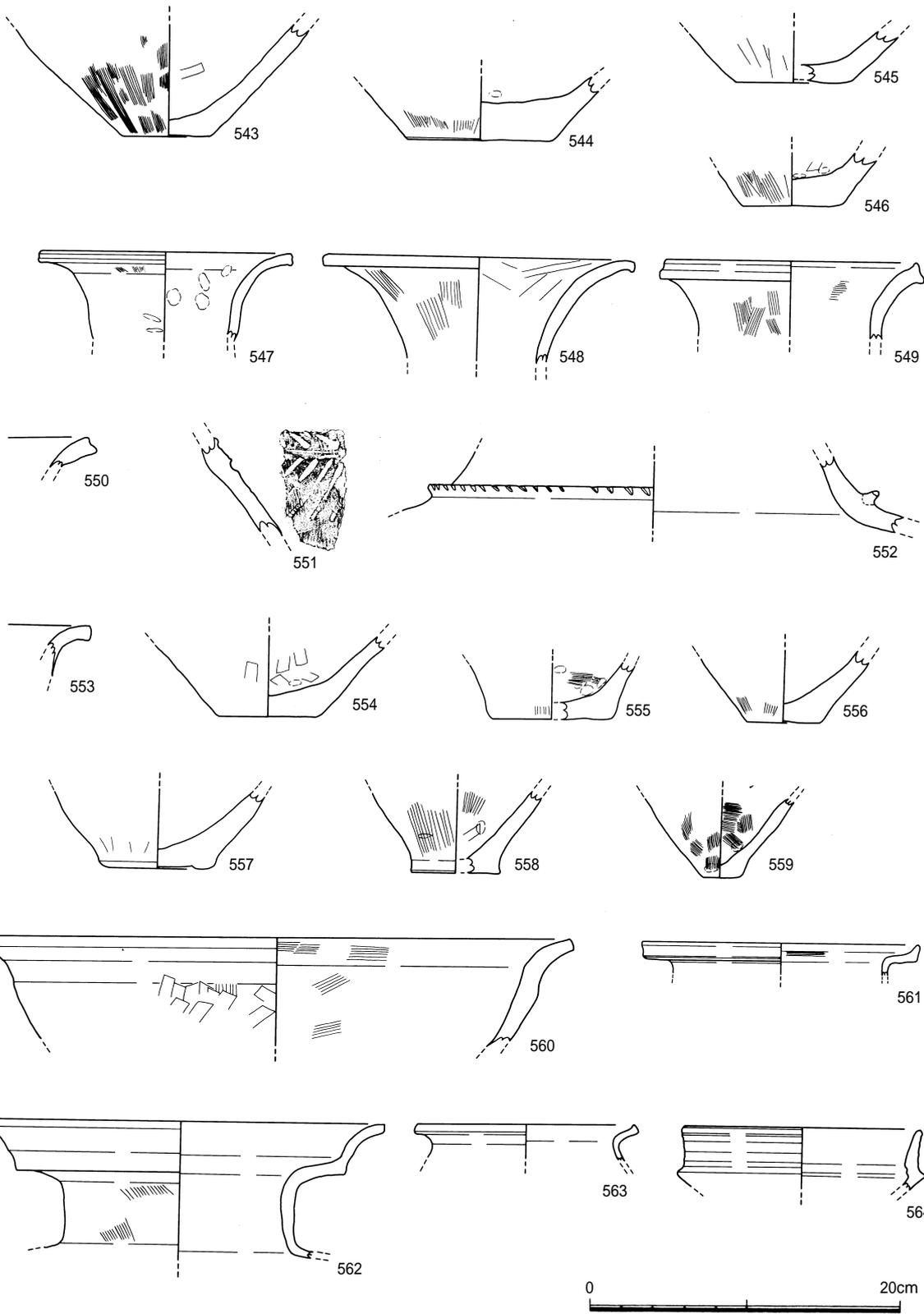
517

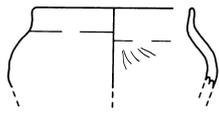


518

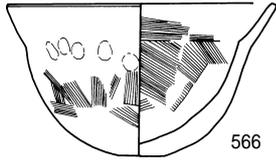




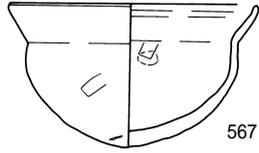




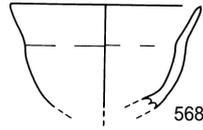
565



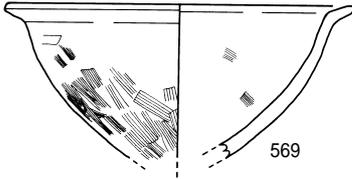
566



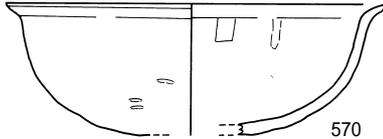
567



568



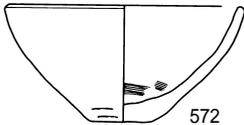
569



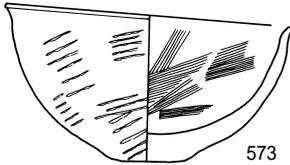
570



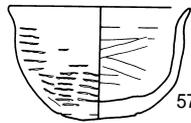
571



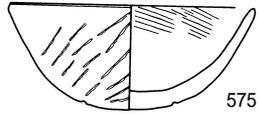
572



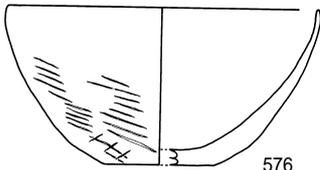
573



574



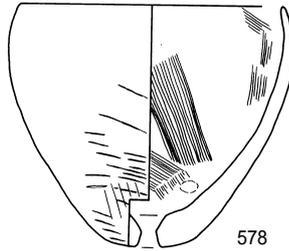
575



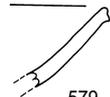
576



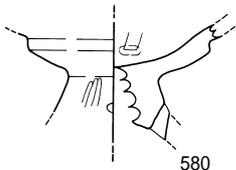
577



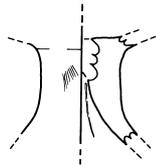
578



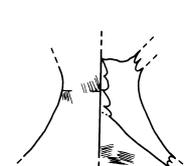
579



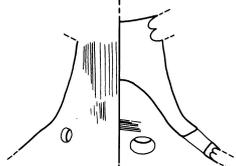
580



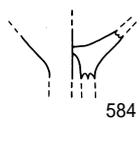
581



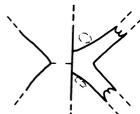
582



583



584



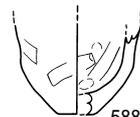
585



586



587

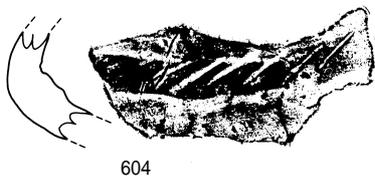
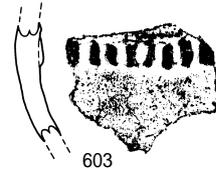
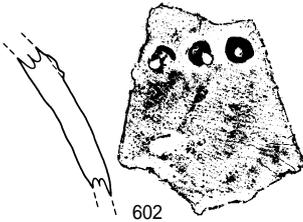
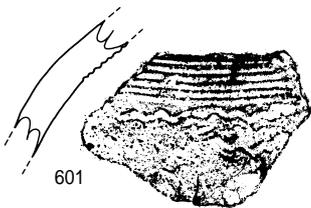
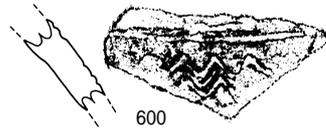
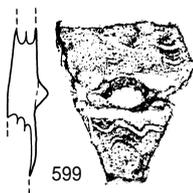
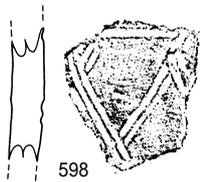
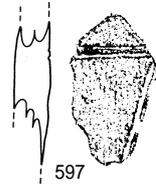
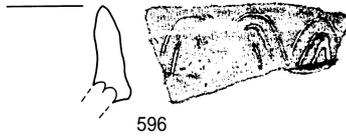
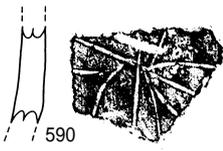


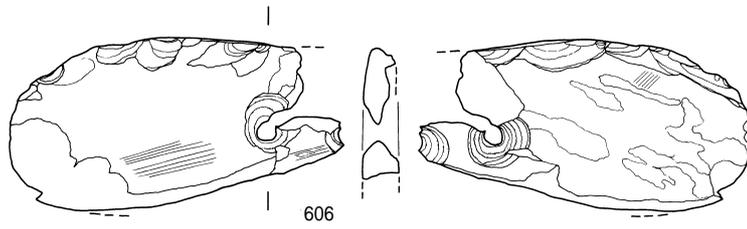
588



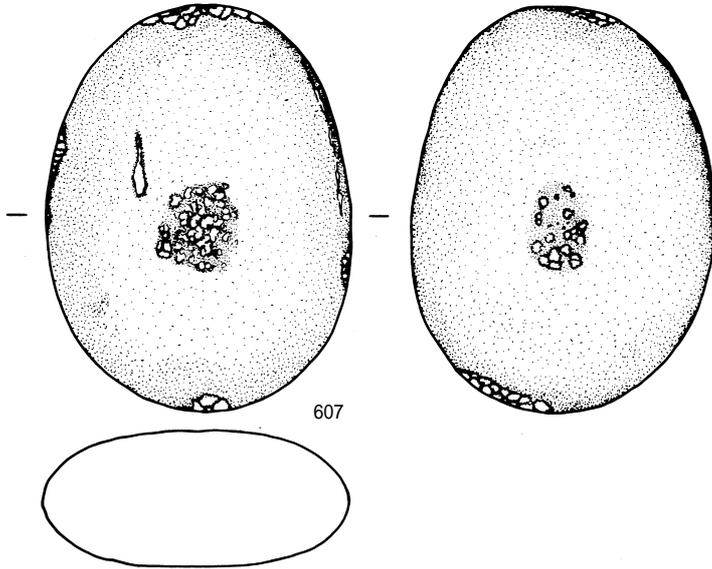
589



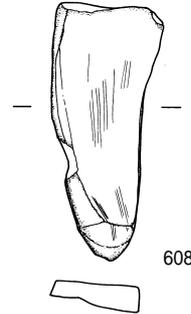




606



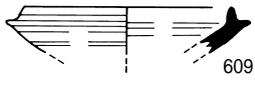
607



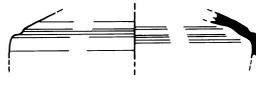
608



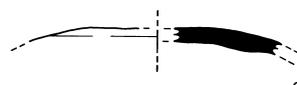
C☒ SB•Pit



609

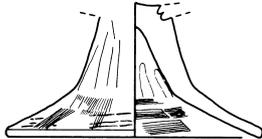


610



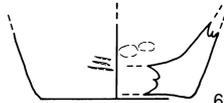
611

C☒ SK3



612

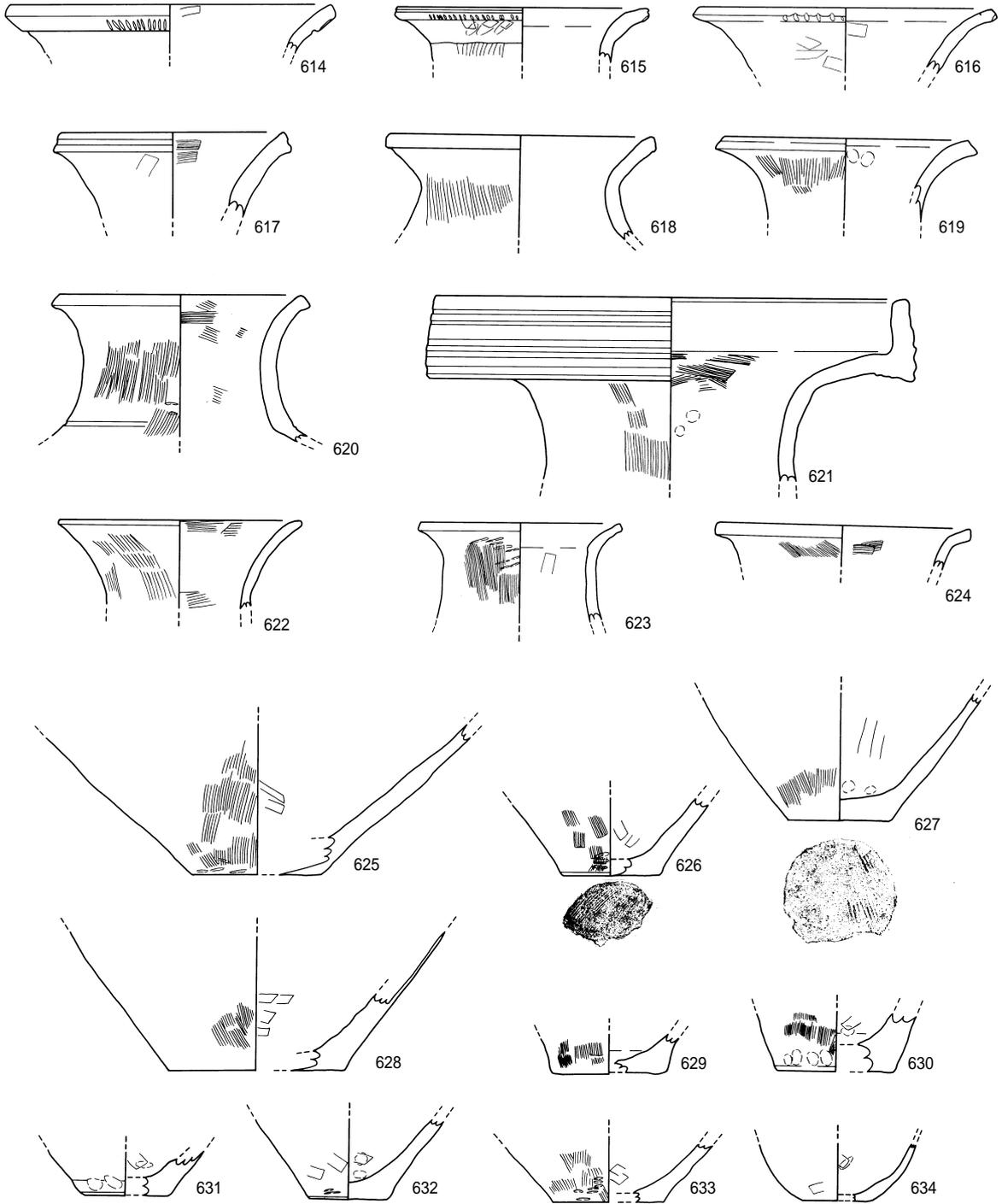
C☒ SK5



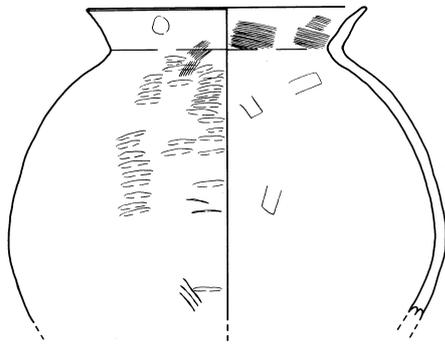
613



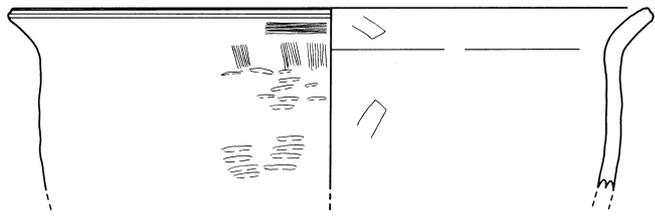
C区 包含層



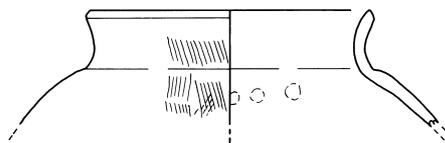
0 20cm



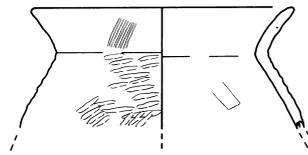
635



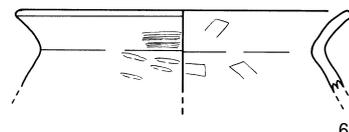
636



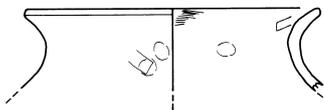
637



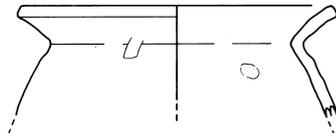
638



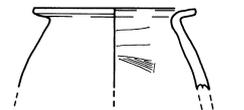
639



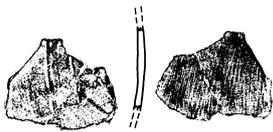
640



641



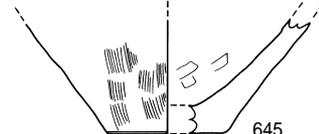
642



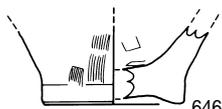
643



644



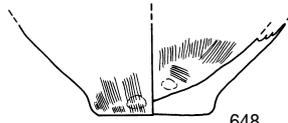
645



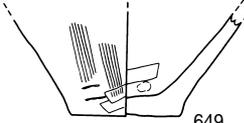
646



647



648



649



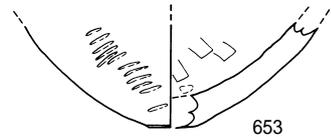
650



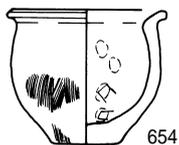
651



652



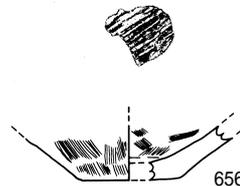
653



654

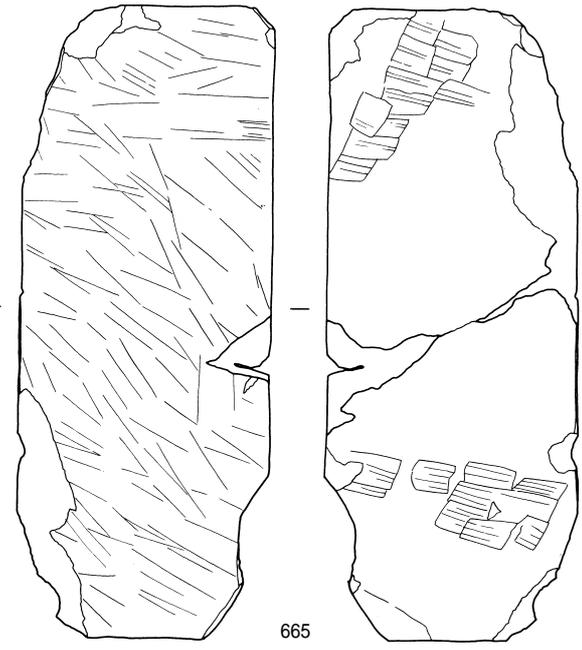
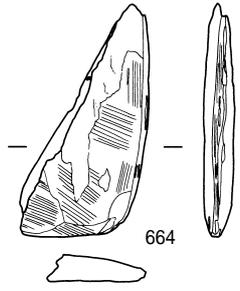
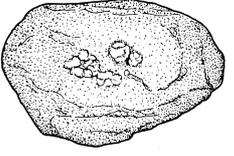
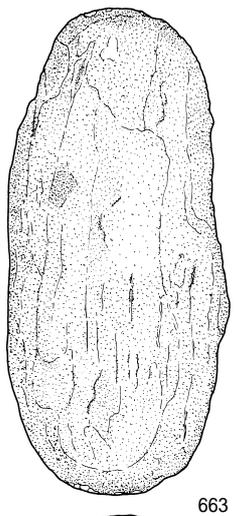
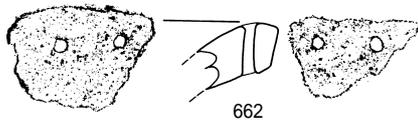
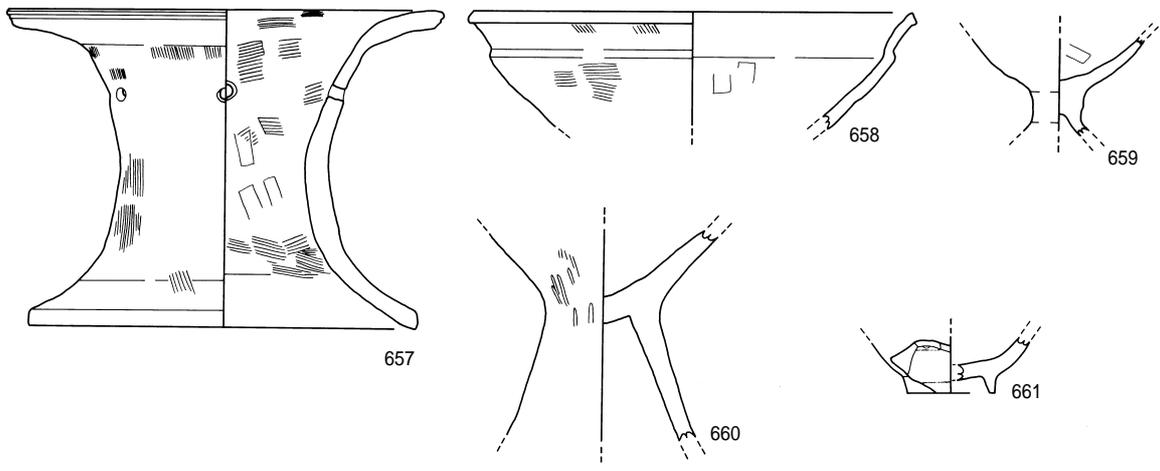


655



656





里改田遺跡 区出土遺物観察表 (1)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
338	A区 P91	土器	壺	16.0	(5.0)			内外面共ににぶい橙色。砂岩の粗粒砂・礫の細粒砂を含む。口縁端部外側が肥厚。頸部に櫛描直線文。	
339	A区 P91	土器	壺	16.8	(5.7)			内面はにぶい褐色、外面はにぶい橙色。長石・石英の細粒砂を多く含む。	
340	A区 P88	土器	壺	21.0	(3.7)			内外面共ににぶい黄橙色。チャート・砂岩の細粒砂・粗粒砂を多く含む。	
341	A区 P94	土器	壺	28.0	(6.0)			内外面共に橙色。石英・砂岩の細粒砂を含む。肥厚させた口縁端部外面に刻目。	
342	A区 P85	土器	壺	17.8	(3.6)			内外面共ににぶい黄橙色。砂岩の細粒砂・粗粒砂を含む。口縁端部外側に刻目。	
343	A区 P99	土器	甕	15.7	(6.0)			内外面共ににぶい橙色。長石・石英の粗粒砂を多く含む。器表内外面共磨耗が激しい。	
344	A区 P88	土器	壺	14.0	(7.1)			内外面共に黄橙色。チャート・砂岩の粗粒砂を多く含む。	
345	A区 P90	土器	壺	11.2	(3.4)			内外面共ににぶい橙色。砂岩の粗粒砂を含む。口縁端部外側に粘土帯を貼付し刻目。	
346	A区 P98	土器	甕		(2.0)		4.4	内面は灰色、外面はにぶい黄橙色。砂岩・チャートの細粒砂・粗粒砂を多く含む。内外面共に器表の磨耗が進む。	
347	A区 P85	土器	甕		(2.8)		3.6	内面は橙色、外面はにぶい黄橙色。砂岩の粗粒砂を少し含む。	
348	A区 P96	土器	壺		(3.5)		8.4	内面は灰色、外面は橙色。石英・長石の細粒砂を含む。内外面共に器表の磨耗が進む。	
349	A区 P88	土器	壺		(4.7)		8.2	内外面共に橙色。砂岩の風化礫の粗粒砂及び石英の細粒砂を含む。内外面共器表の磨耗が激しい。	
350	A区 SK1	土器	壺		(3.0)		7.0	内面は灰黄色、外面は橙色。砂岩風化礫及び石英の粗粒砂を多く含む。内外面共に器表の磨耗が激しい。	
351	A区 P91	土器	鉢	12.8	7.0		3.4	内外面共ににぶい黄橙色。チャート等の砂粒を多く含む。	
352	A区 P86	須恵器	蓋	18.7	(2.1)			内外面共に灰色。胎土は石英の細粒砂、砂岩の粗粒砂等を含む。	
253	A区 P86	須恵器	鉢		(3.1)			内外面共に灰色。胎土には白色及び黒色の細粒砂を少し含む。	
254	A区 P86	須恵器	長頸壺	8.0	(23.0)			内外面共に灰色。肩部・胴部が部分的に、焼成時、空気の膨張により内側と外側の粘土が剥離した部分がある。砂粒が少しだけ含まれる。	
355	A区 P93	土師器	杯		(2.0)		6.7	内外面共ににぶい黄橙色。精選された胎土。底部は回転糸切り。	
356	A区 P96	土師器	杯		(2.0)		7.6	内外面共に橙色。精選された胎土。内面にろくる目が残る。	
357	A区 SE1	陶器	碗		(4.5)		4.6	内面は灰黄色、外面はにぶい橙色。輪高台。施釉は内面は底部まで全面、外面は体部途中まで。胎土は細粒砂・粗粒砂を少し含む。焼成は良。	
358	A区 P89	須恵器	壺		(2.1)			内外面共に暗灰黄色。石英、砂岩の微粒砂を含む。口縁外面に施文。	
359	A区 P97	土器	壺		(4.8)			内面は黒色、外面は橙色。石英・長石の細粒砂、砂岩の粗粒砂を含む。胴上部、頸部により縦方向にへらで施文。下に櫛で横方向に施文。一単位五条の櫛描。その下部に波状文。	
360	A区 P96	土器	壺		(3.0)			内外面共ににぶい橙色。長石・石英の細粒砂を含む。	
361	A区 P92	土器	壺		(4.9)			内面は褐灰色、外面はにぶい橙色。石英の細粒砂を含む。七条のへら描沈線。	
362	A区 SD1	土師器	杯		(2.6)		8.0	内外面共に灰白色。精選された胎土。内面にろくる目が残る。	
363	A区 SD1	土師器	杯		(2.6)		10.6	内外面共に灰白色。精選された胎土。内面にろくる目が残る。底部は回転糸切り。焼成がやや弱め。	
364	A区 SD1	青磁	碗		(4.6)			内外面共に灰オリーブ色。胎土は細粒砂を少し含み灰白色。外面には鴛蓮弁文。釉はオリーブ色の透明。	
365	A区 SD1	土器	甕		(3.8)		7.2	内外面共ににぶい黄橙色。砂粒を多く含む。内外面共に器表の磨耗が進んでいるが、外面に調整痕が残る。	
366	A区 SD1	土器	壺		(2.5)			内外面共に橙色。石英の細粒砂を多く含む。口縁端部に刻目。口縁端部上面に粘土帯を三条貼り付け各々に刻みを施す。口縁端部の粘土帯の、外側より一条目と二条目の間に穿孔。	
367	A区 集中	土器	壺		(5.2)			内面は灰黄褐色、外面はにぶい橙色。砂岩の粗粒砂を多く含む。内外面共器表の磨耗が進みわずかに波状文が残る。	
368	A区 SD1	土器	壺		(3.5)			内面は灰黄褐色。外面はにぶい橙色。石英の微粒砂、砂岩の細粒砂を含む。粘土帯を貼付、刻目突帯。刻目突帯間に櫛描直線文。	

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (2)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
369	A区 SD1	土器	壺		(3.3)			内外面共に黒褐色。石英・長石の細粒を含む。一単位五条の櫛描直線文。	
370	A区 SX1 埋土層	青磁	碗		(1.3)			内外面共にオリブ灰色。胎土は灰白色。釉はオリブ色透明釉。	
371	A区 集中	土器	壺	16.6	(5.2)			内外面共ににぶい橙色。砂岩、チャートの粗粒砂を多く含む。	
372	A区 集中	土器	壺		(9.0)			内面は灰黄褐色、外面はにぶい橙色。石英、長石の微細粒砂、砂岩の細粒砂を含む。粘土帯貼付の刻目突帯間に櫛描直線文。	
373	A区 SX1 埋土層	土器	壺		(3.5)		7.2	内面は灰色。外面はにぶい橙色。長石、石英の細粒砂を多く含む。器表は摩耗が進んでいる。	
374	A区 SX1 埋土層	土器	壺		(3.9)		5.4	内外面共に灰白色。石英、砂岩風化礫の細粒砂を含む。内外面共に器表は摩耗が激しく、指頭圧痕を残すのみ。	
375	A区 包含層	土器	壺	13.0	(2.5)			内外面共ににぶい黄褐色。砂岩の粗粒砂を多く含む。胎土は粒子が粗い。口縁部下側角に刻目。	
376	A区 包含層	土器	甕	15.0	(4.3)			内外面共に灰褐色。石英の細粒砂を含む。器表は剥離している部分が多い。外面に煤が付着。	
377	A区 包含層	土器	甕	16.7	(8.9)			内外面共に橙色。チャート、赤色砂岩の粗粒砂を多く含む。外面に煤。	
378	A区 包含層	土器	甕	15.4	(3.1)			内面は灰黄色、外面は淡黄色。チャート、砂岩の粗粒砂を含む。胎土は粒が粗い。器表は内外面共に摩耗が激しい。	
379	A区 包含層	土器	甕		(2.7)			内外面共ににぶい橙色。石英の細粒砂を含む。しっかりした焼成。口唇部に三条の直線。内面は摩耗している。	
380	A区 包含層	土器	甕	11.0	(4.0)			内外面共に橙色。砂岩等の砂粒を含む。	
381	A区 包含層	土器	甕		(3.4)			内外面共に橙色。砂岩、石英の粗粒砂を含む。内面は口縁は横方向、頸部は左から右へななめにおろす、外面は口縁端部から頸部に縦におろすハケ目。	
382	A区 包含層	土器	壺		(4.2)			内面は灰白色、外面はにぶい橙色。石英、砂岩の細粒砂を多く含む。口縁端部外側に幅約2cmの粘土帯を貼付し、指頭圧痕。器表内外面共に摩耗が激しい。	
383	A区 包含層	土器	壺		(6.9)			内外面共に橙色。チャートの細粒砂、砂岩の粗粒砂を含む。四条の櫛描直線文、その下に粘土帯を貼付し刻目、直下に断面三角形の突帯、突帯には穿孔を有し、貫通しているものとしていないものがある。その下にX模様の沈線。	
384	A区 包含層	土器	壺		(5.8)			内面は灰色、外面はにぶい橙色。石英の細粒砂を多く含む。断面が三角形の粘土帯を貼付。粘土帯は閉じずに行き違いに。	
385	A区 包含層	土器	甕		(2.4)		4.4	内面は灰白色、外面は黒色。石英、長石の微細粒を含む。外面器表は磨かれたような状態。	
386	A区 包含層	土器	甕		(5.7)		6.0	内面は黒色、外面はにぶい橙色。石英、長石、砂岩の細粒砂を含む。内面及び外面も部分的に摩耗。外面は叩き後にハケ、底部にも叩き。	
387	A区 包含層	土器	壺		(5.5)		9.0	内外面共ににぶい橙色。石英、長石、砂岩風化礫の細粒砂を多く含む。内外面共に器表の摩耗が激しく、わずかに外面に指頭圧痕が残るのみ。	
388	A区 包含層	土器	壺		(5.6)		7.4	内面は灰色、外面は灰白色。赤色砂岩風化礫の粗粒砂を多く含む。内外面共に器表の摩耗が激しい。調整不明。	
389	A区 包含層	土器	甕		(4.3)		5.2	内面は灰色、外面は灰白色。チャートの粗粒砂を少し含む。	
390	A区 包含層	土器	高杯		(7.1)			内面はにぶい橙色、外面は橙色。チャートの粗粒砂を多く含む。外面はハケ調整。	
391	A区 包含層	土器	高杯		(4.7)			内外面共ににぶい黄褐色。石英の細粒砂と砂岩の粗粒砂を含む。	
392	A区 包含層	土器	小壺		(2.0)		3.4	内外面共ににぶい黄褐色。石英の細粒砂を含む。底部近くに被熱赤変のような部分が見られる。	
393	A区 包含層	土器	紡錘車	全長 4.6	全幅 2.3	全厚 1.8	重量 20.0g	にぶい橙色。石英、砂岩の細粒砂を含む。	
394	A区 包含層	土師器	皿	9.6	1.3		8.2	内外面共ににぶい橙色。精選された胎土。焼成は良好。内外面共に横ハケ。	
395	A区 包含層	土師器	杯		(2.2)		10.0	内外面共に浅黄褐色。精選された胎土。底部は回転糸切り。内面にろくろ目が残る。	
396	A区 包含層	土師器	杯		(4.4)		6.5	内外面共に灰黄褐色。底部に線刻又は木葉の葉脈痕が残る。胎土には砂岩細粒砂を含む。	
397	A区 包含層	青磁	碗		(1.8)			内外面共に灰オリブ色。内面はヘラによる文様、全面施釉。外面は、上半分に施釉、下部は施釉なし。釉はうぐいす色の透明。胎土は細粒砂を少し含み灰白色。	

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (3)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
398	A区 包含層上	磁器	染付碗	12.2	(4.5)			胎土は白色で堅緻。釉は透明釉。	
399	A区 包含層上	陶器	灯明皿		(1.6)		4.0	内面は橙色、外面は灰黄褐色。精選された胎土、橙色。底部は回転糸切。釉は内面のみで褐色。	
400	A区 包含層	土器	壺		(2.3)			内外面共に橙色。砂岩、チャートの細粒砂を多く含む。器表の摩耗が進んでいる。口縁端部に刻目があったようで、口縁に穿孔。	
401	A区 包含層	土器	壺		(2.6)			内外面共ににぶい黄橙色。石英の細粒砂を含む。口縁端部下側に粘土帯を貼付、口縁端部の上側、下側角に刻目。	
402	A区 包含層	土器	壺		(3.5)			内外面共に橙色。砂岩の粗粒砂を含む。器表が摩耗しており、口縁端部に刻目の痕跡が残る。口縁上面に二条の粘土帯を貼付し刻目をいれている。刻目突帯の間に穿孔。口縁外面の頸部に近い位置に二条の線、その下に粘土帯を貼付した刻目突帯。	
403	A区 包含層	土器	壺		(2.7)			内外面共に黄褐色。石英、長石、砂岩の細粒砂を多く含む。口縁端部は肥厚し口縁端角に刻目。器表は摩耗が進む。	
404	A区 包含層	土器	壺		(2.5)			内外面共ににぶい橙色。砂岩の粗粒砂を含む。器表の剥離が見られる。口縁端近くに穿孔が周回。外面に三条の沈線。この下に粘土帯貼付の刻目突帯。	
405	A区 包含層	土器	甕		(1.7)			内外面共ににぶい橙色。石英、長石、砂岩の細粒砂、チャートの粗粒砂を含む。口唇部に刻目。	
406	A区 包含層	土器	壺		(2.0)			内外面共ににぶい黄橙色。胎土は粒が粗い。器表は全体的に摩耗が進む。上面外側に竹管文を巡らし、その内側に穿孔。	
407	A区 包含層	土器	壺		(3.7)			内面はにぶい黄橙色、外面は橙色。砂岩の細粒砂を多く含む。断面が三角形の貼付突帯。その上側に×状に施文。	
408	A区 包含層	土器	壺		(4.3)			内外面共ににぶい黄橙色。細粒砂を少し含む。一単位七条の櫛描波状文。	
409	A区 包含層	土器	壺		(5.8)			内面は灰白色、外面はにぶい橙色。砂岩の細粒砂を多く含む。一単位四条の櫛描直線文、直下に波状文。その下に縦ハケ調整。	
410	A区 包含層	土器	壺		(3.8)			内面は黒色、外面は灰白色。石英、長石の細粒砂を含む。櫛描直線文を施し、一単位七条の波状文。器表の摩耗が進み明瞭ではない。	
411	A区 包含層	土器	壺		(4.1)			内面は灰色、外面はにぶい橙色。砂岩の粗粒砂を少し含む。櫛、ヘラにより施文。	
412	A区 包含層	土器	壺		(4.5)			内外面共ににぶい黄橙色。石英の細粒砂を少しと砂岩の粗粒砂を含む。一単位五条の櫛描直線文の間に波状文。	
413	A区 包含層	土器	壺		(4.8)			内面は褐灰色、外面はにぶい黄橙色。砂岩の粗粒砂、細粒砂を多く含む。一単位五条の櫛描文。	
414	A区 包含層	土器	壺		(2.1)			内外面共ににぶい橙色。砂粒を多く含む。一単位五条の櫛描直線文を施し、下から三条目と四条目の間に刻目。	
415	A区 包含層	土器	壺		(4.0)			内面は灰黄褐色、外面はにぶい橙色。石英、長石の細粒砂を多く含む。器表の摩耗が激しいが、施文部分のみ残る。	
416	A区 包含層	土器	壺		(3.2)			内外面共ににぶい橙色。石英の細粒砂、砂岩の粗粒砂を含む。四条の隆起帯が見られ、直下に円形浮文を貼付。	
417	A区 包含層上	土器	壺		(1.9)			内外面共ににぶい黄橙色。石英、砂岩の粗粒砂を含む。立ち上がった口縁部の外側に櫛描波状文。	
418	A区 包含層上	青磁	碗		(1.8)			内外面共にオリーブ灰色。胎土は白色で精選されている。	
419	A区 包含層上	青磁			(1.5)			内外面共にオリーブ灰色。灰白色の精選された胎土。オリーブ灰色の釉。	
420	A区東 包含層	土器	壺	17.8	(6.1)			内面はにぶい黄橙色。外面はにぶい橙色。赤色砂岩の粗粒砂を多く含む。外面に被熱赤変。	
421	A区東 包含層	土器	壺		(2.8)		9.0	内面は灰色。外面はにぶい黄橙色。石英、赤色風化礫の細粒砂を多く含む。器表は全体的に摩耗している。	
422	A区東 包含層	土器	甕		(4.1)		5.0	内面は灰白色、外面はにぶい橙色。チャートの粗粒砂を含む。底部から外面にかけて被熱赤変が見られる。内外面とも器表の摩耗が進む。	
423	A区東 包含層	土器	壺		(3.4)		4.8	内外面共に橙色。石英、砂岩の細粒砂を多く含む。	
424	A区東 包含層	須恵器	甕		(6.0)			内外面共に灰黄色。胎土は砂粒を少し含む。	
425	A区東 包含層	土器	器台		(5.8)			外面はにぶい黄橙色。石英の細粒砂と赤色砂岩の細粒砂を多く含む。器表の摩耗が進んでいる。	

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (4)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
426	A区東包含層上	土器	脚付鉢		(2.9)		4.8	内面はにぶい黄橙色。外面は灰黄褐色。砂岩粗粒砂を多く含む。	
427	A区東包含層上	須恵器	甕		(3.5)			内外面共に灰色。胎土は細粒砂を少し含む。	
428	A区東包含層上	須恵器	甕		(2.5)			内外面共に灰色。胎土は白色の細粒砂を少し含む。	
429	A区東包含層	須恵器	壺		(2.7)		9.6	内面は灰色、外面は暗褐色。胎土は細粒砂を含む。	
430	A区東包含層	土師器	皿		(1.5)		9.0	内外面共ににぶい橙色。胎土は砂粒を多く含む。底部は回転糸切り。	
431	A区東攪乱	青磁	碗		(1.8)		5.4	内外面共に灰オリーブ色。胎土はやや灰色がかっている。高台下部、内側、みこみには施釉していない。	
432	A区東包含層上	白磁	碗		(1.4)		4.2	内面は灰オリーブ色。胎土は黒色の細粒砂を少し含む灰白色。高台下部から内側は施釉されていない。釉は灰オリーブの透明釉。	
433	A区東包含層	陶器	備前擂鉢		(5.9)			内外面共に褐灰色。胎土には細粒砂を多く含む。	
434	A区東包含層	瓦質土器	擂鉢		(7.1)			内外面共に灰色。器表がやや摩耗気味。胎土は石英、長石の細粒砂を少し含む。	
435	A区東包含層上	陶器	備前擂鉢	24.2	(7.2)			内外面共に灰褐色。砂粒を含む灰褐色の胎土。口唇部に灰白色の砂粒状の付着。	
436	A区東包含層上	磁器	染付碗	11.6	6.3		6.6	内外面共に灰白色。全体に施釉。透明釉。	
437	A区東包含層上	磁器	染付皿	12.7	3.2		6.4	内外面共に浅黄色。高台外面及び下端は施釉されていない。釉は透明釉で、貫入有り。	
438	A区東包含層上	磁器	染付皿		(3.7)		8.6	内外面共に灰白色。微細粒砂を少し含む白色の胎土。透明釉。	
439	A区東攪乱	陶器	鉢		(4.3)		7.4	内面は黄褐色、外面はにぶい赤褐色。胎土は黒褐色の細粒砂を含む。内面は底部まで施釉。外面は下半は施釉していない。釉は灰色で透明。	
440	A区東包含層上	陶器	天目茶碗		(3.1)		4.4	内面は黒褐色、外面はにぶい褐色。高台及び体部下部は施釉していない。内面は全面施釉。外面の釉は下方でたれた釉が厚くなっている。釉は黒色に金色を散らしたもの。無釉部分は茶褐色。胎土は、茶色細粒砂を多く含む浅黄褐色及び灰白色。	
441	A区東包含層上	陶器	鉢	10.6	9.5		10.2	内外面共に灰褐色。胎土は細粒砂を多く含む。断面は灰褐色。外面は施釉していない。内面は胴部中位から底面に施釉。施釉部分はオリーブ灰色。	
442	A区東包含層上	陶器	鉢	13.0	3.7		5.4	内外面共に浅黄褐色。全面施釉していない、素焼き。胎土は砂粒を含まない精選されたもの。内面底部に、墨による絵或いは文様。	
443	A区東包含層	土器	壺		(1.9)			内面は黄灰色、外面は橙色。チャート、砂岩の細粒砂を含む。口縁端部近くの上面に三条の刻目突帯。	
444	A区東包含層	土器	壺		(2.5)			内外面共ににぶい橙色。砂岩の砂粒を含む。六条のへら描沈線、その上側に列点文。	
445	A区東包含層	土器	壺		(3.0)			内面は黒褐色、外面はにぶい黄褐色。砂岩の粗粒砂を少し含む。一単位九条の波状文と四条の直線の櫛状文。	
446	A区東包含層上	須恵器	平瓦					灰色。細粒砂を多く含む胎土。	
447	A区東包含層上	銅貨	寛永通宝						
448	A区包含層	石器	磨製石斧	全長 4.5	全幅 3.1	全厚 0.6	重量 16.9 g	塩基性岩。全面を研磨して刃部を作出。縁辺平行。	
449	A区包含層	石器	石包丁	全長 1.6	全幅 5.0	全厚 0.5	重量 4.4 g	頁岩。研磨によって作出。一部のみ残在で多くは欠損。	
450	A区包含層	石器	二次加工のある剥片	全長 3.2	全幅 4.2	全厚 9.5	重量 9.7 g	頁岩。	
451	A区包含層	石器	敲石	全長 9.5	全幅 8.9	全厚 3.4	重量 424.6 g	砂岩。表裏面、側縁に敲打痕有り。表裏面共に敲打により窪む。	
452	A区包含層上	石器	敲石	全長 11.8	全幅 9.0	全厚 5.1	重量 824.9 g	砂岩。表裏面、側縁に敲打痕有り。	
453	A区表探	石器	敲石	全長 16.2	全幅 13.8	全厚 4.6	重量 1410 g	砂岩。表裏面、側縁に敲打痕有り。表面は敲打により凹状に窪む。側縁に部分的に欠損がある。	
454	A区包含層	石器	敲石	全長 8.3	全幅 7.6	全厚 3.6	重量 273.6 g	砂岩。表面、側縁に敲打痕有り。石表面に部分的に煤が付着している。	
455	B区検出面	土器	壺	25.0	(3.9)			内外面共に橙色。石英、赤色砂岩の細粒砂を含む。	
456	B区包含層	土器	甕	11.6	(6.1)			内面は灰黄色、外面は明赤褐色。長石、石英の細粒砂、粗粒砂を含む。内面に指頭圧痕及びへら調整痕有り。東阿波型土器。	
457	B区検出面	土器	甕		(5.7)		3.6	内面は黒色、外面はにぶい黄褐色。石英、長石の細粒砂を含む。外面器表は摩耗しているが、叩き調整痕が残る。	

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (5)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
458	B区 包含層	土器	甕		(3.8)		7.6	内外面共ににぶい橙色。石英の細粒砂及び、他の粗粒砂を多く含む。内面は指頭圧痕が残る。底部は摩耗している。	
459	B区 包含層	土器	甕		(3.4)		6.2	内面は灰黄色、外面は灰黄褐色。チャート、赤色砂岩風化礫の砂粒を多く含む。外面は叩き後ハケ。内面はヘラ、指頭圧痕。	
460	B区 検出面	土器	鉢	14.2	6.9		1.4	内外面共ににぶい黄褐色。砂岩、チャートの粗粒砂を含む。器表は摩耗しているが両面共に調整痕が残る。	
461	B区 包含層	土器	鉢		(2.4)		2.8	内外面共ににぶい橙色。石英、チャートの砂粒を含む。外面は摩耗している。	
462	B区 包含層	陶器	擂鉢		(3.4)		11.8	内面は暗灰黄色、外面はにぶい黄褐色、断面はにぶい橙色。砂粒を多く含む胎土。	
463	B区 包含層	土器	壺		(2.2)			内面はにぶい黄褐色、外面は黄灰色。石英、チャートの細粒砂を含む。	
464	B区 包含層	土器	土錘	全長 3.1	全幅 1.0	全厚 1.0		表面はにぶい赤褐色。チャートの細粒砂を含む。時代は不明。	
465	B区 P82	土器	甕		(4.6)			内面はにぶい橙色、外面は黒色で磨きのような光沢がある。石英、チャートの細粒砂を含む。	
466	B区 SX2	陶器	擂鉢	33.0	(7.7)			内外面共に明赤褐色。胎土は赤褐色で細粒砂、粗粒砂を含む。	
467	B区 SX2	磁器	白磁壺		(11.2)			内外面共に灰白色。白色堅緻な胎土。透明釉。	
468	B区 SX2	磁器	白磁壺		(17.4)		10.0	図版番号467と同一個体であるが接点がなく接合はできなかった。	
469	B区 SX2	燻し瓦	平瓦					内外面共に暗灰色。刻印有り。	
470	B区 SX2	燻し瓦	軒丸瓦					表面は灰色。	
471	B区 SX3	陶器	人形					素焼きで胎土は浅黄褐色。童が枕にしている木魚部分は朱色に着色。	
472	C区 ST1	土器	壺	13.1	(8.8)			内外面共に橙色。チャート、赤色砂岩の粗粒砂を多く含む。	
473	C区 ST1	土器	甕	13.1	(6.5)			内外面共に橙色。砂岩、石英、雲母の粗粒砂を含む。外面の口縁下側周辺に煤が付着。	
474	C区 ST1	土器	甕	5.8	(2.5)			内外面共ににぶい褐色。砂岩の細粒砂を少しだけ含む。胎土の粒は粗め。	
475	C区 ST1	土器	壺		(12.4)		6.4	内面は褐灰色、外面はにぶい橙色。砂岩の粗粒砂、他の粗粒砂を含む。叩き後ハケ。	
476	C区 ST1	土器	高杯		(10.1)		14.0	内外面共に橙色。チャートの粗粒砂を含む。内外面共に器表は摩耗気味である。	
477	C区 ST2	土器	鉢		(6.0)		4.0	内外面共ににぶい黄褐色。砂岩の粗粒砂を含む。内外面共器表の摩耗が進んでいる。	
478	C区 ST2	土器	甕	15.0	(2.5)			内外面共ににぶい黄褐色。チャートの細粒砂を少し含む。	
479	C区 ST1	石器	台石	全長 37.5	全幅 27.9	全厚 10.1		砂岩。	
480	C区 ST3	土器	甕	15.4	(22.1)			内外面共に橙色。チャート、砂岩の粗粒砂を含む。外面に被熱赤変と煤の付着がある。	
481	C区 ST3	土器	甕	14.0	(16.4)			内面は黒色、外面は淡黄色。石英の細粒砂、砂岩、チャートの粗粒砂を含む。器表に煤の付着部分が見られる。	
482	C区 ST3	土器	甕	12.4	(10.2)			内面は淡黄色、外面は褐色。石英、赤色砂岩の細粒砂を多く含む。器表は内外面共に摩耗気味。	
483	C区 ST3	土器	甕	13.6	(6.6)			内面はにぶい黄褐色、外面は褐色。砂岩の粗粒砂を含む。	
484	C区 ST3	土器	甕	12.2	(8.6)			内外面共に褐色。砂岩の粗粒砂を含む。	
485	C区 ST3	土器	甕	17.0	(12.8)			内外面共に褐色。砂岩の粗粒砂を含む。外面は口縁部まで叩き、内面は摩耗気味だがハケ目が残る。	
486	C区 ST3	土器	甕	16.0	(5.0)			内外面共に褐色。チャート、砂岩の粗粒砂を多く含む。	
487	C区 ST3	土器	甕	18.2	(5.1)			内外面共に褐色。石英、長石の細粒砂、砂岩の粗粒砂を含む。内外面共に全般に器表が磨耗している。わずかに調整痕が残る。	
488	C区 ST3	土器	甕	17.6	(5.3)			内外面共ににぶい褐色。チャートの細粒砂を少し含む。外面に煤が付着。	
489	C区 ST3	土器	甕	21.2	(5.8)			内外面共ににぶい黄褐色。チャートの砂粒を多く含む。	
490	C区 ST3	土器	甕	16.4	(4.8)			内外面共ににぶい褐色。チャートの砂粒を含む。煤の付着部分がある。	
491	C区 ST3	土器	甕	15.2	(6.3)			内外面共ににぶい黄褐色。石英、砂岩、チャートの粗粒砂を含む。	
492	C区 ST3	土器	甕	18.0	(4.0)			内外面共ににぶい褐色。砂岩の粗粒砂を多く含む。器表は内外面共に摩耗している。	
493	C区 ST3	土器	甕	14.7	(7.3)			内面はにぶい黄褐色、にぶい褐色。胎土は粒が粗く、赤色砂岩の粗粒砂を多く含む。外面に煤の付着、被熱赤変が見られる。	

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (6)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
494	C区 ST3	土器	甗	12.0	(4.5)			内面は橙色。外面はにぶい橙色。チャートの粗粒砂を多く含む。内外面共に器表が摩耗しているが、外面には口縁端まで叩き目が見られる。	
495	C区 ST3	土器	甗	14.0	(5.5)			内外面共に橙色。石英の細粒砂を含む。外面に煤の付着が有る。	
496	C区 ST3	土器	甗	13.2	(5.2)			内外面共に橙色。チャート、砂岩の粗粒砂を含む。内面は器表が摩耗気味。	
497	C区 ST3	土器	甗	24.1	(5.8)			内外面共ににぶい黄橙色。チャート、赤色砂岩の粗粒砂を多く含む。	
498	C区 ST3	土器	甗	22.4	(5.6)			内面は橙色、外面はにぶい黄橙色。石英、チャートの細粒砂を含む。外面は器表が摩耗気味だが叩き目、ハゲ目等の調整痕が残る。	
499	C区 ST3	土器	甗	15.0	(5.5)			内外面共に灰黄色。チャートの粗粒砂を含む。外面に煤が付着。	
500	C区 ST3	土器	甗	13.2	(7.4)			内外面共に橙色。チャート、砂岩の細粒砂を含む。	
501	C区 ST3	土器	甗	16.4	(2.9)			内外面共ににぶい黄橙色。チャートの砂粒を含む。	
502	C区 ST3	土器	甗		(9.0)		5.5	内面は灰色、外面はにぶい橙色。赤色砂岩風化礫等各種の砂粒を多く含む。外面に被熱赤変が有る。	
503	C区 ST3	土器	甗		(7.6)		8.0	内面は灰色、外面はにぶい黄橙色。石英の細粒砂、砂岩の粗粒砂を多く含む。	
504	C区 ST3	土器	甗		(5.3)		7.0	内面はにぶい黄橙色、外面は灰黄褐色。砂岩風化礫の砂粒を多く含む。内面は摩耗が激しい。	
505	C区 ST3	土器	甗		(7.2)		4.4	内面は淡黄色、外面は灰黄色。チャート、石英の粗粒砂を含む。	
506	C区 ST3	土器	甗		(3.6)		6.0	内外面共ににぶい黄橙色。砂岩、チャートの粗粒砂を含む。底部に被熱赤変が見られる。	
507	C区 ST3	土器	甗		(4.8)		2.4	内面はにぶい橙色、外面はにぶい黄橙色。チャートの砂粒を多く含む。外面底部まで叩き、内面にはヘラ、指頭圧痕が残る。	
508	C区 ST3	土器	甗		(2.7)		2.2	内面は灰黄色、外面は灰黄褐色。石英、長石の細粒砂を含む。	
509	C区 ST3	土器	甗		(21.0)		7.2	内外面共ににぶい黄橙色。各種砂粒を多く含む。	
510	C区 ST3	土器	甗		(6.8)		2.4	内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい黄褐色。砂粒を多く含む。外面は底部まで叩き。外面底部近くに被熱赤変、煤の付着が有る。	
511	C区 ST3	土器	甗		(1.8)		0.5	内面は明黄褐色、外面は橙色。石英、砂岩風化礫の粗粒砂を含む。器表は内外面共に摩耗が激しい。	
512	C区 ST3	土器	甗		(5.0)		2.4	内外面共に橙色。チャートの粗粒砂を含む。	
513	C区 ST3	土器	甗		(5.0)		2.0	内外面共ににぶい黄橙色。砂岩等の砂粒を多く含む。底部まで叩き目。	
514	C区 ST3	土器	甗		(4.6)		1.1	内外面共ににぶい黄橙色。砂粒を多く含む。外面底部まで叩き。底部に煤が付着。	
515	C区 ST3	土器	甗		(5.8)		3.0	内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色。砂岩の砂粒を多く含む。胎土は粒が粗い。器表は内外面共に摩耗が進んでいる。外面底部近くに被熱赤変が見られる。	
516	C区 ST3	土器	甗		(3.7)		4.4	内外面共ににぶい黄橙色。石英、砂岩の粗粒砂を多く含む。	
517	C区 ST3	土器	甗		(4.2)		3.2	内面は褐灰色、外面は橙色。砂粒を多く含む。内外面共に器表が摩耗しているが、外面に叩き目が残る。底部が被熱赤変。	
518	C区 ST3	土器	甗		(5.2)		6.0	内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色。チャート、砂岩の粗粒砂を多く含む。器表内外面共に摩耗している。	
519	C区 ST3	土器	壺	16.2	(3.2)			内面は明赤褐色、外面は橙色。チャートの粗粒砂を含む。口縁端外側に竹管文。	
520	C区 ST3	土器	壺	20.6	(4.1)			内外面共に橙色。チャートの粗粒砂を含む。	
521	C区 ST3	土器	壺	17.8	(6.5)			内面は明赤褐色、外面は橙色。チャートの粗粒砂を含む。	
522	C区 ST3	土器	壺	19.4	(5.7)			内外面共に浅黄褐色。チャート、砂岩の粗粒砂を多く含む。器表は内外面共に摩耗。	
523	C区 ST3	土器	壺	17.0	(6.7)			内外面共ににぶい橙色。チャート、赤色砂岩の粗粒砂を多く含む。	
524	C区 ST3	土器	壺	20.0	(5.9)			内外面共ににぶい橙色。チャートの粗粒砂を含む。	
525	C区 ST3	土器	壺	19.0	(5.0)			内外面共に橙色。砂岩、チャートの粗粒砂を含む。	
526	C区 ST3	土器	壺	12.6	(7.1)			内外面共ににぶい橙色。砂岩、チャートの粗粒砂を含む。	
527	C区 ST3	土器	壺	13.0	(6.1)			内外面共に橙色。砂岩、チャートの粗粒砂を多く含む。胎土の粒は粗め。	
528	C区 ST3	土器	壺	7.4	(4.7)			内外面共に褐色。石英、砂岩の細粒砂を含む。	

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (7)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
529	C区 ST3	土器	壺		(3.3)			内面はにぶい橙色、外面はにぶい黄橙色。砂岩、チャートの細粒砂を含む。	
530	C区 ST3	土器	壺		(2.0)			内外面共に橙色。チャートの細粒砂、砂岩の粗粒砂を多く含む。口唇部に三条の沈線。	
531	C区 ST3	土器	壺		(2.1)			内外面共ににぶい黄橙色。チャート、砂岩の細粒砂を含む。外面に煤が付着。	
532	C区 ST3	土器	壺		(3.7)			内外面共に橙色。砂岩、チャートの粗粒砂を多く含む。器表は全体的に摩耗している。口縁にヘラ状工具による刻目。	
533	C区 ST3	土器	壺		(2.3)			内外面共ににぶい橙色。チャートの粗粒砂を含む。	
534	C区 ST3	土器	壺		(2.8)			内面は黄灰色、外面は橙色。石英の細粒砂、チャートの粗粒砂を含む。頸部に粘土帯を貼付し刻みを入れている。外面に叩き目と思われる調整痕が残る。	
535	C区 ST3	土器	壺		(5.3)	10.0		内外面共に橙色。石英の細粒砂、砂岩の粗粒砂を多く含む。	
536	C区 ST3	土器	壺		(4.6)	8.0		内面はにぶい黄橙色、外面は橙色。チャート、砂岩の粗粒砂を含む。	
537	C区 ST3	土器	鉢		(4.0)	10.2		内面は灰色、外面はにぶい黄橙色。各種砂粒を多く含む。	
538	C区 ST3	土器	甕		(4.0)	6.0		内面は灰白色、外面はにぶい黄橙色。石英、長石の粗粒砂を含む。底部外面に被熱による変色、赤変、黒色化が見られる。	
539	C区 ST3	土器	壺		(3.1)	4.7		内面は灰色、外面は橙色。長石、石英の細粒砂、チャート、砂岩の粗粒砂を多く含む。外面器表は摩耗。	
540	C区 ST3	土器	甕	12.8	(5.1)			内面はにぶい黄橙色、外面は橙色。砂岩、チャートの粗粒砂を含む。器表は内外面共に摩耗している。	
541	C区 ST3	土器	甕		(9.3)			内面は灰色、外面はにぶい橙色。石英、赤色砂岩、チャートの細粒砂を多く含む。肩から頸部の位置に二列の竹管文を施す。	
542	C区 ST3	土器	甕		(6.2)	10.6		内外面共ににぶい橙色。砂粒を多く含む。	
543	C区 ST3	土器	甕		(7.2)	5.4		内面は浅黄色、外面は明黄褐色とにぶい赤褐色。各種砂粒を多く含む。外面が底部から被熱赤変。	
544	C区 ST3	土器	甕		(4.1)	9.4		内面は灰色、外面は橙色。石英、長石の細粒砂、砂岩の粗粒砂を含む。	
545	C区 ST3	土器	甕		(3.3)	7.4		内面は暗灰色、外面はにぶい黄褐色。石英、長石、砂岩の細粒砂を多く含む。内面器表は摩耗している。底部に一部煤が付着。	
546	C区 ST3	土器	甕		(3.4)	6.4		内面はにぶい黄褐色、外面はにぶい黄灰色。チャート、砂岩風化礫の砂粒を含む。底部外面の器表が黒色化。	
547	C区 ST3	土器	壺	15.9	(5.7)			内外面共に橙色。石英、長石、砂岩の細粒砂を多く含む。内外面共に器表の摩耗が進む。	
548	C区 ST3	土器	壺	20.0	(6.8)			内外面共に橙色。チャートの粗粒砂を多く含む。	
549	C区 ST3	土器	壺	16.0	(5.0)			内外面共ににぶい橙色。砂粒を含む。器表は内外面共に摩耗気味である。	
550	C区 ST3	土器	壺		(2.2)			内外面共ににぶい黄褐色。石英の細粒砂、砂岩の粗粒砂を多く含む。器表の摩耗が進む。口唇部に指圧により一条、口縁外面に文様。	
551	C区 ST3	土器	壺		(7.7)			内外面共ににぶい橙色。石英の細粒砂、チャートの粗粒砂を含む。ヘラ状工具で施文。	
552	C区 ST3	土器	壺		(4.8)			内外面共に橙色。	
553	C区 ST3	土器	壺		(3.3)			内面は黄灰色、外面はにぶい黄褐色。石英の細粒砂を含む。	
554	C区 ST3	土器	壺		(5.2)	6.0		内面は黄灰色、外面は橙色。赤色砂岩風化礫の粗粒砂を多く含む。内外面共に器表の摩耗が激しい。	
555	C区 ST3	土器	壺		(3.7)	7.8		内外面共に橙色。石英の細粒砂、赤色砂岩の風化礫を含む。粒の粗い胎土。内外面共に摩耗が進んでいるが、共に調整痕が残っている。	
556	C区 ST3	土器	壺		(4.7)	4.6		内面はオリーブ黒色、外面はにぶい黄褐色。チャート、砂岩の砂粒を多く含む。器表は摩耗が進んでいるが、ハケ調整が外面に若干残る。	
557	C区 ST3	土器	壺		(5.1)	3.7		内面は灰白色、外面はにぶい褐色。石英、長石、砂岩等の砂粒を多く含む。器表内外面共に摩耗が進んでいる。	
558	C区 ST3	土器	壺		(5.3)	5.6		内面はにぶい黄褐色、外面は橙色。長石、石英の細粒砂、砂岩の粗粒砂を多く含む。	
559	C区 ST3	土器	壺		(5.2)	2.6		内外面共ににぶい黄褐色。石英、チャートの粗粒砂、砂岩の砂粒を多く含む。	
560	C区 ST3	土器	鉢	37.2	(7.0)			内面は黄褐色、外面は浅黄褐色。石英の細粒砂を含む。外面はハケ調整後ヘラ削り。	

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (8)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
561	C区 ST3	土器	二重口縁壺	17.6	(2.0)			内外面共ににぶい黄橙色。チャート、砂岩の粗粒砂を多く含む。	
562	C区 ST3	土器	二重口縁壺	26.0	(8.7)			内外面共に橙色。長石、石英の細粒砂を含む。	
563	C区 ST3	土器	甗	14.0	(2.3)			内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色。砂粒をあまり含まない粗めの胎土。頸部外面にハケ目が若干残る。	
564	C区 ST3	土器	二重口縁壺	15.2	(3.8)			内面は灰色、外面はにぶい橙色。砂岩の細粒砂を多く含む。	
565	C区 ST3	土器	壺	8.4	(5.0)			内外面共ににぶい黄橙色。チャートの砂粒を多く含む。	
566	C区 ST3	土器	鉢	14.2	8.0		2.2	内外面共ににぶい黄橙色、石英、砂岩の細粒砂を含む。底部外面が摩耗している。	
567	C区 ST3	土器	鉢	13.0	7.4		0.5	内面は橙色、オリーブ黒色、外面はにぶい黄橙色。石英、チャート、砂岩の細粒砂を含む。	
568	C区 ST3	土器	鉢	10.0	(5.4)			内外面共に橙色。石英の細粒砂と砂岩の粗粒砂を含む。	
569	C区 ST3	土器	鉢	18.0	(8.2)			内面は明黄褐色、外面はにぶい黄橙色。石英の細粒砂を含む。	
570	C区 ST3	土器	鉢	19.7	(6.9)			内外面共に橙色。チャート、赤色砂岩の細粒砂を多く含む。	
571	C区 ST3	土器	鉢		(5.0)		3.8	内外面共ににぶい黄橙色。石英等の細粒砂を含む。	
572	C区 ST3	土器	鉢	12.7	6.4		3.2	内面は橙色、外面はにぶい黄橙色。砂岩、石英の粗粒砂を多く含む。内外面共に器表の摩耗が進む。	
573	C区 ST3	土器	鉢	15.0	7.7		4.4	内外面共ににぶい黄橙色。石英の細粒砂、砂岩の粗粒砂を多く含む。外面底部まで叩き目。	
574	C区 ST3	土器	鉢	9.8	6.0		3.0	内外面共に橙色。精選された胎土。外面に煤け。内面に朱色の顔料が付着。内面はヘラ及びハケ調整。外面底部近くまで叩き目。	
575	C区 ST3	土器	鉢	12.8	5.5		4.6	内外面共ににぶい黄橙色。チャートの粗粒砂を少し含む。内外面共に摩耗が少し進んでいるが、調整痕が残る。	
576	C区 ST3	土器	鉢	16.4	8.3		5.6	内外面共に橙色。砂岩の砂粒を多く含む。胎土自体は細かい。内外面共に器表の摩耗が進む。	
577	C区 ST3	土器	鉢	10.3	5.4		3.2	内外面共に橙色。精選された胎土。	
578	C区 ST3	土器	甗	13.8	12.8		1.4	内外面共ににぶい橙色。胎土は砂粒をあまり含まない。底部に煤け。	
579	C区 ST3	土器	鉢		(4.3)			内面はにぶい黄橙色、外面は浅黄色。チャートの粗粒砂を含む。	
580	C区 ST3	土器	高杯		(6.1)			内外面共に橙色。石英の細粒砂を多く含む。脚部に穿孔。	
581	C区 ST3	土器	高杯		(5.7)			内外面共ににぶい黄橙色。石英、砂岩の細粒砂を含む。	
582	C区 ST3	土器	高杯		(6.2)			内外面共ににぶい黄橙色。石英、砂岩の細粒砂を含む。脚部の裾部に穿孔。	
583	C区 ST3	土器	高杯		(7.8)			内外面共に橙色。赤色砂岩の粗粒砂を多く含む。内外面共に器表の摩耗が進んでいる。裾部に穿孔。	
584	C区 ST3	土器	高杯		(2.6)			内外面共に橙色。精選された胎土。	
585	C区 ST3	土器	器台		(3.9)			内外面共ににぶい橙色。チャートの細粒砂、砂岩の粗粒砂を含む。器表は全体に摩耗している。	
586	C区 ST3	土器	器台	4.0			8.4	器表はにぶい黄橙色。各種砂粒を多く含む。	
587	C区 ST3	土器	鉢		(2.2)		5.7	内外面共に橙色。花崗岩風化礫及び砂岩風化礫の砂粒を含む。外面底部近くまで叩き。	
588	C区 ST3	土器	鉢		(4.7)		1.8	内面は浅黄色、外面はにぶい黄橙色。チャートの細粒砂を含む。	
589	C区 ST3	土器	蓋		(4.9)		上部径 3.4	内外面共ににぶい橙色。砂岩風化礫の粗粒砂を多く含む。	
590	C区 ST3	土器	壺		(2.6)			内外面共に橙色。チャートの粗粒砂を含む。木葉文を施す。	
591	C区 ST3	土器	壺		(1.6)			内面は灰黄褐色、外面はにぶい褐色。石英、砂岩の細粒砂を含む。口縁端部内外面角に刻目。口縁上側に粘土帯貼付後刻目。	
592	C区 ST3	土器	壺		(1.6)			内面はにぶい黄褐色、外面は橙色。砂岩、石英の粗粒砂を含む。口縁端部近くに刻目突帯。その下に櫛描直線文。	
593	C区 ST3	土器	壺		(1.7)			内外面共に橙色。チャートの粗粒砂を含む。口唇部に櫛描波状文。	
594	C区 ST3	土器	壺		(1.8)			内外面共に橙色。石英の細粒砂を含む。口縁端外面に刻目。	
595	C区 ST3	土器	壺		(2.2)			内外面共に橙色。チャート、砂岩等の細粒砂、粗粒砂を多く含む。口縁端が肥厚し刻目。器表内外面共摩耗している。	
596	C区 ST3	土器	壺		(2.5)			内外面共に橙色。チャートの細粒砂、粗粒砂を含む。口縁外面に波状文。	

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (9)

図版	出土場所	器類	器種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
597	C区 ST3	土器	壺		(3.9)			内面は赤褐色、外面はにぶい褐色。石英の細粒砂を含む。	
598	C区 ST3	土器	壺		(3.6)			内面はにぶい黄褐色、外面は灰黄褐色。石英の細粒砂、砂岩の粗粒砂を多く含む。	
599	C区 ST3	土器	壺		(3.9)			内面はオリーブ黒色、外面は橙色。石英の細粒砂を含む。櫛描の波状文の間に断面三角形の突帯を貼付。	
600	C区 ST3	土器	壺		(2.6)			内面は明黄褐色、外面は橙色。石英の細粒砂を含む。二条の櫛描直線文とその下に四条単位で櫛描波状文。	
601	C区 ST3	土器	壺		(3.5)			内面は灰色、外面は黒褐色。石英、長石の細粒砂を含む。櫛描直線文七条の下に波状文。	
602	C区 ST3	土器	甕		(4.4)			内面は灰色、外面は橙色。チャート、砂岩の粗粒砂を含む。肩上部に円形浮文を貼付。	
603	C区 ST3	土器	壺		(3.2)			内外面共ににぶい黄褐色。チャート、砂岩の粗粒砂を多く含む。器表は内外面共に摩耗している。頸部に刻目突帯を貼付。	
604	C区 ST3	土器	壺		(2.9)			内面はにぶい黄褐色、外面はにぶい橙色。チャートの粗粒砂を多く含む。頸部下に右上左下と斜めに刻みを入れた突帯を持つ。	
605	C区 ST3	土器	高杯		(2.0)			杯部口縁。内外面共ににぶい赤褐色。石英、長石の細粒砂を少し含む。	
606	C区 ST3	石器	石包丁	全長 8.8	全幅 4.5	全厚 1.0	重量 52.0g	粘板岩。全面を研磨し刃部を作出。部分的に欠損。	
607	C区 ST3	石器	敲石	全長 13.5	全幅 10.0	全厚 4.5	重量 929.2g	砂岩。表裏面、側縁に敲打痕あり。表裏面共に敲打によりわずかに窪む。	
608	C区 ST3	石器	砥石	全長 8.5	全幅 3.0	全厚 1.0	重量 41.0g	灰白色で、黒褐色の砂岩風化礫を含む。	
609	C区 P80	須恵器	杯	10.8	(2.3)			内面は灰白色、外面は黄灰色。胎土は砂粒をあまり含まない。	
610	C区 P79	須恵器	蓋		(2.4)	(12.9)		内外面共に灰色。外面(上面)の端の周囲に一条の線を施す。胎土は砂粒をほとんど含まない。	
611	C区 P80	須恵器	蓋		(1.3)			内外面共に灰色。細粒砂、粗粒砂を少し含む。	
612	C区 SK3	土器	高杯		(7.1)		13.4	内外面共ににぶい橙色。石英、砂岩の細粒砂を多く含む。	
613	C区 SK5	土器	甕		(4.0)		8.0	内面は黄灰色、外面は橙色。石英、長石の細粒砂を多く含む。器表は全体的に摩耗気味。底部外面は摩耗が進む。	
614	C区 包含層	土器	壺	19.6	(3.0)			内外面共ににぶい黄褐色。石英、砂岩の細粒砂を含む。器表は摩耗が進む。	
615	C区 包含層	土器	壺	15.8	(3.4)			内面は明赤褐色、外面は橙色。細粒砂を多く含む。粒子が粗めの胎土。	
616	C区 包含層	土器	壺	18.0	(4.0)			内外面共に橙色。チャートの細粒砂を含む。	
617	C区 包含層	土器	壺	13.5	(4.3)			内外面共ににぶい黄褐色。チャートの細粒砂、砂岩の粗粒砂を含む。	
618	C区 包含層	土器	壺	16.0	(6.3)			内外面共ににぶい橙色。チャートの粗粒砂を多く含む。	
619	C区 包含層	土器	壺	15.0	(5.1)			内外面共ににぶい黄褐色。砂岩、チャートの粗粒砂を多く含む。	
620	C区 包含層	土器	壺	15.0	(9.1)			内面は浅黄褐色、外面はにぶい黄褐色。石英、長石の細粒砂、砂岩、チャートの粗粒砂を含む。	
621	C区 包含層	土器	壺	20.9	(10.4)			内外面共ににぶい黄褐色。細粒砂を含む。	
622	C区 包含層	土器	壺	14.8	(5.5)			内外面共ににぶい黄褐色。チャートの細粒砂を含む。	
623	C区 包含層	土器	壺	12.1	(5.2)			内外面共ににぶい橙色。チャートの細粒砂、砂岩の粗粒砂を含む。	
624	C区 包含層	土器	壺	15.6	(2.6)			内外面共に橙色。チャートの粗粒砂を含む。	
625	C区 包含層	土器	甕		(9.3)		7.8	内面は灰黄色、外面は橙色。砂岩、チャート等粗粒砂を多く含む。	
626	C区 包含層	土器	壺		(4.7)		5.8	内外面共ににぶい黄褐色。長石、石英、雲母の細粒砂を少し含む。器表は摩耗が進む。	
627	C区 包含層	土器	壺		(7.9)		6.4	内面は黄灰色、外面はにぶい黄褐色。石英の細粒砂、砂岩の粗粒砂を多く含む。	
628	C区 包含層	土器	壺		(8.5)		10.8	内面は灰色、外面はにぶい灰色。石英の粗粒砂を含む。内面は器表が剥離している部分が多い。	
629	C区 包含層	土器	壺		(2.5)		7.0	内外面共に橙色。石英、チャート、赤色砂岩風化礫の粗粒砂を多く含む。内面器表は摩耗が激しい。	
630	C区 包含層上	土器	壺		(3.7)		7.1	内外面共ににぶい橙色。チャートの粗粒砂を多く含む。底部周辺に指頭圧痕。	
631	C区 包含層	土器	壺		(2.8)		4.8	内外面共ににぶい黄褐色。石英、長石の細粒砂、砂岩の粗粒砂を含む。内外面共に指頭圧痕、外面は底部周辺に有る。	

里改田遺跡 区出土遺物観察表 (10)

図版	出土場所	器類	器種	法 量 (cm)				特徴 (形態・手法等)	備考
				口径	器高	胴径	底径		
632	C区 包含層	土器	壺		(5.0)		5.1	内外面共ににぶい黄橙色。チャート、砂岩の粗粒砂を含む。内外面共に摩耗が進んでいる。	
633	C区 包含層	土器	壺		(3.6)		7.2	内外面共に橙色。チャート、砂岩の粗粒砂を含む。	
634	C区 包含層	土器	壺		(3.5)		4.2	内面はにぶい褐色、外面は橙色。チャートの細粒砂を少し含む。器表は内外面共に摩耗が進んでいる。	
635	C区 包含層	土器	甗	14.6	(11.6)			内外面共ににぶい黄橙色。石英の細粒砂を含む。外面に煤が付着。	
636	C区 包含層	土器	甗	33.1	(9.6)			内外面共に橙色。チャート、砂岩の粗粒砂を含む。器表は摩耗している。	
637	C区 包含層	土器	甗	14.8	(6.1)			内面は浅黄色、外面はにぶい黄橙色。砂岩、チャートの粗粒砂を含む。外面に一部煤が付着。	
638	C区 包含層	土器	甗	13.6	(6.4)			内面は明赤褐色。外面は橙色。チャート、砂岩の粗粒砂を含む。外面に煤が付着。	
639	C区 包含層	土器	甗	17.2	(5.3)			内面は橙色、外面はにぶい橙色。チャートの粗粒砂を含む。	
640	C区 検出面	土器	甗	15.4	(4.4)			内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色。砂岩、チャートの砂粒を多く含む。内外面共に器表の摩耗が進む。	
641	C区 包含層	土器	甗	16.2	(5.9)			内面は橙色、外面は灰黄褐色。チャートの細粒砂、粗粒砂を含む。器表は内外面共摩耗している。	
642	C区 包含層	土器	甗	8.6	(4.2)			内面はにぶい橙色、外面は橙色。石英の細粒砂、チャートの粗粒砂を含む。	
643	C区 包含層	土器	甗		(4.5)			内面はにぶい黄褐色、外面は黒褐色。砂岩、石英の細粒砂を含む。外面に煤が付着。(東阿波型土器)	
644	C区 包含層	土器	壺	19.8	(4.9)			内外面共ににぶい橙色。チャート、石英の細粒砂を含む。内外面共に器表の摩耗が進む。	
645	C区 包含層	土器	甗		(6.0)		5.6	内面は黄灰色、外面はにぶい黄橙色。石英、長石の細粒砂を含む。内面は器表が摩耗している。外面は底部に煤が付着。	
646	C区 包含層	土器	甗		(4.1)		7.1	内外面共ににぶい黄橙色。各種の砂粒が多く含まれる。底部は一部被熱赤変、及び、煤が付着。	
647	C区 包含層	土器	甗		(4.1)		5.0	内面は灰色、外面はにぶい橙色。石英、チャート、砂岩の粗粒砂を多く含む。外面底部に被熱赤変が見られる。底部に少し煤が付着。	
648	C区 包含層	土器	甗		(4.7)		5.8	内外面共ににぶい黄橙色。砂岩の砂粒を多く含む。内外面共摩耗が進むが調整痕は残っている。底部周辺に被熱赤変が少し見られる。	
649	C区 検出面	土器	甗		(5.5)		5.8	内面は浅黄色、外面はにぶい黄橙色。砂岩の粗粒砂を少し含む。外面に煤が付着。	
650	C区 包含層	土器	甗		(3.2)		4.1	内面はにぶい橙色、外面は灰黄褐色。チャート、赤色砂岩の粗粒砂を多く含む。外面器表は被熱による変色が見られる。	
651	C区 包含層	土器	甗		(3.0)		4.7	内面はにぶい褐黄灰色、外面はにぶい黄橙色。石英、長石の細粒砂、チャートの粗粒砂を多く含む。	
652	C区 包含層	土器	甗		(2.4)		2.6	内外面共ににぶい橙色。チャートの粗粒砂を含む。底部まで叩き。強く被熱赤変している。	
653	C区 包含層	土器	甗		(5.5)		2.3	内外面共に橙色。チャートの粗粒砂を多く含む。器表は内外面共に少し摩耗が進むが、底部まで叩き目が残る。	
654	C区 包含層	土器	手捏ね	7.9	7.1		3.7	内面は明赤褐色、外面は橙色。石英の粗粒砂を少し含む。底部は摩耗している。	
655	C区 包含層	土器	甗		(8.7)		2.1	内外面共ににぶい黄橙色。石英の細粒砂、砂岩の粗粒砂を含む。	
656	C区 包含層	土器	鉢		(2.8)		4.4	内面はにぶい褐色、外面は橙色。石英、砂岩の細粒砂、粗粒砂を含む。	
657	C区 包含層	土器	器台	22.6	16.8		20.0	内外面共ににぶい褐色。砂岩の粗粒砂、石英の細粒砂を含む。口唇部に一条の沈線。柱状部中位よりやや上方へ穿孔。	
658	C区 包含層	土器	高杯	23.0	(6.1)			内面はにぶい黄橙色、外面は浅黄褐色。石英、赤色砂岩の細粒砂を含む。	
659	C区 包含層	土器	高杯		(5.2)			内外面共に橙色。チャート、砂岩の細粒砂を含む。	
660	C区 包含層	土器	高杯		(11.1)			内外面共に橙色。チャート、赤色砂岩の粗粒砂を含む。脚、裾部に穿孔。杯部底部は円盤充填。	
661	C区 包含層上	磁器	染付碗		(3.0)		4.6	内外面共に明緑灰色。全体に施釉。高台下端のみ無釉。胎土は黒色微細粒砂を含む白色。明緑灰色の透明釉。	
662	C区 包含層	土器	壺		(1.9)			内面は灰色、外面は橙色。石英、砂岩の細粒砂を含む。胎土は粒子が粗め。口縁部に1.5cm毎に穿孔。	
663	C区 包含層	石器	敲石	全長 16.5	全幅 7.3	全厚 4.9	重量 730.0g	結晶片岩。両端に敲打痕有り。	
664	C区 包含層	石器	磨製石 斧	全長 4.2 (7.7)	全幅 4.2	全厚 0.9	重量 30.7g	粘板岩。全面を研磨して刃部を作出。折損。	
665	C区 包含層	石器	砥石	全長 21.1	全幅 8.3	全厚 0.85	重量 297.8 g	スレート：四万十帯に在る。粘板岩が圧力により変性したものの。	

第Ⅵ章 考察——調査結果と水害史料の検討

第1節. 概説

既に第Ⅱ章で概述した高知県の地形には、その形成力自体の人文地理的側面である自然災害の多発が内在する。すなわち、県土の83%を占める急勾配の山地下に奥行き浅い平野が断続し、その前面には豪雨の来源となる洋上湿度の高い太平洋の潮流と、巨大地震の震源域である南海トラフが横たわる。

前者は、一年に数度、或いは数年に一度という高頻度で暴風雨や高潮・洪水をもたらし、崖崩れ・堤防決壊・家屋や橋梁その他建造物の倒壊流失・用排水設備や農業施設の損壊埋没など様々な災害の中で、累積的に多くの人命をも奪う。後者は、およそ百年前後の周期性を持ち、一瞬の激震に続く大小の余震および激震直後の平野部を数波に渡って襲う大津波の破壊力によって、世代に語り継がれ、石碑に刻まれる程の人的・物的損害をもたらすものであり、その範囲は太平洋岸を中心とする東海から西日本の各地に及ぶ。地震・気象の専門家らによる各地文献史料の被害記録開析や現地踏査の積み重ねにより、それら歴史南海地震(あるいは東南海地震)の推定震源域は高知県東岸沖から紀伊半島潮岬付近の沖合海底下に絞られてきたが、当該海域における1999年の日米共同音波探査地殻調査では、室戸岬沖約85km地点のプレート間滑り面固着域で生じた過去の南海地震源を含む逆断層を鮮明な画像として捉える段階に到達して^{注9}おり、詳細の続報が待たれる。

これら過去の災害に関する科学面および史料面の基礎調査は、急傾斜地・河川・海岸の防壁堤や交通運輸ならびにエネルギー・通信等の基幹設備は言うにおよばず、官庁・企業・学校・医療機関・住宅・公園等の立地・整備計画や危機管理に当たって不可欠の基礎データとなり、その情報価値には計り知れないものがある。地歴を刻む地層堆積の調査は、農業と密着して発展した土壌学と、地球物理学や古生物学と連携して発展した地質学で上下を分担するが、過去の人文地理的災害場面と直結する埋没生活面の調査機会を遺跡発掘が独占する現状に照らせば、この領域での不検知や通過は、大きな社会的不利益をもたらすものと言える。

大勢としては、時代を降るとともに人口を増す沖積平野の形成自体が洪水の産物であり、一般に水系に沿って展開する人口集中地域は、常に洪水の危険性と隣り合わせで存在する。かつて、島田豊寿氏は、『高知平野に於ける先史時代海岸汀線の研究』^{注10}において、「黒領弥生式遺跡地の出現によって略々5m前後の標高を以て弥生式期の一厳密に言えば後期弥生式期一水陸接触地帯でありとする推定を試みたい」とした。しかし、今回の里改田遺跡発掘調査では、この推定値を約1m程下回る標高4m前後の水準で同時代の遺構面が現れており、なおも地盤水準と海面水位の相対的変動値が推定困難な状況が改めて浮き彫りとなる。とはいえ、弥生時代以後の長期複合分布によって画定された遺跡範囲が現在の集落範囲とほぼ一致する点や、物部川の自然吐流口方位からの掃流を示す河成砂礫堆葉理は、少なくとも歴史時代に顕著な局地的地盤水準の変動が介在しない点を印象付けており、当地域周辺に関連する洪水史料と調査成果の照合が相互に有用となる。

災害年・旧暦月日	災害内容	災害年・旧暦月日	災害内容
寛永三年 (1626)	旱魃；洪水	宝永四年 (1707)十月四日	大地震と津波
万治元年 (1658)	洪水	享保十七年 (1732)	虫害による飢饉
万治三年 (1660)	洪水	延享三年 (1746)	暴風雨
寛文元年 (1661)	洪水	宝暦元年 (1751)	暴風雨と津波
寛文二年 (1662)	洪水	宝暦七年 (1757)	暴風雨と津波
寛文六年 (1666)	洪水	宝暦八年 (1758)	洪水
貞享四年 (1687)	暴風雨	天明二年 (1782)	洪水
元禄十四年 (1701)	大旱魃と洪水	寛政四年 (1792)	洪水
元禄十五年 (1702)	暴風雨	文化十二年 (1815)	大洪水
宝永元年 (1704)	暴風雨と洪水	文政五年 (1822)	洪水
宝永三年 (1706)	暴風雨	安政元年 (1854)十一月五日	大地震と津波
宝永四年 (1707)八月	暴風雨		

南国市域における近世の主な災害：『南国市史』下巻第五編第二章第四節「社会情勢と政策」(執筆・山本大)に基づく

第2節. 昭和南海地震の観測体制不備と、安政南海地震時の里改田周辺

戦後間もない昭和21年(1946)12月21日早朝の04時19分、潮岬沖約30kmの海底域を震源とするM8.0の南海地震が、紀伊半島から四国の太平洋沿岸を襲った。本来ならば、将来の地震災害対策に役立つ科学的観測データを蓄積する機会であったが、実態として、各地での踏査や体験の聞き取りなど対歴史地震同様の古典手法が調査の中核を担った点を、岡野健之助氏は次のように述べている。「実はこの地震は、今村明恒東大教授によって早くから予想されていて、その発生を予知すべく紀伊半島に私財を投じて観測所が設けられていたのであるが、戦争のために観測が途絶え目的を達することができなかった。もっとも、現在の高度な観測によっても予知がむずかしいことを考えると、果たして発生時までを予想できたかどうかは疑問ではあるが、その先見の明と行動力には敬意を表さざるをえない。気象庁の和歌山測候所が空襲によって焼かれたために地震観測が行われていなかっただけに、もしも観測がつづけられていたならば発生前後の貴重なデータが得られたであろうに」と思うと残念なことである^{注1}」。また、地震当時、旧制高知高校の官舎に在宿していた沢村武雄氏(後、理学博士)は、「そのころ“地質屋”といえ、今とちがって県下でわたしひとり。“おれがやらねば”ということになった。当時、最も困ったのは食糧だった。……カメラも蛇腹つき中古品のセミパル^{注2}で…そのフィルムを手に入れるのでさえ自由でなかった」と述懐する。

この観測体制の不備と地震が未明に発生した点は、地震や津波・地盤変動の規模・プロセスの開析に不明箇所を多生する一方、天武十三年(684)以来の歴史南海地震に比べ、昭和南海地震の相対的小規模が知られるようになり、昭和のデータは将来の地震対策基準としては不足とする指摘が相次いでいる。この状況は、震災から3年を経た昭和24年(1949)に高知県が発行した『(昭和)南海大震災誌』に収録する三和村(里改田は三和村に所属していた)の被災の軽さと、前回地震の災厄を伝える古老談の対比にも反映する。

すなわち、昭和南海地震については、「三和村は高知市の東、香長平野の南部にありて、東は前濱村及び日章村を経て物部川に達しているが、又南方は土佐灣に面する農村である。今回の大地震後津波を虞れたるも、南方の海岸線は丘陵(砂丘)をないしている関係上津波の浸入を遮って大した被害を蒙らなかつた。昔より里改田附近の田圃は三坪の雨が降ればいかる(水底に没する)と云われ、

地震による土地の沈下は大体二尺位で、村民は洪水を怖れていたが、翌二十二年の出水期には大海原と化し容易に減水せず大なる被害を生じた。今後排水路を如何にすべきか問題を残している。これが対策は本村として技術的に重大問題である。^{注3}として、むしろ翌年の洪水被害の大きさを引き合いに、排水の課題を指摘している。

一方、同書所収の安政南海地震(1854年12月24日夕刻の16時35分頃発生)に関する「三和村の古老の言」では、「霜月八日黄昏から夜にかけての強震、村人は地裂を恐れ、津波を怖れて、もよりの山へ藪の中へ避難した。物部川の川口から押し寄せた高潮は、濱改田の北側にドットせまり里改田を洗い片山との村境まで迫った。村の大半は凄い海、沖合から流された舟は丸池の地蔵に激突したのもあり、中にはそれで命を失った船人もある。余震旬日にわたり、その度毎に海水は襲った。避難民が山に藪に小屋掛してくらし、人馬諸共の避難生活がつづいた。恐怖のあまり永い者は二十日に及んだ^{注4}とする。この安政南海地震による土佐藩内の被害合計は、藩主山内豊信から幕府への差出に、潰家2939軒、半潰8888軒、焼失2460軒、流失3182軒、死者372人と報告される。^{注5}

第3節. 史料に見る里改田村の宝永地震被害

安政南海地震を147年遡る1707年10月28日の14時頃、東海道と南海道で同時発生した宝永地震による土佐藩内の被害に関しては、藩主山内豊隆から幕府への差出に、流家11167軒、潰家5608軒、死人1844人、死牛馬548足、損田45170石余、米流失22120石余にのぼると報告されており、^{注6}激震と共に過去最大級の津波被害を生じている。

『谷陵記』では、宝永地震による里改田の津波被害を「潮ハ家迄」と記載する一方、物部では三分の一が流亡し、死者二十四とする。上田村については、潮は家の「中半」に止まり流家は少ないとするが、下島と久枝は流亡、前浜は半ば流亡とする。また、浜改田については、全田が潮によって破損したが、家には「中半」に止まり、流家はないとし、十市については、潮は田の「中半迄」と記載する。ここに見る入潮の深度分布は、物部川河口と海岸砂丘の低所から押し入った津波の動きや、当時の地形を再現する上で、重要な手掛かりとなる。里改田に比べ近世の物部川河道に近い上田村がやや軽度の浸水や流家に止まるのは、標高差による入潮の水位や地形上の排水経路に当たるか否かの相違と見られる。

また、延宝三年(1675)から明治三年(1870)まで、里改田村の定庄屋を勤めた宇賀家の膨大な文書(宇賀家文書)中に、地震発生から10日を経た宝永四年十月十四日(1707年11月7日)の差出があり、次のような項目別被災の集計が記される。^{注7}

<原文>	<主意>
一 人馬死失ハ無御座候	(人馬に死失はない)
一 潰家五拾九軒	(全壊家屋は59軒)
一 流家四軒	(流失家屋は4軒)
一 損田五百石余	(破損の田地は5百石余り)
内 貳拾八余石 永荒池成	(その内、28余石は永く荒池と成る)
四百七拾貳石余	(472石余り)

- 但上ははげ来作毛付難成様ニ奉存候 (但し上土が流失して作付けが困難と思われる)
- 一 流米貳拾石 (流失米20石)
 - 一 同粃三拾六石 (流失粃36石)
 - 一 ぬれ米百八拾三石 (浸水米183石)
 - 一 同粃貳百拾石 但種粃米 (浸水粃210石但し種粃米)
 - 一 同麦種貳拾三石 (浸水麦種23石)
 - (中 略)
 - 一 百姓数六拾五人之もの共ハ諸道具 (百姓65名は、諸々の道具や農具類を流失した)
御農具類共流失仕申候
 - 一 井関堤都テ痛申候 (井関堤はすべて破損した)
 - (中 略)
 - 一 麦地上ははげ又ハごみニうまり、こへ (麦畑は上土が流失したりゴミに埋まり、肥え灰も
はい迄も流シ麦作何共難成奉存候 流れ去ったため、麦の作付けは手の施しようがない)
 - (下 略)

これらの項目でまず目を引く部分は、流失家屋4軒に対し、家高の1/3に当たる59軒の全壊家屋を生じる一方、人馬の死失がない点であり、揺れや地割れによる家屋の倒壊が相次ぐ中で、高所への避難が迅速に行われた状況を想わせる。後の安政南海地震時に襲来した津波走時(波源域からの到達時間)は、『大変記』の記事から物部川東岸の赤岡町岸本で15—20分と推定されるが、「村人は地裂を恐れ、津波を怖れて、もよりの山へ藪の中へ避難した」とする前述の三和村古老談は、この宝永地震の災害と山地避難の伝承を投影するものと考えられる。高知に関して「未の上刻大地震同下刻津波」と『谷陵記』に記す点等から、宝永地震の津波走時は、安政南海地震と同じ15—20分程度と推算されている。里改田の集落には南北から丘陵端が至近に迫るため、いずれの場合も「山へ藪の中へ」の速やかな避難が可能であったと思われる。安政南海地震を語る「三和村の古老」は、「人馬諸共の避難生活がつづいた」とするが、これはその前回の宝永地震に関する宇賀家文書「差出」に見る「人馬死失ハ無御座候」(人馬に死失はない)と一致しており、宝永地震の際にも馬を曳いての山地避難が行われたことを物語る。

第4節 宝永・安政両地震の津波浸入路と引潮路

宝永地震の津波浸入路に関して『田村誌』は、「前浜の東、古湊の切戸を押切って大潮が高く北上して伊都多神社の前から東の窪にまで来た」とし、「遠く北へ走って立田村・岩村の辺まで逃げた者もある」とする伝聞を披露している。物部川を遡上する津波の到達先の手掛かりは、『谷陵記』の「野市 潮は芳原境まで家少し流る、物部 三ヶ一亡所 上田村 在家中半まで潮入流家少し、下田村 亡所」にある。間城龍男氏は、この記載によって「海岸から2—3 km程度内陸に入った昔の立田往還近くの高抜11—13 m程度の所にまで達したらしい」と推定している (Fig.76)。

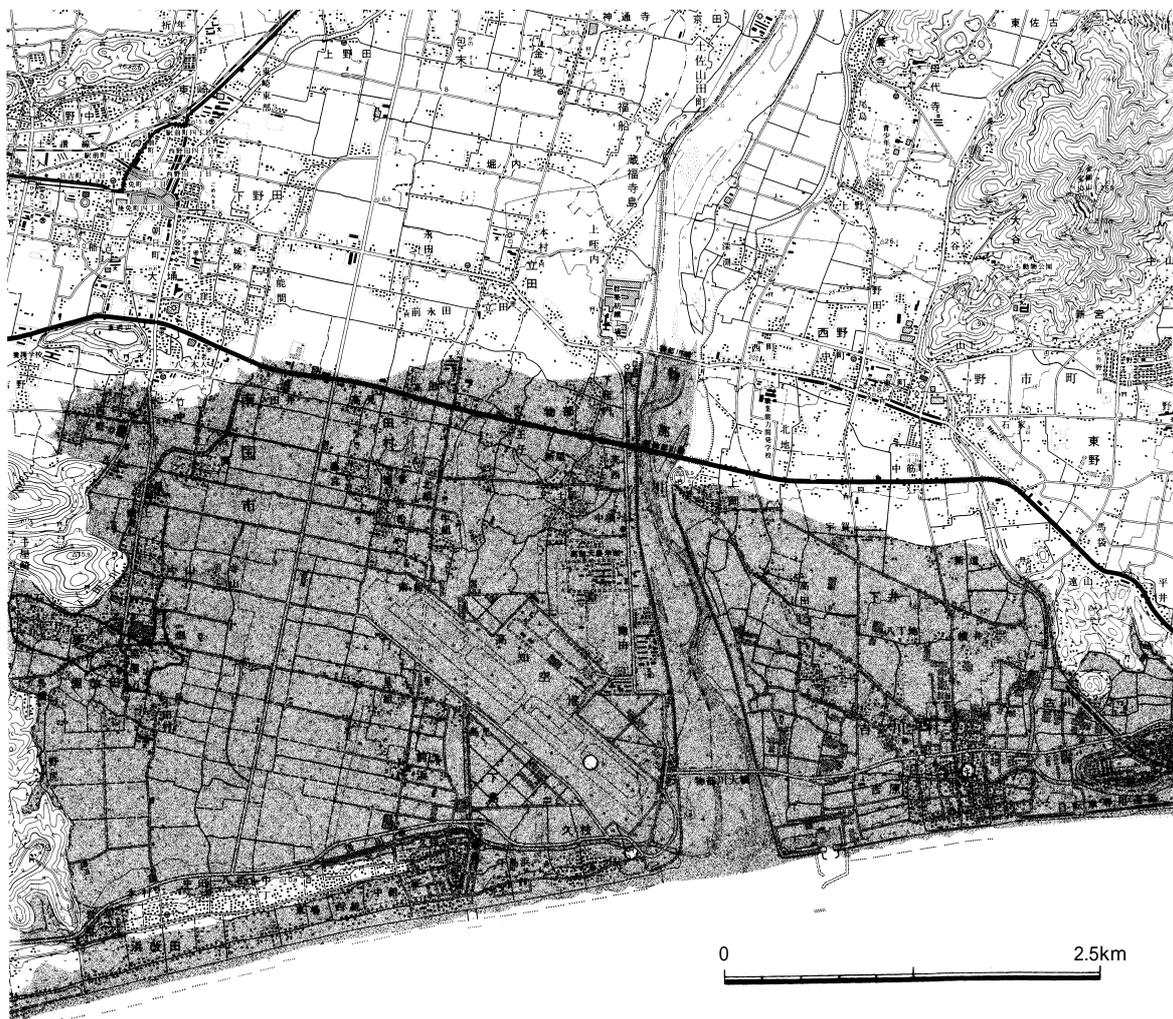
物部川から東に約7 kmを隔てた夜須町の状況に関しても、常住寺の住職を務めたと見られる独楽軒安方斎が、明和五年(1768)に記した『大地震の大変記』(清藤家文書)により、家々から転げ出し

た人々が山へと逃げ惑う様子が知れる。すなわち、「暫して三十余丁隔たる浜より浪が入ぞと呼声里人呼続き、千里の山奥まで讒時に呼伝へる、聞人遠近の考もなく我先にと山上に逃げ去る。子はなくなく親を呼親ハ子の行衛を尋死するハ今となけきかなしむ有様、焦ねつ地獄のくるしみも是にはいかてまさるへし、ほとなく海より式拾余町浪入来る。否引事常にみちる所より三町余干潟^{注21}と成る」と記す。同様の情景は、沿岸の各所に展開した模様であり、浪入りの警報を口々に伝え継ぐ仕方も共通する。物部川の河口付近の人々は、「何れもカア、カアと連呼して走ったと伝えられているが、川の水を見よの意か、それとも無意義な言を無意識に云ったのかは明らかでない」と『田村誌』^{注22}は記す。

安政南海地震について『立田村誌』は、「第二震の時の津波が一層高くて、立田近くまで寄せて来た」と云う。そこで当村の人々は山田方面へ向かってにげ走ったり、又竹藪に畳むしろなどを敷いて、しきりにカア、カア々と云って川の水を見て居たと云う。思うに津波の川を逆流してくるのを見たものであろう」としている^{注23}。

長い波長の高いうねりとなって沖から押し寄せる津波は、砂丘の高所では阻止されるが、その水圧は津波の遡上路となる河口部や砂丘低所にはけ口を求め、自らの重力と水圧との均衡域まで、河道や地面の低所を遡上する。これにより、西岸に比べ砂丘の発達が比較的低い物部川河口の東岸では、遡上波は岸本まで直接浸入した後、低地へとはい進んでいる。物部川西岸では、物部川本流河道の他、近世段階では現代よりも明瞭な凹地列をなしていた景観が史料に記される旧河道跡や、砂丘後背を東西に流れる後川沿いのデルタ地帯が、膨大な海水の浸入路となる。物部川本流河道とその直西の旧河道跡を遡上する海水は、ともに越溢して一帯を浸水しつつ遡上するが、旧河道跡の凹地列が立田手前の物部付近で本流河道寄りに収束度を強めるため、この付近に達した遡上波は再び高さを増した可能性が考えられよう。砂丘後背のデルタを西進する大量の海水は、切戸や浜改田岩坂の砂丘低所を越えてなだれ込む海水と合した後、琴平山の東裾に阻まれ、その水圧のはけ口をデルタ際の里改田やその西方の稲生デルタに向ける。

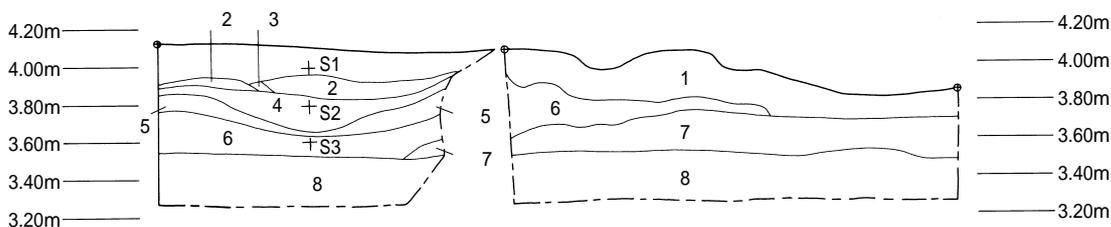
これらの浸入海水は、水圧と重力との均衡域に達するまで遡上展開して合体した後、沖合遙かに後退する引潮の減圧を補う動きにより、地形水準の低所を求めて海への帰路である河口へと殺到する。この場合、海面の後退によって陸上浸入海水と後退した海面との間に大きな落差を生じているため、浸入海水の後退は、通常の洪水よりも破壊力を増す。砂丘を除く津波浸入時の遡上路は、多くの場合に引潮時の海水退路となり、本流河川の他、洪水時に地表水の流入排水路となる諸派流や旧河道凹地列は、その激流に洗われる。この種の典型は、第Ⅱ章・地理的歴史的環境で概述した遺跡の空白地帯であり、物部川西岸の沖積扇では、現物部川に沿って田村遺跡群の東限を画す凹地列や、自然吐流口の岩積・福船方面から里改田遺跡・田村遺跡群間の湾入デルタに連なる凹低帯がある。後者も更に古い時期の物部川旧河道の一つと見られ、この延長に当たる浜改田岩坂の砂丘低所も、かつての河口の名残かと思われる。これら水害を受けやすい地帯は、遺跡分布の空白や過疎として映し出される他、それと重なる場合の多い寺社からも明瞭に読み取れる。Fig.78は、明治40年測図の地形図に記載する寺院と社祠の位置を強調マークしたものであり、洪水や津波の害を避ける立地が明確に読み取れる。伝承や史料に表われる流失寺社は、その想定を上回る洪水や津波に見舞



SP.a < X = 60464.037
Y = 13451.811

SP.b < X = 60464.750
Y = 13450.150

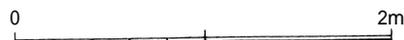
SP.c < X = 60467.002
Y = 13450.909



遺物包含層の下は砂礫層(層)であり、B図トレンチ壁における相対深度0.85mのラミナ(堆積葉理)は、次の状況である。

- V 1: 粗粒砂と径12cm以下の円礫から成る。全体として灰色。
- V 2: 小礫混じりの粗粒砂と細粒砂の互層。全体として灰色。
- V 3: 細礫。全体として灰色。
- V 4: 細粒砂。全体として灰色。
- V 5: ほぼ等量の粗粒砂と細礫から成る。全体として灰色。
- V 6: 細粒砂と粗粒砂の互層。全体として灰色。
- V 7: 細粒砂に若干の粗粒砂と細礫が交じる。全体として黄灰色。
- V 8: 粗粒砂と径12cm以下の円礫からなり、V 1に似る。全体として灰色。

注: 図中のSP.a, SP.b, SP.cは、断面の測点であり、X・Yの数値は公共座標を示す。
SP.a - SP.b区間はトレンチの南壁, SP.b - SP.c区間はトレンチの西壁。





★ 神祠

■ 佛宇

われたものと言えよう。下表は、武田勝氏が地震予知総合研究振興会関係者からの依頼を機に調査した、地震・津波に関わる南国市の寺社伝承や碑文の痕跡を略記したものである。

寺社山名	所在地	関係地震	内容	出典
真福寺	香美郡物部村	宝永地震	堂宇安置諸仏共悉流失	南路志
福榮寺	香美郡久枝村	宝永地震	堂寺共流失	南路志
正興寺	香美郡前濱村	正平地震	古文書流失	南路志
		宝永地震		
本堂寺	香美郡下田村	宝永地震	堂寺流失	南路志
宝岡山	香美郡久枝村	関係地震	村人が避難した山	
		嘉永地震		
上岡八幡宮	香美郡物部村上岡	嘉永地震	津波碑	同碑文
琴平神社	長岡郡里改田村	嘉永地震	津波碑	同碑文

武田勝氏執筆『南国市における地震と津波の痕跡について』記載の地震・津波の形跡史料により作表
注：安政地震は年号のvarietyに発生しており、「嘉永地震」と称される場合もある。

『谷陵記』の記す地区別浸水被害の内容と『田村誌』や『立田村誌』の伝承内容から導かれる宝永津波の浸入域は、標高10mの上田村を北に越え、標高15mの立田に迫ったものと考えられる。

河口からの遡上過程で岸堤を越溢する海水は、久枝や浜窪および浜改田岩坂付近の低砂丘から浸入した越波と合体し、瞬く間に標高10～13m以下の沖積平野を覆ったものと考えられる。宝永地震から13年を経た享保五年(1720)の「奉書」には、「大潮物部川尻 改田ノ後下田川筋へ引落申候」とあり、物部河口からの入潮は、里改田に達した後、下田川に注ぎ落ちた様子を窺わせる。この下田川の性格を、島田豊寿氏は、上岡川・香我美川・田村川・介良川・明見川等と並んで岩積付近から放射状に派流する旧河道や凹地列の一つとする見解を試みている。里改田遺跡の発掘調査で露呈した標高4.00m前後を最終面とする砂礫堆は、Ⅰ区(室ノ内)の堆積葉理とⅡ区の葺瓦状円礫分布の観察によって、北北東ないし北東方位からの掃流作用によって形成された点が判明しており、この方位は、物部川西岸の岩積や福船に向かって先細りの帯状に伸びる遺跡空白帯や下田川の河道方位と重なり合う。従って、立田付近に迫った津波の入潮は、頻発する豪雨の場合と同様に、下田川や旧河川の凹低地形に沿って、やや西寄りの緩弧を描く形で里改田村に流れ込み、浜改田岩坂方面から琴平山の山裾沿いに北上して来た入潮に合したものと考えられる。

第5節 まとめ

調査区で観察した砂礫堆の円礫成分は、硬質砂岩を主とし、泥質岩・珪岩・チャートがこれに次ぐ。緑色岩や玄武岩質熔岩、或いは蛇紋岩類等の塩基性岩の混在は極少もしくは不見であり、それらの混在が珍しくない国分川水系の礫成分とは一線を画する。この状況は、今一つの砂礫堆成分である粗粒砂の観察についても、より際立つ。Fig.77は、Ⅱ-C区の砂礫堆に設定したトレンチの壁面の一部(標高4.12m～3.26m)であり、SP.a—SP.b区間が東西方位の断面、SP.b—SP.c区間が南北方位の断面を表す。全体として大小の円礫と粗粒砂の互層を成し、北優位の流水による浸蝕・埋積跡の明瞭な谷型葉理が観察される。伏流水の上位面はV-8の標高3.17m前後の層準で検知しており、調査前

の地表面からは僅か1 m程度の浅さである。伏流水の水準や水脈位置は変化を伴うが、水の浸透が容易な砂礫層の広範な分布は、素掘りでも高い確率で水の得られる環境と言える。

第Ⅱ章第6節の「地形と周辺遺跡の分布」で詳述したように、里改田遺跡は物部川沖積扇の扇端に位置し、かつては田村遺跡群と同様に、海水と淡水の交錯するエリアに密着して繁栄を維持したと見られる。しかし、この人文地理的環境は、常に水害の危険に晒される宿命にあり、遺存文献の増す近世以降については、その災害状況も相当に詳しく伝わる例が少ない。里改田地区の周辺に関わるこの種の史料は比較的多く、埋没史料の発見のみならず史料間の照合によって新たな史実が浮かび上がる可能性もある。また、文献史料との接点を宿す近世層位の解析は、より古い層位に遺留する水害の残痕検知にも役立つ。

今回の調査では、時間的制約から近世層の遺存について精査を欠いた。このため、特に流水方位を刻む斜交葉理の記録を主眼とする近世層精査が、この里改田遺跡をはじめとする低地遺跡の調査に今後加わることが望まれる。(武吉眞裕)

注釈

注9 『高知新聞』1999年8月19日。朝刊社会2面(所載の地殻断面画像は、東大海洋研究所・工業技術院地質調査所・テキサス大・ハワイ大等の共同チームが提供)。

注10: 『高知平野に於ける先史時代海岸汀線の研究』—島田豊寿執筆『土佐史談』復刊第12号(通刊91号) 1957.8.21。

注11: 『四国の地震』岡野健之助著—土佐出版社。1988年。

注12: 『日本の地震と津波—南海道を中心に』沢村武雄著—高新企業(株)開発部編。高知新聞社1967年。

注13: 『(昭和)南海大震災誌』編集—南海大震災誌編纂委員長 高知県副知事 廣木三郎; 発行—高知縣。昭和二十四年十二月二十一日。

注14: 同上

注15: 『日本の地震と津波—南海道を中心に』沢村武雄著—高新企業(株)開発部編。高知新聞社1967年。一方、間城龍男著『南海地震津波—土佐』では、(安政地震の)「被害の合計量は、流家3818軒、全壊4815軒、破損家10289軒、焼失家屋3301軒、死者372人」とする。

注16: 『日本の地震と津波—南海道を中心に』沢村武雄著—高新企業(株)開発部編。高知新聞社1967年。一方、間城龍男著『南海地震津波—土佐』では、(宝永地震の)「被害の合計量は、流家11170軒、全壊4866軒、破損家1742軒、死者1844人」とする。

注17: 『南国市史』下巻—第五編。第三章「宇賀家文書」高橋史朗執筆。南国市史編纂委員会1982年。

注18: 『南海地震津波—土佐』間城龍男著—土佐津波の会。昭和58年。

注19: 同上

注20: 同上

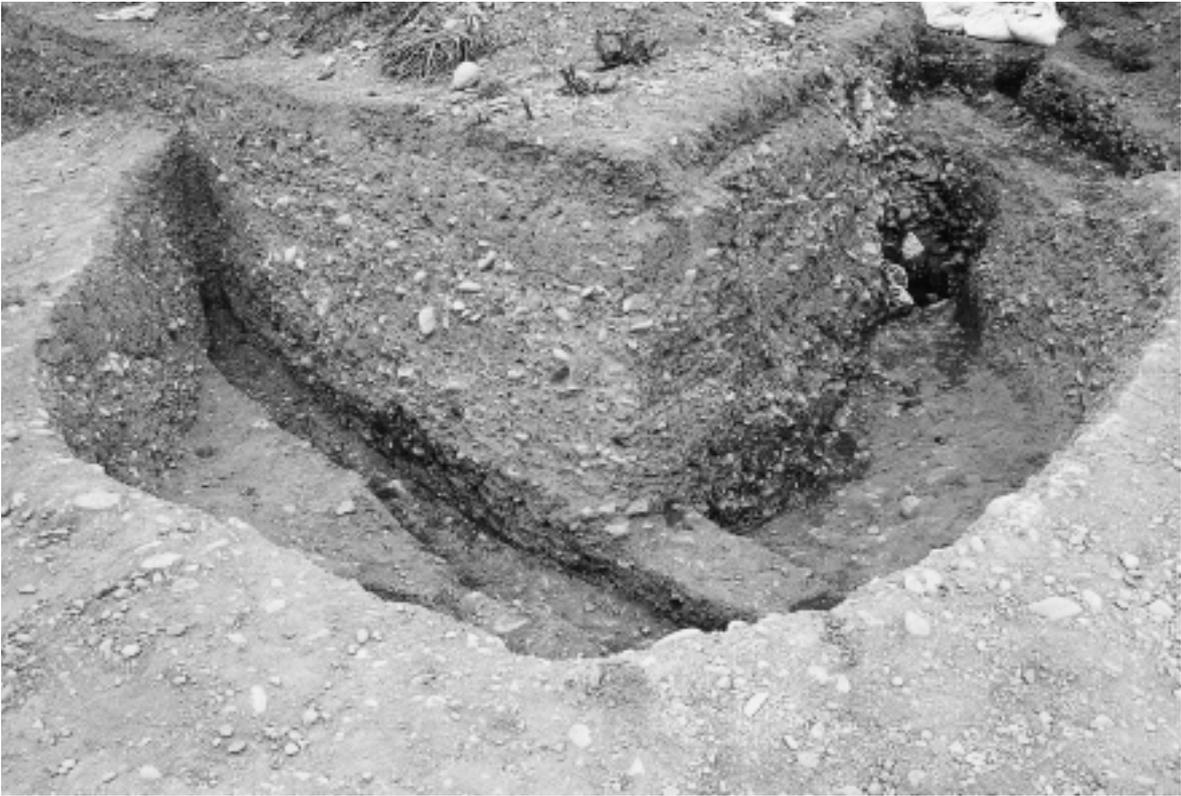
注21: 土佐群書集成。第四十六巻収録『宝永大地震の大変記』(清藤家文書)—高知地方史研究会編。高知市民図書館1979年。

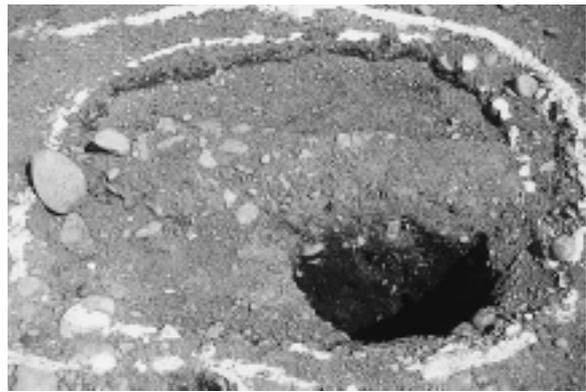
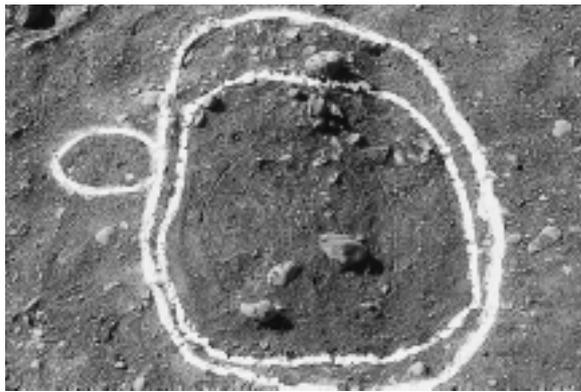
注22: 『南国市史』下巻—第五編。第二章。第四節「社会情勢と政策」。災害の記録—山本大。執筆。南国市史編纂委員会1982年。

注23: 同上

注24: 『南国市における地震と津波の痕跡について』武田勝。執筆—『土佐史談』185号1991年収録。



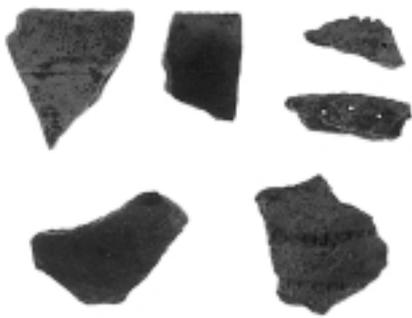
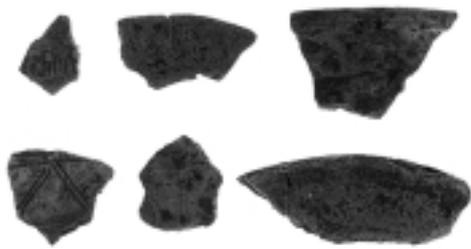
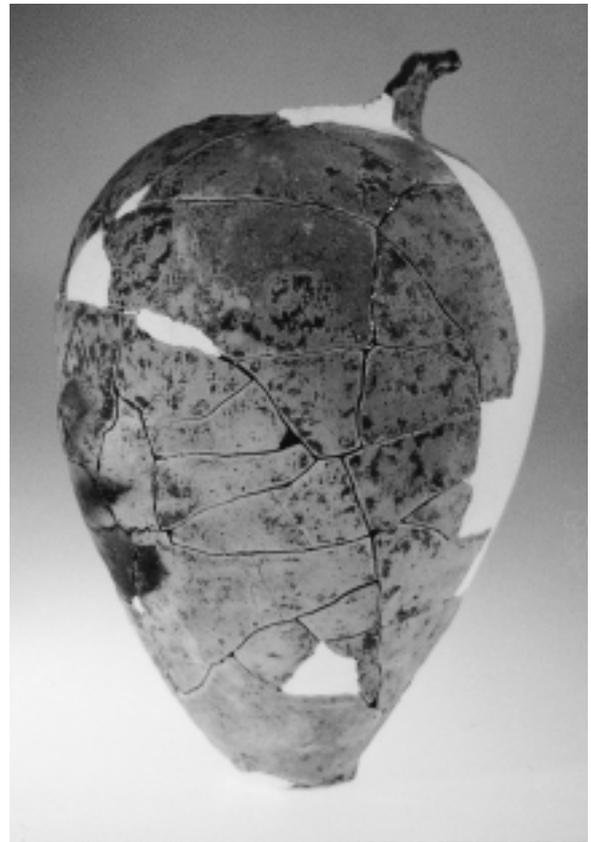


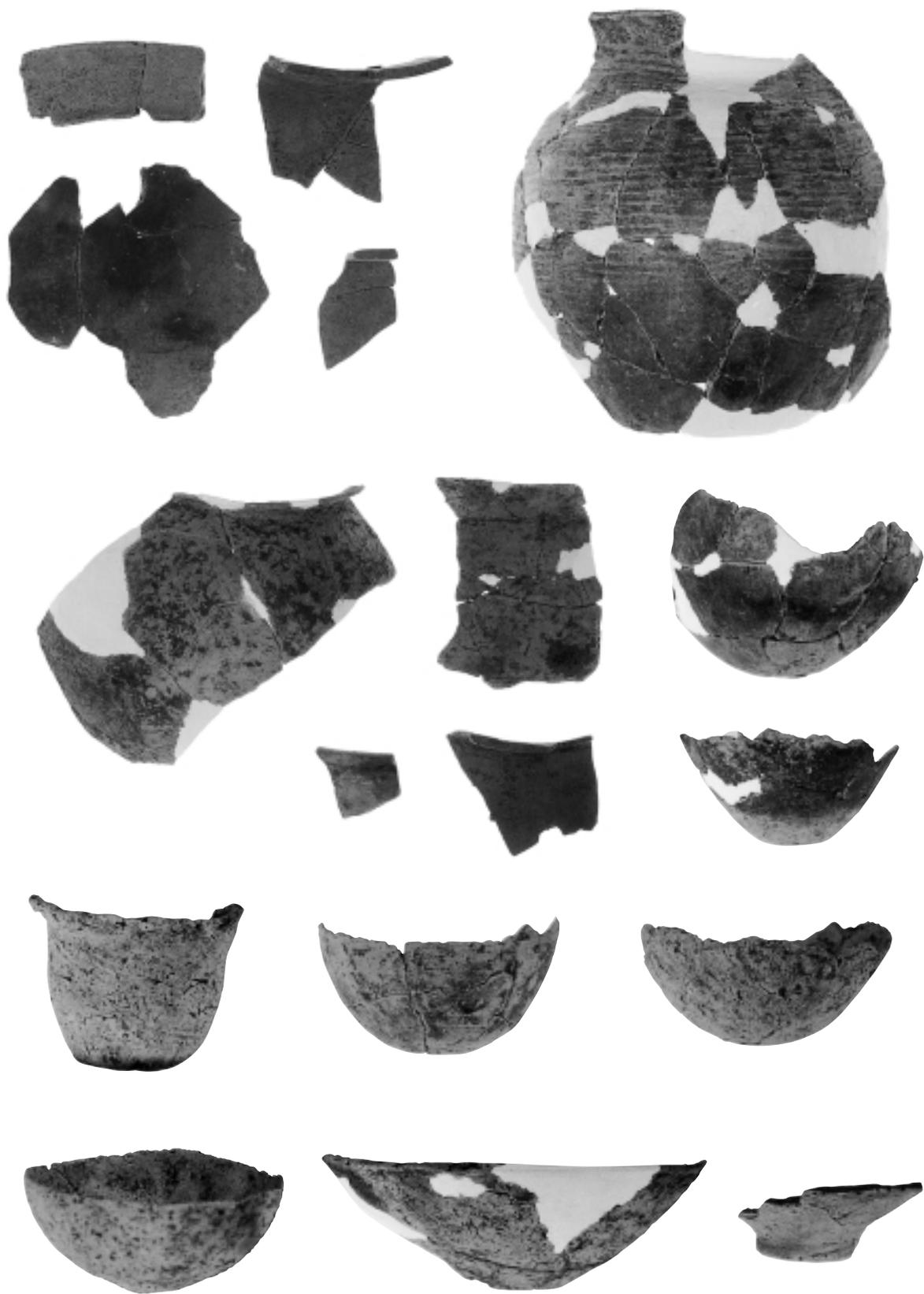


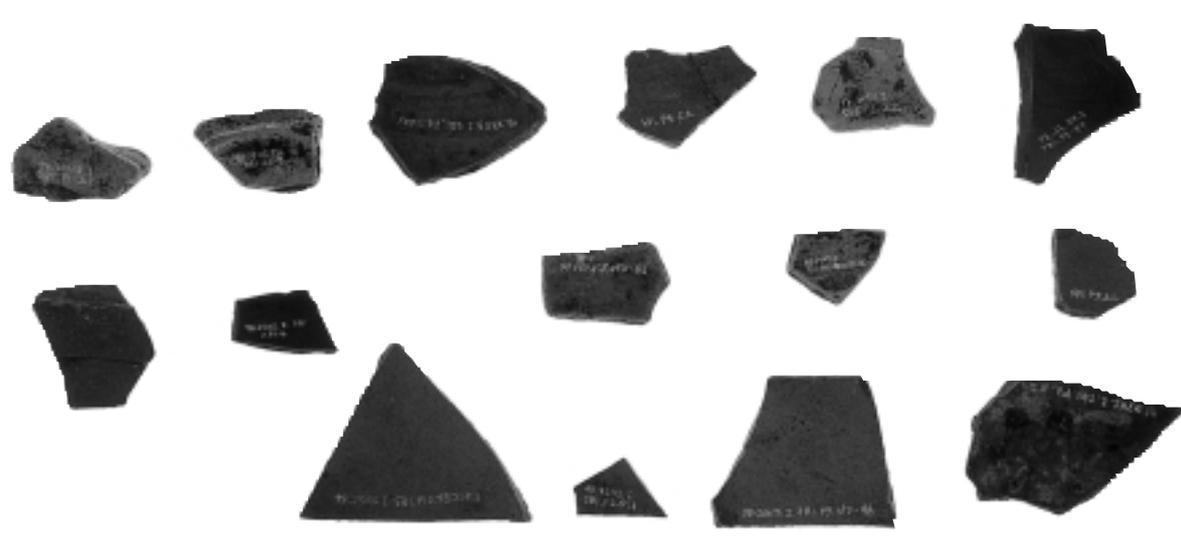
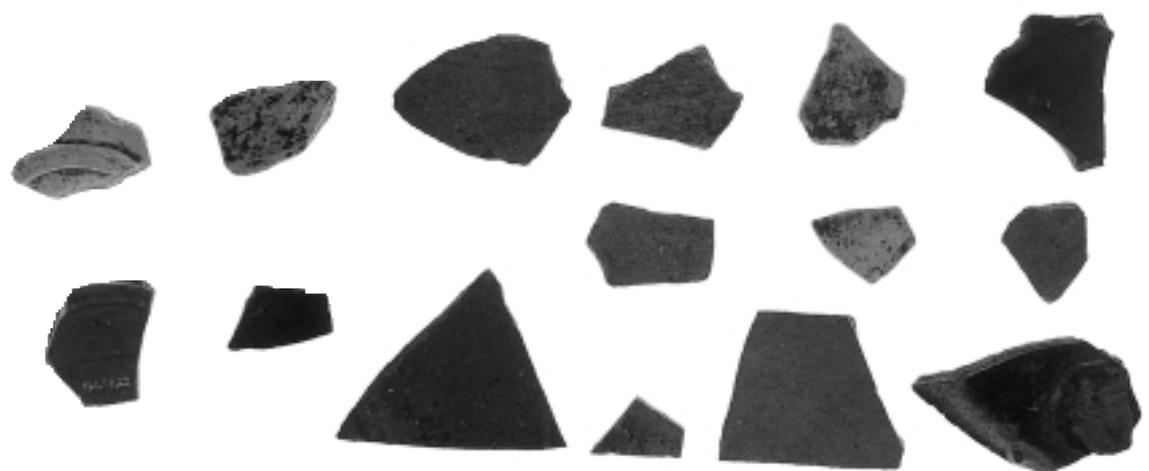
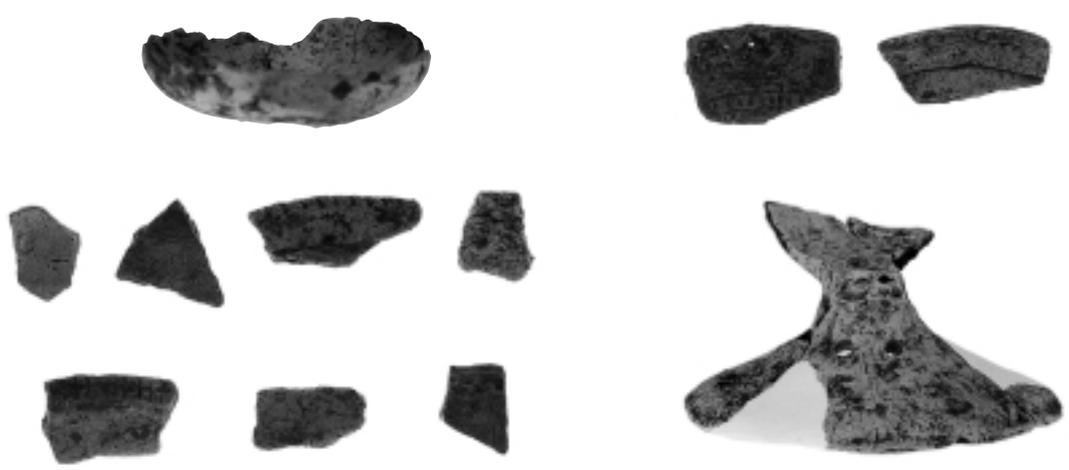


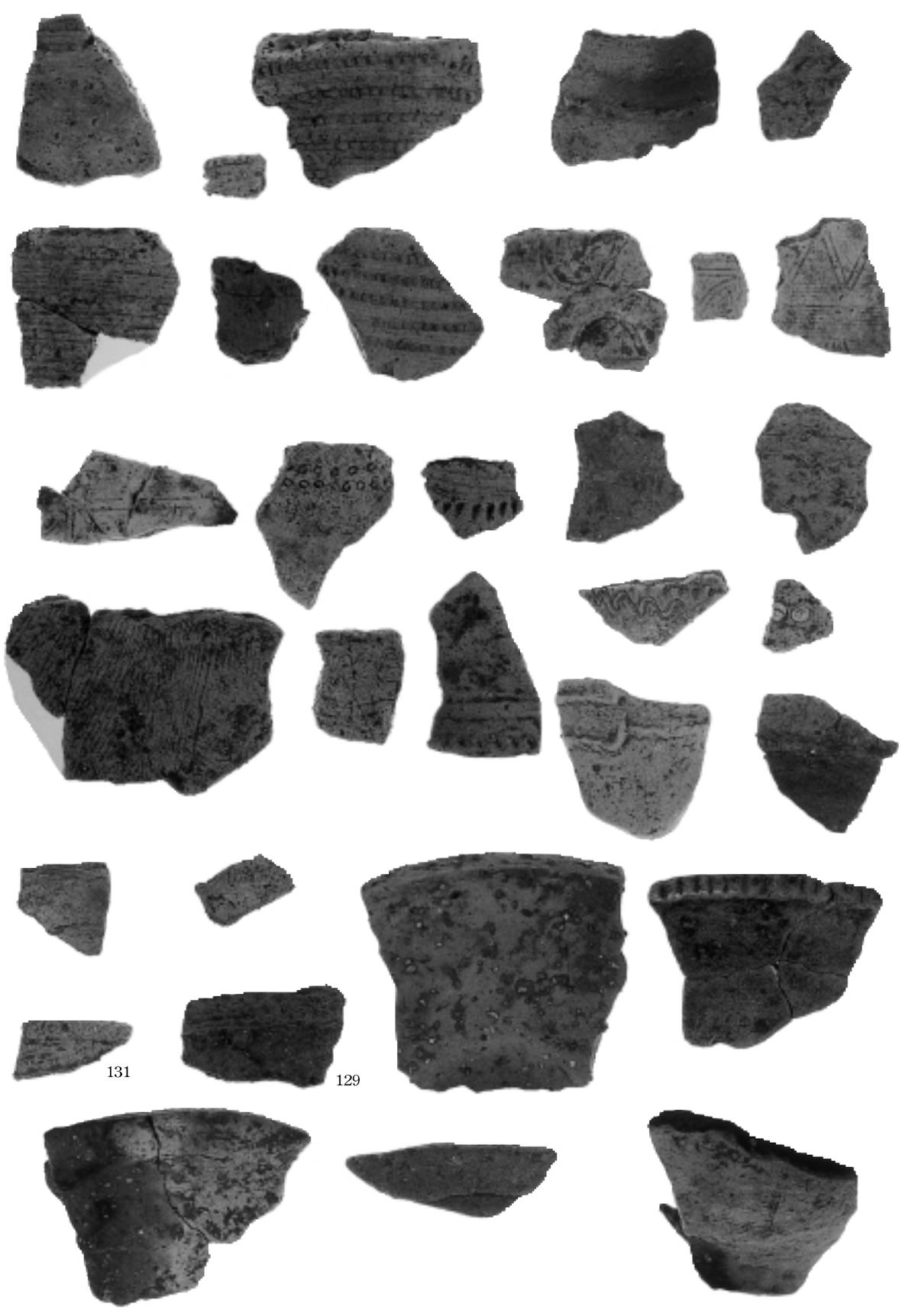








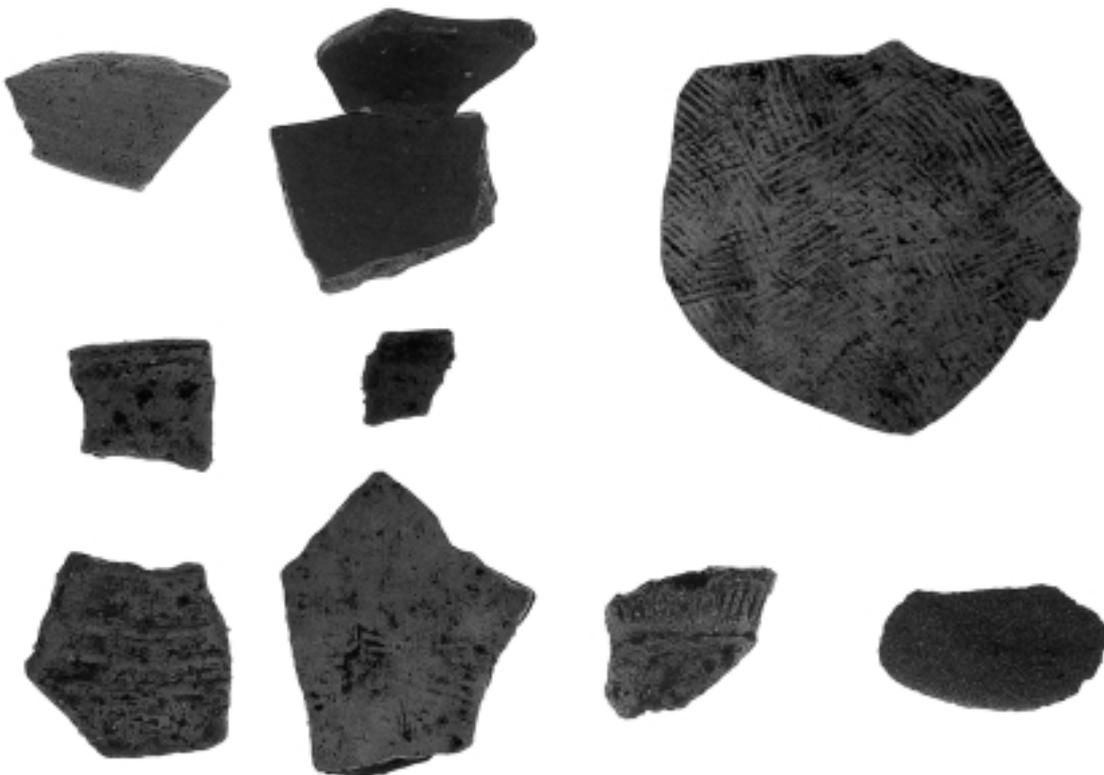




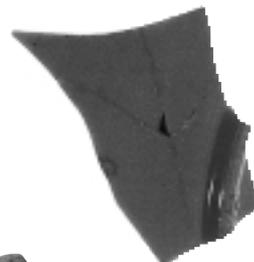
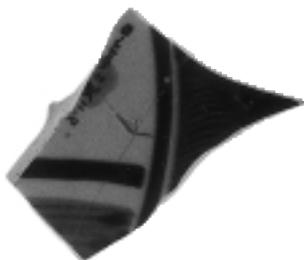
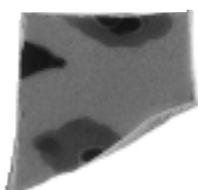
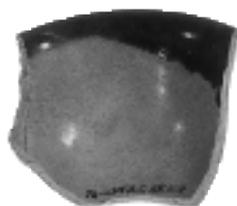
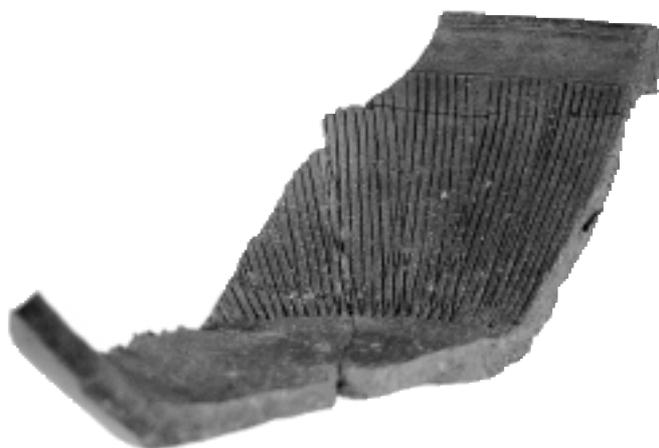
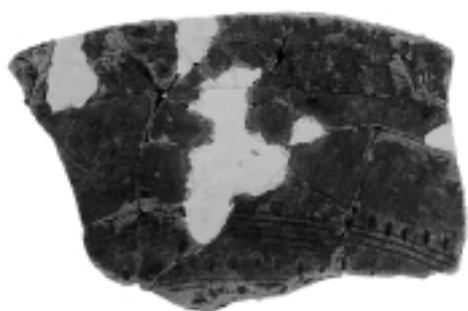
131

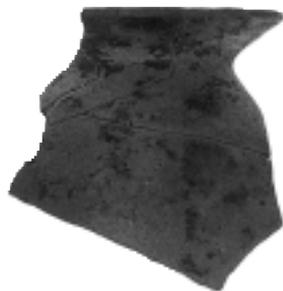
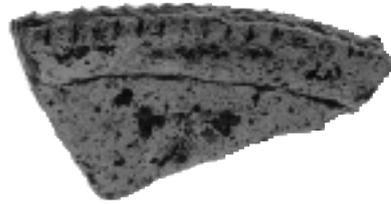
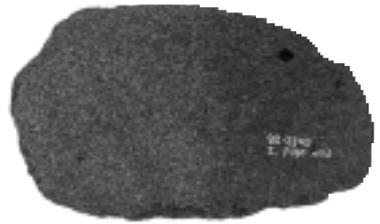
129





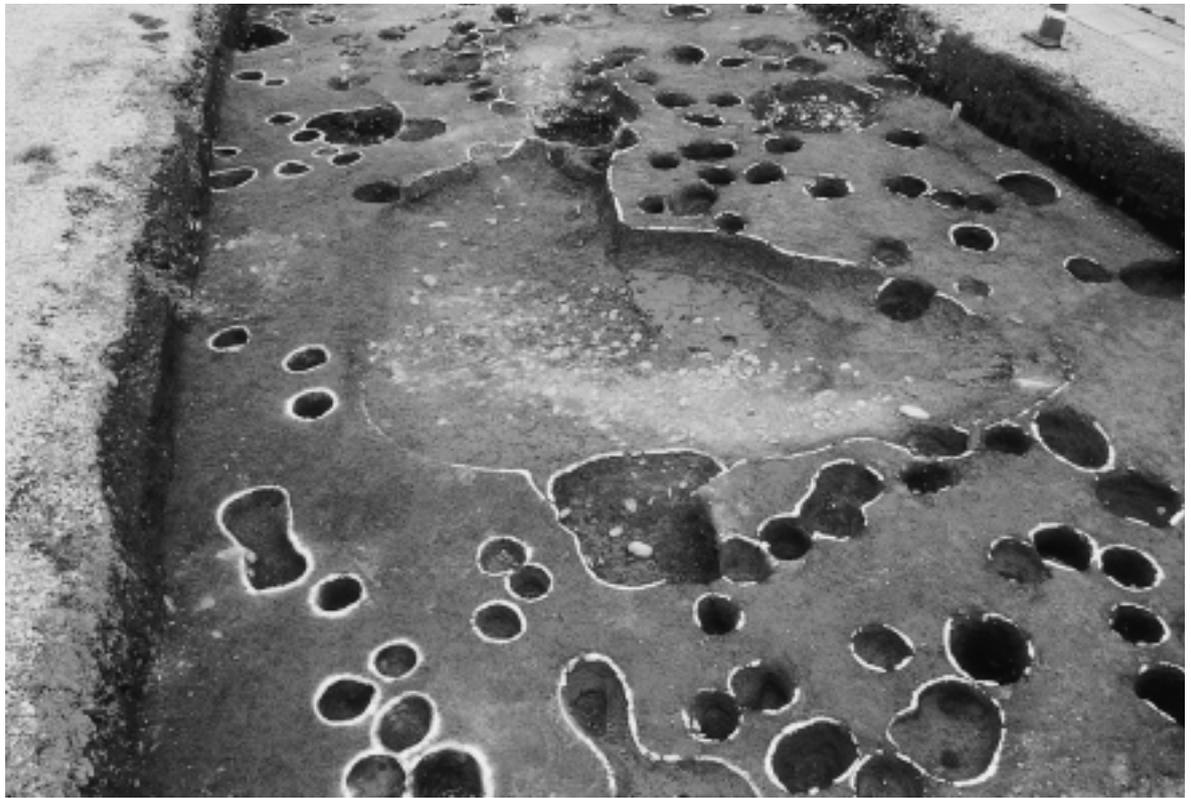




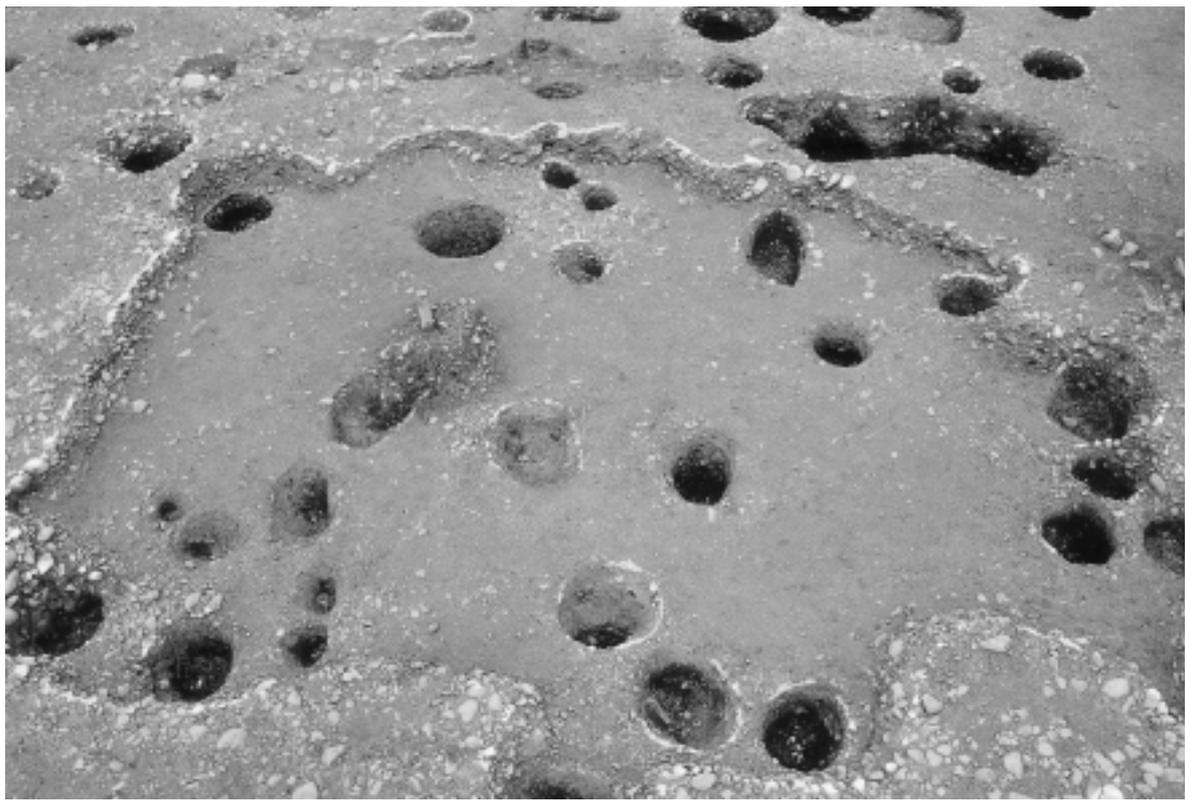


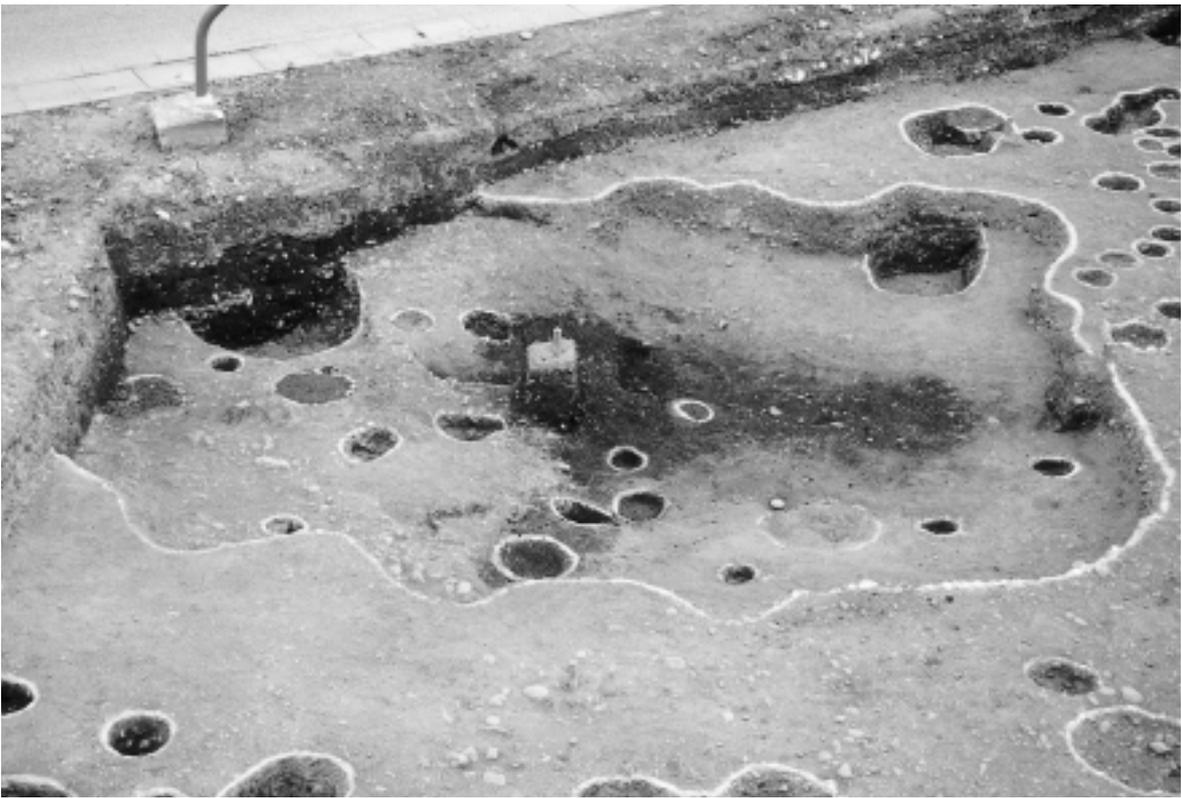


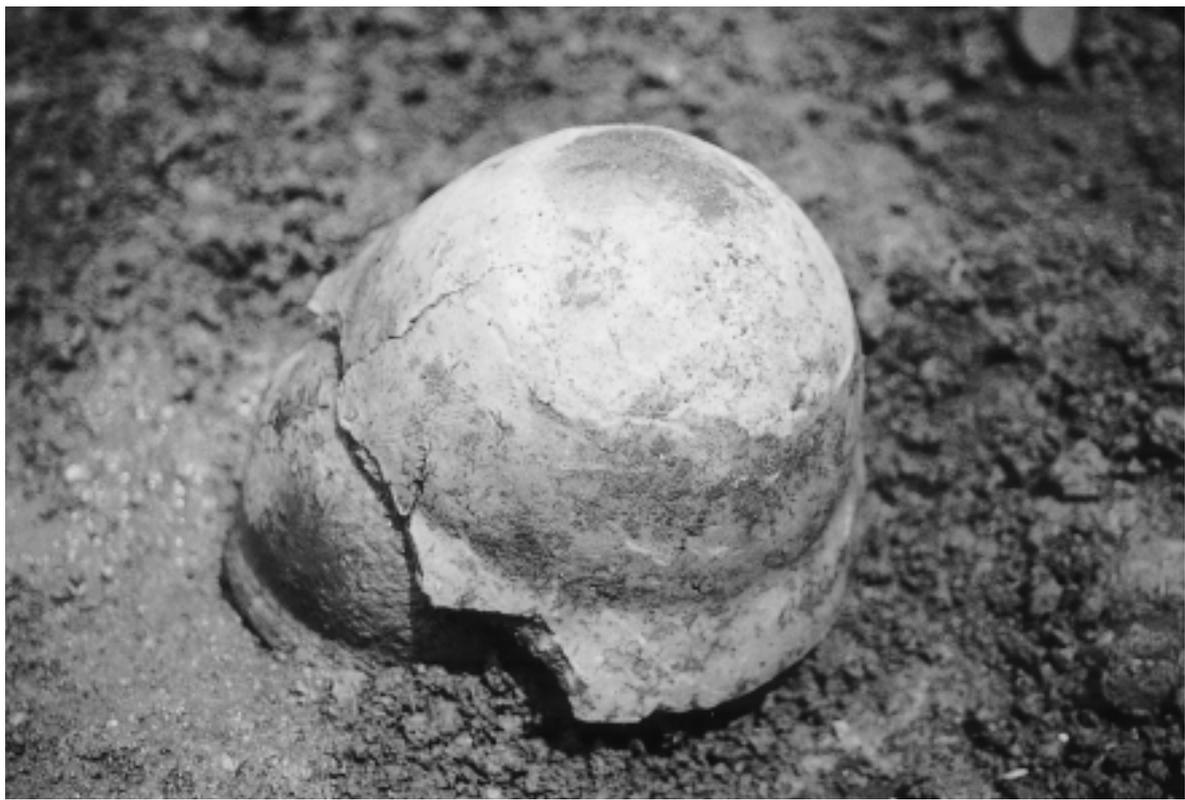


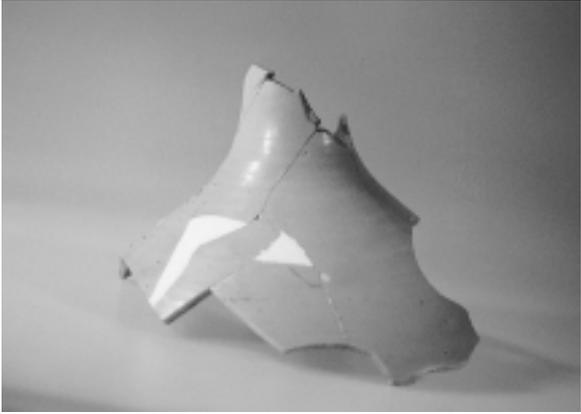
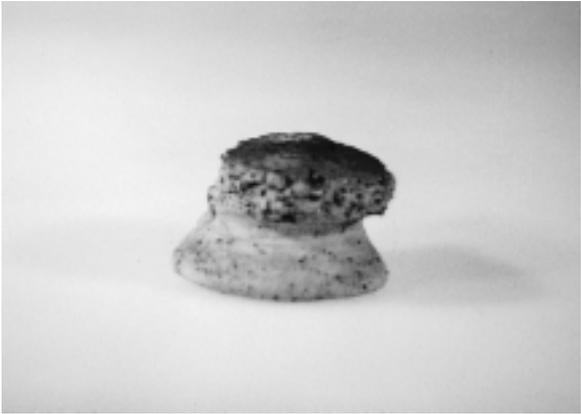


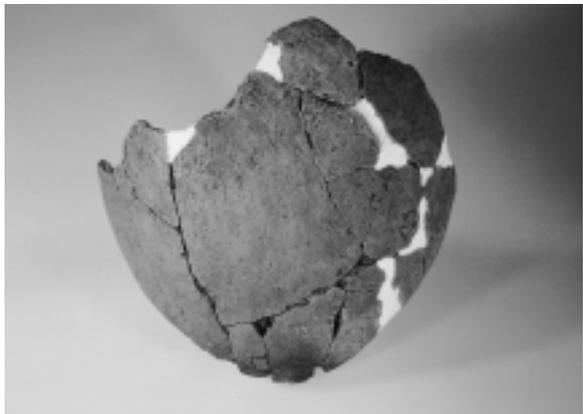




















報告書抄録

ふりがな	さとかいだいせき むろのうちいわじ ちく							
書名	里改田遺跡 室ノ内・岩路 地区							
副書名	県道土居一五台山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	武吉眞裕、江戸秀輝							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL. 088-864-0671							
発行年月日	西暦 2000年 1月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 。 〃	東経 。 。 〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さとかいだいせき 里改田遺跡	〒783-0082 高知県南国市 里改田	39204	040267	33° 32′ 42″	133° 38′ 40″	「室ノ内」地区 平成11年1月27日 ～ 平成11年3月27日 「岩路」地区 平成11年5月6日 ～ 平成11年8月12日	778m ² 684m ²	県道土居 一五台山 線改良工 事に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
里改田遺跡	弥生集落跡 古代建物群跡 中～近世集落跡	弥生 奈良～平安 中～近世		竪穴住居 掘立柱建物跡 井戸 土坑 溝		土器、石器 土師器 須恵器 瓦 陶器 瓦器 瓦質土器 磁器	ピット 多密	

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第45集

里 改 田 遺 跡

—室ノ内・岩路地区—

2000年1月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 川北印刷株式会社